けいおん！~もう一人のギタリスト~

ラルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！～もう一人のギタリスト～

【Ｎコード】
Ｎ１４９１Ｑ

【作者名】
ラルク

【あらすじ】
今年から共学になった私立桜ケ丘高校に高嶺恭哉が入学する。そこである一人の女の子【平沢唯】に出会う。
恭哉はこの学校でどのような生活を送るのだろうか。
ヒロインは唯です。
初作品です。駄文ですが宜しくお願いします。

【注】歌詞掲載についてのことで、一年の学園祭編の内容を一部変更しました。それに関しての物語の変動などは特にありませんので

ご安心ください。

第一話　桜舞う出会い（前書き）

どうも、初めまして！ラルクです！

初作品です、よろしくお願いします！

第一話　桜舞う出会い

今日は高校の入学式、なのだが…
現在の時刻はというと。

８時１５分

言うまでもなく遅刻だ。

「…ヤッベ」

急いで飛び起き、歯を磨き顔を洗い髪をセットする。

「…よし、こんなもんでいいか」

俺は部屋に戻りまだ真新しい制服を着る。

「…行ってくるか」

―――――――――――――――

さぁ、学校まで走る。何ともシンドイ。
学校に着くまでに俺の事、これから行く学校の事を話そう。

俺の名前は高嶺恭哉（たかみねぎょうや）、ごく普通の高校生だ。
過去にまぁ、そこそこあったが…そこは今はどうでもいい。
そこら辺は次回のキャラ設定を読んでくれ。

次に学校だが、『私立桜ヶ丘高等学校』この名前の学校が今日から俺の行く学校の名前だ。
今年から共学になったらしい。ただ、元女子校なだけに女子が多いだろう。
少し不安だ。
とまぁ、こんな感じでいいだろ。

――――――――――――――――――――

「…つ、着いた…疲れた」

とりあえず訳が分からんので昇降口をウロウロする。
そこにクラス表が張ってあった。

「え～と…3組か」

つーわけでクラスのドアの前へ。

（…転校生ってこんな気分なのか？）

こう感じるのも無理は無い。
なんせ教室の中から担任である男の声が聞こえるし…

（まぁ、いいか…）

ガラッ

ドアを開けるとクラスの奴全員と担任の視線がこっちに。

（…最悪だ）

「やっと来たか高嶺！！」

シーンとした空気からいきなり担任が俺の方を掴む。

「…席、どこッスか」

「お前はなぁ～…あったあったあそこだ！」

「…そうッスカ、あざす」

そう言って言われた通りの席へ移動する。
その席の後ろに知った顔があった。

「よう、恭哉！」

「…お前、高校入れたんだな」

「入れます！バカにするなよ！！」

「おい、静かにしろー、高嶺も早く座れ～」

「…うっす」

そっから長々とした担任の話と後ろから来るバカの呪文を眠い目をこすり受け流していた。

「……という訳でわかったか～」

と、気がついたら何を分からせたのか知らんが担任の話は終わっていた。
そして入学式をするために体育館へ移動。

――――――――――――――――

「……であるからでして～」

またもや訳分からん校長の話を聞き流して、寝る。

……

トントン

「…ん？」

「起きろよ、恭哉終わったぞ」

「…あぁ、すまない」

どうやら寝ている間に入学式は終わったようだ。
そっからまた教室へ戻り、自己紹介の時間。
自分の番が来るまでボーっとしていた。

「はい、次、高嶺！」

「……」

「おい、高嶺！」

「…あ？俺？」

「高嶺はお前以外に誰がいる」

渋々その場で立ち上がり…

「…高嶺恭哉、よろしく」

といって座った。そして次の人が立つ。

「橘雄介（たちばなゆうすけ）です！みんなよろしく！ちなみに恭哉とは幼稚園からの幼馴染です！」ちなみにこちらもキャラ設定で。

ガンッ！

「ぐわぁ！」

「…余計な事は言わなくてもいい……ん？」

何故か一人の女子と目が合った。しかもピンポイントに。
そしてそいつは微笑んだ。

「よろしくね♪」

そいつとは席が離れていた。なのに何故か聞こえた、特に大きな声を出した訳でもないのに。
不思議だった。そしてあいつの自己紹介。

「え、えっと…平沢唯（ひらさわゆい）です！よ、よろしくお願いします！！」

名前は平沢唯、女子になんら興味も無い俺が、人生初気になってし

まっていた。
この出会いがきっかけで後々の人生が変わるとも知らずに……

――――――――――――――――桜舞うこの季節、少年（たかみねきょうや）は少女（さわゆい）に出会った。

第一話　桜舞う出会い（後書き）

どうでしたでしょうか？

あの～…実の所、この一話は一度消えて書き直したものとなります。
正直こっちの方がしっくりきます。

まぁ、そんな事はどうでもいいでしょう！
これからも頑張ります！応援よろしくお願いします！

ラルクでした！！

キャラ設定？（前書き）

今回は本作の主人公高嶺　恭哉君と、幼馴染の橘　雄介君のキャラ設定です。

では、どうぞ！！

キャラ設定？

名前：高嶺　恭哉

詳細：身長・・１７０ｃｍ　体重・・５８ｋｇ　誕生日・・１０月１１日

本作の主人公。

楽器はギター、パートはリズムギター。

母親がたまたまなにかで当たったギターを使っている。

ギターの腕はなかなかのもの。歌もうまい。

普段はクール気味で優しいが、怒ると普段のクールさが消えて

暴力的になる。

特に、自分の友人や大切な人などを傷つけられると。

運動は得意で、中学の時ボクシングジムに通っていたり空手道場に通っていたりと

運動神経抜群である。

勉強は基本全教科平均点以上で特に問題はない。

現在、母親と妹と3人暮らし、中学の時に両親が離婚してしまっている。

父親がいない。　家事などは妹と母親で分担中。基本家事全般は何でもできる。

好きな事（物）は、運動、ゲーム、ギター、暑くもなく寒くもない日、料理

嫌いな事（物）は、暑い日、寒い日、自分の友人・大切な人を傷つけたりするやつ

髪の色は暗い茶色、髪型はＢＬＡＣＫ　ＣＡＴのトレイン＝ハートネット的な感じ。

名前：橘　雄介

詳細：身長・・１６６ｃｍ　体重・・５５ｋｇ　誕生日・・６月２３日

主人公、高嶺恭哉の幼馴染。

恭哉とは反対で元気いっぱい、いや元気が有り余っているといってもいいくらい元気。

よく恭哉にシカトされたりしている。

中学の時、荒れていた恭哉を止めた唯一の親友である。

楽器は出来ず恭哉もとい軽音部の応援者。

髪の色は黒で髪型はエア・ギアの美鞍数馬的な感じ。

キャラ設定？（後書き）

とりあえずキャラ設定です。
髪型設定のアニメを知らない場合は検索して下さい、すいません。
今後も出来るだけ早く投稿していきますのでよろしくお願いします

ラルクでした。

第二話　部活選択と改めて思う天然（前書き）

どうもラルクです。

今回少し長くなった気がします。

では、二話目ですどうぞ！

第二話　部活選択と改めて思う天然

始業式の日から時が過ぎ、４月下旬
高校生活にも慣れてきたこの時期・・・俺と、隣りの平沢は入部用紙を見て
う～～ん、と唸り声を挙げていた。俺は挙げてないぞ、挙げたい気分なだけだ。

「二人ともどうしたの？」

赤眼鏡の少女、真鍋和が声を掛けてきた。
真鍋は机の上にある入部届けを見て。

「二人ともまだ出してなかったの！？学校始まって2週間経ってるのよ？」

そんなこと言われてもな、やりたい部活がないんだよ。
隣りの平沢もないようで・・・

「はぁ・・・こうやってニートが出来上がっていくのね・・・」

「部活やってないだけでニート！？」

「その発言結構痛いぞ」

「そう？」

そう？って・・・・

「高嶺君はやりたい部活にないの？」

「・・・残念ながら、真鍋はどうするんだ？」

「私は部活じゃなくて生徒会にはいったわ」

生徒会ねぇ・・・確かに似合うな

「あ～～あ、きょう君そのまんまだとニートになっちゃうよ」

「おい、人の事言えるのかお前が・・・・・つーかきょう君ってなんだ」

「え、きょうや君のきょうを取ってきょう君だよ！」

「そのあだ名やめろ、雄介が聞いたらどうなるか・・・・・・」

「ん？何か呼んだ？？」

「あ！雄介君だ」

「なっ！こんなときに・・・・・・」

何としても防がなければ！

「おい！平さ「今ね、恭哉君のあだ名をきょう君に決めてたんだぁ」

・・・・防衛失敗

「き、きょう君って……アッハッハッハッハッハッハッハッハッハ！！！！！！い、いいあだ名じゃん・・・・ブッ！だめだ、わ、笑いがアッハッハッハッハッハッハ！！！！！」

・・・・・・はぁ

「その笑い俺が思いっきり止めてやる・・・・・」

「ハッハッハって、へッ？」

「さようなら、そして今までありがとう・・・・・」

ドスッ！

「ウッ！」

パタッ・・・

「だ、大丈夫なの橘君？」

「大丈夫だ脳天に一発ぐらいで死ぬような男じゃない」

「そ、そう・・・」

「自業自得だ」

「なんの部活に入ろう・・・・」

「俺も決めなくては・・・・」

それからずっと考えたが（途中忘れてたけど）まったく浮かばず帰ることにした。
隣りの平沢は真鍋に軽音部に入るって言ってたが、何やるか分かってなさそうだな。

次の日、昼休みに平沢が俺のところに走ってきた。

「きょう君、わたし入る部活決めたよ！！」

「ふ～ん、でどこに入るんだ？」

「軽音楽部ってところに入ってみました！！」

「一つ聞いていいか？」

「なに？」

「軽音楽部ってどんなことやるか知ってるか？」

「さあ？」

「さあ?って・・・・・・」

「でも、軽い音楽って書くから簡単な事しかやらないよ」

「例えばどんなことだ?」

「口笛とかカスタネット??」

「ハァ・・・・・・」

ヤル気無さ過ぎだろ

「何やるか知らないとは、予想はついたけどな・・・・・」

「え!じゃ、じゃあ何やるの!?」

「ギターとか、ベースとかやるんだよ」

「え～～！そんなの出来ないよ！」

「てめぇが勘違いして入部したんだろうが！」

「だ、だってぇ～～～～」

「泣きそうになるなよ・・・・」

周りの目線が気になる。

「ハァ・・・で、見学に行かないのか？」

「で、でも楽器出来ないし・・・・」

「いいんじゃないか？出来なくても入りたいって思ったんなら、それに
今から何か始めてもいいと思うぞ？」

「う、うん！そうだね！ありがとうきょう君！」

「お前の笑顔って結構反則だよな・・・・・」

「ん？なあに？」

「いや、何でもない」

「？？？」

無邪気な子供って感じだな・・・・・
今日はため息が多い気がする・・・・・・

放課後

「きょう君行こーーーーー」

「あいよ」

「あれ？恭哉達どこ行くの？」

「軽音楽部の見学」

「へぇ～～～まあ、恭哉ギターうまいし、歌うまいからな」

「え！きょう君ギターできるの！？」

「ああ、３年くらいやってたかな？」

「へ～～～今度やって見せてよ！」

「まあ、いいけど。今は見学な」

「そうだね、じゃあね雄介君！」

「え、あ、うん」

雄介と別れた俺達は音楽準備室に行く為の階段を上っている

「そういえば平沢」

「なあに？」

「さっき先生に何の紙出してたんだ？」

「さっきの紙はね～～入部希望書だよ」

「入部希望書か・・・・・・って、え・・・・・」

「ん？どうしたの？？」

「お前入部希望書って見学するだけだろ！！」

「あ！そうだったぁ～～～・・・・大丈夫かな？？」

「ハァ・・・どうにかなる事を祈るしかないだろ」

今改めて思ったことがある・・・そう、それは

平沢唯＝天然

改めてだけど、こいつは本物だ。

第二話　部活選択と改めて思う天然（後書き）

どうもラルクです！
思ったよりも長くなってしまったので一旦切って
次話に入部の話を入れようかと思います。

次に律、澪、ムギが出てきます。
今後も早めに投稿しますのでヨロシクお願いします！！

第三話　入部！（前書き）

二度も消えました。そのせいで投稿が遅れました
精神的ダメージが意外にも大きかったです。

では、どうぞ・・・

第三話　入部！

「こ、ここだよね・・・」

「そうだな」

今俺と平沢は軽音楽部の部室前に来ている。

「なんで、緊張してるんだ？」

「だ、だって、間違えて入部希望書出しちゃったから、辞めるなんて言ったら
白いメイクした怖い人が・・・・・きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

どんな軽音部だよ・・・と心の中で突っ込んでおいた。

隣りで平沢がパニックになっていてなかなか入ろうとしないので
俺が部室に入ろうとした時、うしろから声がした。

「うちの部の前で何やってるの？」

そこには、平沢くらいの長さの髪にカチューシャをつけた女子が立っていた。

「あ！もしかしてあなたが入部希望者の平沢唯さん！？」

「は、はい・・・・」

「ギターが凄く上手いんだよね！来てくれるの待ってたよーー！！」

（なんか、あらぬ尾ひれがついてる！？）

「えっと君は？」

「俺？俺は平沢の付き添いだ」

「あんたも入部希望者でしょ！みんな～入部希望者が二人来たぞ～～～！！」

「お、おい！俺は違う・・・・・ハァ・・・・」

平沢の手をとって部室である音楽準備室の中に話を聞かず入って行ってしまった

俺もため息をついて中に入る。

「ようこそ軽音部へ！」

「歓迎いたしますわ～っ！」

そこにいたのは、黒髪のロングと金髪のロングの少女がいた。
俺の方を見て黒髪はなぜか動揺していて金髪は誰？という目で見ていた。

「そちらの方は？」

「俺はこいつの付き「よ～しムギ！お茶の準備だ！」・・・・話聞け」

それから俺と平沢は椅子に座らされた。前には紅茶とケーキがある。

「どうぞ召し上がって下さい」

フォークを手にとって一口・・・・・

「うまっ・・・・・」

思わず口に出てしまった。
これはどっかの店か?手作りか?少なくともそこら辺の店よりは美味い。
隣りの平沢と言うと・・・・・

「おいしぃ～～～～♪」

本来の目的を忘れケーキを食っていた。
(何してんだよ・・・・・)

「実は私達も新入部員なんだけど…先輩達が皆卒業しちゃってて今私達3人しかいないんだ」

「部員が4人いないと部として認められなくて、一週間以内にあと一人集まらなかったら廃部するところだったんです」

「本当に入部してくれてありがとう!」

カチューシャが平沢の手をとり上下にブンブン振っている。

（ますます言いづらいー！）

「平沢さんはどんなギタリストが好き？」

「えっと・・・・じっ、じっ、じっ…」

「ジミ・ヘンドリックス！？」

「おお～！」

「い、いえ・・・・じっ、じっ、じっ…」

「ジミー・ペイジ！？」

「おお～っ！」

「ち、ちが・・・・じっ、じっ、じっ…」

「ジェフ・ベック！？」

黒髪よ、少しくらい平沢の話を聞いてやれ・・・・・
平沢も緊張しすぎだろ。

「そっかぁ！ジェフ・ベックか！！」

「どなた？」

「ロックギタリストには二種類しかいない『ジェフ・ベックとジェフ・ベック以外だ』
って言われてる挑戦的なギタリストだよ」

黒髪が人が変わったようにしゃべりだした。

「（おい平沢、言うなら今じゃないか？）」

「（う、うん）」

「あ、あの！！私実は入部するの辞めさせて下さいって言いに来たんです！！」

よし！やっと言った、これで俺のお役御免だな
つーかさっきまでの、空気が思い切り凍りついたな。

「え・・・や、やめるって言いに来たんだ・・・・そうなんだ・・・・」

すげ～～～カチューシャのテンションさがったな

「ギター弾けないし、もっと違う楽器をやると思ってて・・・・・」

「じゃ、じゃあ何なら出来るの??」

「カ、カスタネ・・・・・ハ、ハーモニカッ!!」

(今絶対カスタネットって言おうとしたな)

「あ、ハーモニカならあるよ!吹いて見せ…」

「ごめんなさい!吹けません!!」

(なぜ見栄を張った?そしてカチューシャ、なぜハーモニカを持っている??)

「でも、うちの部に入ろうって思ったってことは、音楽には興味があるってことよね？」

「他に入りたい部活とかあるの？」

「いえ、特には・・・」

「それならさ私たちの演奏一度聞いてから、入部するかどうか判断しない？」

（なるほど、ここで平沢を逃すと廃部の可能性が増えるからな）

「え？演奏してくれるの？」

「もちろんいいよ！」

カチューシャは不敵な笑みを浮かべる

「入部するつもりはねぇけど聞いてみるか」

俺達は椅子から楽器の前にあった長椅子に腰を掛ける。

（カチューシャは『ドラム』、金髪は『キーボード』、黒髪は『ベース』か
お？しかもレフティじゃないか、珍しいな）

「それじゃあいくよ！、1，2，3，4！」

カチューシャのカウントで演奏がはじまった。
曲は翼をください。懐かしいな・・・・雄介の奴が歌いまくって廊下に立たされたんだよな
ふと隣りを見ると平沢は感動？してるようだった。

…演奏終了

「えへへ・・・どうだった？」

「なんて言うか・・・凄く言葉にしにくいんだけど・・・」

サイコーの言葉を一発よろしく！

「・・・あんまりうまくないですね！！」

（バッサリだーーーー！！）

さすが平沢、期待を裏切らない。

「でも、すっごく楽しそうでした！私、この部に入部します！！」

入部したか・・・・まあ、これで安心だな。

「ありがとう！これから一緒にがんばろう！」

「よろしくお願いします！！」

（じゃあ、俺の任務は終了したから帰りますか・・・・）

と踵を返したが・・・・

「待ちなさい」

誰だ、俺の肩を持つ奴は・・・・・・カチューシャ

「なんだ？」

「君はまさか帰ろうとしてないかね？」

「だから何だ、俺の任務は終了した、だから帰る」

「無理に勧誘は良くないぞ！律」

「そうかい・・・・」
カチューシャの手を肩からはずし、踵を返し歩き出そうと思ったがまた掴まれた。

「だから俺は・・・・・」

振り返ると今度は平沢だった。

「な、なんだ」

「きょう君も一緒に軽音部入ろうよ！」

「は？なんで？」

「だってきょう君も一緒だと楽しいから」

「何だそれ・・・・・」

「そうだよ！元々お前も入部希望者だったじゃないか！」

「え！そうなの？」

「違う、俺は平沢の付き添いで来ただけだ、入部希望者なんて一言も言ってない」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「言ってねぇ」

（いいから帰らせてくれ・・・・）

「そっか・・・・・」

「じゃあ平沢、頑張れよ軽音部」

「やだ！きょう君と一緒じゃなきゃやだ！」

何を言い出すんだこいつは・・・・

「なんでだよ・・・・そしてこの手は何だ？」

「入部するって言ってくれるまで離さないよ」

ハァ・・・つくづくこいつには疲れる・・・・・
無理やり離そうと思えば離せるけど、こいつの今の顔は始めて見る本気の顔だ
まあ一生で一度の高校生活ぐらい楽しんでみるか。
中学はホントつまんなかったし・・・・

「わかったよ、入部するから手を離せ」

「「「「やった～～～！！！」」」」

「ありがとうきょう君♪」

「へいへい、カチューシャ入部希望書はどこだ」

「カチューシャ言うな！はい、入部希望書。」

ささっと書いてカチューシャに渡す。

「ほらよ先に自己紹介しとく、俺の名前は高嶺　恭哉だ、呼び方は自由でいい」

「平沢　唯です。ヨロシクお願いします！」

「私は田井中　律だ、この部の部長だから！担当はドラムよろしく！」

「秋山　澪です。担当はベースです。よ、よろしく」

「私は琴吹　紬です。担当はキーボードです。あと、お茶とケーキです♪」

自己紹介が終わり、カチューシャもとい田井中が口を開いた。

「じゃあ、軽音部活動開始記念ってことで、写真を撮ろう！」

かばんからカメラを取り出して

「いっくよ～ん！」

カシャッ！

その写真には、デコしか映っていない田井中

若干、驚いている秋山

笑顔でピースをする琴吹

戸惑いつつも両手でピースをする平沢

ヤル気ゼロで無表情の俺が写っていた。

「私、全然楽器できないし、あ！マネージャーとかどうかな？」

「いや、運動部じゃないんだから・・・」

「そうだ！この際だから入部と同時にギター始めてみたらどうかしら？」

「あ、それいいんじゃない？」

「この部ギターいないしね」

「でも、ギターってすごく難しそうなイメージが・・・」

「大丈夫だよ、私達も分かるところ教えてあげるし」

（ドラムをやってるのにギター分かるのか？）

「そうだね！さっきの演奏聞いてたら、私にも出来るかもって思えてきた！」

「・・・それはよかった」

さりげなくひどいことを言う天然娘に若干怒ってる田井中。

「高嶺君はどうするの？」

「どうするって？」

「楽器、平沢さんと一緒にギターやるのもいいと思うけど」

「全員勘違いしてないか？俺はギター弾けるぞ？」

「「「えっ！」」」

「3年ぐらいやってたんだっけきょう君？」

「ああ」

「なんだ、弾けるんじゃん！言ってくれよ高嶺～～～」

「聞かれてねぇ、家で暇な時ぐらいだけど」

「じゃあ、平沢さんにギター教えるのは高嶺君、よろしくね」

「そうなりますか・・・まぁいいけど」

「ヨロシクお願いします！きょう君師匠！」

「師匠やめろ」

「とりあえず、今日は帰った方がいいんじゃないか？時間も時間だし、
この話は明日すればいい」

「そうだな、じゃあ今日は解散！また明日～～！！」

田井中の号令により俺と平沢以外の全員が出て行った。

「きょう君・・・・」

「ん？」

「今日はありがとね！」

「お、おう」

そう言って平沢は笑顔になり走って行ってしまった。
不覚にもその笑顔に顔を赤くしてしまった。

こうして、退部が目的だったはずの平沢が入部し、付き添いが任務だった俺までもがなぜか入部してしまった。

第三話　入部！（後書き）

疲れました。ただその一言です
４０００字近く書いてしまった・・・・・

今後も早めに投稿しますのでよろしくお願いしますラルクでした。

第四話　沈黙はしんどい！そして秋山澪、男としゃべれた！（前書き）

ラルクです。タイトルの意味が全く分からない・・・・・・
ＰＣを触る暇が全くなく書けなかったです。

話が少しアレですが、どうぞ

第四話　沈黙はしんどい！そして秋山澪、男としゃべれた！

「ふぁ～～～・・・」

時計の時刻を見る。

7時１５分

今日は全然余裕がある。制服を着替えて寝癖を直して髪を整え、鏡を見る。

「こんなもんか・・・・」

持っていくものを確認する。教科書とノート、音楽プレーヤー、基本これしか持っていかないだが、今日から一つ荷物が増える、それはギター。ストラトキャスターと呼ばれるギターだ。

「自分で買ったギターが欲しい・・・・・・」

そんなことを言いつつギターをケースに入れる。ここから飯を作らなくてはいけない。

自分のはどうでもいいのだが、妹と母親のがある。

「飯できたぞ～～～～」

「「は～～～～い」」

今日の飯はご飯、味噌汁、焼き魚という超一般的料理だ。
俺達の家は一日交替制度で飯を作っている。

「俺は先に行くから」

「そう、いってらっしゃい」

「いってらっしゃい、兄さん」

「いってくる」

学校への道、イヤホンを耳につけて音楽を聴いてる。
学校が近づいていくと、

（女子が多い・・・・・そして気まずい・・・・）

そんなことを思って門をくぐり教室へ・・・・・は、行かずに
部室へ、教室にギターを置くのは目立ちすぎるため部室に置くことにする。

「なんで階段に亀が付いてんだ・・・・・」

なんてことを思いつつ到着、ドアノブに手を触れるが

ガチッ

「んあ?開かねぇ」

まじかよ・・・・・・

「鍵かかってるし・・・・」

さてどうするか・・・・・職員室に行って鍵を取るか、いやめんどくさい
いっその事このまま教室に置いておくか・・・・・・・

「・・・・・教室行くか」

めんどくささが勝ってしまった。
踵を返す。

「ん?」

「あ・・・」

振り返るとえっと・・・・秋山だっけ?まあいいや、秋山がケースを持っていた

「よう」

「うん・・・・」

見事に会話がつながらない。そういやこいつも部室に用があるのか

「なあ、部室なら鍵がかかってて入れないぞ？」

「あ、大丈夫鍵持ってるから」

「そうか、じゃあ開けてくれ俺もギターを中に置いておきたい」

「うん、待ってて開けるから」

そう言うとドアを開けた。

「ありがとう」

とりあえず礼を言う。

「「・・・・・・」」

（会話が無いこの空気はしんどい）

部室に入ってから一言も会話が無い。

（ギターケースを置くか）

背負っていたギターケースを降ろして壁に立てかける
相変わらず会話が無い。

（話を振ってみるか）

「なぁ」

「な、何？」

「なんでベースをやってるんだ？」

「えっ、えっとベースは目立たなくて済むから・・・・」

「目立たなくて済む？ベースだって目立つじゃないか」

「そうかもしれないけど、みんなの注目はギターの方にいくから・・・・」

「そうか、まあ確かにギターに注目は自然と集まるな・・・・」

「だからギターは恥ずかしいんだ」

秋山は恥ずかしがり屋なのか。

「私がその立場になるって思うと・・・・・・・」

ボンッ！

プシュ～～

頭が爆発し、煙が出てきた。

「お、おい！」

「うう～～～」

秋山はそのまま倒れそうになった。とりあえず肩を支えて、ちらっと時間を見てみる。

（うお！そろそろホームルーム始まるじゃねえか・・・・）

「秋山！大丈夫か？」

「う、うんもう大丈夫・・・・・ひゃっ！」

いきなり声をあげて、俺から離れた顔を赤くして俯いている

「俺今、何かしたか？」

「い、いや何もしてない・・・・ただ、男の人にこんな近づいたことが無くて」

「そうか、それはすまないな」

（教室に戻るか）

「俺は先に教室に戻るから」

「うん、また」

「ああ」

と言ってドアに行こうとすると

「澪～～」

ドアが開きカチュ・・・田井中が入ってきた

「どうしたんだ律？」

「澪が教室にこないから見に来たんだ」

（こいつらは仲がいいんだな）

「あれ？キョウもいる」

「いて悪いか」

「いや、別に」

「とりあえず、俺は先に戻るから時間も時間だし」

「そか、じゃあまた放課後な！」

「またな、高嶺君！」

軽く手を挙げてあいさつし部室を後にした。

恭哉がいなくなった後の部室

「なぁ、澪」

「なんだ」

「男としゃべれるじゃん」

「え？」

「だから、男としゃべれるようになってるんじゃない？」

「あ、確かに」

「よかったな！」

「うん、でも高嶺君だからかな？」

「なんで？」

「なんかしゃべりやすいと言うか・・・・・・」

「ふ～～～～ん」

「な、何ニヤニヤしてんだよ！律！」

「いやっ、何でもないよ～～～～ん♪」

「待てよ律～～～～！」

「待たないよ～～～～～」

その後、教室についたがホームルームに遅れた為怒られた・・・・・

第四話　沈黙はしんどい！そして秋山澪、男としゃべれた！（後書き）

次話からもっとガンバリマス！！
なぜか澪にフラグが立ちそうですがヒロインは唯です。

話が変わりますが、今日作者にはいい事がありました。
それは、無事に高校に合格しました！！
すいません個人的で・・・・・
てな訳でテンションは上がってます。

感想等ございましたらお願いします！！
ラルクでした。

第五話　改めて紹介と楽器（前書き）

どうもラルクです。
すみません、投稿が少し遅れました。
昨日か一昨日投稿するつもりでしたが夜、体がだるくて・・・・
今度からもっとガンバリマス！

では、どうぞ！！

第五話　改めて紹介と楽器

現在放課後、ダルイ授業が終わり部活に行く為の準備中

「恭哉～～～～帰ろうぜ♪」

「部活」

「えっ・・・・・・・部活？」

「ああ、言ってなかったっけ？」

「聞いてねぇよ！！」

「あ、そう」

「くそぉぉぉぉぉぉ！！！！」

「じゃあな」

「チョッと待て、じゃあ部活がある日は一緒に帰れないの？」

「そう言うことになるな」

さっきまでの笑顔がウソの様に暗い顔になった。

「まあ、頑張れ」

そう言って俺は部室に向った。

「あ！待って～～～きょう君～～～～～」

「んあ？」

「あ、和ちゃんまたね～～～」

「うん、またね」

「さあ、きょう君部活に行こう！！」

「ああ」

俺は真鍋に背を向けて軽く手を挙げて別れた。

部室に向う廊下

「楽しみだな～～～～」

「昨日は退部する気だったじゃねえか」

「それはそれ、これはこれだよ♪」

「なんだそれ・・・・・・」

「それに・・・・・・」

「あ？」

「きょう君も一緒だし♪」

「なっ！」

「どうしたの？？」

「な、なんでもねぇ！」

俺はどうしてこんなにも平沢の笑顔に弱いんだ・・・・・・

「？？」

「早く行くぞ」

きっと今は顔が赤いであろう。
その顔を平沢に見せるわけにもいかず、早歩きで歩いた。

「あ！待ってってば～～～～きょう君～～～～」

ガチャッ

「こんにちわ～～～～」

「・・・・・」

挨拶をして入る。俺はしてねぇけど。
そこには俺と平沢以外の全員が来ていた。

「よっ！」

「来たか」

「こんにちわ～～どうぞ座ってください♪」

琴吹に言われ俺は秋山の隣りに、平沢は田井中の隣りに座った。

「紅茶とケーキをどうぞ♪」

「ありがと～～～」

「サンキュ・・・・・」

ここは喫茶店かよ・・・・・

とりあえず出された紅茶を一口

「うま・・・・」

「おいしぃ～～～～」

「どういたしまして♪」

隣りの秋山に一つ質問

「（おい、秋山）」

「（え、な、なに？）」

「（ここって軽音部だよな？）」

「（う、うん・・・・・一応）」

今、小声で一応って言ったな

「ハァ・・・・・」

思わずため息を放出してしまった。

「ねぇねぇ、なんで澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやろうと思ったの？」

平沢は突然そんな事を聞き始めた。

「だ、だってギターは・・・・・は、はずかしい」

「はずかしい！？」

朝話してたな、確か恥ずかしがり屋なんだっけか？

「ギターってバンドの中心って感じで先頭に立って演奏しなきゃいけないし、
観客の目も自然と集まるだろ？」

つーか演奏してる時点で全員に目が行ってると思うけどな。

「自分がその立場になるって考えただけで・・・・・」

シュ～～～・・・・・

あ、また煙出た

「澪ちゃん!?」

すげー繊細だ。

「琴吹、紅茶もういっぱい熱いのくれるか?」

「ハイ、ちょっと待ってね?」

「すまない」

紅茶が来るまでケーキを食べる。

「ハイ恭哉君、お待たせしました」

「サンキュ」

あぁ～～うまい・・・・・

「ムギちゃんはキーボードうまいよね、キーボード歴長いの？」

「私、４歳の頃からピアノを習っていたの、
コンクールで賞をもらったこともあるのよ。」

「へ・・・へぇ～すごいねぇ」

コンクールで賞か・・・確かにすげぇ

「クッキーおいしぃ～～～」

さっきからずっと至福の顔してるな平沢は。

「あ、そういえばずっと疑問に思ってたんだけど、この部屋ってやけに物がそろってるよね？
最近の学校ってこんな感じなのかな？？」

「ああ、それは私の家から持って来たのよ」

「「自前！？」」

正直驚いた・・・なかなかのお嬢様だとは思っていたけど、『かなり』のお嬢様だったとは。

「りっちゃんはドラム～～って感じだよね」

「んなっ！？私にも始めた理由があるのよ！！」

「へぇ～どんな？どんな？」

「それは、えーっと・・・あれよ・・・・・・かっこいいから」

「ないんじゃん」

理由適当だな・・・・・

「だ、だってさー！！ギターとかベースとかキーボードとか指でちまちまするのを
想像するだけで・・・・キーッ・・・ってなるのよ」

楽器選びには性格が出るな。

「じゃあ、きょう君ははなんでギター始めたの？」

俺にも聞くのか

「親に強制的にやらされた」

「え、そんな理由なの？」

「あとは・・・まあ、息抜きだ」

「い、息抜き？」

「ああ、それだけだ」

喧嘩のな・・・・・

「そうなんだ、きょう君のことだから凄い理由があるのかと思ってたよ」

「そうか・・・・」

（なんだろう?きょう君の表情少し暗かったような??）

「ん?どうしたんだ?唯」

「なんでもないよ」

「そうか、あ!なぁなぁキョウ、ギター弾いて見せてよ!」

「なぜ?」

「いいじゃん、みんな聞きたいよな?」

「そうだな、バンドを組むメンバーとしては実力を知っておきたいな」

「私も聞いてみたいです」

「私も～～～」

特に断る理由もなかったので

「わかった・・・・」

そう言って壁に立てかけてあったギターをケースから取り出す。

『ストラトキャスター』

色は、ブラックとホワイト。なかなかカッコよく、初めて弾けた時はうれしかった。

「恭哉君、これ」

「ああ」

これ結構重いぞ・・・・琴吹はすげー力持ちだな・・・・
人はみかけによらないな。

チューナーでチューニングをし、アンプにつなぐ
電源を入れボリュームを確認する。

（うし、行きますか）

～♪♪♪♪～

途中にすごいだのなんだの聞こえてきたがそんなのは無視

ジャァ～…ン

2分ほど弾いて、終わる

「ふう・・・・ん?どうした?」

「「「「「・・・・・・」」」」」

4人が一斉に止まった。
そして・・・・・・

「「「「「すご~い!!」」」」」

声をそろえて言ってきた。

「すごいよ!かっこいいよ!!きょう君!!」

「高嶺君すごいギター上手いな!!」

「いや~流石キョウだな!」

「凄いわ!本当に!」

ここまで褒めてくれるとは・・・・

「サンキュウな・・・・」

結構照れる・・・・
そんなこんなでいきなり始まった俺のギター演奏は終了した。

その後、お茶などを楽しむ軽音部・・・・軽音部じゃねぇだろどう考えても。

「そういえば、平沢さんってギター買ったの？」

「唯でいいよ！」

「えっ」

「私すでに澪ちゃんのこと澪ちゃんって呼んでるし」

「ゆ、唯…」

上目遣いで名前を呼ぶ、これは雄介だったら一瞬で死んでたな・・・
・
平沢もなんかときめいてるし。

「きょ、恭哉…」

「なぜ俺まで??」

「えっ…いや、その・・・・・」

「まあいいけどな」

「あう・・・・」

「じゃあキョウも私達を下の名前で呼ぼう！」

「いずれな」

女子を下の名前で呼ぶのはな・・・・
つーか話戻せよ。

そう思って俺が言う

「で、平沢ギターはどうしたんだ??」

「ん?ギター?」

「・・・・・」

「・・・・・」

「あーそっか私ギターやるんだっけ!わすれてた~~」

「軽音部は喫茶店じゃないぞ?」

机の上にケーキとか乗ってる時点で説得力無いけどな

「ギターって値段どれくらいするの?」

「う~ん…安いのは一万円代からあるけどあんまり安すぎるのはよくないからな

最低でも五万円くらいのがいいかも…」

まあそのぐらいじゃないとな・・・・・

「えっ！ご、五万・・・・・私のお小遣い十か月分・・・・・・・・・・・・・・・」

「高いのは十万円以上のもあるよ？」

そこで平沢はある手段に出る

「りっちゃん」

「ん？」

「部費で落ちませんか？」

平沢の最高の笑顔で反撃。

「落ちません♪」

そこで負けじと田井中も笑顔で反撃。

「うう～～」

落ちた方がすごいな

「楽器が無いと始まらないしな・・・・」

「そうだな」

「よし！今度の休みにギターを見に行こうぜ！」

「「「おーっ！！」」」

「お、おー・・・」

恥ずかしいならやるなよ秋山…

「なぁ、俺も行かないとダメなのか？」

「あたりまえだろ！」

「ハァ・・・・・・」

とりあえず、今度の休み平沢のギターを見にいくことが決まってしまった。

（やっぱりギターは買わなくていいか、当分このギターで・・・・）

第五話　改めて紹介と楽器（後書き）

この作品を読んで下さる方本当にありがとうございます♪
お気に入り登録して下さった方本当にありがとうございます♪
評価して下さった方本当にありがとうございます♪

感想等ありましたらヨロシクお願いします！！
ラルクでした。

第六話　楽器と値切りとオモイ（前書き）

すいませんでした！！ＰＣがまったくできなくて投稿が遅れました

今回は唯のオモイが明らかに！？そして恭哉のオモイは！？

的な感じです。

では、どうぞ！！

第六話　楽器と値切りとオモイ

休日の街をブラブラと歩く。平沢のギター買う為である。

「待ち合わせの時間より２０分も早いじゃねぇか・・・・」

ハァ・・・なんでこんなに早く来なきゃいけないんだ・・・・・・
これも全部、母さんと楓のせいだ

高嶺家

「こんなもんでいいか・・・・」

と、支度を終えた俺は

「暇だ・・・・・・」

３０分暇になっていた。ベットに横になって天井を見ていると

バタンッ！！

いきなりドアが開いた。

「兄さん、何やってるんですか？？」

「何ってこの通り暇だが？？」

「じゃあ、待ち合わせ場所に行って下さい」

「ハァ？まだ早いじゃ「早く行って下さい」なんで？」

「兄さん、いいですか？女の人を待たせる男の人になってはいけません、
だから、今から行って下さい」

「そうだぞ～～恭哉君、だから早く行きなさい」

「なぜあんたも居る？」

「ほら、早く行って下さい」

「分かった、分かったから押すなって」

「じゃあ行ってらっしゃい、兄さん」

「いってらっしゃい、恭哉君」

「ハァ・・・・・・・・・」

てな感じで強制的に追い出されてきた。
回想シーンに浸っていたら声が聞こえてきた

「早いのね、恭哉君」

「ん？琴吹か、まあ強制的に家を追い出されたからな」

「誰にですか？」

「母親と妹だ」

「妹さんいるんですか～～」

「ああ」

て言う他愛もない会話をしていると

「お～～い、ムギ～～キョウ～～」

「でけぇ声出すなよ・・・・」

「大きな声出すなよ律、はずかしいじゃないか」

「こんにちは、りっちゃん、澪ちゃん」

「・・・・・」

皆挨拶をする中俺は無言でいた

「挨拶しろよ！」

と、田井中の声が聞こえたので挨拶をしてやった

ビシッ！

「イタッ！」

デコピンで

「何すんだよ！痛いじゃないか」

「挨拶だ」

まあ、こいつのデコ見てたらデコピンしたくなるよな

「そういえば、唯がまだ来てないな」

「そうですね～」

と、俺達を無視して話し出す秋山と琴吹
その話に対して俺は

「あいつの事だから寝てるんじゃないか？」

「「「確かに・・・・」」」

全員の意見が一致した

「誰か電話してみろよ」

「じゃあ私がするよ」

そう言って田井中が携帯を取り出し電話を掛けようとしたとき

「みんな～～ごめ～～ん」

平沢がやってきた。ナイスタイミング

「あ、唯～～こっちこっち～～」

そのまま走ったら人にぶつかるかもしれ・・・・・・

「あ、すいません」

ぶつかった。

「何してるんだよ・・・・」

挙句の果てには犬にじゃれついてるし・・・・・・
おまえは１０分遅刻してるんだぞ・・・・

「目の前なのに・・・・」

「たどり着けない・・・・」

唖然としている秋山と田井中

「だから、何してるんだよ・・・・・」

呆れる俺

「ごめんね～～遅刻しちゃって」

「じゃあ、唯も来たところで行きますか～」

「そうだな」

「そうね♪」

やっとの事で平沢のギター買いが始まった。

「そういえば唯ちゃんお金用意できた？」

「うん、お母さんに無理言って5万円前借りさせてもらったよ」

「そう」

「お金っていつ必要になるか分からないよね！これからは計画的に使わなきゃ・・・
いけないんだけど・・・・・」

「こらこらこらこら！！」

「この服可愛い・・・今なら買える・・・」

服を買いに行こうとする平沢、それを止める田井中
呆れている秋山、なぜか笑っている琴吹

「ハァ・・・・」

ため息をついている俺

「ほら唯、行くぞ」

「待って～～見るだけだから～～～」

「ハァ、見るだけだぞ？」

そう言って、俺以外の奴らは服屋に入っていく
俺は入る事は出来ない、なぜならそこは女物の服しかないからだ。
そんな中に男がいたら周りからヘンな目で見られる。
それはさすがに厳しい。

「秋山、こいつらを頼んだぞ、俺はそこの本屋にいるから」

本屋に指をさして言う。

「分かった、すぐに連れ帰ってくるから」

「ああ、頼んだぞ」

本屋に付き楽器の雑誌やスポーツの雑誌を立ち読みする事にした。

立ち読みしていた本を戻し軽く体を伸ばす。

「あいつらまだか・・・・」

本屋を出て待っていると

「ごめん恭哉・・・・」

申し訳なさそうに俯いていた秋山が来た。

「気にしなくていい」

そう言って秋山の頭に手を置いた

「うん、わかった・・・・」

顔を赤くして返事をした。

「ほら、行こうぜ」

「うん！」

その後も楽器店に行くことはなく、ゲーセンだのなんだの目的とは全く関係のないところを巡っていた。

結局店に着いたのは昼ごろだった。

【１０ＧＩＡ】

（やっと着いたか・・・・）

「うわー！！すご～いギターがいっぱい！！」

（ツインネックがある・・・・）

そう思っていたら平沢もツインネックのギターを見ていた。
始めて見る人は頭が混乱するだろうな、俺も始めてこれを見たとき人間はこんなものは弾けねえだろとか思ったし。
平沢も同じことを考えていることだろう。

「唯、何してんの？こっちこっち」

「う～～ん…いっぱいあり過ぎてどれがいいのかわかりませ～ん」

まあ、そりゃそうだろ始めてだし

「なにか選ぶ基準とかあるのかな？」

「もちろんあるよ」

「なになに？」

「ギターって音色はもちろん、重さやネックの形や太さも色々あるんだ
だから、女の子は細くて軽いやつを・・・・」

「あ、このギター可愛い―♪」

（（聞いちゃいねー！！））

平沢が可愛いと言ったギターは

【ギブソン・レスポール】

（よりにも寄ってこれですか・・・・）

「おい、平沢」

「なに?きょう君」

「それ、２５万するぞ?」

「あ、本当だ・・・」

気づけよ・・・・・

「さすがに手が出ないや…」

「唯ちゃんそのギターが欲しいの?」

「うん…このギターがいい」

「何かする気か」

「ちょっと来て恭哉君」

「ああ」

なんだ?まさか俺を使って店員を・・・・ってそんなわけねぇかじゃあ、どうするんだ?

「ねぇねぇ、値切るってどうやってやるの?」

えっ・・・・まさかあのギターを値切るのかいや、いいところのお嬢様ならいけるかもしれない

「店員に向って負けて下さいっていえばいいんじゃないか?」

「やってみるわね?」

マジでやるのか・・・・

「あのー…ギターのお値段5万円に負けてもらえないでしょうか？」

「あ…あなたは社長の娘さん！！！」

まじで〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！！

これはマジで驚いた。

「で、ですが流石に5万円では・・・・」

「では、どれくらいで譲ってくれるかしら？」

「ちょ、ちょっとお待ちください」

そう言ってものすごいスピードで電卓を打ち始めた。

「これぐらいなら何とかなります」

電卓に出ていた数字は8万、25万がよくもここまで来たものだ・・

・・・

「う～～ん唯ちゃんが持ってたお金が5万円だから」

「もうやめとけ店員が可哀そうだろ」

「で、でも・・・・」

「あとの3万は俺が払うから」

「それだと恭哉君に悪いけど・・・・」

「気にするな、これは平沢に秘密な」

そう言って3万を先に出した

「本当にいいの？」

「いいんだ、平沢が買いたいって思ったギターを買わせてあげたいからな」

「そう・・・唯ちゃんに秘密で♪」

「ああ、平沢に伝えに行くぞ」

「はい！」

俺は平沢に甘いな・・・・
こいつらといると楽しいぜ、こんなこと中学の時とかはまったく思わなかったのに・・・・・・

「どこ行ってたんだよキョウ、ムギ」

「ちょっとな」

「唯ちゃんあのギター5万円で売ってくれるって！！」

「「「えぇ～～～～！！！」」」

「驚いてるのはいいんだが、早く買ってこい」

「う、うん」

平沢はギターを買いに行った。

「でも、どうやったんだ?」

「私が値切ったの～～～」

「普通に値切って??」

「うん」

「じゃあ、目的のものも手に入ったし帰るぞ」

「ありがとう、ムギちゃん!」

「私もそうだけど、恭哉君もよ?」

「え!そうなんだ・・・・・」

（きょう君はやっぱり優しいな・・・・）

そんなこんなで今日は終了まあ、これで本格的に部活が出来るわけで一安心だな。

その日の夜、平沢家

「エヘヘ…かわいいなぁ…持ってみたりして…うおっ!!ミュージシャンっぽい!!
サ、サインの練習しなきゃ!!」

「お姉ちゃんうるさい・・・・」

終始平沢は騒いでいたそうで・・・・・

「今日も楽しかったな～～～きょう君にお礼しなくちゃ!!!
明日からしっかり部活しよ!!」

きょう君今日はありがとう・・・・大好きだよ。

さりげなく自分の恭哉へのオモイを口にした唯であった。

週明けの月曜日

「お姉ちゃ～～～ん、早く起きないと遅刻しちゃうよ～～～！？・・・お姉ちゃん？？」

「う～～ん」

「添い寝！？」

好きのベクトルが違う平沢だった。

その日の夜、高嶺家

「痛い出費だな3万て・・・・・いいか別に平沢が喜ぶなら」

「へぇ～～兄さん好きな女の子でも出来たんですか??」

「ちげぇよ!!ただ、部活がやっとできるって思っただけだ!」

「そうですか～～～～」

「お、おい!・・・ハァ・・・・」

こんな感じで1日が終わった。平沢の事が好きか・・・・
可愛いとは思うけどな・・・・

「もういいや、寝るか・・・」

第六話　楽器と値切りとオモイ（後書き）

どうでしたでしょうか??
今後の唯と恭哉のオモイを待っていて下さい

感想等ございましたらお願いします。

ラルクでした!!

キャラ設定？（前書き）

前回の話に妹と母親が出てきたので
そのキャラ設定を入れたいと思います。

では、どうぞ！！

キャラ設定？

名前：高嶺　楓

詳細：身長・・１５５ｃｍ　体重・・秘密だそうです　誕生日・・１１月５日

主人公、高嶺恭哉の妹。中学３年。

兄である恭哉に厳しい半面、優しい面もある。

誰に対しても敬語で、敬語じゃなくなるときは怖がっているときか母親と

話しているときにしかならない。なぜか兄の恭哉には敬語。

性格はとても兄思いで、兄同様クールなイメージだが、実は怖がりでお化け屋敷などに入った際、恭哉の腕を離さなかったとか。

恭哉曰く、『楓の涙目＋上目遣いはやばい』だそうです。

中学時代荒れていた恭哉を止めた人でもある。

現在、兄と母親の３人暮らし小学６年の頃両親が離婚してしまっている。

そのため、家事全般は得意。クールな憂と思ってくれていい。

髪型はダ・カーポ２の朝倉音姫、髪の色は明るい茶色。

名前：高嶺　沙紀

詳細：身長・・１５８ｃｍ　体重・・秘密だそうです　誕生日・・４月６日

主人公、高嶺恭哉の母親。

とても優しく時に厳しく、理想的な母親。

性格は先ほど言ったように優しく、厳しい。そしてノリが良い？

ただ、夫関係の話をすると人が変わったかのように・・・・・・

家事全般はやはり主婦なので完璧、正直言うと高嶺家ＮＯ１である。

髪型はセミロングでツイストパーマ、髪の色は黒。

キャラ設定？（後書き）

まあ、ざっとこんなもんですかね？
今後も『けいおん~もう一人のギタリスト~』をヨロシクお願いします！

ラルクでした！！

第七話　平沢のギター、そして迫る中間テスト。（前書き）

最近作者は風邪気味です・・・・・しんどい
皆さんこの時期の風邪に御注意を・・・・
鼻が・・・・・・

というわけで、第七話どうぞ！！

第七話　平沢のギター、そして迫る中間テスト。

「寝みぃ・・・・・」

朝からダルイオーラ全開で起きる。
まあ、これにも訳がある。

（くそ…昨日楓にあんなこと言われたから寝れなかったんだ!!）

あんなこととは・・・・

『へぇ～～兄さん好きな女の子でも出来たんですか??』

なんという…妹が俺の心をつく破壊力・・・・・・
大ダメージだ・・・・昨日は平静を装ってたけどな。

「ハァ・・・・・」

朝はいつもの通り、朝食を作り・母さんを起こし（楓はちゃんと起きるのに・・・・）
途中に雄介に会い、一方的にしゃべってくる雄介を無視して学校に行く。
授業という平日の地獄を味わい、あっという間に放課後になる。

「おい、高嶺ちょっといいか」

「ん？」

いきなり担任に捕まった。

「なんだなんだ？？恭哉何かしたのか？？」

「てめぇは黙ってろ雄介」

「なんだと～～！てめぇが元不良「で、なんすか先生？？」話聞けーーー！！」

うるさいな・・・早く話聞いて部活行きたいんだが…。

「もういいさ！もう恭哉何か知るか！！」

「あ、そう…で、話は？？」

「すいませんでしたーーー！！」

忙しい奴だな…

「後で話聞いてやるからチョッとどっかいってろ」

「本当だな、じゃあいつものとこで！！」

そう言って手を振ってどこかへ行ってしまった。

（いつものとこって何処だよ・・・・）

「じゃあ、少しいいか？」

「いいっすよ」

それから、担任と電話番号だの住所だのを聞かれた。

「もういいぞ、軽音楽部頑張れよ」

「ああ」

あれは、軽音楽部と言えないだろ…放課後にお茶会してるだけじゃん・・・

部室に行く階段を上っていると徐々に騒がしくなっていく。
もちろん軽音部だ。部屋の前に着くとやはりうるさい。

（何やってんだよ・・・・）

そう思いドアを開けると、平沢のギターお披露目会が開かれていた。

♪ジャジャーーン♪

「「「おおーっ！」」」

「ギターを持つとそれらしく見えるな」

確かにこんなに似合うとは思わなかった。

「キョウも来たか！」

「・・・・・」

「恭哉君、今日は何飲む？」

「熱い紅茶を頼む」

「は～～い♪」

琴吹の紅茶は美味いからな・・・・

「ねぇねぇきょう君」

「あ？なんだ」

「似合う？？」

そう言って俺の前で一回まわった。

「・・・・いいんじゃないか？」

「エヘヘ／／／」

何故か照れている。

「ねぇ唯、何か弾いてみてよ」

「わかった！」

そう言って平沢はギターを構え、弾き始める。

「・・・・」

♪チャラリ～ララ～チャチャチャラララ～♪

「チャ○メラ！？」

まさかのここでチャ○メラ。

（なぜこれを弾こうと思ったんだ・・・）

「唯、家でギター練習してないの？」

「家じゃほったらかしなんじゃないの？？」

こいつの事だ、練習よりこのギターに見とれてたりするだろ。

「そ、そんなことないよーっ！！」

まさか意外に練習してるのか？

「すっごい大事にしてるんだよ？埃が付いたら拭いたり、鏡の前でポーズとってみたり、添い寝したり、写真撮ってみたり…ボーッと

眺めてて一日が終わっちゃうなんてこともしょっちゅう…」

ギターがまるで人形の様に・・・・・・
つーか・・・・

「「弾けよ」」

田井中と見事にハモった。

「いやーギターってきらきらぴかぴかしてるから、何か触るのが怖くて・・・」

「ああ、わかるわかる、そういえばギターのフィルムも外してないもんね…唯ってもしかして
携帯のモニタのフィルムもはがしてないんじゃない？」

それはないだろ・・・・

「すごい！！何で分かったの！？」

まじか・・・・

「何で外さないんだ?」

「ん〜〜・・・・分かんない!」

そんなに元気よく言われてもな・・・・・・・

(ん?田井中が平沢のギター見て何しようとしてるんだ?)

手つきが怪しいし、なんかうずうずしてるし・・・・・・まさかあいつ、もしかして・・・・・・

「えーいっ!!」

ビリビリッ!!

やりやがった・・・・・

「あぁーーっ!!!」

あーあ、平沢が震え始めてるし、もう半泣き状態だし・・・・
しまいには部室の隅で体育座りで『ズーン』って言う音が聞こえそうなくらい
落ち込んでるし。

「これは、田井中が悪い…」

「そうだぞ、今のは律が悪い、ほら謝れ」

「ご、ごめんっ!!ほんの出来心だったんだ!!」

田井中が謝っても変わらず隅で体育座り中。

（そこまで落ち込む事かよ・・・・）

とりあえず、練習できないと何も始まらないんだが・・・・・・・
どうしたもんかねぇ・・・・

「ほーら!!ムギが持ってきたお菓子だぞー!!」

「そんなので機嫌が治るわけないだろ」

「いや、意外と治るんじゃないか?」

モグモグッ

(なおったーーーー!?)

「やっぱりな・・・・」

平沢の事だからそんな事だと思ったよ。

「そうだよね…やっぱりギターって弾くものだよね…ただ大事にしているだけじゃ
ギターもかわいそうだよね、ありがとうりっちゃん!私ヤル気出てきたよ!」

いやいや、それは違うと思うが・・・・・・

「お?…そ、そうか?うん!唯がギター練習するきっかけになると思ったんだ!
さすがわた・・・「調子に乗るな!」うっ!!」

田井中の脇腹に秋山の痛烈な突っ込み、もとい肘打ちが炸裂する。
的確に入ったらしい、脇腹を押えて「お、おお…」と呻きながら壁
に手をついている。

（あれは痛そうだ・・・・）

「それにしても…このお菓子凄く美味しいよー、ムギちゃんこんな
高そうなお菓子
いつも貰っちゃっていいのかな？」

「いいのよ、いつもいろんな方から頂くんだけど家に置いておいて
も余らせてしまうから
皆に食べてもらった方がいいの」

（いろんな人から余るほどお菓子を貰う家ってどんな家！？…どん
な家ー！？）

さすがはいいところのお嬢様だな。こいつの家を見てみたい・・・・

「そういえば、どうやってギターでライブみたいな音出すの？」

「ああ、アンプに繋いだら出るよ？繋いでみる？」

何か嫌な予感がする・・・・

「うん！」

ジャラーン♪

「おおー！！かっこいいー！！」

初めてだと感動するな。俺もしたし。

「でも…まだ、チャ〇メラしか弾けないし・・・・」

（つーかなんでチャ〇メラ弾こうと思ったんだ？）

「アンプで音を鳴らすのはもう少し練習してからだね…」

そう言って、アンプからコードを抜こうとする。

（嫌な予感的中・・・・）

俺は急いで鞄の中にある音楽プレーヤーを出し、たまたま今日はヘッドホンだった為
それを耳につけ音楽を流す。

「あっ!!唯、危ないっ!!」

「ほえ?」

ボンッ!!!

「平沢、ボリュームを下げる前にコードを抜くと、今みたいな音がでるんだよ・・・・」

「だから、気をつけてね?大丈夫??」

「きょ…きょう君…早く言って～…」

どうも、田井中まで食らったみたいで・・・・

「キョ、キョウ…ヘッドホンなんてずるいぞ…」

「んなこと言われてもな・・・」

「そう言えば、ギターの絃って怖いよねー細くて硬いから指切っちゃいそう…」

平沢はそういった瞬間、田井中が何かを閃いたように目を輝かせた。

（今度は何をやらかすんだ・・・）

「そうだぜー気をつけないと指がスパーッと切れて血がドバーッと
「キャーッ!!」…あれ？
なんで…澪から悲鳴が…唯を驚かそうとしたのに…」

「可愛い悲鳴・・・」

「い・・・痛い話はダメなんだ・・・」

体を縮ませてブルブル震えている。

「おい、大丈夫か？」

とりあえず近くに寄って肩に手を置く。
ん？なんで平沢に睨まれてるんだ？

「う、うん、大丈夫・・・・・」

「きょう君・・・・・」

「ん？なんだ？」

「え、いや何でもないよー…ははは…」

「は？まあいいけど」

なんだ??

「おほん、ギターを練習してるうちに指先が硬くなるから血が出たりすることはないよ」

「ふ～ん」

俺は硬いのかどうか分かんねぇな

「ほら、私はベースだけど」

「わ、本当だ」

そう言って指を揉む・・・・・揉む・・・・・揉む・・・・・揉む・・・・とにかくずっと揉む

（いつまで揉むんだよ・・・・）

「あの…唯?」

「も、もうちょっとだけ・・・・・」

（まだ揉むのか・・・・・）

ふと、俺と目が合う、そして思いついたように・・・・・

「あ、きょう君の指はどうなってるの??」

「俺?さあな・・・・・」

「触ってもいい??」

「別にいいが・・・・ほら」

断る理由特にナシだったので手を出す。

「あ、すごい硬いよ」

「いずれはお前もこれくらいなるだろ、ちゃんと練習すればだが」

「うぅ…で、でもギターを練習するって言ってもいったい何から始めていいか分かんないや」

「とりあえず、最初はコードを覚えるといいよ」

そう言ってある一冊の本を渡す、タイトルは

【サルでもわかるコード】

この本のタイトル付けた奴、なめてんのか？
つーかこれ読んで分んなかったらサル以下かよ・・・・

「え、ありがとう」

平沢は本をペラペラめくって読んでみる。

「ま、まずは楽譜の読み方を教えて下さい…」

「「そこから（かよ）！？」」

「それじゃ、また明日～」

別れた俺は、トボトボと帰っていた。

（平沢の奴ギター、大丈夫なのか？まあ、心配無いか・・・・）

「何か忘れてる事がある気がするんだよな・・・・・あ、雄介の事忘れてた・・・・
まあいいか」

家帰ったら昼飯の準備しないとな・・・・メンドイから楓に手伝ってもらうか・・・・

雄介

「恭哉の奴何やってんだよ・・・・」

橘　雄介はいつも？の場所で未だに待っていた。

「恭哉ーーーーもう6時半だぞーーーー」

根気がいい奴である。

「もう帰るからな！！」

お疲れ様です・・・・・

平沢　唯

全員と別れた後、平沢はコードの練習をしていた。

「えーと、これがCで…これがD・・・・」

う～んやっぱり難しいなー、きょう君ぐらいに弾けるようにならなくちゃ。

でも、きょう君はやっぱりすごいなぁ～、かっこいいし・ギターうまいし

優しいし、少しぶっきらぼうだけど、憧れるよ～～～。
・・・・・やっぱりきょう君のこと好きなんだな・・・・・・
きょう君は好きな人いるのかな？いないといいいな・・・・・

そんな事を考えていると後ろから知ってる声がした。

「唯ーーっ！」

「あ、和ちゃん！」

思わず今まで練習していたコードが指に出てしまった。

「何それ？新しい挨拶？」

「えへへ、今日ギターのコードを教えてもらったんだー」

「へーがんばってるのね」

「そういえば和ちゃん遅かったね、何してたの？」

「うん、図書館で中間テストの勉強してたから」

「へぇ～」

へぇ～、ではないと思う・・・・・・

「・・・・・・」

「・・・・・・」

沈黙が介入してくる・・・・が、その沈黙が平沢の言葉によって打ち破られた。

「え!?中間テスト!?」

そして、またコードが指に出る。

「…それもコード?」

「そっかぁ…もう中間テストなのかぁ…せっかく頑張ってギター練習しようと思ったのに…」

「・・・あんた今まで試験勉強なんてしたこと無かったじゃない」

「そっかーなら大丈夫だネ☆」

「いや…大丈夫じゃないけど…」

それから真鍋と別れた平沢はちゃんと勉強をしようと決めたのだった。

高嶺　恭哉

そういや、そろそろ中間テストじゃねぇーか。
クソダリィ・・・・しゃあないここは勉強しないとな。

恭哉も勉強しようと決めたのだった。

第七話　平沢のギター、そして迫る中間テスト。（後書き）

すいません！！投稿遅れました・・・・
くそ～ＰＣ使う暇がなかった・・・・
今度から早く更新していきますのでよろしくお願いします！！

ご感想をくれた、黒き勇者先生、デビルマン先生、奇跡の覚醒者先生
ご感想ありがとうございます！！

今後も本作品をヨロシクお願いします！

ラルクでした！！

第八話　試験終了、だが平沢の追試（前書き）

すいません！！また遅れました・・・・・

この作品を楽しみにしている方「いないと思いますが」すいません

でした！！

では、第八話どうぞ

第八話　試験終了、だが平沢の追試

静寂に包まれたこの教室に……

カリカリカリ……

シャーペンの音が四方八方から聞こえてくる。

今、高校生になり初のテスト真っ最中。

俺が問題をそこそこ詰まりながらも解いてるのに対し、
後ろの席に座っている雄介は戦意喪失中だった。
ん？なんで状況が分かるかって？
そりゃあ後ろから「分からねぇ・・・・」だの、「何だよこれ…こんなの見た事ねぇよ…」
とか言ってるのを聞いてりゃ状況ぐらい分かるだろ。

（勉強ぐらいして来いよ・・・・・）

そんなことを思っている俺であった。

テスト終了

「ハァ・・・・やっと終わった・・・・・・」

ようやく長いテストとの戦いが終わった。
ちなみに後ろの雄介は白目をむいて意気消沈している。

「唯、大丈夫？」

どうやら平沢までもが意気消沈しているようだ。

その後放課後までずっと平沢と雄介はどこを見ているか分からない目で一点を見つめていた。

次の日の放課後

「う～んっ、やっとテスト終わったぜ～っ！！」

「高校になって急に難しくなって大変だったわ」

「そうだな…そして…もっと大変そうな奴がココに・・・・」

そう言って明らかにテンションが下がった平沢を見る。

「そ、そんなにテスト悪かったのか？」

「ははははは・・・・・クラスで二人追試だそうです…」

「二人？二人って事は唯以外にいるんだよな？」

「そう言うことになるな・・・・・まさか・・・・・」

そう言うと全員俺の方を向いてきた。

「俺じゃねぇ・・・・・」

「「「「そっかぁ・・・・・」」」」

ひどくねぇか、そんなに勉強できない様に見えるか・・・・

「じゃあ誰なんだ?」

「お前らは知らなくていい奴だと思うが・・・・」

きっと雄介の奴だろう・・・・いや、きっとじゃない…絶対だ。

「恭哉は知ってるのか?」

「一応な」

「誰だよ~キョウ教えてくれよ」

「お前らは一生知らなくていい奴だ・・・」

「ぶぅ～」

「とにかく、今は平沢のテストの結果じゃないのか？」

「そ、そうだな」

つーか１２点って……勉強してねぇだろ・・・・・・

「で、でも大丈夫よ！今回は勉強の方法が悪かっただけじゃない？」

「そうそう！ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕！」

少しエールぐらいは送っとくか・・・・

「まあ追試ガンバレ…」

「勉強してなかったけど・・・・・・」

「「励ましの言葉返せコノヤロウ」」

予想はしてたけどな…エール送ってやったじゃねぇか……

「なんで勉強しなかったのさ」

「いや～…しようと思ったんだけど…何か勉強中ってさ勉強以外のことに集中できたりしない？」

「あーそれはあるな…部屋掃除はかどったりな」

「それで勉強の息抜きにって思ってギターの練習したら抜け出せなくなって結局全然勉強できなかったの」

「それはいいけどよ…そんだけギターの練習してたなら少しは上達してるよな？」

これで上達してなかったら意味がねぇけどな・・・・

「おかげでコード殆ど弾けるようになったよ！」

そう言ってピースをする平沢。

「その集中力を勉強に回せば……いや、すごいけどね……」

秋山がボソッと突っ込みを入れる。

「ハァ……琴吹、熱い紅茶くれ」

「は～い♪」

とりあえず紅茶を頼む。何度も言ってると思うが琴吹の紅茶はうまいぞ。

「そう言うりっちゃんはどうだったのさ！」

「ん？わたし？余裕ですよ！この通り！！」

『バーン！』と音が鳴りそうな勢いで出したテストの点数は８９点。

（なかなか点が高いな）

ふんぞり返っている田井中の点数を見た平沢は・・・

「……こんなのりっちゃんのキャラじゃないよ……」

確かに田井中はこんな点を取る奴には見えない。

「なんだと！どういう意味だ！！私くらいの人間になるとなんでもそつなくこなしちゃうのよ！」

と、お嬢様風に笑う。

「りっちゃんは私の仲間だって信じたのに・・・・・」

まあ、田井中も誰かに勉強を教えてもらってたんだろ。

「テスト前日に勉強分からないって私に泣きついてきたのはどこの誰だっけ？」

「あっ！！バラすなよ！！」

やっぱりな・・・・・

「それでこそりっちゃんだよ！」

「赤点取ったやつに言われたくねぇー！！いい顔しやがって！」

「平沢は今度からしっかり勉強すること、田井中は自分の力で勉強すること
って言う事が目標じゃないか？なぁ秋山？」

「えっ！あ、うん…そうだな」

「くそーキョウのクセに生意気な！！」

田井中は俺のところに来たと同時に俺の頬を引っ張る。

「いてーから」

そう言って俺も田井中の頬を引っ張る。

「いひゃいひゃひゃいひゃ！（痛いじゃないか！）」

「きょう君はどうだったの？」

「俺か？……いい加減離せよ」

ちなみに俺はもう離している。

「ぶぅ～～」

ぶぅ～～じゃねぇよ・・・・・

「はいよ」

テスト結果を平沢に渡す。

「そんな……きょう君までこんなに出来てるなんて……」

「何を言ってるんだ唯、キョウがそこまで出来るわけが・・・・・・

・ナニーーーーーー！！！！」

「うるせぇな・・・・・」

「だって全教科８０点以上だとは思わなかったもん！」

「そうかい・・・・・ほら返せ」

しぶしぶ返す平沢に今だ「キョウがこんなにできるなんて」と呟いている部長。

「俺の事はいいから、今は平沢の事だろ？」

「ん～…とりあえず追試で合格点取るまで部活動は禁止だって…」

「え！？そ…そしたら部室にいるのもまずいんじゃ！？」

「大丈夫だよ、お菓子食べに来てるだけだし」

（お前は軽音部に菓子食いに来てんのかよ……）

「そっかそれなら安心だね・・・・・・・・・・ってなんでやねん！」

田井中のノリ突っ込みは見事に平沢の首をしめた。

「…というわけで、澪ちゃん、きょう君助けてーーー」

「え…わたし？」

「俺もかよ……」

秋山は少し考えて・・・・・・・・

「…仕方ないな…それじゃ今日、勉強会するか！」

「本当！？」

「唯も澪に教えてもらえば確実に合格点取れるよ！上手いんだぜ？澪は・・・・・・・・一夜漬け術を教えるのが！」

「うぉーい!!印象悪いな!!普通に勉強教えるよ!!」

「俺も行かなきゃいけないのか?」

「そうだぞ!行かなきゃダメだぞ!」

「そうだそうだーきょう君も行かなきゃダメだぞー!」

「わかったわかった……静かにしろ…じゃあちょっと待っててくれ」

そう言って携帯を持って一旦部室を出ようとする。

「あ…何時くらいまで勉強会やるんだ?」

「う~ん…とりあえず唯が分かるまで?」

「・・・・・なんだよそれ」

とりあえず部室を出て妹に電話をかける。

プルルルルルル・・・・・・・

『はい？どうしたんですか？』

「ああ、今日部員全員で勉強会するから当分帰ってこないかもしれない」

『そうですか、ではご飯はどうしますか？』

「楓達で食っててていいぞ、俺は何とかしとくから」

『分かりました、では気をつけて下さいね？」

「ああ、じゃあな」

「はい」

ピッ

電話が終わり部室のドアを開けたら・・・・・・

「何やってんだお前ら」

全員がドアに耳を当てていた。

「聞いてたのか？」

「えーとそれはー・・・・・・」

「ハァ・・・別にいいけどな」

「ねぇねぇ、楓って誰？」

「俺の妹だ」

「「「「妹！？」」」」

「なんかおかしいか？」

「イヤ…なんて言うかキョウって男兄弟って感じがするから」

「あっそ……で、勉強会やらないのか？」

「あ、うんやるよ」

「どこでやるんだ？」

「唯の家でやるんだよん♪」

平沢の家だと・・・・・・

「じゃあいくぞぉ～～」

「「「おぉーーー！！」」」

「お、おー……」

だから恥ずかしいならやるなって。

平沢家

「ただいまー」

「「「おじゃましまーす」」」

「・・・・」

「皆上がって」

「お姉ちゃんおかえり～…あれ？お友達？」

「うん、部活の友達だよ」

「はじめまして妹の憂です、姉がいつもお世話になってますー」

（（（出来た子だー！！））））

唯の部屋

「…いやー…姉妹でこうも違うもんかね？」

「何が？」

「妹さんにいい所全部吸い取られたんじゃないの？」

「ひどーい！！」

「……あの～みなさんよかったらお茶どうぞ、買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど」

（（（本当に出来た子だー！！））））

見た感じ中学生だが・・・・・

「なあ、平沢妹」

「は、はい」

（そういえばお姉ちゃんが男の人を連れてくるって初めてだな・・・
・・ま、まさか彼氏さん！？
そ、それとも好きな人かな！？）

「おい、大丈夫か？」

「へっ？あ、はい！何ですか！？」

「今、中3？」

「はい、そうですけど……」

「キョウはいきなり何を聞いてんだよ……」

「気にすんな、こっちの話だ……で、高校はどこへ行く」

「えっと一応桜ケ丘高校ですけど…それが何か？」

「そうか……一つお願いがあるんだが俺の妹も来年桜ケ丘に入学するんだ、
仲良くしてくれないか？」

「……はい！勿論です！」

少し戸惑いながらも了承してくれた平沢妹。

「サンキュウ・・・あ、自己紹介が遅れた、高嶺恭哉だ」

「妹の憂です。ヨロシクお願いします、恭哉さん♪」

「ああ」

「えっと・・・・」

こんな会話をしていると秋山が口を開いた。

「そろそろいいか？唯の勉強しないといけないんだけど」

「ん？ああ、すまない、やってくれ」

「す、すいません！では、ごゆっくり」

そう言うと平沢妹は部屋をでていった。

「じゃあやるぞ・・・・・・」

秋山の号令により勉強会がスタート。
だが、開始したのはいいが俺と田井中は暇すぎて何もやる事が無い。
人の家で寝るわけにもいかず、人の部屋（女の子の）を詮索するわけにもいかず
俺はずーと音楽を聴いて平沢のベッドに寄りかかっていた。

（だぁー暇すぎる……ふぁ～～やべ寝みぃ・・・・・・）

寝るわけにもいかずと言っていたが案の定寝てしまった。

「・・・て！・・・・・や君」

ん？なんだ？

「・・・きて！・・・・・う君！」

だからなんだよ……

「起きて！きょう君！」

「あ？……あ、わりぃ寝ちまった」

「ぐっすり寝てたね、きょう君」

「今何時だ？」

「今は１１時だよ？。」

「……マジ？」

「うん！」

「そうか、で、平沢は勉強大丈夫なのか？」

「うん！もうばっちりだよ！」

「そりゃよかったな」

「それじゃ、私達はそろそろ帰りましょうか」

「そうだな…ってあれ？律は？」

確かに部屋を見渡してみてもどこにもいない

「あいつどこ行ったんだよ……」

そう言って全員平沢の部屋がある二階から階段を下り、何か音がする部屋に入る。
すると、平沢妹と田井中がゲームをしていた。

（なじみ過ぎ！）

「ハァ・・・・・・」

高嶺宅

「ただいま・・・・」

「おかえりなさい、兄さん」

「おう、まだ寝てなかったのか？」

今、１１時半を過ぎている。

「兄さん結局何も食べてないんですか？」

「ああ、あっちで寝ちまった」

「そうですか、じゃあご飯作っておきましたんで食べて下さい」

「マジで？……ありがとな」

「はい♪」

平沢よ、俺の妹もなかなかの出来た子だぞ。

何日が経ったある日　追試返却日

「大丈夫かな唯…」

「大丈夫じゃないか」

平沢を心配しているとドアが開いた。

ガラッ

「ど、どうだった！？」

「ど…どうしよう澪ちゃん、きょう君」

「え…まただめだった？」

「ダメだったのか？」

「１００点取っちゃった…私すげぇ…」

「極端な子っ！！」

「紛らわしいな・・・・・・・・」

「まあ、とりあえずこれで一段落だな…」

「そうですね♪」

「みんなのお陰だよ！本当にありがとう！！」

「イヤ～～それほどでも～」

「お前は何もしていない」

こいつは俺が寝ている間何をしていたんだ・・・・・・・・・

「ギターの練習に復帰させるまでが一苦労だな…」

「確かにな」

「んじゃ追試合格祝いにカラオケでも行くか！」

「おごってくれるの？」

「それはねーよ」

今思ったがあいつコードちゃんと覚えてんのか？
ちょっと聞いてみるか。

「おい、平沢」

「ん？何？」

「ギター持ってきてるか？」

「うん、あるよ」

「じゃあ、コードのおさらいするぞ」

「まっかせなさい！練習した成果を見せてあげるよ！」

「じゃあ、【Ｅｍ】弾いてみろ」

「・・・・・・」

「まさか・・・・・」

「しゅいましぇ～ん・・・・・・」

「お前覚えたんじゃないのか？」

「今までの勉強が頭に入り過ぎて、コード全部忘れちゃった・・・・・」

また一から教えなきゃいけない事に俺は気が落ちそうになった。

「ハァ・・・・・・」

第八話　試験終了、だが平沢の追試（後書き）

第八話はなんと過去最高５０００字を超えると言うまさかの文字数・・・・・

まあそんなことより、感想等ございましたらお願いします！！

ラルクでした！！

第九話　合宿、つーか別荘広すぎ……これで一番小さいのかよ……（前書き）

どうもーラルクです！

最近小説の文字数が増えてる……

というわけで、第九話どうぞ！

第九話　合宿、つーか別荘広すぎ……これで一番小さいのかよ……

「夏だ！海だ！泳ぐぞーっ！！」

「おーい、あんまりハメはずし過ぎるなよー！！」

「唯！水がしょっぱいぞ！！」

「塩！塩だよりっちゃん！！」

「き…聞いちゃいねぇ～…」

「ハァ・・・・・」

現在夏休み。何故か俺は海に来ている。
なぜ海に来ているかと言うと……

夏休み前

「合宿をします！！」

突然秋山が何の前触れもなしに言ってきた。

「え？合宿！？」

「マジで！？海！？山！？」

「遊びで行くんじゃありません」

「て言う事はバンド合宿てか？」

「そう！いい事を言った恭哉！」

「そりゃどうも……」

「目的はバンド強化合宿！！朝から晩までみっちりと練習するの！！」

「うわー着ていく服買わなきゃ！」

「水着も買わなきゃな！」

「聞いちゃいねぇ……」

「聞けーっ！！！」

まあ、夏休み明けには学園祭があるからな。
つーか練習しないとヤバいだろこの部活は……

「唯と恭哉が軽音部に入ってから数カ月たつのに未だバンドの練習したこと無いだろ？」

「それはそうと…何で急に？」

「夏休み明けたら学園祭があるだろ？」

「学園祭……！？はいはーい！！メイド喫茶やりたーい！！」

「私お化け屋敷ーっ！」

いや、平沢お化け屋敷とか苦手じゃなかったのか？

「ここ軽音部！！ライブやるのー！！」

こいつら相手にまあよくも頑張るもんだ秋山は……

ゴンッ！！

「ちょっとしたジョークなのに…何で私だけ」

「お～」

アレは絶対に痛い……

「でも澪ならメイド衣装とか似合いそうだな」

「なっ！？……私が……」

秋山の頭から煙が出ている。

「なんてなー冗談だよ冗談」

ゴンッ！！

うお～見事な鏡餅……つーか痛そうだ……

「律がいじめる…」

「お～よしよし」

秋山は琴吹に慰めてもらってるし……

「でも、合宿って言ってもスタジオ付きの旅館とかあるの？」

「私お金無いよ？」

「確かにいくら合宿したくても場所がなきゃダメだな」

「うっ…」

そこまで考えてなかったらしいな。

「ム、ムギ別荘持ってたりしない…？」

「いくら琴吹でも「ありますよ？」…は？」

（（（（どんだけーーー！？））））

正直これは驚いた……

時はぶっ飛びまくって琴吹の別荘前。

「うわーーっ！！すごーいっ！！」

「で、で、でけえーっ！！」

「本当にこんなところに泊まっていいの？」

「本当はもっと広い所に泊まりたかったんだけど…一番小さいところしか
借りられなかったのごめんなさい」

（これで一番小さいのー！？）

（…て言うか他にも別荘あるのかー！？）

「これで申し分ないと思うぞ琴吹」

「そうかしら？」

「ああ、とりあえず用意してくれてありがとな……」

「えっ…あ、はい！」

（つーか、これで小さいのかよ…他の別荘はどんだけデカイんだ・・・・）

「じゃあ、中の案内しますね？」

「頼んだ…」

中に入ってから色々と説明を受けたが…ダメだ、広すぎて何が何処にあるのかがサッパリ分からん。
とりあえず、トイレだけは覚えた。

「最後にここがスタジオです」

「なかなかいい所だな……アンプも新品でいい…いいのか？ここ使っても？」

「はい、勿論！使ってくれて構わないですよ♪」

「ん？今思ったんだが…田井中と平沢はどこへ行った？」

「確かに何処へ行ったんだ？」

「何処でしょう？」

とりあえず、スタジオを出て探す。
ある部屋にたどり着くと……

「よーし、遊ぶぞー！！」

「「おーっ！！」」

そこには水着に着替えた、田井中と平沢と琴吹がいた。……ん？
琴吹？
いつの間に着替えたのか……

「おいおい、ここに来た目的は遊ぶ事じゃ……」

「突撃ーっ！！」

とうとう、この場には俺と秋山しかいなくなった。

「私も遊ぶー！！水着どこー！？」

「ハァ・・・・・・・・・・」

秋山がそこで着替え始めたらヤバいのでこの部屋から出た。

「仕方ねぇ…俺も行くか……」

とりあえず、開いてる部屋に入り鞄に入っていた水着とパーカーに着替える。
一つ言っておくぞ、水着って言っても海パンとかじゃないぞ。

「帰ってきたら練習しねぇとな……」

海水浴満喫中……恭哉ｓｉｄｅ

「よ～し、行くぞー唯ー」

「来い！りっちゃん！！」

「そーれ！」

「キャアッ」

「あはは、唯ードンくさいぞぉ～」

「何だこの暑さは……来なきゃよかった……」」

「あぁ～きょう君だ～～お～～い」

「うるさいぞ」

「だって～……あ・・・」

「ん？どうした？」

いきなりなんで顔赤くしてんだ？

「ううん！なんでもないよ！エヘヘ／／／」

（やっぱりかっこいいな……）

「俺はパラソルの下にいるから……」

「えっ、一緒に遊ばないの？」

「こんな暑い日に遊んでたら俺は死ぬ……」

「そうなんだ……」

あれ？なんか機嫌悪い事言っちゃったか。
仕方ないこんな時は褒め言葉を。楓が『機嫌損ねるようなこと言ったら
褒め言葉を言いなさい』って言ってたからな。

「あ～……平沢、えっと…水着似合ってるぞ……」

「えっ…あ、ありがとう！」

（ガラじゃねぇな・・・・）

俺はそのままパラソルの下で寝っ転がり手に持っていた団扇を扇いだ。

「恭哉君、カッコいい事言いますね？」

「うお！琴吹か……聞いてたのか……」

「はい！」

「今言った事は忘れてくれ」

「忘れません♪」

「ハァ・・・・・」

海水浴満喫中……恭哉ｓｉｄｅじゃない方、じゃあ何ｓｉｄｅ？…色々って事で！

「うおー綺麗なところだな～」

「・・・・・・・・」

秋山が黒い水着で登場するや田井中の先程までの笑顔が一変。
目線は確実に秋山の胸に一直線。
そして・・・・・・・・・・・・・・・・

「くらえーーーーっ！！！」

「ぶはっ！」

持っていたビーチボールを秋山の顔面に当てる。

「何するんだよ律！！」

「へーんだ！私だって……私だってーーーーーーっ！！！！」

田井中は捨て台詞を吐き去って行った。
まあ、その後も楽しく遊んでいたが・・・・・・（特に秋山が……）

色々ｓｉｄｅｏｕｔ

「ふぅ～遊んだな～」

「あっ！バンド練習！！全く…律が遊ぼうとか言うから時間がほとんどなくなったじゃないか…」

「一番楽しそうに遊んでたのは誰だよ」

「そういえば、きょう君はどこ行っちゃったんだっけ？」

「そう言えばそうだなキョウの奴何処行ったんだ？」

「それなら恭哉君はパラソルの下でまだ寝てるよ」

というわけでパラソル下へ移動。

「良く寝てんな～キョウ」

「そうだな」

「カッコいいですね～恭哉君の寝顔♪…ね？唯ちゃん？」

「ほえ！？う、うん…そ、そうだね……／／／」

「どうしたんだ唯？」

「ほほ～う…唯まさかキョウの事好きなのか～？寝顔見てそんなに顔赤くしちゃってさ♪」

「えっ！ち、違うよ～…た、ただ～・・・・・」

「ただ、何だって？」

「えっと……カッコいいなって思っただけで……」

「ふ～ん……いいんだぞー唯、私達には正直でも♪」

「そうですよ！正直にどうぞ！」

「うん！唯の事応援してやるからな！」

「あれ？澪はキョウの事好きなんじゃないの？」

「えっ！そうなの！！」

「ち、違うよ！でたらめな事言うなよ律！」

「よ、よかった～……あっ」

「聞いちゃったぞー」

「あ……あう～／／／」

「まあいいさ応援してるぞ唯！」

「頑張ってね唯ちゃん！」

「頑張れ唯！」

というわけで平沢が恭哉の事が好きな事が恭哉以外にバレたのであった。

「・・・・・・ふぁ～……ん？お前ら何してんだ？」

「うわ！ビックリしたー！」

「恭哉！今の話聞いたか！」

「あ？聞いたも何も寝てたから聞けるわけねぇじゃん」

「そっか・・・・よかった～」

「は？」

「まあ、こっちの話だよ、じゃあキョウ先行ってるぞ～」

「お先失礼しま～す」

「ま、またね／／／」

俺を置いて全員走って戻って行ってしまった。

「お、おい！・・・・・・ハァ、何なんだよいったい……」

別荘内

「うわー立派なスタジオだなーっ！！」

「なあ澪、もう今日はやめにしようぜー……遊び疲れた……」

そう言った田井中に秋山は何か考え付いたようで……

「…そういえばさっき海で遊んでた時思ったんだけど、律…太ったんじゃないか？」

なるほどな、そう言うことか……

「最近ドラム叩いてないからじゃないの？」

すると田井中がものすごいスピードで、

「うわーーん！」

と、言いながらドラムを叩き始めた。

（さ、平沢のギターを見てやるか……）

「おい、平沢ギターの練習するぞ」

「うん♪あっ、きょう君ちょっと弾いてみるから見ててくれる？」

お？平沢から弾いてみるなんて以外だな。

「そうか、じゃあ弾いてみてくれ」

……演奏中……

♪ジャラーン♪

「ど、どうだったかな？」

「正直言うとたった数カ月でここまでなったのはすごいぞ……」

「あ、ありがと～♪」

「すご～い！弾けるようになってる！」

「えへへ～っ、がんばったもん！」

「へ～…あとはチョーキングとかスライドとか細かいテクニック覚えたら完璧だな」

「チョーキング？」

いきなり田井中が平沢の首をしめた。

「「違う」」

「まあ、平沢ならすぐ覚えられるだろ……」

「ねぇねぇきょう君、チョーキングって何？」

「チョーキングっつうのは音を出しながら弦を引っぱりゃいい、そうすっと音程が上がるまあ、実際にやってみると……」

グワ～ン

「おお～」

「平沢もやってみろ」

みょ～ん　みょ～ん

「そんな感じだ」

「あはははははは」

「そこツボるとこか？」

「それが唯なんだよ・・・・・・・・」

なんだそれ・・・・・

「なぁ皆、曲合わせてみないか？」

「そうだな、いいぞ」

「私もいいぞ～」

「私もいいですよ♪」

「私もいいよ！」

「そんじゃ、田井中頼んだ」

「オッケー、1，2，3，4！」

……演奏中……

「恭哉、どうだった？」

「まあ、いいんじゃね？後は個人的練習だな」

「あ～もうお腹すいた～～～誰かご飯作って～～～～」

「そうだなーもう腹減ったぜー」

「ご飯誰が作りましょうか？」

「そんじゃ、俺が作るとしますか……」

「「「「えぇ！！」」」」

「あ？なんかおかしい事言ったか？」

「えっ、いや、だってきょう君料理作れるの？」

「ああ、そうだが？」

「そんな・・・・・・」

「まさか、キョウが料理できるとは・・・・・・」

「確かに意外だな・・・・・・」

「意外です・・・・・・」

「つーかなんで平沢はそんなにショック受けてるんだ？」

（そんな……女の私が料理できないのに男のきょう君が出来るなんて・・・・・）

「う～ん・・・・」

「何考えてるんだ田井中？」

「ちょっと聞いてもいい？」

「ああ？」

「キョウってさ家庭的な女の子の方が好き？」

「いきなり何聞いてんだお前？」

「いやなんとなく……」

全員が俺の返答を待っているようで……

「あー……基本的には別にどっちでも構わないが家庭的ってのもアリだと思うし
できなくても、これから勉強して上手くなってくれるならそれでもいいと思うが…」

「つまりどっちでも構わないと？」

「まあ、そうだな」

「（よかったな唯♪）」

「（へっ！で、でもまだ結婚するとか決まった訳じゃないし、ていうかまだ付き合ってもないし……あわわわわ）」

なぜか知らないが平沢が慌て始めた。

「まあ、いいや…お前らはどっかで待っててくれ、俺は飯作ってるから」

俺はそれだけを言い残してキッチンに向った。

「えーと……結構揃ってんな……」

冷蔵庫の中には、肉、魚、などなど高級食材が色々あった。

「まあ、色んなの作ってみるか…あいつらなら何作っても喜ぶだろうし」

そう言って自分も腹減っていたのでさっさと作ってしまう事にした。

……1時間後……

何故一時間で作れたかというと……キッチンがいい設備でな……

「おーい、飯できたぞー」

「「「「は～い」」」」

「ご飯だぜーーーっ!!」

「うわ～いい匂い～」

「美味しそうだな!」

「すごいわ!さすが恭哉君!」

「そりゃどうも…じゃあ食うぞー」

「「「「いただきまーす」」」」

「・・・・・」

余程遊んで空腹だったのか少し作り過ぎだと思っていた飯を余裕で完食した。
その後休憩をはさみ今、スタジオに来ている。

「ハァ～きょう君の料理美味しかったー」

「喜んでくれたら何よりだ」

「もうお腹いっぱいだー」

そう言うと田井中と平沢はスタジオの床に横になる。

「あ～床が冷たくて気持ち～…こうやって目を閉じると、なんか波に流されてるみたいな

感じするよね～」

「あ、ホントだ…」

「おやすみなさい……」

「おやすみ……」

「ハァ……おい、練習するぞ」

「ほら、練習始めるぞー」

「二人とも起きてー」

俺と秋山と琴吹が言っても微動だにしない。
仕方がないので無理やり起こそうとする……が、秋山がアンプを持ってきたので。

「ほどほどにな……」

「ちょっとどいてて」

そう言って田井中と平沢の頭のすぐ上にアンプを置き思い切り……

ブォ～ン！！！！

この大音量にのそのそと二人は起きて自分の楽器の位置についた。

「なぁ～もうやめにしようぜ～」

「ここには練習が目的で来たの！」

「散々昼遊んだろ？だったら夜は練習だ」

「でも～」

「でもじゃねぇ」

「あ！なぁ律」

「んあ？」

「さっき恭哉の作ってくれたご飯いっっっぱい食べてたよな？もしかして
食後はやっぱり体を動かさないと太っちゃうんじゃないか？……特にお腹が」

（また、この手か……）

「え！え！……うわ～～～ん！！！」

（またかよ……）

すると、平沢も……

「もう、ギター持てない……」

「えぇっ！」

「だってこのギター重いんだもん……」

「…だから軽い奴にしておけって言ったのに…」

「誰だー！このギター買うって言ったの！」

「「お前だ！」」

それ言っちゃったら琴吹の努力はどうなるよ……

結局平沢と田井中はまた床に寝っ転がってしまった。

「あ～床温まってきちゃったね…」

「あぁ」

「「グルグルグル」」

「洋服汚れちゃうわよ～」

「あ、またひんやり……」

「そんなんで学園祭どうするつもりだよ」

「だ～から～メイド喫茶がいいって言ってるだろ～」

「お化け屋敷だよ～」

「唯、お前は何も分かってないな…澪をみてみろ」

よくわからないが俺もギターを構えたままヘッドホンを外し秋山を見る。

「な、なんだよ……」

「澪ほどメイド服が似合う奴なんてなかなかいないぞぉ～」

「確かに似合いそうだな……」

「なっ！恭哉まで！」

「そうだろ！？想像してみろ…黒のストッキング！純白のエプロン

！そしてメイドカチューシャ！
萌え萌え～キュンッ！…とか言ったりしてな～」

「可愛いかも～」

「ノーコメントで……」

「なんてな～冗談だ≪ドゴォッ！！！≫オ……オオ……」

（今のはゲンコツとかそういうレベルじゃねぇぞ……）

俺はギターを構えなおしてヘッドホンを耳につけて曲を流した。

……演奏中……

♪ジャラーン……♪

「ふぅ～……ん？あいつら何処行ったんだ」

周りを見渡して見るといつも騒がしい奴らがいなくなっていた。

「ハァ……何をしてるんだか……」

とりあえずギターをスタンドにかけ、ヘッドホンを外し、椅子から立つ。
すると、いきなりドアが開き

「きょう君行くよ！」

平沢が何故かレスポールを持って入ってきた。

「は？」

「早く早く！」

「お、おい！」

俺の手を引っ張って走り出す。

「手を引っ張るのはいいんだが、こけるなよ…」

「うん！大丈夫だ…うわ！」

案の定こけそうになった、仕方ないので腕を引っ張る。

「おい、大丈夫か？」

「……わ！だ、大丈夫だよ！あ、あははは……」

（あわわわわ、抱きつかれちゃったよ～…）

（思わず腕引っ張って抱きついちまった……なんてこった……」

「わ、悪い！そんなつもりじゃなかったんだ」

「いや、大丈夫だよ！助けてくれて、その…ありがとう……」

「あ、ああ」

（うっ…その上目づかいはやべぇ……）

「い、いいから何処行くんだ？」

「う、うん外に行こうかなって」

「そうかじゃあ行くぞ」

「うん！」

そう言って俺達は外へ出た。
するとそこには何か準備中の田井中と琴吹。
座ってスイカを食っている秋山がいた。

「じゃあきょう君はここにいてね」

「ああ」

（いったい何をやらかそうとしてるんだよ……）

「なぁ秋山、いったいこれは何をしようとしてるんだ？」

「分からない、急に皆が外行こうって言うから」

「あっそ……」

「終わったら本当に練習するからなー」

「分かってるって」

田井中が準備できたのか琴吹にアイコンタクトをする。

「うん！」

どうやら準備が終わったらしい。

（いったい何を見せてくれるのやら……）

すると、平沢が俺達の前に立つ。

「「せーのっ！」」

合図と共に。

ドォーンッ！！！

花火が上がった。

（なかなか面白い事するな……）

「それじゃー最後の曲、いっくぜー！！」

そう言ってギターを弾きまくる平沢。
なかなか面白い事を考えたと思うよ部長さん。
秋山はスイカを食うのをやめ、花火に夢中になっていた。

パンッ！パンッ！

「オーイェイ！オーイェーイ！！…あれ！？もう終わり！？」

「予算がなぁ～」

「いつかまた♪」

「そうだな、武道館公演で派手にババババーッっと！」

「武道館？」

「おいおい、目標はそこだって決めただろ？…なっ！澪、キョウ！」

「ふぇ？」

「は？」

（部室のホワイトボードに書いてあった様な……）

「じゃあ、その時はピンクがいい！」

「小学生か！」

「えー…だって可愛くない？」

「ガキっぽいだろぉ？」

「私もピンクはちょっと……」

「悪いが俺もピンクはパスだ」

「きょう君まで～」

秋山がいきなりラジカセを取り出し曲を流し始めた。

（結構うまいな……）

「武道館目指すなら、まずこれくらいはできるようにならないとな」

「へ～うまいなぁ～」

「あれ？でもこの曲……」

ラジカセから聞こえてきた声は……

≪お前らが来るのを待っていたぁ～！！！！どぅらぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！≫

ガチャッ

「これって……」

「テープがB面に変わったのね」

「なんだぁ…ん？」

「あぁ～うっせぇ……」

「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない「フジツボ」やーーーっ！！！」

（そういや秋山は怖いのとか苦手なんだっけか？）

そこに田井中が追い打ちをかける。

「膝の皿屋敷」

「やだぁー！やー！」

これはダメだな……

「嫌だよぅ……」

「おい、田井中少しやり過ぎじゃないか？」

「りっちゃん！」

「やり過ぎだよ」

「謝っておけ」

「あぁ～ゴメン…悪かったなー澪」

「澪ちゃん大丈夫だから！」

「お化けなんかじゃないわ」

（この怖がりようは半端じゃねぇな……）

すると秋山は涙目で俺達の方を向き……

「ほんとう？」

（うお！こ、この上目づかいもやべぇな……つーか俺どんだけ上目づかいに弱いんだ……）

どうやら田井中と平沢までときめいたらしく。

そして……

「「萌え萌え～キュンッ！」」

楽し〇ごのようなポーズを決める田井中と平沢。

（よく即興でポーズがあったな……）

そう思う俺であった

「うぅ…」

「ごめんな～澪～」

「ぶぅ～」

「唯ちゃん、でも本当にさっきの曲……」

「うん！見ててー…えーとー」

そう言ってギターを構える平沢

（まさか……）

平沢はさっき少しだけしか聞いてない曲を弾き始めた。

「お、お前……」

「ウソ……」

「はい！どう！？」

「すごい！完璧！」

「えへへ～でも、みょ～んって所が分からなくて…」

「みょ～ん？」

「それってさっき言ってたチョーキングの事じゃないか？」

「チョーキングって何だっけ？」

「チョーキングはさっきお前がツボにはまってたやつだ」

「あの、面白いやつね！くくく……あはははははは！！！！」

「またかよ……」

「フジツボ！やーーーーっ！！！」

「こっちもかよ！」

「おお！キョウが珍しく大声で突っ込んだ！」

「うるせぇ！」

「クスッ」

「ハァ……」

風呂場

かぽ～ん……

「ふぅ～」

只今入浴中。

どうやら女性陣は露天風呂らしく、俺は一人内風呂だった。

（ハァ……）

女性陣

「ふぅ～気持ちい～」

「まさか露天風呂まであるとは……でも、そんなに心配する事なかったな」

「唯ちゃんもうまくなってたしね」

「だからもっと遊べばよかったのに！」

「誰だー！」

「私だ」

「前髪なげー」

「今日初めて皆と合わせてみたけど…すっごい楽しかった！やっぱり音楽っていいね！」

「そ、そうか」

「合宿しようって言ってくれた澪ちゃんのおかげだよ！ありがとう澪ちゃん！」

「え？あ…あう」

「澪の奴照れてるぞーー！」

「ち、ちが…のぼせただけだー！！」

風呂を上がり、喉が渇いたので冷蔵庫の中を探る。

「おぉ…俺の好きなコーヒー牛乳がある……」

あぁ～うめぇ～

「あぁ～コーヒー牛乳まだあるのか？」

「もうねぇぞ……てお前誰だ？」

そこにはやたら前髪が長い奴がいた。

「私だ」

「田井中か…前髪長いな」

「悪いか！つーかキョウだって髪いつもと違うじゃん」

「そりゃ風呂入ったらなるだろ」

「あれ？きょう君だー」

「ん？平沢か」

「きょう君の風呂上がり撮っちゃえー」

カシャッ

「撮っちゃったー♪」

「勝手にしろ……」

こんな感じで我ら軽音部の合宿は終了した。

翌日

「ごめんくーださーい」

「はーい、ちょっと待ってー…合宿の写真できたんだってー」

「はい、良く撮れてるだろー」

「ネガを渡しなさい……」

そう言って田井中を締め上げる秋山

「デ、デジタルカメラだから…ネガはあ、ありませ……ギブ」

高嶺家

「あーあちぃ……」

今日も太陽で苦しんでいる恭哉であった。

第九話　合宿、つーか別荘広すぎ……これで一番小さいのかよ……（後書き）

第九話は前話を余裕で超える８７００字……
そりゃあ俺しんどいわ……

あ！すいません恭哉君のキャラ設定の髪型を変えました。
よかったら見て下さい。

ご感想等ございましたらよろしくお願いします！！

ラルクでした！！

第十話　顧問！そして、学園祭ライブまであと三日！！（前書き）

申し訳ありませんでした！！
こんなに投稿が遅れるとは……
本当に申し訳ありませんでした！！

遅くなりましたが、ようやく二桁話突入！
では、第十話どうぞ！

第十話　顧問！そして、学園祭ライブまであと三日！！

現在９月。
暑さのピークが来ていた８月とは違い、まだいい方のはずと考えていた今日。

「９月のクセにあちぃじゃねぇか……」

残念ながらそう上手くはいかない。
部室の中はエアコンなし、扇風機なしの２トップのせいで俺はギターを持つ気力すら
残っていなく、ずっと長椅子に横たわって団扇を扇いでいた。

「恭哉、服装だらしないぞ」

そんなことはないぞ秋山。これは正しい服装だ。

仕方ないので俺の服装を紹介しよう。

ボタン全開＆シャツだし。

中には赤い柄シャツ

夏ズボン。

ざっと説明するとこんな感じになる。

「こんな暑い日に服装正してたら俺は死ぬ……」

「そんなに暑い日が苦手なのか」

「ああ、団扇だけが頼みの綱だ……」

そう、団扇だけが……俺が死にそうな中、俺が教えたコードや細かいテクニックを練習中の平沢に悲劇が訪れた。

「あいたっ！！…手の皮がむけちゃったー！…」

……特に悲劇ではなかった。

ギターをやっていればよくあることだ。

「うわあ…痛々しい」

「ほらー澪ちゃん見てー……澪ちゃん？」

「見えない聞こえない見えない聞こえない」

（手の皮がむけただけでこれかよ……）

すると、田井中が何かを思いついたように……

「ははーん？」

と、目を輝かせた。

「あーっ！！私もドラムの練習のしすぎで手のマメがつぶれちゃったーっ！！」

という、明らかに棒読みじゃねぇか＋てめぇ練習全然してねぇだろ！ていう突っ込みを
入れたくなるほどの分かりやすいセリフだった。
だが、そんな分かりやすいセリフでも秋山は身体をビクッとさせて震え始めた。

「ほらほらーっ！！」

本当にマメがつぶれていると思っているのか顔を背ける。
それに飽きたか、満足したか知らないが平沢に向き直る。

「指の皮向いたらどんどん指先が硬くなっていくよ」

「ほほー」

「だからと言ってギターがうまくなってるとは限らないけどね！」

「ガーンッ！」

「ガーンじゃねぇだろ……」

（ん？何か後ろに気配が……）

気配が感じたので後ろを振り向くと……

「琴吹か……」

「あれ？ムギじゃん」

「どうしたの？」

「な、なんだか入りづらくって……」

「ほえ？」

「あ！そういや、面白いもの見つけたよ」

そう言ってなにかのアルバムを持ってきた。

「ほれ、見てみ」

「何これ？」

「昔の軽音部の写真みたい」

少し俺も覗いてみる事に。

「うわー…すごいね……」

「これは引くな……」

この写真は本当にヤバい……ん？この写真の人どっかで見た事が……

「いつの時代のバンドだよって感じだよな！あはははは！！！」

「そ、そうだね～」

（軽音部といえばこういうイメージしかなかった私って……）

少し苦笑いを浮かべて返事をする平沢。

「そういえばムギちゃんどこに行ってたの？」

「学園祭のステージを借りる申請をしに行って来たんだけど、軽音部ってまだ、
ちゃんとした部活って認められてないから断られちゃった」

「へ～」

「あ、この写真すご～い」

「引くわ……」

「「「って、へ？」」」

（マジかよ……）

「軽音部が部として認められてないだってー！！もっと緊迫感出して！！」

「もう…暑くて突っ込む気にもなれねぇ……」

「ご、ごめんなさ～い」

「なぁ部長さん、４人集まればそれでいいんじゃねぇのか？」

「そうだよりっちゃん、４人集まれば大丈夫じゃないの？」

「そのはずなんだけどなぁ…」

「ていうか…部活って認められてなかったのに…音楽室好き放題に使ってよかったのかなぁ？」

平沢に痛いところを突かれ自慢のデコに冷汗を浮かべる。

「い、今まで何も言われなかったから大丈夫だよ…きっと…うん」

「そうかなー？」

「とりあえずどうなってるか聞きに行くか、生徒会室かな？」

「そうですね」

「……あれ？そういや澪は？」

「ああ、澪ちゃんなら……まだ怯えてる」

「帰ってこーい！！」

というわけでなぜそうなったのかを聞きに生徒会へ乗り込む事に。

「ほーら、きょう君行くよ～」

「あ？どこに行くんだ…」

「生徒会室だよ」

「なんでだ……」

「なんで部として認められてないか聞きに行くんだよ」

「それは俺も行かなきゃダメなのか？」

「あたりまえだよ～、だってきょう君も軽音部だからね！」

「ハァ……分かりましたよ……」

めんどくさいながらもトボトボと生徒会室へ。

生徒会室

「頼もー！」

「部長は私！」

「普通に入れよ……」

なぜか生徒会室へ道場破りの様に入る。

「あら？唯に高嶺君じゃない」

「和ちゃん？えーっ和ちゃんが何でここに？」

「何でって……生徒会だからだけど？」

「え！すごいね！さすが和ちゃんだよ！」

「おまえら本当に幼馴染？」

「んなことはどうでもいいだろ…真鍋、軽音部が部として認められてないってどういうことなんだ？」

「えっと…ちょっと待ってて、今調べるから」

そう言って真鍋は一冊のファイルを取りだした。

「……えっと、軽音部は部活のリストには無いわね」

「そんなぁ～」

「ハァ……」

（もう嫌になってきた……）

「もしかして……」

すると、田井中が何か思いつく。

「りっちゃん、何か心当たりが？」

「うん……おそらくこれは弱小部を廃部に追い込む為の、生徒会の陰謀！！」

「そんなわけねぇだろ……」

「和ちゃんは本当は心がきれいな子！目を覚まして！」

「何の話？ていうか、部活申請用紙がまだ出てないんじゃないの？」

「部活申請用紙？」

琴吹が首をかしげる。

「そんな話は聞いてないぞ！」

そう言った瞬間……

「聞・い・て・る・だ・ろ！！」

声のした方を向くと、そこにはどす黒いオーラを身にまとった秋山が息を切らせて立っていた。これを見ていた子どもたちはきっと泣き始めるだろう。

「おい田井中、何か心当たりは？」

そう俺が聞いた瞬間、何かを思い出すように語り始めた。

「そう、それはまだ春の事……」

『私が部長だから私が書くー』

『大丈夫か？』

『あのー、パウンドケーキ持って来たんだけどー』

『パウンドケーキ食べようぜー』

『おい、律！』

『分かってるよー、食べ終わったらすぐ書くってー……書くってー……書くってー……』

回想シーン終了。

「やっぱりお前のせいかー！！」

秋山が田井中のほっぺたをグニャグニャ引っ張りまくる。

「澪ちゃん、りっちゃんは悪気があるわけじゃないし……」

「ムギは甘いんだ！」

「まぁまぁまぁまぁまぁまぁ」

「部長さん……？」

「ヒィッ！」

恭哉までどす黒いオーラをまとっている。

「ココまでして置いて、てめぇのせいだったとはなぁ……？」

恭哉は元不良なだけあってか、なかなかの威圧感である。
その威圧感で田井中は完璧に腰を抜かしていた。

「キョ、キョ、キョ、キョ、キョ、キョウ…ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「高嶺君、生徒会室で暴れないでね？」

「あ？ああ、悪い」

仕方ないので威圧感を出すのはやめたが、一つ罰として自慢のデコにデコピンをする事に。

「田井中」

「は、はい！」

「これは罰だ」

そう言って田井中のデコにデコピンをした。

「イタッ！」

それからも少し揉めていたそうで……

「なんて言うか……軽音部って唯にピッタリだと思うわ」

「ほえ？」

平沢は何を言っているのかイマイチよくわかっていないようだ。

「おい田井中、申請用紙早く書け」

「わかったよ、え～と…部員は５人で、部長が私…あれ？副部長って誰？」

「副部長はきょう君がいいと思います！」

「私も恭哉君がいいと思います！」

「なんでだよ……」

「え～と…副部長はキョウっと」

「勝手に書くなよ……別にいいけどよ……」

何故か勝手に副部長にされた俺。

「あとは……顧問って誰？」

「「「「顧問！？」」」」

確かに顧問って誰だ？…その疑問に出てきた答えは。

「軽音部顧問は山中先生じゃねぇの？」

「山中先生は吹奏楽部の顧問じゃないかしら？」

「は？マジで？」

「うん、そうだったと思うぞ」

（たまに顔出しに来るからてっきりそうかと……）

「顧問がいないんじゃ何にも始まらねぇぞ」

「よし！ダメもとで山中先生にあたるぞ！！」

「「「「おおー！」」」」

「……」

どうやら、今回は秋山も照れずに出来たようだ。

「山中さわ子先生、我が校の音楽教師である。
そのきれいな顔立ちと柔らかな物腰で生徒だけでなく教師の間でも人気が高い
さらに楽器の腕前や歌声も素晴らしく、ファンクラブが存在するほど人気がある」

双眼鏡をノートで作りだし、何をするかと思えば…
ナレーション口調で山中先生をよいしょし始めた。

「……あの…さっきから何言ってるの？」

それは確かな疑問だと思う。

「「「「先生！！」」」」

「はい！？」

「軽音部の顧問になって下さい！！」

「まだ顧問いなかったんだ…」

「先生しか頼める人がいないんです！」

「お願いします！」

秋山と琴吹が頼む。

「ごめんなさい、なってあげたいのは山々だけど…私、吹奏楽部の顧問しているから掛け持ちはちょっと……」

「時間なら取らせません！」

「練習なら自分達でやりますから！」

「ココに名前を書いて、判子を押すだけ！ね？簡単でしょう？」

秋山、琴吹、田井中が諦めずに説得を続ける。

（ん？この人どっかで見た事が……あ、あの写真……）

「なぁ先生、昔の軽音部のアルバムをさっき見てたんだが…」

俺がそう言った瞬間顔を青ざめて、体をビクッとさせた。

「そのアルバムは今どこにあるの？」

「軽音部の部室にある」

「そう……」

すると、俺達に背を向けて歩き出した。

「先生？」

平沢が言うと山中先生はいきなり走り始めた。

「ちっ！」

追いかける為に俺も走った。

（なっ！山中の奴、早すぎだろ！）

「あっ！きょう君待ってよ～！」

（待てるわけねぇだろ！！）

平沢ｓｉｄｅ

いきなり走り始めた山中先生の後を私達は追いかけた。

「り、りっちゃん…早すぎて…お、追いつかないよ…」

私は運動が苦手なので、あの二人には追い付かない。

「ほ、ホントだよ…なんであ、あんなに…早いんだ…」

そう言って走って、やっとの思いで軽音部に行く階段まで来た。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「ハァ、ハァ…暑い日に走るとダメだ……」

（つーかなんであの人は少ししか息を切らしてないんだ……）

「やっぱり先生なんですね？」

うしろから声だすると思ったら、平沢達がドアの所にいた。

「後は頼んだぞ部長さん…俺はもうダメだ……」

そう言って俺は長椅子に倒れ込んだ。

（暑い日に走るのはもうやめよう……）

「よくわかったわね…そうよ、私、軽音部にいたの」

「い、意外でした」

まあ、確かにおしとやかキャラの山中先生は実はヘビメタだったと知ると
唖然とするのが当り前だろう。

「じゃあ、もしかしてこの声も」

と言ってどこからともなく取り出したラジカセから流れてきた声は
合宿の時に聞いた声だった。

「やめて！恥ずかしい！」

山中先生はしゃがみ込み、耳を塞いで首を横に振った。
その隣では秋山もしゃがみ込み「聞こえない聞こえない…」と、怯えていた。

「まだ、引きづってんのか！」

田井中の突っ込みが入る。

「あれ？じゃあ、ギターも」

「そっか！弾いて、弾いて！」

平沢がアンプにつないだギターを無理やり手渡す。
ギターを持った山中先生は軽く弾くと頭をガクッと下げた。

「せ、先生？」

平沢が声をかけると山中先生は……

「くっくっくっ……」

と、肩で笑い、立ちあがった。そして、かけていた眼鏡をはずすと
先程までの目とは
全く別物の目つきになった。

「しゃーねーなぁ～」

「「「「目つき変わった！？」」」」

すると、速弾き、タッピング、歯ギターという素晴らしいテクニックを見せてくれた。

（うまいな……）

俺は心の中で思っていた。

「あぁ～私のギター…」

「おめぇら！音楽室好きに使い過ぎなんだよ！！」

と、とてつもないほどの声で正論を言う山中先生。

「「「「ご、ごめんなさい！！！！」」」」

「大体なぁ！……はっ！」

（うるせぇ……）

「今の…見た？」

「「「「うん…」」」」

また、おしとやかな状態へ戻る。

「先生の時は、おしとやかキャラで通すって決めてたのに……」

「もう、ムリだろ……」

「先生……」

「アレはもう八年も前の事……」

「「「「いきなり語り出した！！」」」」

……

「所詮そんなものよね……」

「流石に俺もそんなことされたら引くわ……」

山中先生の昔の事をざっと話すと、学生時代に好きだった人に告白したが
ワイルドの方が好きと言われヘビメタを始めたが、今度はやり過ぎと言われ
結局振られるという過去だった。

「いいの、慰めの言葉なんて……」

「先生……顔あげて」

田井中が先生の方に手を置き慰める……と、思ったが

「りっちゃん……」

「バラされたくなかったら顧問やって下さい」

先生を脅した。

「りっちゃんたくましい子!!」

「ちなみに録画しといたから……」

「きょう君は頭いい子！！」

（頭いい子って何だよ……）

山中先生はバラされたくない為か仕方なく、

「分かったわよ…顧問になるわよ…」

と、承諾してくれた。

その後俺達は山中顧問に演奏を聞いてもらった。

「…て言う感じのオリジナルなんですけど……」

「軽音部ＯＧとしてなんかアドバイスないっすか？」

「そうね……色々気になる事があるけど……恭哉君、あなたは流石ね」

「どうも……」

「ていうか…ボーカルはいないの？」

（……あ、ボーカルいねぇ……）

「「「「あ！」」」」

「じゃあ、まさか歌詞もまだ…とか？」

「え、え～と～……」

思わず全員が口ごもってしまった。

「それでよく学園祭のステージに出ようと思ったわねぇ……」

「すいません……」

秋山が謝るが、山中顧問は腕を組んだままプルプル震え始めた。
これは怒る寸前だろう。そして……

「音楽室占領して今まで何やってたの!?ココはお茶を飲む場所じゃないのよ!!」

「ううぅ…怒られた……きょう君～」

と言って俺の後ろに逃げる様に隠れた。
他の奴らは縮こまってしまっている。

「大体ねぇ!!」

(徐々にうるさくなってきたな……)

「先生!!!」

俺が一つ一喝を入れようと思った時に琴吹がらしくない大声を出した。

「あぁん！？」

琴吹は勇気を振り絞って…

「ケ、ケーキ…いかがですか？」

「「「えぇ！？」」」

まさかの言葉だった。
そして山中顧問の返答は、

「いただきます！！！」

「「「いただくんかい！！！」」」

「訳わかんねぇ……」

その後は色々とあったが今日は解散になり、明日秋山が歌詞を持ってくる事になった。

翌日

「「「できた！？」」」

「あ、ああ……」

どうやら一日で歌詞が出来たようだ。
つーか一日で歌詞出来るって凄すぎだろ……

「見せて♪見せて♪」

「えっ！も、もう？」

「もうって何だよ…」

「私も見たいなぁ～」

「で、でもやっぱり恥ずかしいよ～」

「大丈夫だよ～笑ったりしないしぃ～」

「そうそう♪」

「でも…あぁ！ま、待て！」

「待てない！持って来たって事は見せるってことだろ？」

「澪ちゃんお願い♪」

「ちょ～っとだけ、こそ～っと私に」

「あ！ずりぃ！見せるなら私が先だろ！」

「え～、何で～」

「なぜなら、私は部長だから！」

「むっ！ならば、私は澪ちゃんの心の友だから！」

「じゃあ私は澪ちゃんの心の友その二だから～」

「こしゃくな！私なんか澪の心の故郷だぞ～」

「いつからそうなった？」

「あ～田舎のおばあちゃん元気かなぁ～？」

「今、関係ないから」

「あ、去年年賀状出したっけ～」

「話をそらすな！」

という、長々しい会話を黙～～～～～って聞いていた俺と山中顧問。
俺はもう呆れまくっているが、山中顧問は笑顔ながらも徐々に顔が引きつってきていた。
そして……

「早く見せんかーーーい！！！！！」

噴火した。

「あぁ！」

「どれどれ？」

横から俺も覗いてみた。
そこに書かれていた歌詞は

『君を見てるといつもハートＤＯＫＩ☆ＤＯＫＩ
揺れる思いはマシュマロみたいにふわふわ』

「……死ぬ」

俺はそのまま長椅子に倒れ込んだ。

「うおお……体が……かゆっ…！！」

田井中と山中顧問は苦しんでいた。
こんなメルヘンな歌詞はムリだ。

「私としてはいい感じに書けたと思うんだけど……やっぱり駄目かなぁ？」

そう言って涙目になる秋山。

「ダメって言うかその…ねぇ？」

「ほら唯からも何か言ってよ！」

「すごくいい……」

「マジで言ってんのか？」

「可愛い歌詞だよ……」

平沢はうっとりしてしまっている。

「え…だってこれだよ？」

「うんっ！！私この歌詞大好きだよ！」

「ほ、ほんと？」

「ム、ムギはどう思う？」

（あれー！？超うっとりしてるー！？）

「……ムギも気にいったの？」

「はいっ」

「正直こういうのアリだと思う？」

「ええ…本人同士がいいなら、いいんじゃないんでしょうかっ！」

「「お前は何を言ってるんだ」」

こいつは、そういう系なんだろうか？

「さわちゃんはこの詞無いと思うよね？」

「さ、さわちゃん？……そ、そうね」

「キョウも思うよな？」

「そうだな……男の俺として歌うわけではないがちょっとな……」

「そうだよね！…ねぇ皆、やっぱり考え直した方が…」

すると、山中顧問が何か考えている。

「わ、私この歌詞好きかもー♪」

寝返るというまさかの行動。

「あれぇ！」

「つーかそういうのやめた方がいいぞ……」

「何よ！別にいいじゃない！」

「何歳だか知んねぇけどやめとけ」

「何よもう！」

そして、結局

「それじゃ、もうこの歌詞でいくか……」

「「わーーいっ！」」

「マジか……」

「それじゃあ、澪がボーカルって事で」

「えっ！？…わ、私はムリだよっ！」

「なんで？」

「こんな恥ずかしい歌詞なんて歌えないよぉ……」

「おい、作者……澪がダメとなると…」

振り返ると平沢が物凄くやりたそうな眼をしていた。

「……唯、やってみる？」

「わ、私！？で、でも私そんなに歌上手くないし…私なんかがつとまるかどうか…」

何故か断る平沢。

「それじゃあ、ムギ歌ってみる？」

あっさりとスルー。

「ごめん！歌う！！歌いたいですーっ！！」

「それじゃ、ちょっと歌ってみよう！」

「ラジャー！きょう君ちゃんと聞いててね？」

「聞いてっから早く歌え」

「うん！」

ギターを持って準備が出来たのか目を瞑る。

（あいつギター弾きながら歌、歌えるのか？）

疑問も持ちつつ壁に寄りかかって聞く。

「キミを見てるといつも「おい、平沢」…何？」

「ギター弾き忘れてるぞ」

「あ！そうだった……」

「もっかいやってみろ」

「うん、えーっと」

平沢の再チャレンジ

（おっ、ギターはちゃんと弾けてるな）

だが……

「今度は歌忘れてるじゃねぇかよ！！」

「うお！恭哉が大声で突っ込んだ！」

「珍しいわ……」

「ギターを弾きながら一緒に歌、歌えない……」

（やっぱりな……）

そこで立ちあがったのは山中顧問だった。

「先生が付きっきりで特訓してあげるわ！！」

「先生っ！！」

という、訳分からないシーンが展開される。

「それじゃ、まず歯ギターのやり方は……」

「それはいいです」

「無駄な事教えんでいい……」

それから一週間後

「えーっと…ボーカルは唯で、曲目がふわふわ時間(タイム)っと…OK、じゃあ、出演時間が
決まったらまた連絡するね」

「よかった～、わざわざ来てくれてありがと～」

「これも生徒会の仕事だから、でも本当に唯で大丈夫なの？」

「先週からさわ子先生の家で特訓してるからな～」

「たぶん間に合うんじゃないかと…」

その瞬間いきなりドアが開いた。

「待たせたわね……」

現れたのは山中顧問と平沢だった。

「まあ、山中のことだ平沢をちゃんと指導してくれただろ……」

「完璧よ！」

といって、ＯＫポーズをとる。

「さあ、唯ちゃん…見せてあげなさい！」

平沢はその合図と共にギターを弾き始める。

「うまくなってるな……」

「すげぇ！」

「上達している！」

「自信に充ち溢れた表情！」

（まあ、ここまで出来ればライブも安心だな。）

そう思って安心していたが、その安心は一瞬にして打ち破られた。

その正体とは……

「ぎみ〝を〝見〝でるどい〝づも〝ばーどどぎどぎ……」

平沢の声がガラガラに枯れていた事だった。

「お前こんなときに……」

「てへ☆練習させすぎちゃった☆」

「ごえがれぢゃっだ☆」

「いい子ぶってもダメだー！！」

「そんな…じゃあ、ボーカルは……」

「変更するなら今日中よ」

「え！そうなのか！？」

これは困ったものだ……

「秋山、もうお前がやるしかないようだ」

「えっ！」

「そうね、澪ちゃんなら歌詞覚えてるだろうし、かといって恭哉君にこの歌詞を歌ってもらうのは…」

「歌詞作った本人だしな」

「もうそれしかないだろ…」

「頑張ってね、澪ちゃん♪」

「ふぇっ！？ふぁぁぁぁぁ……」

「お、おい！」

「澪ちゃん！？」

「しっかりしろよ……」

（こんな調子で大丈夫なのかよ……）

本番まであと三日、無事にライブ成功を祈るのみになった。

第十話　顧問！そして、学園祭ライブまであと三日！！（後書き）

最近眠い……
これからもがんばりますので応援してくれる方
よろしくお願いします！！！
感想等ございましたらお願いします！！

ラルクでした！

第十一話　桜高祭、軽音部初ライブ！（前編）（前書き）

どうもラルクです！

更新が遅れてしまいましたが今回はちょっと理由がありまして……
やっと自分のパソコンが手に入りました。
これで多分少しは更新が早くなるんではないかと……

ていうわけで、第十一話は前編です。長くなりそうだったので……
では、どうぞ！

第十一話　桜高祭、軽音部初ライブ！（前編）

7，8月と違い快適に過ごせるようになった9月下旬。
服装も夏服から冬服に変わり、【ＴＨＥ・丁度いい季節】がやってきた。

ふと窓の外を見ると、【たこ焼き屋】や【クレープ屋】などの露店がそこらじゅうに広がり、
生徒や一般の人でいっぱいだった。
そう、今日はこの桜ケ丘高校での学園祭、名付けて『桜高祭』である。

ちなみにこの盛り上がりの中、俺は何をしているかというと。

ジュー……

ずっと、焼きそばを作っていた。

「ダルイ……」

「ぎょう君頑張って！」

「クラスの中で唯一料理できる男子なんだから…まあ、うちのクラスはそこが売りだからね！」

と、企画を考えた俺のクラスメイトの女子が何故か俺を看板男にしてしまった。

隣りでは平沢が頭に何か紫色のモジャモジャをつけ、わけわからない服を着て
焼きそばを作っていた。

「へい！そこのカワイイお嬢さん！！焼きそばいかがですか～！」

バカ（雄介）は客寄せというナンパをしていた。

「焼きそばいかがですか～！中には家事全般全てＯＫのイケメンの男子「余計な事を言うんじゃねぇ」……ぶばぁ！」

とりあえず、黙らせておいた。

「一人前だね～はい、お譲ちゃんあ〝りがどね〝ー」

「お譲ちゃんって……どこのじじぃだお前は……」

すると、いきなり知った顔が走ってきた。

「恭哉！」

「ん？秋山か」

「唯はどこ？」

「そこにいるぞ」

両手が使えないので首で指す。

「あ！澪ぢゃん！焼きそば！？ちょっと待っててねー」

「なんでそうなる……そうじゃなくて、今日本番だろ～目一杯練習しておこうよ～」

「残念ながら俺達は今抜けらんねぇ」

「ごめんね〝私も〝練習したい〝んだけど…」

その瞬間ブレーカーが落ちた。

「またかよ……」

「生焼けになっちゃう～」

「何回目よ、も～」

と、クラス中からブレーカーへ不満が飛ぶ。

「ちょっと～ホットプレートは三台までよ！ちゃんと守ってる！？」

「うちじゃないわよ～！５組じゃないの！？」

（さっきからブレーカー落ちる度これだな……）

「何か大変そうだな……」

「悪いがこっちは無理だ、田井中達を当たってくれ」

「うん、そうするよ……」

「ごめん〝ねー澪〝ちゃん〝」

悲しそうな表情を浮かべる秋山。
少しでも喜んでもらおうとして

「ほらよ、焼きそば……俺からのおごりだ、これ食って元気出せ」

「えっ……あ、ありがとう、じゃあ律達の所に行ってくるな」

「ああ」

そう言って秋山は教室を出て行った。

「高嶺君優し～♪」

「きょう君…あの、私〝にも〟焼きそば……」

「喉痛ぇならのど飴食ってろ、焼きそばじゃあ意味がねぇだろ」

「そんなぁ～」

そんな会話を交わしてから数十分後に真鍋が来た。……変な帽子をつけて……

「あ〝和ちゃん！」

「唯、その声大丈夫なの？」

「部活の練習しすぎちゃっただけだから、大丈夫だよ～」

「大丈夫じゃねぇだろ……あ？焼きそば何個だって？」

（この客何言ってるかわかんねぇ）

「唯、今日が初ステージでしょ？えっと、3時からだっけ？」

「う〜ん」

「まだ結構時間あるし、練習しておきたいんじゃないの？」

「う〜ん、この担〜当が終わった〜ら行くつも〜り〜」

「そっか、ならもうそっち行ってもいいわよ…だれか他の人に頼んでみるから」

「で、でも…」

「いいっていいって、後は任せて」

「唯！行っておいでよ！」

「頑張って！」

「ありがとう、行ってくる〜」

「あ？だから何個だって聞いてんだよ！」

「高嶺君……」

「何だよ」

クラスメイトの女子が声をかけてきた。

「早く練習行ってきなよ」

「はぁ？平沢だってそこにいるじゃ……あいつどこ行った？」

「唯ならそこにいるよ」

指をさした方を向くと、俺に向って手を振っていた。
しかも、普通の服装に戻って。

「お～い　ぎょう君～」

「……悪いな、後は頑張れよ」

「うん！高嶺君もガンバ！ほら、応援しなくていいの？」

そう言って花柄のゴムをつけたツインテールの女子がモジモジじながら…

「あ、あの…高嶺君、ライブ見に行くから、その……頑張ってね…
……」

「……ああ、応援ありがとな」

「うん！」

「そんじゃあ行ってくるわ」

「ぎょう君行くよ～」

「分かったから黙れ、ただでさえガラガラなくせに……」

俺達はそう言って教室の片隅に邪魔にならない様にバカ（雄介）を移動させ、（俺しかやって無いが）
教室を後にした。

「どうぞ～ごゆっくり～」

と言っていた我が部長の元に。

「り〝っちゃん〝！澪〝ちゃん達〝は？」

「まだ声治んないなぁ～？」

「うん〝まだちょっとイガイガする〝」

「結構並んでんな……」

「お、キョウまで来たのか」

「来ちゃ悪いか」

「そうだ唯！ごっつぁんです！って言ってみてよ！」

なんだその要求は……

「ごっつぁんです！」

やるとは思っていたがここまで……

「お相撲さんお相撲さん♪」

「稽古は本場所の如く、本場所は稽古の如くっす！」

要求していない事までやり始めた。
そして何故か田井中まで。

「相撲は国技じゃないっす、格闘技っす！」

「相撲に勝って勝負に負けるとはこう言う事かいなぁー」

意味分からん……

「あぁーどすこーいどすこ～い」

「あぁーどすこいーどすこーい」

「お前ら周りから冷たい目で見られてるからな……」

「あっ！そうだ澪〝ちゃん達〟！」

「ごめん、ごめんムギはこの中だけど、澪は部室にいるんじゃないかな？」

「お化け屋敷か……入って見てもいいか？」

「いいぞ、珍しいなキョウが興味を示すって」

「お化け屋敷好きだからな、平沢はどうする」

「私は～……」

（きょう君がいれば大丈夫だよね……うん！）

「私〝も入る！」

「特別、お金払わないで入れてあげるぞ～」

「そりゃどうも……」

「じゃあ、ごゆっくり～、唯よかったな～」

「そう言う事〝言〟わな〝いでよ〝～」

「いいから行くぞ」

黒いカーテンをくぐって中に入ってく、

「なかなか本格的だな……ん？」

何か引っ張られると思ってみたら、平沢が俺の腕にしがみ付いていた。

「お、おい何やってんだよ」

「だ、だって～怖いんだもん」

「じゃあ、何で来たんだよ……」

つーかそんなに強くしがみ付かれると色々とヤバい……
平沢の顔は驚かされてもいないのに涙目になっていた。
すると、

「うらめしや～」

と、ありがちな言葉でお化け登場。

「……」

「きゃぁ～～～っ！！！」

（そんなに驚くかこれ……）

どうやら今の平沢にはココの空間で少しでも驚かされるとアウトらしい。
だからそんなにしがみ付かれると……ヤバいって……

「うらめしや～「てめぇはもうどっか行け」……はい」

潔くどこかへ去って行った。

「おい、平沢…立てって」

「怖いよ～…うぅ…」

「ハァ……何か楓の奴と一緒だな……」

我が妹、楓もいつもは強気ながらこう言う事になると現在の平沢の様になる。

「ほら、行くぞ…さっきのうるせぇ奴ならもういねぇから」

「ホント？」

（……早く出ないと理性がぶっ飛びそうになる……）

「あ、ああ…」

俺はある意味お化けなんかより数十倍怖いのがココにいた。
そろそろ出口だろう。そう思って歩いていたら。

「恭哉君、唯ちゃん」

琴吹の声がした。

「琴吹か」

「ムギちゃんだ！」

だが、俺達が振り返ったその先には顔の左側を特殊メイクで怖くした琴吹がいた。

（まあ、今までよりはまだ、怖い方か……）

「――――――ッ！！！！」

平沢はというと声にならない悲鳴あげ、目に涙を浮かべしゃがみ込んでプルプルと震えていた。

「あれ？恭哉君だけ驚かないのね」

「事前に声をかけてどうする……」

「あ！そうだった～、つい声かけちゃった♪」

テヘッ♪とやるが今のお化けメイクでやられてもただただシュールなだけだ。

「まあいい、仕事終わったら部室来いよ」

「はい、分かりました！」

そのまま琴吹は暗闇へと消えていった。
その後少し進むと明かりが見えた。

「やっとゴールか……」

高嶺恭哉、理性防衛完了。

「おつかれさ～ん」

田井中が出迎えてくれた。

「結構雰囲気出てたな」

「すごく怖かった……」

「それはよかった、ところで唯、その腕はどうしたんだい？」

「腕？……あっ！これは、違うんだよ、りっちゃん……」

そう、平沢はお化け屋敷から出たのにも関わらず、俺の腕にしがみ付いていたのだ。

「ラブラブだねぇ～♪照れなくていいよ♪」

「だ、だから、これは……うぅ…」

「ハァ……」

「そ、そんなことより早く練習行こうよ～」

「そうだな、あと少しで私もムギも交代になるからさ、先行っててよ」

「うん、分かった～、きょう君行こ～」

「へイへイ……」

というわけで部室に向うのだった。

（さっきの平沢は正直ヤバかったな……）

部室に行く途中の些細な出来事。

「ハァ～緊張するな～」

「……」

「きょう君は緊張しないの？」

「特に……」

そんな緊張する、しないなどの他愛のない会話をしていると後方から声が。

「兄さ～ん」

「お姉ちゃ～ん」

「ん？」

「憂だぁ～」

「楓か……」

そこにいたのは我が妹の高嶺楓と平沢妹の平沢憂がいた。

「お久しぶりです、恭哉さん」

「ああ」

「あの～兄さん？そちらの方は？」

「こいつは平沢唯、部活のメンバーで、そいつの姉だ」

「へぇ～……まさか、憂ちゃんのお姉さんだとは思いませんでした」

「ねぇねぇきょう君！その子が楓ちゃん！？」

「そうだが、何テンションあがってんだ？」

「可愛い～よ～しよしよし」

「人の妹をネコの様に扱うな」

ゴンッ

「イタぁ～」

「兄さん！殴っちゃダメじゃないですか！」

「わ、分かったから落ちつけ」

「すいません、うちの兄が……」

「大丈夫だよ楓ちゃん、きょう君は優しい人だから」

「そうですか、なら安心です…あ！そう言えば練習しなくてもいいんですか？」

「今から行くところだ」

「じゃあ、ライブ頑張って下さい♪」

「頑張ってねお姉ちゃん！」

「うん！頑張るよ！」

「ああ」

俺達は妹達にエールをもらい部室へと向かった。

部室

部室のドアの前に来たが一向に開けようとしない平沢。

「何してんだ」

「しーっ！」

よ～く耳を澄ませて聞いてると部室の中から声が聞こえた。

「秋山か？」

「うん……」

すると、田井中と琴吹も階段を上がってきた。

「二人とも何やってんだ？」

「しーっ！」

「一人で練習してるらしい」

俺は扉から離れ場所を明け渡した。

「ずっと…練習してたんだろうな…」

「うん…」

部屋を覗いている田井中と琴吹の顔には優しい笑みを浮かべていた。
そして俺達は秋山の歌が一区切りついたところで中に入る。

「待たせたな！澪！」

「普通に入ることはできんのか……」

秋山は体をビクッとさせて、俺達の方に振り向いた。

「一人にしてごめんなさい…」

「私も練習するよー」

琴吹と平沢が声をかけた。そんな俺達を見て……

「皆……遅いぞ」

と、拗ねたように言った。

「さぁ！本番に向けて練習しますか～！」

「「「「おぉー！」」」」

「……」

……演奏中……

「よ～し、まあまあなんじゃない？」

「うん！バッチリでした！」

「キョウ先生どうでしたでしょうか！？」

「キョウ先生言うんじゃねぇ……まあ、いんじゃね？」

「よし！」

「澪ちゃん大丈夫そう？」

「え？う、うん……」

秋山は頷くが俺には少し無理をしているように見えた。

「まぁ、大丈夫だろ」

「うん……」

すると、突然部室のドアが開いた。
誰が来たのかと思ったら軽音部顧問、山中さわ子だった。しかも超御機嫌で。

「どうしたんだ山中」

「そこ！先生を呼び捨てにしない！もう一回！」

なんでやねん……

「……ナニシニキタンデスカ、ヤマナカセンセイ」

「それはね～、不本意ながらも軽音部の顧問になった事だし、何か手伝うことないか～っと思って
……衣装を作ってきました～♪」

「ノリノリだぁ～」

まさか衣装を作ってくるとは……

「いや～先生…気持ちはありがたいんだけど……」

田井中が指をさした方向を見ると秋山がカクカク震えていた。
そしてこんなこと言った。

「あんな服着て歌うの？……大勢の前で……」

「ちょっとタイミング悪かったかな？」

「タイミング悪すぎたな……」

「う～んこれはお気に召さなかったか～」

と、しょんぼりという山中に秋山は全力で首を縦に振っていた。
その代わりに新しく出した衣装は……

「私の昔の衣装なんてどう？」

山中が出したのは、どこかにある民族の儀式に着る衣装の様なものだった。

「……こんなもの着てっからふられるんだろ……あっ」

と、思っていた事を思わず言ってしまった。

「恭哉君？……なんだって！？アァ！？」

「すいませんでした、申し訳ないっす」

そろそろグーが来そうなので謝っておいた。

「で、澪ちゃんどう？」

「さっきの服が着たくなってきたぁ～！」

そりゃそうだ。儀式の衣装なんかより断然さっきの方がいい。

「ストップ、さわちゃん！」

ここで田井中が暴走している山中を止めに入る。

「こんな衣装、澪じゃなくても恥ずかしいよ！」

「だよな！」

田井中という強い仲間を手に入れた。
だが強敵もいるのだ。

「そうかなぁ？頑張って作ったんだけどなぁ～…それに……」

山中が視線を送った方を見てみると、そこにはナース服に着替えた琴吹とスクール水着に着替えた平沢がいた。

（こいつらには羞恥心というものがないのか……）

「お前らコラー！」

「もう…何でこんな事に……」

「まだ緊張してるの？澪ちゃんだって分からない様にメイクしてあげようか！？」

「ひぃっ！…け、結構です！！」

「それじゃあ頑張ってねー♪」

そう言って山中は出て行こうとした……が、

「あっ！恭哉君に衣装渡すの忘れてた」

「あ？俺も衣装あんのか？」

「あたりまえじゃない！唯一の男子が目立たないでどうするのよ！」

（いや、目立たなくていいから……）

「はい！これが恭哉君の衣装ね、じゃあ頑張ってね！」

バタンッ！

俺に強引に衣装を渡し去って行った。

「ハァ……」

「きょう君、衣装に着替えてきてよ！」

「何でだよ……」

「いいじゃん♪いいじゃん♪」

「後で見れるだろ……」

「今見たいの！」

なんでやねん……

「後で」

「今！」

「後で」

「いーまー！！」

ハァ……

「……じゃあちょっと待ってろ」

「やったー！」

とりあえず、用意された服に着替える為奥の物置へ。

「何で執事服みたいな服なんだ……」

三〇院家の執事のような服だった。

（俺だけコスプレか……）

そんな事を考えつつ着替える。
そして、着替え終わったので物置から出る。

「着替えてきたぞ……」

「「「「おぉ～！」」」」

「カッコいいじゃないか恭哉！」

「カッコいいですよ恭哉君！」

「イケてるじゃないかキョウ！」

「カッコいい……」

「……そりゃどうも」

平沢は俺の恰好を見て何故か顔を赤くしている。

「大丈夫か平沢？」

「……えっ！あ、うん！大丈夫だよ！」

「そうか」

「唯はキョウのこと本当に好「わぁ～！ダメ！ダメだよ、りっちゃん！」…いいじゃん♪」

「ダメだよぉ～！」

「わかったよん♪」

「うぅ～……」

こんな会話をしている二人を残し、俺は物置へ戻り制服に着替える。

（あ～、こんな服着てやるのかよ……）

「じゃあこれ、講堂まで運んどいて」

「ほーい…うおっ！」

「重いから気をつけてね」

「うん、あれ？澪ちゃんは？」

「澪には他の事やってもらってる、危なっかしくて機材は運ばせらんないよ」

「そうなんだ」

「あ、キョウはベースアンプ持っててね」

「あ？俺もか？」

「だって暇でしょ？」

「まあ暇だが……」

「じゃあよろしく♪」

そう言って勝手に俺にアンプを持たせ、田井中は部室の中に入って行った。

とりあえず、俺と平沢は講堂にアンプを運びに行った。

「お、重いよ～」

平沢はフラフラと右へ左へと歩いている。

「何トロトロしてんだよ……」

「だ、だってぇ～…こんなに重いとは思わなかったんだもん」

平沢のペースに合わせても遅くなるだけなので先に行く事にする。

「先行ってるぞ」

「あ！待ってよ～きょう君～置いてかないでよ～」

「うるせぇ……じゃあそのアンプ貸せ、運んでやっから」

「えっ、いいよ～私が使うアンプだし」

「あっそ……ん？」

後ろから軽快な鼻歌が聞こえてきた。

「……」

スタスタ……

通り過ぎたのは、鼻歌を歌いながらドラムの中で最も重いバスドラを、爽やか笑顔で
軽々と運んで行く、琴吹だった。

それを見た俺達は絶句していた。

「あ、汗一つ掻かずに……」

「あいつはなんなんだ……」

お譲さまで力は無いと思っていた琴吹は、今をもって軽音部一の力持ちになった。
そんな琴吹に驚きつつ、講堂裏に到着。

「和ちゃ～ん……」

「ああ唯に高嶺君、今演劇が始まってるから隅に置いといて」

「分かった～……」

アンプを置いた所には9割琴吹が運んだであろう楽器があった。

（あいつ一人でこんなに運んだのか……）

「で、この次が合唱部で……」

どうやら真鍋は同じ生徒会の奴と打ち合わせをしているようだ。

「はい、その後は軽音部です、機材は来ています」

その言葉を聞いた平沢の顔には自信が浮かび上がっていた。

（後は秋山がしっかりしてくれればいいか……）

俺は少し不安を感じつつ3時間後に迫った初ライブの成功を祈るのみになった。

「まあ、頑張りますか……」

――――――初ライブまで後3時間――――――

第十一話　桜高祭、軽音部初ライブ！（前編）（後書き）

というわけで、前編です。
本当は一話にまとめるつもりでしたが、友人から「詰め過ぎも良くないよ」
と、言われたのでそうすることにしました。

次回は当たり前ですが後編です。
さりげなくクラスの女子に好かれている恭哉君でしたが気にしないでください。

感想等ございましたらヨロシクお願いします！

ラルクでした！

第十二話　桜高祭、軽音部初ライブ！（後編）（前書き）

どうも！ラルクです！

えー……話すことがない…だと…

はい！話すことがありません！

というわけで、第十二話！後編！どうぞ！

第十二話　桜高祭、軽音部初ライブ！（後編）

講堂に荷物を運び終わった俺たちは部室に戻ってきていた。

「はぁ～運び終わった～」

「お疲れさん♪二人とも」

「みんな～お茶入ったわよ～」

「うわっほーい！流石ムギちゃん！」

つい先ほどまで疲れ果てていたはずの平沢がいきなり元気になった。
俺達はいつもの席についた。
すると、いきなり平沢がこんなことを聞き始めた。

「りっちゃんって澪ちゃんの幼馴染なんだよね？」

「そうだよー」

「いつから一緒なの？」

「そりゃ～もう幼稚園からずっと一緒だし…あれ？小学校からだっけ？」

曖昧な田井中の言葉に対して

「幼馴染違うんかい」

と、突っ込まれる側の平沢が突っ込む。

「澪ちゃんって小さい頃から恥ずかしがりやだったの？」

「そうだぞー…私が『綺麗な髪だねー！！』て、言ったり…『すごーい！！左利きなんだー！！皆ー澪ちゃんすごいよー！！』て、言ったらぁ…顔を真っ赤にして恥ずかしがってたもんな～あはは」

「いや、それ、りっちゃんのせいじゃん！」

すると、部室に秋山が入ってきた。

「機材運ぶの終わった～？」

「あ、澪ちゃん！」

「お！何か落ち着いてるな」

（これならライブ大丈夫か……）

「ん？」

「はいどうぞ♪」

「琴吹、俺にも熱い紅茶くれ」

「わかりました～♪」

「澪、あんなにボーカルするの嫌がってたのに」

「そんな子供じゃないんだし……」

そう言いながら紅茶を飲もうとするが……

ガチャガチャガチャガチャ

カップがシャレにならないほど揺れている。
つーかカップってこんなに揺れる物なのだろうか。

（こりゃ、ダメだ……）

「いつまでも動揺してられないだろ」

（（（めちゃめちゃ動揺してるし……））））

「その状態で言われても全く説得力ねぇから……」

「もうすぐ本番なのにそんな調子でどうするんだよ」

「もうヤダ……律！私とボーカル変わって！」

不可能なことを言い出す秋山。

「そしたらドラムどうするんだよ…」

「私がやるから！」

「じゃあ、ベースどうするんだよ！」

「それも、私がやるから！」

ボーカルという地獄に頭が訳分からなくなっている秋山。

「ああ、やってもらおうか！逆に見てみたいわ！」

「じゃあ、恭哉歌って～」

「……俺に死ねと？」

「そんなぁ～……」

俺は絶対無理と分かったのか

「律〜律〜」

と、また田井中に無謀なお願いする。

「離せってば」

「うぅ〜うぅ〜」

「ごめんね、澪ちゃん…私のせいで……」

いきなり謝る平沢。

「私がこんな声にならなかったら…澪ちゃんが歌うことなかったのに……」

「唯……」

そして平沢は……

「やっぱ私がボーカルするよ！」

「いやいやいやいや」

「絶対無理だろ……」

「ご、ごめん唯…そんなつもりじゃなかったから！」

（つーことは、マジでやりたくなかったんだな）

秋山は俺たちから離れ、胸の前で両手を強く握り勇気を振り絞ろうとしていた。
そこに田井中が秋山の緊張をほぐす為か知らないが何かを考え付いたらしく。

「あ！そうだ、ＭＣ考えておかなきゃ！」

「ＭＣって何？」

「お前はＭＣも知らないのか……」

「うん」

「MCっていうのは、コンサートとかの曲と曲の間にしゃべったりしてるだろ？あれだ」

「あるあるー」

すると、田井中が席から立ち秋山の隣に立つ。
そして……

「みなさ～ん！こんにちわ～！」

と、左手をマイクのようにしてMCの物真似をする。

「今日は軽音部のライブにようこそ～！」

田井中のMCに両手をブンブン振ってはしゃぐ平沢。
琴吹も楽しそうに見ている。ちなみに俺は美味しく紅茶を頂いている。

「じゃあ、メンバーを紹介しま～す！！ギター！休みの日にはいつ

もゴロゴロ、甘いものなら私にまかせろ！のんびり妖精！平沢唯！！」

「ジャジャァ～ン、ジャラララララ…ギュッイ～ン！！」

平沢はエアギターを全力でやった。

「キーボード！お菓子の目利きはお手の物、しっとりノリノリ天然系お嬢様！琴吹紬！」

琴吹も平沢のように……

「ポロポロポロポロボロロ～ン♪」

なかなかのノリでエアキーボードをする琴吹。

「ベース&ボーカル！怖い話と痛い話は超苦手！軽音部のドン、デンジャラスクイーン！秋山澪！！」

ゴンッ！

「あいた！」

「誰がデンジャラスだ！」

「痛い……ほら、そんな感じが……」

俺はＭＣをしている部長さんを無視して紅茶を堪能している。

「あ、琴吹…紅茶くれ」

「は～い♪」

琴吹に紅茶を貰った俺はゆっくりとしていたが……

「ギター！ヤル気ゼロだがギターの腕は一級品！我等が軽音部副部長！高嶺恭哉！！」

「誰がヤル気ゼロだ……」

一言多い部長だ。

「最後に私、ドラム！容姿端麗、頭脳明晰、さわやか笑顔で幸せ運ぶみんなのアイドル！
田井中律！！」

ゴンッ！

「あいたっ」

「自分だけ持ち上げすぎだろ！」

「アホか……」

そんなやり取りを見てか、俺以外の全員が笑い出した。

（はぁ～紅茶うめぇ……）

平沢達が笑っているのを普通に見ていたらいきなりドアが開いた。
俺はまた山中が来たと思って…

「今度はなんだ、山中」

と言ったが、そこにいたのは……

「うい～す、恭哉」

「なんでてめぇがいるんだよ、雄介」

「いいじゃねぇかよ～恭哉に会いたかったんだよ」

「気もちわりぃこと言うんじゃねぇ……」

「え～と…お話のところ悪いんだけど…誰？」

「ん？ああ、俺は橘雄介、恭哉の「パシリ」そうそう、パシリ……って違ぇよ！」

「ところで雄介君、何しにきたの？」

「いい事を聞いてくれた！唯ちゃん！実はね……暇だったんだ！」

ドスッ！

「うっ！」

「お前調子に乗るな」

「み、鳩尾は痛いって……」

「アッソ……」

「少しくらい心配してくれませんかねぇ！？」

「うるせぇな……」

「そうだ、君たちの名前聞いてなかったね」

「私は軽音部部長の田井中律だ、よろしくな」

「私は琴吹紬です、よろしくお願いします」

「わ、私は…あ、秋山澪です、ヨロシク……」

「（おい、恭哉！お前はドンだけハーレム状態になってんだよ！）」

「（俺がそんなこと知るか）」

「チキショー！恭哉てめぇ！抜け駆けしやがって！覚えてろよー！」

そんなわけ分からない捨て台詞をはいて部室から出て行ってしまった。

「キョウ何したの？」

「……なんもしてねぇ」

こんなことをしている内に本番は近づいていた。

「男子の扱いひどくね？」

こんな事をいきなり言っているが、それはしょうがない。
現在俺はホームレスの家のようなブルーシートに囲まれた場所にいる。

「こんな所で着替えるのか……」

このブルーシート小屋は男子更衣室となっている。
ここ以外場所がない俺は仕方なく着替えた。
とりあえず舞台袖へ。

『以上、合唱部でしたー』

合唱部が終わったらしく、すでに軽音部の出番が来ていた。

「わぁー！人がいっぱいいるよー！」

「ホントだぁ～」

「キョウも来たか」

「ん？秋山どこ行った」

周りを見渡しても秋山の姿だけ確認できない。
するといきなり、

「ちょ、ちょっと律…やっぱこんな格好で出なきゃいけない？」

そこにいたのは、黒のゴシック衣装を着た秋山だった。

「うふふ、よく似合ってますわよ澪ちゅわん♪」

「うん！すっごく可愛いよ！」

「んー、もう！」

『次は軽音楽部によるバンド演奏です』

「もう出番か……」

「よ～し、みんな行くぞぉー！」

「「おーっ！」」

「お、おー…」

「……」

そして全員が配置につく。
軽くギターの調整をする、と先程まで暗かった照明が付く。
そして……

――――――――――軽音部初ライブを告げる幕が上がった。

拍手とともに幕が全部上がり切り、見えたのは体育館を埋め尽くす観客の姿だった。

「何あれー？」　「可愛いー」　「何組の子？」

「あの男の人かっこいいー！」　「恭哉ーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

一人だけ馬鹿でかい声を出す馬鹿（雄介）がいた。

（あとで、どう痛めつけようか……）

準備ができているはずなのに一向に始まらない、なぜだ？
後ろにいる田井中を見ると心配そうに秋山を見ていた。その視線を追って俺も秋山を見る。
秋山は目を瞑って体がガクガク震えていた。

「澪ちゃん！皆澪ちゃんが頑張って練習してたの知ってるから！」

と、平沢が勇気付ける。

「そうだよ、澪」

「澪ちゃん」

全員が励ましの声をあげてる中俺だけがあげないのはどうかと思ったので

「普段通りやればいい、やれば緊張なんてぶっ飛ぶだろ」

「絶対大丈夫だよ！頑張ろう！」

「み、みんな……うん、頑張る」

そして秋山は顔を上げる。それを見た田井中がカウントを始める。

「1，2，3，4、1，2，3！」

曲は『ふわふわ時間（タイム）』

俺と平沢のギターと、田井中の力強いドラム、しばらくして秋山の俺たちを支えるベース

琴吹の綺麗なキーボードの音…これらがすべて重なり五重奏となった。

そして……秋山の歌声が入る。

……演奏終了……

俺たちの演奏が終わると割れんばかりの拍手と歓声があがった。
秋山も最初の緊張が嘘のように晴れて

「み、みんな…ありがとーっ！」

秋山のこの言葉により拍手と歓声が一段と大きくなった。
軽音部の初ライブは無事成功したのだった。
歓声と拍手の大きさからか平沢達は呆然としていた。

「ハァ……お前ら早く礼して終わりにするぞ」

俺が言うと全員我に返り一礼した。
軽音部初のライブが成功した。
が、俺たちが舞台袖へ進行方向を変えたとき事件は起こった。

ドタンッ！

誰かが倒れる音が聞こえ、振り向くと秋山が派手にこけていた。

「何してん……だ……」

俺の目に映ったものは…その、なんだ…うお！？
いきなり目に何かが食い込んだ。

「きょう君見ちゃだめ！」

（見ちゃだめって言われても見ちゃったし…つーか）

「指が目にくいこんでっからイテェ！」

「あ！ごめん」

「おい！誰でもいいから幕下げろ！」

とは言ったものの遅く、その直後に会場全体に秋山の……

「イヤァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

という悲鳴がほとばしった。
この悲鳴と共に

カシャッ！

という携帯の音が聞こえた。

「くそっ！誰だ！今携帯で撮ったやつは！」

俺がそう叫ぶと犯人らしきやつが走って逃げてった。

「平沢！ギター頼んだ！」

俺は平沢にギターを託して舞台から飛び降り

「雄介！いるなら来い！」

「ＯＫ！まかせろ！」

俺と雄介で犯人を追った。
走ってすぐにそいつは見つかった。

「おい、てめぇ！その携帯よこせ！」

「ひっ！す、すいませんでしたー！」

と言って、素直に携帯を渡してきた。
とりあえず、撮った写真を消し、そいつに渡した。

「てめぇ、あんま調子に乗るんじゃねぇぞ……」

「は、はい！」

最悪な事件で俺らの初ライブは幕を閉じた。

翌日

「みんな！昨日はお疲れさん！」

「「「お疲れ様～」」」

「唯は初ライブにしてはなかなかなかのものだったよ～」

「いや～えへへへへ」

と照れる。ちなみに平沢のがらがら声は直ったらしい。

「澪はファンクラブまでできたらしいぜ～」

「うわ～すご～い」

「当の本人は再起不能だけどな……」

秋山を見ると何かをブツブツ呟いていた。
その後は他愛もない話で本日は終了した。

まぁ最後に……

「あ！キョウにもファンクラブできたってさ」

「……は？」

田井中にファンクラブができましたと言う地獄の呪文を言われたが。

季節はそろそろ冬。気づけばすでに2年へとなる一歩手前となっていた。

第十二話　桜高祭、軽音部初ライブ！（後編）（後書き）

多分次回はオリジナル話になるかもしれません。
更新遅れるかも……
できるだけ早く更新します。

それでは、感想等ございましたらよろしくお願いします。

ラルクでした！

第十三話　恭哉の過去、重なる気持ち（前書き）

ラルクです！
あ～今回やばい……恭哉君のキャラが崩壊しまくってます。
自分で書いてて『あれ？恭哉君ってこんなキャラだったっけ』って思いました。

今回は多分これまで以上にボロボロです。そして短いです。

では、第十三話どうぞ…

第十三話　恭哉の過去、重なる気持ち

学園祭から一月たった１１月下旬。
寒さも本格的になり【ＴＨＥ・丁度いい季節】があっという間に過ぎ去っていった。

「あぁ～寒い…寒すぎる……」

「きょう君！子供は数の子だよ！」

「風の子だろ……つーか意味違ぇし……」

「あれ～？そうだったけ～？」

現在、平沢と二人で街中をブラブラしている。
まぁ、なぜこんな状況になっているかと言うと……

今俺と平沢は部室に向かっている。
と、そこに

「唯〜キョウ〜」

我らが部長、田井中の声が聞こえた。

「どうしたのりっちゃん？」

「今日は部活なしね」

「あ？何でだよ」

「澪と買い物行く約束しちゃってさ」

（まさか…軽音部一の真面目な秋山が……）

そう思ってもいまさら行くなとは言えず

「あっそ……」

「あ！ムギも家の用事で来ないからな～」

と、去り際に言う。

「……暇になった」

「う～ん……」

何かを考えている平沢。

（きょう君と二人きりになるチャンス！）

「きょう君、どっかに遊びに行こうよ！」

「……」

（まぁ、特に予定ねぇしいいか……）

「別に構わんが、どこに行くんだ」

「特に行く所ないから、そこら辺をブラブラと……」

「行くとこねぇのかよ……ハァ」

「じゃあ、どっか行こう！」

てな感じなやり取りがあり、今に至るわけである。

「きょう君！あれかわいい～♪」

「あそ……」

「ぶぅ～、きょう君も楽しもうよ～」

「楽しめるわけねぇだろ」

今現在俺がいるのは、ぬいぐるみ屋…俺にとって無縁の世界に来ている。

「あ！あっちの洋服屋さんにも行こうよ！」

「おい、待てって」

こんな自由奔放に動く平沢に

「ハァ……」

ため息を吐く事しかできなかった。

「よ～し、ペアルックを「却下」ぶぅ～」

「そんな事恥ずかしくてできるか！」

「え～いいじゃん」

「良くねぇ……」

この後も楽器屋など様々なところを巡った。

「あれ取って～」

今度はゲーセン。

「じゃあ、金貸せ」

「ダメだよきょう君！男の子は女の子に優しくしなきゃ」

「……わかったよ」

仕方なく自分の金を入れ、ＵＦＯキャッチャーを起動する。

「あれだよな？」

「うん！」

俺はを取りたい商品から垂直で見てクレーンを移動させ、丁度の所で止める。
今度は真横から見て商品の上にピタリとクレーンを付ける。

「このまま行け……」

ちょっと熱が入ってしまった。
そしてクレーンはそのまま商品をつかみ移動…落とす…任務終了。

「ほらよ……」

「わぁ～♪ありがとうきょう君！」

「ああ、どうってことない」

（久々に熱中してしまった……）

「そろそろ出るか」

「そうだね」

ゲーセンの中にアイスを買うところがあったのでアイスを買い、食べながらゲーセンを出る。
が……

ドンッ！

「いたっ…あ、ご、ごめんなさい！」

平沢が明らか不良だろという3人組みの一人にぶつかってしまう。

（どこのアニメ的展開だよ……）

「あ～あ、これ新品何だけどなぁ？弁償してくれない？」

と、あからさまな言い方をする。

「え？…弁償ですか……」

と言って平沢は困った顔をしている。ちなみに俺はまだ見ているだ

け、あくまでも見ているだけだ
このクズ達のやり方によってはぶっ飛ばすがな。

「ちょっと待った～、いい事思いついちゃった～」

「何だ、何だ？」

「体でとか言ってみたり」

「お～それいいな！なぁ君、そういうわけで体で弁償してもらおうか」

と言って無理やり平沢を引っ張っていこうとする。

「や、やめてください！放して……！」

その行為を見た俺は少しキレながら……

「おい、いい加減にしろこのクズ野郎」

「あぁ？何だてめぇは？」

「調子乗ってんのか？あぁ？」

「口出してくんじゃねぇよ！」

3人組は口口に俺に言ってくる。
俺は少しからかってみようと思い

「口喧嘩か？生憎てめぇらみたいなクズの言葉は通じないんでね」

「てめぇ！調子乗ってんじゃねぇぞ！！」

と言って俺に殴りかかってくる。

「きょう君！！」

ブンッ！！！

殴ってくるがそんなものは軽くかわす。

そして、逆に俺は相手を殴る。

バキッ！！

「がはっ！……くそが！」

（久々に人殴るとあの頃が蘇ってくるな……）

そんな俺に軽くだが笑いが込み上げてくる。

「くくくく……ちょっと待てここじゃあ場所があれだ、移動しようぜ」

と言って移動しようとする。が、何かに袖を捕まれた

「あぁ？誰だよ」

振り向くと平沢だった。

「ダメだよきょう君！喧嘩なんかしちゃ！」

「何言ってるんだ平沢、これは喧嘩じゃねぇ、お前を守るためにやってることだ」

「行っちゃダメだって！」

「離せよ！」

と言って強引に平沢をひっぺはがす。

「ちょっと待ってろ…すぐにあのクズ共をクズ以下にしてくっから」

俺はそれだけを言い残し路地裏らしき所に入っていった。

唯ｓｉｄｅ

「ちょっと待ってろ…すぐにあのクズ共をクズ以下にしてくっから」

そう言って路地裏みたいな所に入っていってしまった。
あの時のきょう君はもうきょう君じゃなかった。
私の知ってる、私が好きなきょう君の姿じゃ……

「なんとしても止めなくちゃ！」

私が行ったら殴られちゃうかもしれない、でも…きょう君には喧嘩なんかしてほしくない。
きょう君は私を守るためって言ってたけど、あの時の目はそんな目じゃなかった。
私はすぐに路地裏に行くため走った。

「さぁ、やろうぜ？どうした？こないのか？」

「な、なんだよこいつ……目がイカれてやがる」

「来ないなら俺から行かせて貰う」

バキッ！

バキッ！　　ドカッ！

「がっ！……がはっ！」

「ちっ！くそーーーーっ！！！！！」

「うわぁぁぁぁぁ！！！！！」

（ちっ！一気に二人かよダリィ……）

ブンッ！　　バキッ！　　ドカッ！

その後も殴り合いは続いた。

「あ～あ、久々だったから何発か食らっちまったぜ……」

「きょう君！！」

声がしたほうに俺は向いた。そこには普段のホンワカした顔は無く、真面目な顔をした平沢の姿があった。

「おう、とりあえず片付け……」

パンッ！

「は？」

俺は何をされたのか分からなかった。でも、頬に痛みを感じた、俺は平沢にビンタを食らった。

「痛ぇーな、なにすん「きょう君のバカ！心配したんだよ……」

……」

その直後俺は平沢に抱きつかれた。

「もう、喧嘩なんてしないでよ……きょう君が傷つくなんて嫌だよ……」

「俺は…俺はまたこんな事を……」

「どうしたの？」

いきなりだが俺は平沢に抱きつかれたまま過去について話す。

「俺は前にもこんな事をした…その時は中学1年だった、俺は桜ヶ丘第四中学校にいたんだ
最初は普通の生活を送っていた、でも、いつの日からか母さんと、親父が喧嘩をする毎日が
始まったんだ、そして離婚したそれに耐えられなくなった俺はその中学で暴れ、友人だった奴も病院送りとかさせて、校長室に呼ばれた。そこで校長になんて言われたと思う？」

「なんて言われたの？」

「『お前はこの学校に要らん存在だ！調子に乗りやがって！このガキが！今すぐ出て行け！』
だってよ、だから俺は『上等だ、今すぐこんなとこ辞めてやるよ…

じゃあなこのゴミ虫共…』て、言ってとりあえずそこにいた教員と校長を殴り飛ばして退学した、その後転校したのは神楽坂中だ」

「えっ！きょう君神楽坂中学校にいたの！？」

なぜ平沢が驚いているかと言うと、そりゃあこの辺じゃあ名の知れた不良校だからだ。

「ああ、転入初日と二日目は手荒く歓迎された…まぁ所詮クズはクズだ、そんな奴らは一掃させてもらった、その後はなぜか知らないけど神楽坂中のトップに立っていたんだ…そんな中唯一信じていた家族にまで手を出したんだ……」

本当にあの時は何をしていたのだろう？なぜ大切な家族にまで手を出してしまったんだろう？
そんな事を思うと自分の不甲斐なさにムカついてくる。
すると、俯いていた俺の頬に何かが触れた。

「大丈夫だよ、手を上げちゃったのはダメだけど…でも、楓ちゃんもきょう君のお母さんも
許してくれてるんでしょ？」

俺の頬に触れたのは平沢の手だった。冬で寒い日のはずなのにその手はとても暖かく感じた。

「ああ……」

「じゃあ、よかったね♪」

「なぁ、何でお前はこんな過去を持っている俺に、ましては目の前で人を殴っていた俺に
接することが出来るんだ?ずっと仲良かった奴も俺の過去を知ったら全員逃げてったのに…」

そう言った時、平沢は先程の真剣だった顔じゃなく、とても優しい顔に変わっていた。
それで俺は思った。

(ここまで優しく接してくれる友達が良くいたもんだ)

と。そして俺の弱弱しい質問に平沢が答えを言う。

「そんなのあたりまえだよ、だってきょう君はどんな過去を持ってても
きょう君だもん
どんな事をしたってきょう君だもん、それに……」

何故か平沢はそれにの後で止まった。
しかし、俺は次の言葉を言って欲しくなかった。
何故なら、今、平沢に何か言われたら涙腺が崩壊すると思うから。
他人にここまで優しくされたことがないから、平沢に甘えそうになる。
だから言って欲しくは無かった。
でも、平沢は言った。俺が思わぬ言葉を……

「それに、私が大好きなきょう君だもん」

「大…好き……？」

「あ！…えと、その、え～と……」

（わぁ～…思わず言っちゃった～…よし！平沢唯！一世一代？のチャンス！もう全部言っちゃえ～！）

「きょう君！ちょっといいですか！」

「な、なんだよ、改まって」

「スー…ハー…スー…ハー…よし！」

（良いから言えよ……）

「私、平沢唯はきょう君…じゃなくて、恭哉君の事が好きです！
あなたが過去のことで喧嘩したりしても私はあなたの味方でいます
それに…きょう君、さっきみたいにまた私の事守ってくれると思う
から……
私はきょう君をずっと信じるから、だから私と付き合ってくれませ
んか？」

正直、俺は何を言われたのか分からなかった。
でも、目から涙がでた。涙？親が離婚した以来流したことがなかっ
たのに。
平沢の癖に生意気な事を……

「きょう君……」

（今のきょう君は私が支えなきゃ！）

「きょう君……いいよ」

「え？……」

「泣いていいよ……我慢しなくていいよ」

そう言われた瞬間3年間流していなかった涙が溢れ出た。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

その後も俺は泣き続けた。その間ずっと平沢は抱きしめてくれていた。

この時に俺は分かった事がある。

入学式の自己紹介の時、何故平沢の事が気になったのか。

楓に好きな人ができたのかと聞かれ、俺らしくも無い慌て方をしたのか。

そう、俺は……

――――――――――――――――――平沢の事が好きなんだ……

恥ずかしながら泣き終えた俺は、帰路に立っていた。

「今日は本当にすまない……」

「ううん、大丈夫だよ」

会話が続かない……

「大分恥ずかしいことしたな…俺、この事は田井中達に言うなよ」

「どうしようかなぁ～」

「おい、本当に言うなよ」

言われるとマジで困る。

「じゃあ、さっきの返事聞かせてくれたら言わないよ」

「さっきの？」

「も～きょう君の意地悪～」

「えっと……悪い、何だっけ？」

「最後の一回だけだよ～」

と、可愛く頬を膨らませる。

「ああ、頼んだ」

「ゴホンッ！……えっと、私、平沢唯は恭哉君の事が好きです
ギターが上手い所とかかっこいい所とかいっぱいあるけど、全部が好きです
だから、私と付き合ってくれませんか」

俺は迷いは無かった。

自分の気持ちに気づいたから。

（好きな人ぐらい名前で呼ぶか……）

「俺も、唯の事が好きだ……俺も好きな所とか言うのか「うん」
……えっと
俺の課題もちゃんとこなすし、徐々にギターも上手くなってるし…
「好きなところだよー」分かったよ
えっと……え、笑顔だよ！お前の笑顔が好きなんだ！だから俺
からも付き合ってくれ」

（あ～、俺今ぶっ壊れてる……）

「うん！ありがとう！！きょう君大好き！！」

といって、いきなり抱きついてきた。

「うお！危ねぇから……」

「エへへ／／／」

それからの帰路は二人でくっ付いたまま帰った。

（こいつと会ってから大分俺の性格変わったような気がする……）

「じゃあきょう君また明日ね～」

「おう、またな」

そう言って唯に背を向けて歩き出す。

「あ！きょう君」

「あ？どうした」

「えっと～……ん！」

唯は目を瞑って口を突き出す。
これは～そういう事なんだろうか……
俺は軽くため息を吐く

「ハァ……」

俺は唯の肩に手を置いて目を瞑り、近づいていく。
唇に柔らかい何かが当たる。

これから何があろうとも唯を守っていく。
こいつとずっと一緒にいられる事が俺の幸せだと思うから。
１５年の人生の中で一番の幸せを感じた今日。

その後帰宅した俺は、風呂でキスの事を思い出し思いっきりのぼせた。

第十三話　恭哉の過去、重なる気持ち（後書き）

どうでしたでしょうか？ホントこんなんですいません。
次回から原作にまた乗っかります。それまでまた頑張るか。

感想等ございましたらヨロシクお願いします！
いずれまたオリジナルが一つ入る予定……

ラルクでした！！

第十四話　平沢家でクリスマス会！あぁ～バレた……（前書き）

やっと書けた……今まで待たせて本当にすいません！！！
しかも書いてなかったから出来が悪い……

こんなマイナス発言はやめよう！
いや～地震凄かったですね！僕の所は特に被害はありませんでした。
東京なので。
地震きたらテンション上がってしまいましたｗｗ

皆さん余震にもお気をつけて。

長らくお待たせしました、第十四話です！どうぞ！

第十四話　平沢家でクリスマス会！あぁ～バレた……

俺と唯が付き合い始めてから１ヶ月。
ちなみに俺たちが付き合っている事はまだ田井中達にはバレていない。
後、唯たっての希望で一緒に登校することに。

（バレないようにするのは本当にしんどかった……）

「どうしたの？きょう君」

「よくもあいつら相手にここまでバレなかったものだ……」

「バレてもいいじゃ～ん」

「なんかヤダ」

（からかわれるに違いねぇし）

現在１２月、寒さが苦手な俺に嫌な季節がやって来た。

「あぁ～、寒い……」

「寒いのも苦手なんだね」

「ああ……ホッカイロが命だ」

「少しでも温かくしよう！……ていっ！」

といって、唯は俺の背後からいきなり首に抱きついてきた。

「うお！唯、それやめろ」

「え～、だって寒いんでしょ？」

「寒いのは寒いが……さすがに周りの視線がな……」

「え？」

「え？…じゃなくて、離れろ」

「じゃあ、せめて腕！」

「拒否」

「腕！」

「却下」

「う～で～」

「ダメだ」

「ぶぅ～、きょう君のケチ…」

唯は俺の腕に抱き付けないだけで拗ねてしまった。

「ハァ……分かったよ、ほら」

仕方ないので、唯に腕を渡す。

「エへ／／／」

唯は俺の腕に抱きついた。

「学校着いた時には放せよ」

「うん、わかった」

分かったと言っておきつつ学校の門の所でも放してくれなかった。

時はぶっ飛んで放課後。

「みんなー！クリスマス会のチラシ作ったよー！」

勝手にクリスマス会をやろうと言う田井中。

まぁ、そんな事をお構いなしに紅茶を堪能している俺。

「……あれ？クリスマス会ってやる事になってたの？」

「私も聞いてませんでしたけど……」

「誰にも言ってないからね☆」

「言えよ」

すると唯が隣に来て

「きょう君、クリスマス会行く？」

「行くも何も場所とか決まってるのか？」

「それなら、ムギの家って決まってるぞ」

「おいおい…場所勝手にムギの家に決めちゃって大丈夫なのか？」

「あの…その日は都合が悪いんだけど……」

「あ…やっぱりダメだった？」

「うちは常に何かしらの予定が詰まってて、一ヶ月前に予約取らないといけないの」

（一ヶ月前って……）

「だから、ごめんなさい」

「そ、そうなんだ……」

「りっちゃんのお家はどう？」

「あ～ダメダメ、律の家は汚くて足の踏み場も無いから」

「なんだとー！！、澪の部屋なんか服が散らかってるくせに～……パンツとか」

「ま、真顔でデタラメ言うな！！恭哉もいるんだぞ！」

「部屋ちゃんと片付けろよ」

「だから、違うって～！」

「ちなみに～、証拠は写真にバッチリ」

「嘘つけ～！」

「嘘じゃないも～ん♪」

「パ、パンが二つでパン……」

「「「ハァ……」」」

「しょーもないな……」

「ほかにも……」

といって、パンが二つ写っている写真の裏から2枚の写真を出した。

「やめろ〜、やめてくれ〜」

「きょう君の家はどうなの？」

「俺ん家は無理だ、楓の友達が来る」

「そうなんだ」

「じゃあ、唯ちゃんの家は？」

琴吹は写真争いをしている田井中と秋山を横に唯に尋ねた。

「別にいいよ」

と唯が言うと写真争いは終わり

「やったー！」

と、切り替えがやたら早い。

「でも、クリスマスなのに大人数で押しかけて大丈夫なのか？」

「うん、その日はお父さんもお母さんもいないから」

「そう言えば前行った時もいなかったな」

「よく二人で旅行するんだ、クリスマスはドイツ行くんだって」

「「「ドイツ……」」」

「随分仲が宜しい様で……」

（こっちの父親は……ただのクズだ）

今はそんな事は置いておこう。

「何か用意するものある？」

「料理は任せて！」

「大丈夫か～」

（唯、お前は料理が出来ない……）

「うん！憂が作ってくれるから♪」

「出来た妹でよかったな……」

「ホントだ、姉のお前も頑張れよ」

「うっ……」

田井中が何か思いついた様で。

「あっ！そうだ！あれやろうよ！プレゼント交換！」

「「やろう、やろう！！」」

田井中の提案に唯と琴吹が賛成した。

「澪、変な物持って来るなよ」

「それはお前だろ、小学校の時だって……ビックリ箱だったじゃないか……」

「しょうもない……」

「ベタやな～」

「お前が突っ込むなー！」

「ベタ子さん♪」

（……誰やねん）

「楽しみだわ～、クリスマス会♪」

「つーか、俺も行くのか？」

「きょう君も来ないとダメだよ～」

「そうだそうだ～」

「へいへい、プレゼント交換か……女子って何が喜ぶんだ？」

「そうだな～……まぁ、何でもいいんじゃん？」

「適当だな……」

《その日の帰り》

「和さんも軽音部のクリスマス会、参加しない？」

「え、私部外者だけどいいの？」

「全然いいよ、私たち友達だし……人数増えたほうが使えるお金増えるし」

「それをどうする気だ」

「和ちゃん来れる？」

「うん」

「わ～い♪」

そんなに両手挙げて喜ぶことか？

「お～い、恭哉～～～」

「あ？」

聞いた事があるバカの声の方へ向く。

「ありゃ？珍しく勢揃いだね」

「その勢揃いに一人浮いたバカがいるけどな」

「誰の事だ？」

「てめぇ以外にいるかよ……」

「酷くないっすか！？」

「うっさい……」

ドカッ

「ギャア！」

「行こうぜ」

「「「「「……うん」」」」」

次の休み。

「来たのはいいが……何買えばいいか分かんねぇ…」

現在、クリスマスフェア中のプレゼントショップの様な店に来ている。

「女子って何が喜ぶんだ？」

生まれてこの方女子にプレゼントなどした事がない俺はどうすれば良いのか全く分からない。

「仕方ない、店員に聞いてみるか……」

いつまでも立ち往生しているわけにもいかないので、近くにいた店員に聞く。

「すいません……」

「はい」

「じょ…女の子って何貰ったらいいんすか？」

「そうですね～……」

店員は少し考え、

「ぬいぐるみとか何かアクセサリーとかがいいんじゃないですか？」

「そうっすか、ありがとうございます」

「ちなみに…彼女さんにですか？」

なんということを聞くんだこの店員は……

適当に答えるか

「まぁ、そうっす」

「そうですか♪……頑張ってね♪」

やけにテンションが高くなり、そのまま去っていった。

「何だったんだ……」

とりあえず、プレゼント交換用に誰にでも当たって良いようにストラップを。
一応彼女に上げる訳にもいかず、唯には奮発してハート型のネックレスを購入した。

「俺がこんな事をする日が来るとはな……」

前の自分では考えられなかった行動を今やっていると考えると少し自分が変わったと思う、恭哉だった。

「ん？あいつらも来てたのか」

俺の目線の先には丁度買い物に来ていた、真鍋と唯の姿があった。

「よう」

「あ～！きょう君だ～！」

「高嶺君じゃない」

「お前らも買いに来たのか」

「うん、そうだよ～、きょう君は買った？」

「一応な」

「何買ったの？」

「いや、それ聞いちゃダメじゃない唯」

「あ！そうだった～エヘヘ／／／」

「ハァ……」

とまぁ、こんな会話をしながら唯達と色々と回った。

「あっ！これ可愛い～♪和ちゃん私これにする！」

「自分に当たったらやり直しだよ？」

「あー……じゃあこれで良いや」

といって、ちょび髭が生えた訳分からん人形を手にした。

「「おい」」

突っ込みが見事に被る。

（つーか、あの真鍋が、おいなんて言うんだな……）

とりあえず、真鍋と唯が買ったのを確認し、俺たちは店を出た。

「やっと、決まった～」

「そりゃあよかったな……」

すると、真鍋が小声で俺だけに聞こえるように言ってきた。

「（唯にプレゼント買ったの？）」

あ、ちなみに真鍋だけは俺たちが付き合っている事を知っている。

「（大丈夫だ、買ってある）」

「ん？どうしたの？」

「いや、何でもねぇ」

そのまま商店街の中を3人で歩いていると、通りかかった店から田井中と秋山が出てきた。

「なんだー、唯たちもプレゼント買いに来てたんだ～」

「何買ったの？」

「それを言ったら楽しみがなくなるだろ」

「それさっきも言ったよな」

「あーそっか」

そっか、じゃねぇ……

「そうだ！ジャジャ～ン、これから抽選に行くんだ～」

「私たちもだよ」

という訳で抽選場へ。

カランカランッ

「はぁ～、またティッシュか……」

結局全員ティッシュという最悪な結果に。
すると隣で

カランカランッ

「一等賞～～～！はい、おめでとうございます」

「ムギちゃん？」

「皆もお買い物？」

「当たったの？」

「ハワイ旅行だって！」

「なんという強運！」

（こいつはなんかすげぇな……）

「でも辞退したの～」

「なんで！？」

（ある意味すげぇな……）

「こっちが欲しくて換えてもらっちゃった！」

（もう……すごいな……）

琴吹が見せてきたのは【超人生すごろく】

（超人生って何だよ……）

「クリスマスに皆でやりましょ？」

「「「「う、うん……」」」」

（こいつは、もう……分からん）

「じゃ、じゃあ…クリスマス会でな～」

「またね～」

――――

時は飛んでクリスマス会当日。

「あぁ～寒ぃ」

雪こそ降ってはいないが、寒い中唯の家を目指し外出中。

「お～い、キョウ～」

「あ？」

前方から声が聞こえたので顔を上げる。

「お前らか……」

「お前らかとは何だ！」

そこにいたのは、田井中と秋山と琴吹の３人だった。

「あれ？キョウなんでプレゼント二つ持ってるの？」

（あっ！やべ！隠すの忘れてた！）

「いや、これはなんでもない」

「嘘はいけないぞキョウ～」

「だから、違う」

「まさか！これを好きな人にあげるのか！」

「……違う」

「そうかそうか、これでキョウの好きな人が分かるわけだ」

田井中は俺の言葉を無視して勝手に解釈した。
挙句の果てには他の二人も

「そ、そうなのか！？恭哉！？」

「そうなんですか、恭哉君！？」

「違う」

（田井中は強敵だ……）

そんなこんなでバレそうになりつつも唯の家に到着。

ピーン…ポーン…

「は～い」

家の中からトタトタと音が聞こえ、中から出てきたのは……まぁ、予想通り唯妹だった。

「「「おじゃましま～す」」」

「……」

「どうぞ」

「やっほ〜、唯〜来たぞ〜」

すると、玄関から見える階段の死角から、唯が何かを首に巻きつけて出てきた。

「お〜い、みんな〜あがって〜」

「何してんの？」

「やりだしたら止まらなくなっちゃって♪」

「プッ、小学生かよ〜」

「あ、コート貰います」

「あ、ありがとね」

「働き者の妹と…遊び人の姉……」

「不幸のドラマが始まりそうな設定だ……」

「この姉妹にそんな事は無いだろ……」

……

「料理、すげぇ～！！」

「憂ちゃんが作ってくれたの？」

「失礼な！私も作ったよ！」

「お前は料理できんだろ」

「このケーキ！」

「すげぇ！」

「……の上にいちごを乗せました！」

「……私の言ったすげぇを返せー！！」

「……ダメ？」

「あ、あの！お姉ちゃん色々とすごく頑張ってくれて…」

と、唯妹は唯をフォローしようとする。

「掃除しようとしてくれたり、飾り付けようとしてくれたり……それから…えっと……」

気づいただろうか、気づかなかった方に唯妹が言った言葉をもう一度。

『掃除しようとしてくれたり、飾り付けようとしてくれたり』

そう…○○しようとしてくれたり……唯、お前は結局何もしてないじゃないか。
つーか、唯今更飾りを作るんじゃない。

「じゃあ、和ちゃん遅れるって言うから、先に乾杯しよっか～」

「うん！」

「能天気な姉と健気な妹」

「これはこれで、いいコンビなのかもね」

（冷静だが怒ると冷静ではなくなる俺、常に冷静沈着な妹……似ている様で似てねぇな……）

……

「「「「「「カンパ～～イ！！！」」」」」」

「いや～今年も終わっちゃうね～」

「や～ね～オヤジくさい」

「ん？」

「あっ！さわちゃん！」

「何であんたがいるんだよ……」

「別にいいじゃない、あっ！これ美味しいわ、おかわり貰える？」

「「「「いつの間に！」」」」

「まさか、ロープをよじ登り！」

「窓から侵入して！」

「忍び込んできた！？」

「ちょっとー…人を何だと思ってるの？」

「あんたならやりそうな事だ……」

「何？恭哉君？」

「なんでもねぇっす」

「全く、顧問を忘れるなんてどういう事？」

「あ～いや～忘れてた訳じゃないんだけど……」

「先生は彼氏と予定があると思って呼びませんでした」

唯の的確な爆弾投下に被弾した山中と、それに巻き込まれた俺たちは見事に時が止まった。

（唯の奴、良くそんな事を…ましては山中に平気でそんな事言えるな……）

「そんな事言うのはこの口かぁ～～～！！！」

「天然はすごい……」

「「うん……」」

（天然は意外と恐ろしい……）

「罰として唯ちゃんはこれに着替えなさい！」

「なんでそんな物持ってるんですか？」

「それを彼氏の前で着る予定だったら、やめといた方が絶対にいいな」

「恭哉君？それどういう事か・し・らぁ！！！」

「ッ！！！イッテェ～～～～！！！！ヤメロこの……野郎！！！」

いきなりコブラツイストをかけてきた山中を自力で脱出する。

「てめぇ……調子に乗るんじゃねぇ……」

「あなただって余計な事を言わなきゃいいのよ」

すると、着替えが終わったのかトコトコと歩いてきた。

「じゃーん♪」

唯はサンタ服を着てピースをしていた。

「どうかな？きょう君？」

「……いいんじゃね」

「やったぁ～♪」

「可愛いけどダメね、唯ちゃんは恥じらいが足りないわ」

（可愛いで十分じゃねぇか……）

唯はその場にヨロヨロと座り、唯妹に頭を撫でられていた。

「やっぱり……」

山中はそう言って、秋山の方を向き……

「ほ～ら、逃げな～い♪」

山中は男の俺がいる目の前で秋山の服を脱がそうとするので、一旦部屋を退出。
部屋の中から秋山の悲鳴が聞こえてくる。

「ハァ……」

すると、ドアが開き秋山と山中が出てきた。
しかも、秋山のズボンを脱がした状態で。

「……すまない」

その一言を残して俺はもう一度部屋に戻った。

「本当に申し訳ない……」

小声で謝っておいた。

……

一方玄関前では軽い修羅場が展開されていた。

「こんにちは～～」

といって、真鍋が玄関のドアを開けて入ろうとすると、中から悲鳴と奇妙な声が聞こえた。

「おじゃましま～……」

「イヒヒヒヒヒヒ」

「ヒッ！」

普段の清楚な山中と違い、悪意に満ちた化け物のような山中とそれに襲われる秋山を見た真鍋は
仕方ないので

「ごめんなさい……間違えました」

最善の策にでた。

「間違えてないよ！！！助けて！！！！」

……

「もうお嫁に行けない……」

「高校生って、なんだか凄い……」

「顧問がおかしいだけだろ……」

「気を取り直して！プレゼント交換でもするか！」

訳ワカンネェこの空気から打開策を打ち出したのは田井中だった。

「おーっ！！！！！」

「高校生って切り替えが早い！？」

「いや、こいつらが早いんだ……」

「あ、でも先生は？」

「私も持ってきてるわよ」

「「「「「おぉー！」」」」」

「本当は今日、彼氏に渡すプレゼントだったんだけど……」

この山中の一言で折角田井中が盛り上げようとしたこの空気が一気に静まり返った。

「重たい……」

「ここでそういう言葉言うなよ……」

「それじゃあ！始めるわよーっ！！！！！！」

何かもう……山中が開き直った。
山中はコタツの上に置いてあった料理を無理やりどかして、そこに俺たちはプレゼントを置く事に。

「歌が終わったところでプレゼント」

といって、一つずつ渡していく。

「じんぐるべ～る、ほい！」

（何か、やけくそ……）

「じんぐるべ～る、よい！」

（もっと楽しいものじゃないの？プレゼント交換って……）

「すずがぁ～なるぅ～」

（もうお嫁に行けない……）

「じんぐるべ～る、うお～！」

（今年のクリスマスは今までで一番盛り上がってるかも！）

（何だよこのくそ下手な歌は……頭がモゲルッつーの……）

そして。

「スト～～ップ！！！！」

「あ、これ私が買った奴だ」

「じゃあ交換ね♪」

何かやけにテンションが高い、いい年こいている大人。

「あっ！さわ子先生」

「あ～、何か凄く素敵な物の様な気がするわぁ～♪」

そう言って紙袋を破く。

「さぁ、何かなぁ～？」

といって、プレゼント箱を開ける。
すると中から出てきたのは……

「とてつもない勢いなビックリ箱だな……」

そう、ビックリ箱だ。その箱は見事に山中の眉間に直撃、ものすごく素敵な物だった。

「へへへへへへへへ……最高のクリスマスだわぁ～～！！！！！！」

完全にぶっ壊れた。

「メイークリスマスゥ～～！！！！あっはっはっはっはっは！！！」

その後も山中はぶっ壊れていた。

……

「あ！それ、私が買ったやつ」

琴吹には秋山の。

「あ、それ私」

田井中には真鍋。

「和ちゃんお歳暮じゃないんだから～」

次に開けたのは真鍋。

「あ～いいなぁ～美味しそう」

真鍋には琴吹の。

次に秋山。

「ヒィッ！！！！！！」

「はいはい、それが私のね～」

秋山には山中の。

「まさか、これを彼氏に上げるつもりだったんですか？」

「……そうよぉ、悪かったわねぇ～」

といって泣き始める山中。

次は唯と妹。

「え～と、あ！」

「手袋とマフラーか」

「憂がマフラー無くして寒そうだったから」

「お姉ちゃんが手袋片方無くしたって行ってたから」

見事に姉妹のプレゼント的中。

「お互いのプレゼントが当たってなかったらどうするつもりだったんだ」

「ありがとー、憂♪」

「うん！ありがとう、お姉ちゃん♪これがあれば冬も暖かいかも～」

残る俺一人だが……

「キョウは誰の？」

「……俺の」

「「「「「えっ…」」」」」

「じゃあ、ジャンケンで勝った人にしなさい」

もうこいつ、ヤケクソだな……

「う～ん、それじゃあ恭哉が可愛そうじゃないか？」

「俺は別に構わないけど」

「それならいいけど……」

というわけで山中を除いた5人でジャンケン。

「「「「「ジャンケン、ポン！」」」」」

この声が4，5回続き……

「よっしゃ～！私の勝ちぃ！」

勝ったのは田井中。

「ほらよ」

俺のプレゼントは田井中に。

「サンキュー、中身は何かな？」

「ストラップか」

「なんかキョウにしては普通だな」

「うるせぇ」

「まぁ、いいや！よ～し、一人ずつ芸でもするか！」

「いい話系の流れだったのに、恭哉のは違うけど」

「だまれ……」

「ん？澪が一番やるかぁ？」

「完全にオヤジだわ……」

その後は唯妹が腹話術をやり、秋山が先程のサンタ服を着て、唯と田井中はエアギター、エアドラム
琴吹はマンボウの物真似、何故マンボウなのかは知らないが、まぁ最後に山中が腹に手でもみじを作って終了。
ちなみに俺は何もやってないが、やれやれと言われたが断固拒否。

「「「「「おじゃましました～」」」」」

といって全員がバラバラに別れて行ったのを見た俺は見つからずに唯の家へ戻る。

「唯！」

「へ？あれ？きょう君どうしたの？」

「あ、私は先に家の中にいますので～、ごゆっくり」

気を利かしたのか唯妹は家へ戻って行った。

「え～と、ほらこれ」

「え？何これ」

「クリスマスプレゼントだ」

「ホントに！？ありがとー！開けてもいい？」

「ああ、いいぞ」

凄く嬉しそうな顔をした唯は、紙袋を開けた。

「わぁ～♪可愛い～♪」

「気に入ってもらえたなら何よりだ」

「うん！ありがとーきょう君！大事にするよ！」

「ああ」

「あっ！私何も用意してないや……どうしよう」

「んなことは別に構わない」

「それはダメだよ、じゃあ～…う～ん……」

唯は必死で考える。

「あっ！」

何か思いついたようだ。

「きょう君目瞑って…」

「目か？ああ、これでいいか？」

「うん、じゃあ失礼します！」

俺は何をされるのかと思って片目を薄く開けた、そこには唯の顔が目の前にあった。

「ん……ぷは！」

「唯、お前なぁ外でやるのはダメだろ」

「だって～渡すのもなかったし、それに……キスしたかったんだもん……ダメ？」

唯の上目遣いは相当な威力がある、これをされてはアウトだろう。

「べ、別に構わないが……」

「エヘヘ／／／ありがとーきょう君」

といって抱きついてくる。

「ああ」

普段まったく笑ったりする事がない俺が今回は少し笑うとまではいかないが口角が上がった。

「あ～！きょう君が笑ったぁ～！！」

「あ？」

「やっときょう君の笑顔が見れた～♪」

見られてしまった……

「確かに今笑いましたねぇ」

ん？この声は唯でもない、俺でもない、唯妹でもない。
まさか……

「なっ！！テメェラ！！！」

そこにいたのは帰ったはずの田井中たちだった、山中はいねぇけど。

「お二人さん熱いねぇ～♪」

ちなみに抱き合ったままだった。

「こ、これは違うよ！りっちゃん！」

「何が違うのかなぁ？」

「ちなみに聞くがどこらへんから見ていたんだ」

「え～とね…『クリスマスプレゼントだ』って言うところからだよん♪」

俺たちの隠す努力がむなしくも散っていった。

「終わった……」

「いやぁ～まさか、唯とキョウが付き合ってるなんてなぁ♪ましてはキスまでしてるなんて♪」

（そこまで見られたらもうダメだ）

「そうだよ、付き合ってるよ」

「いつから付き合い始めたんだ？」

「一ヶ月前だよ」

「すごい隠してきたんだな……」

「ハァ……」

その後もあれやこれや聞いてくる田井中をかわすことが出来ずに意

気消沈した。

「もうヤダ……」

第十四話　平沢家でクリスマス会！あぁ～バレた……（後書き）

どうでしたか？大丈夫でしたでしょうか？
今後も頑張ります！よろしくお願いします！！

感想等ございましたらヨロシクお願いします！！

ラルクでした！！

第十五話　新年あけおめ！！山中、おみくじ……（前書き）

どーも！高校の課題で忙しいラルクです！！
見事に暇が無い……今回は夜中に頑張りました。眠い。

今回は超短いです。短編か！っていう突っ込みは遠慮しときます。

では、第十五話どうぞ！！

第十五話　新年あけおめ！！山中、おみくじ……

クリスマスの日から丁度１０日たった、１月４日。
昨日、俺の携帯電話に田井中から一本の電話が入った。
内容は次の様である。

『キョウ、あけおめ～♪』

「うるさい、用件は何だ」

『新年の挨拶ぐらいしろよ！』

「ハァ……アケオメ……」

『よろしい、突然だが軽音部で初詣に行くぞ！』

「断る」

『もう皆に連絡しちゃったからな』

「知らん、つーか初詣もう行った」

『2回行ってもいいじゃん♪』

「メンドイ……」

『じゃあ、明日11時に○○神社にねー、絶対来てね！』

「おい」

ブチッ

「切りやがった……ハァ」

俺は強制的に初詣に連れて行かれることになってしまった。

初詣当日、行きたくはなかったが、行かなければ田井中等からメール又は電話が来そうなので
仕方なく行く事に。

「ハァ、眠ぃ」

集合場所の神社にダラダラと足を動かす。
すると、後ろからバカの声が聞こえた。

「お～い、恭哉～！！」

「あ？」

そこにいたのは、バカ一名にその家族。

「あら、恭哉君じゃない！相変わらずカッコいいわね～♪」

「あざっす……」

「はっはっは！幼稚園の時はあんなに小さかったのになぁ～！」

「父さん！母さん！いいから行くぞ！…じゃあなぁ～恭哉～！」

嵐の様に去っていった。

（何だったんだ……）

「ハァ……」

訳分からん家族が去っていった後、俺はため息を付いて目的地へダラダラと足を動かした。

数分後

とりあえず目的地到着。そして、聞こえてきた第一声は……

「憂ちゃんくれ」

堂々と人をさらおうとしている声の主のところへ。
そこにいたのは、まぁ言うまでも無く軽音部女子４人である。

「新年早々、何、人をさらおうとしてんだよ……」

「あっ！きょう君～！」

俺を見つけた唯はこっちに走ってきて抱きつこうとする。

「人がこんなにいる中、抱きつくのは禁止な」

「えっ！わ…わ、わぁ！」

禁止の言葉に残念そうな顔をして失速しようとしたところ、地面が生憎石なので、出っ張っているところに足が引っかかり、こけそうになる。

「うお！唯、あぶな！」

唯の体を支える。

「おい、大丈夫か？」

「エへへ／／／大丈夫だよきょう君！」

「ハァ……気をつけろよ？」

「うん！」

唯をしっかり立たせて、合流。

「明けましておめでとうございます、恭哉君」

「……ああ」

「恭哉は三が日どうだったんだ？」

「あ？あ～…簡単に言うと、唯の妹と一緒だと思うが…」

「「「「ご苦労様です！」」」」

「でもさ唯、そんだけ食っちゃ寝してたら、太っちゃうんじゃないか？」

「まぁ、コタツでダラダラしてたらな……」

「きょう君何で知ってるの！？」

「てめぇが写真送ってきたからだろうが！」

「あ～、そうだっけ？」

「そうだ」

自分のやった行動を何で忘れるんだ……

「ちなみに私はいくら食べても体重増えないんだぁ～♪」

「「ええっ！！」」

どうやら唯は太らない体質なようで、琴吹と秋山は残念ながらって事だ。

「そんなわけ「ないでしょ！」…ええっ！」

（おお、琴吹がここまで声を張り上げるとは……）

それほど衝撃的なことのようで。

「ム、ムギちゃんまで……」

すると、秋山と琴吹は俺たちから距離をとり、ヒソヒソ話始めた。
そして、両手で顔を覆い泣く。

「あいつら、何してんだよ……」

「……唯、とりあえず謝っとけ」

「ごめんなさい！」

つーか、俺は一つ気になる事がある。

「何で秋山だけ着物着てんだ？」

「それは、律が昨日着て行くのって聞くから」

「聞いただけ」

「な、なにぃー！」

普通にはめられたな。

「着替えに帰る」

「…メンドイから帰る」

「キョウは関係ないでしょ！」

「ちっ…」

「そのままでいいじゃん、かわいいよ？」

「そ、そう？」

「そうだよ～」

「「へへ／／／」」

なぜか知らないが二人で見つめあい笑った。

「今年もいい物を見せてもらいました～♪」

「ムギも相変わらずだな…」

「行くなら行くぞ、こっちは無理矢理てめぇに連れて来られたんだ……ダルイ」

「キョウも相変わらずだよ……」

なんて事を言われても知らん振り。

チャリンッ

ガラガラガラ

今年2度目の参拝。

（何で一年で2回も参拝しなきゃいけねぇんだよ……）

突っ込んでも、１０円を賽銭箱へ投下してしまったため仕方なくまた祈る事に。

「みんな何をお願いしたの？」

「私は家内安全を」

「体重減りますように」

「美味しいものを沢山食べられますように」

「…唯のスキンシップができるだけ減りますように」

「…みんな軽音部の事祈ろうぜ、つーかキョウ…それは唯に言え」

「きょう君！スキンシップは大切だよ！それがダメだなんて！」

どこぞの昼ドラ的なノリで台詞を言う唯。

「知らん、別にするなとは言ってない」

「なんだ～、じゃあよかった～♪」

「はいはい、ラブラブトーク終了…じゃあもう一回」

というわけでもう一度。新年3度目の参拝。

「演奏が上手くなりますように」

「みんなと楽しく過ごせますように」

「新入部員来い」

「ムギちゃんの持ってくるケーキをもっと沢山たべられますように」

ゴンッ

「ギターが上手くなりますように」

「よしっ！じゃあ、おみくじ引きに行こうぜ～」

というわけで、おみくじ売り場到着……したのはいいが、そこにいたのは…

「さわちゃんだ……」

田井中の言う通り、山中がいた。まぁ、山中もおみくじを引きに来たのだろう。
ただその行動が怪しかった。

まず、合掌しお祈り。つーかその時間が長い。次に、おみくじを引く、とてもわくわくしながら。
そして、嫌な顔をして舌打ち、内容が気にくわなかったのか結びに行く。
そこにたまたまいたカップルを睨む、そしてまた戻り再度おみくじを引く。

（山中が可哀相に思えるな……）

「お前ら、見なかった事にするぞ」

「「「「う、うん……」」」」

仕方なく俺らもおみくじを引こうと歩き出す……が

「みんなの分、おみくじ引いてきたよ」

「なんで勝手に引いてくるんだよ！」

姿が消えたと思ったら、勝手におみくじ引いてきやがった田井中。
とりあえず、田井中の持っているおみくじを一人ずつ取っていく。

「まったく……あ、大吉だ」

「あ、私も」

「私もです」

「きょう君は？」

「大吉だ……」

まぁこの流れからすると全員大吉という落ちであろう。
という考えをしていた俺がバカだった。

「……キョウ」

「なんだ」

「違う、呼んだんじゃない……結果が凶」

一瞬、俺らは凍りついた。
田井中は俺らに近づいてきて、

「返せ！」

むなしい一言を秋山に。

「ええい！見苦しい！」

「唯、交換！」

「やだよぉ～」

「ムギ！」

「私もちょっと……」

「キョウ！」

「自業自得……」

「ほら、律結びに行こう」

「うん……」

田井中が結びに行くのでついていくと一角だけやたら結んである量が尋常じゃないところがあった。
そこで結んでいたのは……山中。

「「「「「どんだけおみくじ引いてるんだよ！！！」」」」」

「うわーっ！！びっくりした！！！」

軽音部初の全員ではもる。しかも矛先が山中。

「新年から訳ワカンネェ……」

――――――――――――――――――――――――こうして俺ら軽音部の新年が明けた。

第十五話　新年あけおめ！！山中、おみくじ……（後書き）

さぁ、これからも頑張ろう！！
次回から、恭哉君たち2年生に突入！！
ファンの方お待ちかね、あずにゃん登場！
いつ投稿か分からないですけど、待っててください！！
早め早めに……

では、次回お会いしましょう！ラルクでした！

番外編　少し甘い？エイプリルフール（前書き）

どーもラルクです！！

今回はエイプリルフール、という事なので番外編で出してみました！
楽しんで頂ければいいなぁと思います！

では、番外編！スタートです！

番外編　少し甘い？エイプリルフール

今日は４月１日。
学校も春休みという訳だが、田井中が部室集合との号令に嫌々部室にいる訳である。

「で？何で田井中たちが居ないんだ？」

「何でだろうね？」

現在部室にいるのは、俺と唯だけで号令をかけた張本人が何故かいない。

「ハァ……コネェなら俺は帰るぞ」

「ちょ、ちょっと待って、きょう君」

「ん？何だ」

「実は、今日は私が話があって呼んだんだ…」

「は？いや、俺田井中に呼ばれたんだが？」

「え、あ、うん…そうなんだけど、私がりっちゃんに頼んで呼んでもらったんだ…」

「あ、そう…まぁ良いけどよ…で、話って何だ」

「うん…あの、さ」

ここで、というか部室に居た時から一つ疑問がある。
今日の唯はいつもの天然元気娘ではない、今まで見た事のない遠慮さだ。
そして、嫌な沈黙が流れた。

「突然でゴメン……私達さ…もう、別れよっか」

俺は何を言われたのか全く分からなかった、いや分かりたくなかった。

（別れる？は？……何だよそれ、意味ワカンネェよ…）

でも、俺は声が出なかった。せめてもと思いこれだけは振り絞って出した。

「……な、何でだ」

「それは……ゴメン、本当にゴメン…それじゃ」

唯は『ゴメン』の一言だけを残して走って帰ってしまった。

静寂に包まれたこの空間に残されたのは、呆然と立ち尽くした俺だ

け。
俺は今すぐにでも唯を追いかけたかった、でも足が全く動かなかった。
頭の中を整理しているのだが全く整理できない。

「くそっ…何だよ…」

俺はそのまま壁に寄りかかり力無く座り込む。

「意味がワカンネェ…唯、どうして……」

俺はその後何をしていたか分からない、ただ気がついた時には1，2時間ぐらい経っていただろうか。
唯に理由を聞こうと思っても唯の家に行く気にも、携帯で聞く気にもなれなかった。
仕方なく俺は部室をでて、学校をでた。
しばらくして俺は商店街の方へ。
足取りはフラフラとしながら行く当ても無く歩いていた。
すると、

ドンッ

誰かとぶつかった。

「あ、悪い……」

「おい、ちょっと待て」

ぶつかったのは不良3人組。

「なんすか」

「ぶつかっといてその態度か、あぁ！？」

「調子乗るなよ、このガキが！」

「てめぇ、ちょっとこっち来い」

連れて行かれたのは路地裏、人気が全く無い。

「喧嘩なら、他でやってくれ」

俺はそれだけを言い残して去る…が、

ドンッ

後ろから蹴られた。

そのままよろける、俺は振り返り不良のところに歩いていき、不良の一人の

ドスッ

鳩尾を殴った。

「うぐッ！……て、てめぇ…」

ドカッ　　バキッ

ドスッ

不良たちは俺の目の前でうずくまっていた。

「……」

俺は大して怪我無く踵を返し歩き出す。
すると、携帯が鳴る。画面に出ていた文字は…

《平沢唯》

（何だよ……）

「……なんだ」

『……さっきはいきなりゴメン』

「……あぁ」

『今どこにいるの？』

「商店街の路地裏…」

『……そうなんだ』

「……あぁ」

すると、いきなり後ろから誰かに後頭部を殴られる。

「ぐぁ！ッ！誰だ！？」

後ろを振り向くと先程の不良のボスらしき奴が一人いた。
俺が電話をしている間に呼んだらしい。

『どうしたの！？きょう君！？』

「悪い唯……後でまた掛ける」

それだけを言い残して電話を切る。

「隙を狙うとは、まぁ卑怯だなぁ」

「くっくっく…なかなかできるガキだな」

「うるせぇ、かかって来いよ…クソジジィ」

唯side

「どうしたの!?きょう君!?」

『悪い唯……後でまた掛ける』

きょう君はそれだけを言い残して切ってしまった。

（きょう君に何かあったんだ……とにかく行かなきゃ！）

きょう君がいる場所は商店街。
私は家から走って商店街に向かった。
私は運動、特に走ったりする事なんか得意じゃないけど…それでも走る！何か胸騒ぎがするから。
そして走って１０分程して商店街の入り口に到着。
着いたからといってすぐに見つかるわけじゃない。

「ハァ…ハァ…きょう君、どこ…」

私は必死できょう君を探した、そして……

「きょう君！！」

私の目の前には怪我をして力無く座り込んでいるきょう君がいた。

「きょう君！大丈夫！？」

「……ゆ、唯か…」

「また、喧嘩したの？」

「……あぁ、ちょっとな」

「もうやらないでって言ったのに……ぐすっ…うぅ…」

「唯、ゴメンな……だから泣くなって…」

「きょう君が傷ついてるところなんかもう見たくないよ……」

「本当に悪かった……唯、ゴメン、ちょっと意識が……」

「え！？きょう君！？だ、大丈夫！？きょう君！？」

きょう君はそのまま私に寄り添って意識を失ってしまった。

恭哉ｓｉｄｅ

「え！きょう君！？だ、大丈夫！？きょう君！？」

俺は唯のこの言葉を最後に意識を失った。
ちなみにあのボスは倒したぞ、あの後手下たちみたいなのが連れて帰ったが。

「う…ん…あ？…こ、ここはどこだ…」

意識を失ってどれぐらい経ったか分からないが気がつくとどこかの部屋に来ていた。
それに加え誰かのベッドに横になっていた。

「あ、きょう君！気がついた？」

声がした方へ向くと唯の顔があった。

「ここは、唯の部屋か？」

「うん、そうだよ、それより体大丈夫？」

「あぁ……これぐらい大丈夫だ」

「そっか、よかった～」

そこから、沈黙が流れる…ただ、時計の音だけが聞こえる。
でも、俺は一つ疑問があった。

「なぁ、唯」

「なあに？」

「別れるって話なんだが……」

「……あ、え～と…その～」

「……悪いけど別れたくない、勝手なのは分かるけど俺は唯の事が好きだ、別れる気はない」

「……うん、ありがとう…こんな時に言い出しづらいんだけど……」

「何だ？言ってみろ」

「……分かれるって話、嘘だよ？」

「……は？もう一回言って」

「だから、別れるって話、嘘だよ？」

（ん？嘘？嘘……え…）

「嘘！？な、何だそれ！」

「だって今日はエイプリルフールだよ？」

どうやら俺は天然元気娘の平沢唯にしてやられたようだ。

「お前なぁ…ついて良い嘘と悪い嘘があるぞ、今回は悪い嘘だ」

「でも、今日は嘘をついて良い日だから……」

「他の事ならまだいいが…今回はダメだ」

「ゴメンなさい！！」

「ハァ……でも、別れなくていいなら、いいか」

「え、じゃあ許してくれるの？」

「許すわけじゃない、だから罰だ…目を瞑れ」

「うぅ～…瞑ったよ」

「よし、じゃあいくぞ」

そして俺は軽く起き上がり唯の頭の後ろに片手を回すとそのまま唯を俺の方に寄せてキスをした。
今回はちょっと激しく。

「……ん、きょうく……ん…ふぁ…ん」

俺は少しした後離れた。

「はぁ…はぁ…きょう君、い、いきなりはびっくりするよぉ…」

「……だから、罰なんだ…」

まぁ、俺はその後の事はまだ早いだろうと思い、しなかったが。
そして俺は唯を抱き寄せて…

「好きだ、唯……」

「うん、私もきょう君が好きだよ…さっきはゴメンね？」

「別にいい、これからも傍にいてくれ」

「……うん、傍にいる」

その後は抱き合っていた。
４月１日、エイプリルフールの御陰で心の重なりがより深くなったと思う。

「唯、一つ いいか？」

「なあに？」

「この計画を考えたのは誰だ？」

「え～とぉ～……」

「唯じゃねぇよな？それだけはまず確実だ」

「うん、言っちゃダメって言われてたけど、りっちゃんだよ」

「……やっぱりな…唯、これから田井中をここに呼んで軽く制裁を入れる」

「程々にね？」

「…そこまではしない、とりあえず俺の名前を出さずに電話で上手く呼んでくれ」

「……うん、分かった」

そして、唯は携帯で田井中を呼び出すことが成功。
俺は物陰に隠れ、田井中を待つ。

ピンポ～ンッ

「……来たか」

「お～す、唯～来たぞ～」

「あ、りっちゃん」

「どうだった?私の作戦?」

「引っかかりました!!」

「そうかそうか、うんうん……」

俺は物陰から気づかれないようにゆっくり出て……

「お前の作戦に見事に引っかかったんだけど?」

「だよな~さすが私って……かん……じ…あ、あれ~?何でキョウがここに…?」

俺は右手を田井中の頭の上に乗せて

「さぁな？……調子に乗るんじゃねぇ、デコ野郎…」

といって、徐々に力を入れてった。

「ゴ、ゴメンなさぁイタタタタタタタタタタタタッ！！！！！」

その後は田井中に土下座をさせ謝らせた。
まぁ、今日こいつの作戦がなかったら唯ともっと心が重なる事ができなかったんだなと思うと少し田井中に感謝する恭哉だった。

番外編　少し甘い？エイプリルフール（後書き）

どうでしたでしょうか！？

最後らへんは少し甘かったでしょうか？？

恭哉×唯は本当に好きです。

さぁ！では、次回は本編で会いましょう！

感想等ございましたらよろしくお願いします！！

ラルクでした！！

第十六話　2年生突入！！そして部員勧誘　高校2度目の春。（前書き）

どーも！！お久しぶりです！！ラルクです！

やっと書けた……

あ、梓の事なんですが、まだあまり出てきません。
前回に梓登場！とか言って調子に乗りましたが、ただただ僕の記憶違いでした。
すいません……

多分次回、または次々回に登場します。
梓ファンで読者の皆様、申し訳ございません。

では、第十六話どうぞ！！

第十六話　2年生突入！！そして部員勧誘　高校2度目の春。

季節は春。もう一つ言うならば、唯に初めてあったのも春。なんだそれ……

まぁ、俺が『私立桜ヶ丘高校』に入って、早一年が経った。

この一年、中学の頃の俺には考えられない事が多々あったが一番考えられない事は…

やはり、俺に彼女ができた事だろう。正直この事に関しては俺も驚いている。

まぁ、色々あった一年だと思う。

「兄さん、どうですか？制服どこもおかしくないですか？」

「ん、ああ…つーかさっきから気にしすぎだろ」

「身だしなみはしっかりしないと、だから兄さんもしっかりしてください」

「……楓、もう時間だ行くぞ」

「誤魔化さな「じゃあ先に行ってるぞ」あ、待ってください！」

言い忘れてたが、今日は始業式。
見事に今日から2年である。ちなみに……

「お～い！恭哉～」

「雄介は残念ながら留年だ……」

「そうなんですか……雄介さん、残念ですね…」

「いきなりそんな事言うのやめてくれません！？つーか、留年じゃないっす！！」

「……で、楓は部活とかどうするんだ？」

「私は入るつもりはありませんよ」

「シカトやめてくれません!?」

「ん?あぁ、よう雄介」

「おはようございます、雄介さん」

「おはよう!楓ちゃんも高校生かぁ〜……」

と、まぁバカが楓に昔話的感覚で喋っているのを俺は無視、楓は笑顔で聞いているがほとんど話を右から左へ、左から右へと受け流しているだろう。年月が経つにつれ、どうやら楓も俺に似てきたようだ。

つーか雄介は何故喋る時右へ行ったり左へ行ったり、めんどくさい動きをするのだろうか…

「あ、きょう君～！」

「ん？」

「おはよー！」

（こいつはドンだけスキンシップをしたがるんだ……）

「やめい」

とりあえず俺目掛け走ってくる天然元気娘の頭を？む。
その後ろに見える妹…まぁこの際憂と呼ぼう。
憂よ、笑ってないで止めてくれ。

「うぅ～…いいじゃん！」

「いいじゃんじゃない、ここはダメだ」

「じゃあ、他のところは？」

「……場所によっては許す」

「やったぁ～♪」

「朝っぱらからラブラブだねぇ～」

「恥ずかしいぐらいにな、おはよう恭哉、それと楓…でいいんだよな」

「はい、えっとすいません……」

「あ、悪いな私は秋山澪だ、初めまして」

「あ、はい…澪さん、初めまして」

「私は田井中律だよん♪よろしくな楓！」

「よろしくお願いします、律さん」

「私は琴吹紬です♪よろしくお願いします、あの～出来ればムギさんとでも呼んで頂けると…」

「はい、よろしくお願いしますムギさん」

一通り挨拶が済んだ俺らは昇降口へ行き、楓、憂の新入生組みと別れる。
そして前の掲示板に張ってあるクラス表を見る。

「え～と…あ、あった2年2組かぁ～」

「私もだ」

「本当！？私も2組♪」

「じゃあもしかして、澪ちゃんも！？」

「……1組」

「「「あ、あぁ～……」」」

「な、何その目は！」

「寂しくなったらいつでも遊びに来ていいんだよ…」

田井中は秋山の肩に手を置き、涙を流す名演技をしながら言う。

「私は小学生かっ！律こそ、私と離れて大丈夫か？もう宿題見せてやれないぞ？」

ここで秋山も腕を組み言う……が、俺には強がっているようにしか見えない。

「へっへ～ん！平気だよ～！こっちにはムギがいるもんね～」

「ぐっ…」

秋山は悔しそうな顔をして顔を背ける。
そこに真新しい制服に身を包んだ唯の妹、憂と俺の妹、楓がきた。

「あ、みなさん！」

「二人とも似合ってる似合ってる」

「初々しいわね♪」

「……そ、そうかな？…」

「……あ、ありがとうございます」

楓と憂は恥ずかしそうに俯いた。
だが、このごく普通な日常的空気をぶち壊す奴が現れた。
そいつはやはり雄介だった。

「あはは！憂ちゃんだけに初々しい！…な～んちゃってぇ～」

ドスッ…

「うっ！」

つまらないダジャレを言ったクソバカの鳩尾に鉄拳制裁。
とりあえずこの場の全員が聞かなかった事に。
そしてこの空気を打破してくれた素晴らしい方がここに。

「あ！お姉ちゃん、襟」

そう、憂だ。憂は唯の襟に手を伸ばして何かを剥がした。

「クリーニングのタグ、付けっぱなし」

「あ～ホントだぁ」

「それにここのところ、寝癖ってるよ」

憂は唯を後ろに向かせ、カバンから出した櫛で唯の髪を梳かし始めた。

「お前らやっぱり姉と妹を交代した方が合ってると思うんだが……」

これは素直にそう思う。多分秋山や田井中たちもそうだろう。
すると楓が俺の前に立ち。

「兄さんも髪が跳ねてます」

「俺は別に構わん、男は別に跳ねててもいい」

「男ってのはむしろ跳ねてる方がカッコいいんだよ、楓ちゃん！」

何故か力説しているバカ。しかも跳ねてるからカッコいいわけでもない。つーか別にカッコつけてるわけではない。

「雄介さんは気にしないでください、ほら兄さん少ししゃがんでください」

（雄介はもうダメだな……）

仕方なく少し膝を折ると、楓は櫛をポケットから出し俺の髪を梳かす。

つーか通り過ぎていく人の視線が軽くこっちに向いているのだが……

「はい、終わりました」

「あぁ……」

「それと、シャツ、ボタン、ネクタイ、ちゃんと服装正してください、ダラしないですよ？」

「いやいや、楓ちゃん…恭哉みたいな不良はこの服装が合っているのさ！」

「不良じゃねぇ……」

「せめてネクタイは締めてくださいね？」

「分かった……」

とりあえずネクタイを締める、今締めないと楓に「今すぐ締めてください！」と言われるからだ。

「唯は姉と妹、交代した方がいいんじゃないか？」

やはり田井中も思っていたようだ。

「キョウも交代したらどうだ？」

「うるせぇ……悪いが唯ほど妹に苦労とかをかけてねぇ…」

「うぅ～…きょう君ひどいよぉ～」

「へいへい……」

するとチャイムがなった。

「あっ…じゃあまた！」

「失礼します」

二人は俺たちに礼をしてクラスへと走っていった。

と、思ったが楓だけが何故か戻ってきた。

「兄さん」

「あ？」

「一つだけ言い忘れていました」

「何だよ」

「今日の夕食の当番、兄さんなので……豪華にお願いしますね？」

「は？何で豪華にしなきゃいけねぇんだよ……」

「だって入学祝いの夕食普段と変わらなかったじゃないですか」

「……ハァ、分かったよ…じゃあ豪華に作るから早く行け…」

「ありがとう兄さん♪」

先で待っていた憂のところへ走っていった。

「何だかんだ言って恭哉は妹に優しいんだな」

「……知らん」

「じゃあ、私らも行くか」

という訳で俺たちも自分たちのクラスへ行く。
とりあえず最後にクラス表を見る。

秋山　澪
・
・
・
高嶺　恭哉
橘　雄介
・
・
・
真鍋　和
（また、雄介と一緒かよ……つーか秋山と真鍋いるし…）
とりあえず一階に到着。

「あれ？2組って二階だっけ？」

「ええ」

「いかにも上級生って感じだよな！」

（秋山に対しての嫌味というかなんと言うか……）

「じゃあな～、一階2年1組の秋山さん♪」

もろ嫌味前回な言葉で階段を上がっていく田井中たち。
そこでふと一人が振り向く。

「あれ？きょう君来ないの？」

「……来ないの？って俺、一組だぞ」

「……そ、そんなぁ～…きょう君違うクラスなの？……」

「あぁ…そうなるな」

唯はかなり落ち込む…そして泣きそうになる。
その程度で泣くなとも思うだろうが、唯は泣くだろう。
そして階段を下りてきて……

ギュッ

「おい、何故抱きつく」

いきなり真正面から抱きついてきた。
つーか階段のところで田井中、横で雄介が「ヒュ～♪」と、ニヤケながら言う。
琴吹は笑顔でずっとこっちを見る。秋山は何故かうんうん頷いている。

「きょう君が別のクラスやだぁ～…」

「ヤダって言われてもな……」

「ほら～唯行くぞ～」

「田井中が呼んでるぞ、ほら行って来い」

それでも離さない。

（仕方ない……）

「唯、少し耳貸せ」

「え?あ、うん」

ここは階段前の廊下、こんな人目に付きやすい場所でこんな事してるのを見られるのは致命的だ。
一番効果的なのは琴吹の持ってくる菓子なのだが明らかに持っている訳がない。
ここは一つ……

「(後でなんかしてやるから一旦離せ、ちなみに笑ってだけは無しな……)」

「ホントに!?やったぁ~!!約束だよきょう君!!」

「あぁ、だから行け…」

「うん!また後でね~!」

唯は元気よく田井中たちの方へ走って行き、階段を上がっていった。
とりあえず唯を離す事に成功。

「恭哉、お前何したんだ？」

「テメェには関係ねぇだろ、ほら行くぞ」

「教えてくれたっていいじゃねぇかよ～」

まぁ、そんなこんなで2年1組の教室へ。

「でも恭哉が一緒のクラスでよかった～…知り合いが誰もいなくなっちゃうと思ったよ…」

「澪ちゃん、俺は？」

「真鍋もいるケド？」

「本当か！？」

「澪、高嶺君」

すると噂をすれば影、真鍋が登場。

「よかった、唯とクラス離れちゃって知っている人がいるか心配だったの、これから
一年間よろしくね」

「うん、よろしく和」

「……あぁ」

「あの…俺の事忘れてません？」

「え？ああ、橘君もよろしくね」

「はい！よろしくお願いしまぁっ！！」

なんか笑顔の顔がウザかったので、デコに右ストレート。

「高嶺君は相変わらずね」

「……まぁな」

残念ながら雄介は話掛けないと気づかれないタイプなようで。
とりあえず地面に伸びているバカをほっといて始業式へ。

始業式が終了し、後は適当に担任の話を聞いて午前中の日程は終了。
階段を下り廊下を見ると新入部員獲得のため部活のチラシやプラカードを配って勧誘している
2、3年の連中だらけになっていた。

「バスケしませんか～」

「茶道部、楽しいですよ～」

「オカルト研よろしく～」

「卓球に興味ありますか？」

などなど、様々な部活が勧誘という名の戦争を繰り広げていた。
その中我ら軽音部はというと……

「わぁ～、もう人で一杯だぁ～」

「やっぱり大きい部は手際が違うわね～」

「感想を述べる場合かよ……」

完全に出遅れていた。いや、出遅れ過ぎていた。

「軽音部だからって甘く見んなよぉ～、澪！チラシは！？」

いや、別に甘く見てはいないとは思う。

「い、一応作ってきたけど……」

秋山は恥ずかしそうにチラシを田井中に渡した。俺も横から覗く。

（あ～……普通……）

「う～ん、なんか普通……」

秋山が作ったチラシは……

『バンドやりませんか』

の文字を中心として、ドラム・マイク・キーボード・ギターだかベースだか区別がつかない楽器、むしろチェロといっても過言ではないだろうイラストが描かれていた。

そして文字、イラスト、両方が小さいのでとても普通もとい地味なチラシになっていた。

「ズバリ！売りがない！」

「……売りがない」

「ガーンッ！！きょ、恭哉まで～……」

残念ながらこれでは軽音部のチラシと言えばチラシだが…正直分かりにくい。

「でも、軽音部の売りって？」

琴吹のもっともな意見を聞き考え込む我らが部長、田井中。
で、考え付いた答えは。

「例えば……お茶とお菓子はおかわり自由！！食っちゃ寝食っちゃ寝の軽音部！！」

「あぁ～、それいいかも！！」

「良くない！！」

「それもう軽音部じゃねぇだろ……」

「じゃあ他になんかあるか！？このままじゃインパクトないぞ！」

「なければ、付けるまでよ！」

田井中の肩に手を置いていきなり現れた山中。
こいつが考えることだ、ロクな事じゃないだろう。
しかしなんであろうと勧誘しないと始まらないのでやる事に。

―――――――――

「軽音部で～す…」

「明日、新観ライブがありま～す、是非来てくださいにゃ～♪」

「興味がある人は放課後、音楽準備室にどうぞ～ワンワンワンワン」

「美味しいお菓子もいっぱいあるよ～！コケェ～」

「……こいつらの隣はハズイ…」

結果。やはりロクな事じゃない。
山中は俺たちに着ぐるみを配った。

唯＝ニワトリ　　田井中＝イヌ　　秋山＝ロバ　　琴吹＝ネコ

ちなみにこの四人の関連性はブレーメンの音楽隊。
そして俺は……着てません。当たり前だ、あんな物は着れん。
その代わり俺が着ているのは……執事服。何でまたこれを……
いきなりだが何故この状況になったかを軽く話そう。（主に俺の服）
まず山中に…

「着ぐるみを着ろ」

と脅されていたが、断固拒否。

「じゃあこっちは」

と言われ、いつぞやに秋山に出したどこかの儀式の衣装を持ってきたが
無理とかそういう次元を超えている。

「しょうがないなぁ～…じゃあこれ」

といわれ持ってきたのが学園祭ライブで着ていたこの服だった。
まぁこれならさっきよりはマシか、と思いこれを着る事に。

唯と琴吹は着ぐるみを着るのを喜んでいたが、田井中と秋山は渋々着ていた。
そして今に至るわけである。

「ねぇねぇ澪ちゃん…」

「な、なに？」

「これって逆効果なんじゃ……」

「私も今思ってた……」

「いや、最初から気づけよ……」

すると聞き覚えがある声が俺たちの後ろを通った。
振り返ると楓と憂、中学の友達かどうか分からんがまぁ、女子と3人で歩いていた。
その姿に唯も気づいたのだろう。

「あ、憂だ！きょう君、楓ちゃんもいるよ！」

「あぁ、分かってる」

「行かないの？」

「行ったところでどうすりゃいいんだ……」

「じゃあ私行ってくるね～」

そう言って唯もとい奇妙なニワトリが腕もとい羽を振りながら走る。
その様子を遠目から見ていたが異様な光景だった。

（インパクトでかすぎ……）

唯は「憂〜！」と走りながら声をかけ、それに応じ「あ、おねえ…
……」と、振り返ったが
案の定3人をびびらせものすごいスピードで校舎に逃げられていた。
唯無念。
つーか楓をびびらすんじゃねぇ。

「あれ…なに？」

「さぁ……」

違う視点から見ていた下級生二人組みがいた。
その二人を目にしたロバがチラシを手に歩み寄り……

「軽音部です、興味があったら放課後…3階の音楽準備室に是非」

といってチラシを渡す。若干二人は引いていたが。

「梓、行くよ？」

「う、うん……」

梓と呼ばれるツインテールの少女は若干引きつつチラシを手に去っていった。
後にこのツインテールが軽音部に来る事とは誰しも思わないだろう…………

――――――――――――――――――――――――――――――

昼休みも終わりに近づいてきたので、勧誘は終了。部室へ戻った。

「はぁ……はぁ……」

「辛いばかりで…あんまり受け取って貰えなかったね……」

「明日のライブで取り返すしかない！」

「そうね～♪」

「何でお前だけ元気なんだ……」

着ぐるみ軍団の一人、琴吹以外の奴らは体力を消耗し疲れきっていたが、
琴吹のみ元気がやたらと有り余っていた。

（不死身かこいつは……）

そんな事を思っていると……

「あの～…この服も作ってみたんだけど～」

メイド服を持った山中が何食わぬ顔で登場。だが、その行為は今の唯たち（琴吹以外）にはイラっとくる言葉だったようで。

「さぁ午後の授業始まるぞぉ！」

田井中は山中の言葉を無視して怒り充分に言った。
つーわけで午後の授業へ。

――

前のバカが授業中、話掛けてくるのを聞いているフリをしてスルー。
その状態のまま放課後へ。

「……そしたらさぁ！……あれ？恭哉どこ行くんだ？」

「部室に決まってんだろ」

「じゃあ俺も行こー♪」

「テメェ関係ねぇだろ」

「良いじゃねぇか、さ！行こうじゃないか！！」

「何こいつテンション上がってんだよ……」

「いや～久しぶりに行くからなぁ～♪」

「……」

「本当に久しぶ……っておい！置いてくなよ！」

訳分からんほどにテンションが上がって、クラスの連中から軽く冷たい目で見られているバカを放っておいて俺は部室への道を歩き出した。

第十六話　2年生突入！！そして部員勧誘　高校2度目の春。（後書き）

え～…最初にも言った通り梓は次回または次々回です。
とりあえず次回の話は今日また投稿します！

初の2連続投稿、今後もよろしくお願いします。

感想等ございましたらお願いします！！

ラルクでした！！！

第十七話　新観ライブ！そして新入部員！！（前書き）

どーもラルクです！！

初一日2話投稿！！つっても時間差がありますが……

え～では！第十七話、どうぞ！

第十七話　新観ライブ！そして新入部員！！

部室に着いた俺たちは異様な光景を目にした。

「いらっしゃいませ～♪」

「……何故お前らメイド服？」

部室に入るといきなり唯がメイド服で登場。
それだけじゃなく田井中と琴吹も。だが何故か秋山だけいない。

「ウォ～ッ！！！！天国ですか！？ここは天国でぶはぁっ！！！！」

とりあえず隣にいた「天国ですか」を連呼し始めた天国少年を本当の天国へと逝かせてあげた。

「逝ってませんけども！？」

「まだ生きてたのか……」

「生きてるに決まってんだろ！！高校卒業までは生きるよ！！」

（後2年で死ぬんかい……）

「唯ちゃん可愛いね！！」

とか言って唯の肩に手を乗せようとしたので……

「唯に触るな」

「ギャアスッ！」

脇腹を蹴ったら「ギャアスッ！」という天国少年特有の声を出して倒れた。

「ユウ君大丈夫!?」

「だ、大丈夫だよ唯ちゃん……初めて呼んでくれたね…ユウ君っていいあだ名…だ…よ…」

「いや～、雄介君よりユウ君の方が良いかなと思ってぇ～」

この状況であだ名をつける唯。恐るべし……

「でも、本当にユウ君大丈夫なの?きょう君」

「大丈夫だ、生命力だけは人並み以上にはある……さずが天国少年」

「そうなんだ、ところできょう君、天国少年って？」

「……いや、こっちの話だ」

思わず出てしまった……天国少年というフレーズが。

「それよりきょう君！似合うかな？」

唯は俺の前で緩やかにターンし満面の笑み。

「似合ってるぞ……」

「ホント！？ありがと～、きょう君！」

すると、琴吹が唯と場所をチェンジ。

「あの～…私はどうでしょうか？」

何故か琴吹まで。前で手を組み微笑む。

「……」

言葉に出さず、手でＯＫサイン。

「やったぁ～♪ありがとう恭哉君♪」

「じゃあ私はどうだ～！！」

田井中が場所チェンジ。腰に手を置き笑う。

「……」

言葉に出さず、冷たい目で見る。

「キョウに聞いた私がバカだったよ～！」

（逆切れか…勝手に自分でやったくせに）

「雄介～どうだ？私のメイド姿！」

「……」

田井中が話しかけるが天国少年はピクリとも動かない。

残念田井中。

「わぁ～ん！私だけか～！！」

（うるさい…）

ゴンッ

「イタッ！」

「……静かにしろ」

まぁ、その後天国少年は現世へと復活をとげ、そのまま脇腹を押さえ部室からヨロヨロ出ていった。
雄介が出て行った後、俺は琴吹の紅茶を堪能し、唯はお菓子を頬張る、田井中は長椅子で雑誌を読む
琴吹はトレーを持ってニコニコと笑っている。
のほほん空気を充分に漂わせていた時、ドアのノック音が聞こえ誰かが入ってきた。

「すいませ～ん」

入ってきたのは憂と短いツインテールの女子の二人だった。
そこで唯がお出迎え。

「いらっしゃいませ～」

「お、お姉ちゃん！？」

そりゃあ驚くだろう、軽音部と思って部室に来るや否やいきなりメイドが登場。
ましてはそのメイドが自分の姉だ。

「あ、憂ちゃん！」

「もしかして軽音部に！？」

「……うまい」

とりあえず紅茶を堪能。

「律さんにムギさんまで！」

するといきなり俺の横の物置のドアが思いっきり開き、中から勢いよく出てきたのは……

「助けてぇ～！！！！！！！」

秋山だった、しかも何かを企んでいる顔の山中と共に。
そのまま山中は右手に秋山、左手にメイド服を持ってどこかへ走り去っていった。

「何やってんだあいつら……」

「さ～入って入って！歓迎するよ～」

「い、いや～あの～…その前に今のは～……」

「まぁ、気にするな」

その後はとりあえず憂と短いツインテール少女を椅子に座らせた。

「クリスマス以来、さわちゃん先生服着せるの癖になっちゃったみたいでさぁ～」

「そうなんだ～…あ、私のお姉ちゃんで唯です」

「平沢唯です、ちょっと待っててね？今お茶持ってくるから」

「唯、気をつけろよ」

「大丈夫！任せて！ムギちゃん、これ持ってけばいいんだよね？」

「熱いから気をつけてね？」

「アッチッ！きょう君～あちゅい～…」

「だから気をつけろって言ったろ……」

「お、お姉ちゃん！？」

そして唯はティーカップの乗ったトレーをガタガタ揺らしながらやってきた。
めっちゃ危ない。

「わ、わわわわわ！！」

「……っと、大丈夫か？俺が持ってくから」

危なっかしくて見てられず、揺れているトレーを手で止め片手で机に運ぶ。

「ありがと～、よく片手で持てるね？」

「まず両手で持てないお前がおかしい……」

「ひどいよ～…ぶぅ～」

「はぁ…唯ったら…」

その後は短いツインテール少女に憂から自己紹介。

「この人は律さん」

「どもー、部長の田井中律です」

「ちょっと律!!」

いきなり誰かが入ってきた。
そんな時に短いツインは……

「カッコいい人だね」

感想を述べる。
つーか入ってきた人は真鍋だった。

「講堂の使用申請書、また出してないでしょ！明日ライブできなくなっちゃうわよ！？」

（こいつはまた……）

「あ、うぅ…そうだった……」

「全く…何度言えば分かるの？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

という訳で次、琴吹。
なんかヤケクソに……

「この人が琴吹紬さん」

「初めまして～」

「どうもです」

「騒がしくてゴメンね～」

「は！ま、待て待て！」

隣で修羅場が展開されているのにもかかわらず短いツインは……

「優しそうな人だね」

感想を述べる。

「だいたいその格好は何よ！？」

何故か田井中の服に指を刺しながら詰め寄る真鍋。

（そこまでせんでもいいだろ……）

「わ、私に言うな～！」

その展開を見た琴吹は顔を赤くし、頬に手を当て。

「りっちゃんったら……」

（妄想の展開力がハンパねぇ気がする……）

次～……俺。

ちょっとヤケクソに。

「えっと、この人が恭哉さん」

「……高嶺恭哉だ」

「……高嶺？どっかで聞いた事があるような……」

「恭哉さんは楓ちゃんのお兄さんだよ？」

「あーっ！楓のお兄さん！！」

いきなりうるせぇ……

「……ところで憂、楓はどうした」

「へ？あ、楓ちゃんならご飯のお買い物とかで先に帰りましたけど……」

「そうか、つーかなんで動揺してるみたいになってんだよ……」

「いえ、恭哉さんがいきなり名前で呼んだので……」

「あぁ……悪い、ダメだったか？」

「い、いえ！そんな事はありません！」

「そうか」

「きょう君～！来て～！」

（そんなデカイ声出さんでも聞こえるわ……）

呼ばれたので仕方なく行く事に。
ここで短いツインの感想タイム。

「なんか凄そうな人だね」

「うん、凄い人だよ！」

（凄そうって何だよ……）

「お姉ちゃんにギター教えたり、家事全般なんでもできるし、凄い人なんだ！」

「へぇ～…人は見かけによらないね…」

「じゅ、純ちゃん！」

（もろ聞こえてるぞ、ツイン団子…）

少々ムカついたため、あだ名をツイン団子に。

「え、え～と！じゃあ、最後が…あれ？」

「秋山ならそこにいるぞ」

俺はドアの方へ指をさす。
そこにはメイド服を身に包んだ秋山がモジモジしながら立っていた。

「あの人？」

「うん！秋山澪さん、とっても恥ずかしがり屋さんなの」

「ん？何だ澪、そんなところにいないで早く入って来いよ～」

「嫌、笑うもん……」

「笑いませんよ、似合ってますし」

「ほ、本当？」

秋山は隠れていたドアの後ろからちょっと照れながらススススッっと出てきた。
その姿を見た憂とツイン団子が声を合わせて……

「「かわいい～♪」」

だそうだ。そして何故か隣には真剣な眼差しで新入生を見ている山中の姿が。

（つーかいつの間にいたんだな……）

「あの～この人は……」

（明らかに先生だろ……）

「さわ子先生、軽音部の顧問…」

「あなた達…」

「「はい！！」」

「着てみな～い♪」

「「結構です」」

「もう山中帰れ…」

「何よ！もう……」

とりあえず悪影響を与えかねない山中を追い返す。

「おい、演奏はしないのか」

軽音部の見学に来た筈の新入生組みにお茶だの菓子を食べさせメイド服という何ら関係の無いものを見せられただけでは意味がないだろう。

「そうだな、よーし！演奏の準備をするぞぉー！」

田井中は今まで読んでいた雑誌を投げ捨て、ヤル気を出す。

「「「おーっ！」」」

俺はストラトを構えが、他の奴らはというと……

「澪ちゃん、きょう君、ストラップが肩に……」

（……早く着替えてくればいいだろ…）

「うん、私も……」

（だから、着替えて来い……）

「裾が邪魔……」

（着替えて来い……）

「袖が……あ、大丈夫か…」

（……）

琴吹も言ってみるがあまり関係がなかった。
ちなみに俺は制服だ、問題はない。

「あーっ！！もう、やりづらい！！」

（……いい加減にしろ）

徐々にムカついてきた恭哉。

「誰だ！メイド服なんて言ったの！！」

プチッ…

「…愚痴言ってる暇があんなら、テメェらさっさと着替えて来いや！！！」

「「「「す、すいませんでした～っ！！！！」」」」

俺に怒鳴られた４人組は逃げるように奥にある物置部屋に。

「……ハァ」

（何がしたいんだ……）

「ははは……人は見かけによるのかな…」

「じゅ、純ちゃん…今のはお姉ちゃんたちが…」

（聞こえるぞツイン団子……）

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――

「結局ジャージになりました♪」

「制服にすればいいだろ………」

着替えて出てきた４人は何故だかジャージを身にまとっていた。

「ほーい！行くぞーっ！」

「あいよ～」

田井中は体操選手のように右手を上げ、腰を曲げた唯の方へ走って行き。

ダッダッ

「とうっ！」

田井中が唯の腰に手をあて、飛ぶ。いわゆる馬跳びだ。
何のためにやったのかは知らないが……しょーもない。

ダンッ

「次！ムギだぞ！」

「はい！」

ゴンッ

「何してんだ！」

「……ハァ」

呆れてため息を漏らす俺。
まぁ、とりあえず各自位置へ移動。

「じゃあ始めるぞ～」

「うん」

田井中が号令を掛けると唯が返事をし、ギターを軽くストロークする。

「あっ！カッコいい！！」

「カッコいいけど、ジャージ…」

まぁ、そんな感想はさておき『ふわふわ時間（タイム）』を弾く事に。

……演奏中……

…ジャ～ン……♪

演奏が終了し、一息つく。

「なんか…ちゃんと演奏見せてあげられなくて、ごめんね～」

唯は後頭部に手を当て、申し訳なさそうに言った。

「いつもは真面目にやってるから」

「そうかなぁ？」

「そうだろ！」

（そうでもねぇだろ……）

「とにかく明日、ライブで４曲やるから聞きに来て♪」

「是非、清き一票を！！」

（選挙じゃねぇ……）

「は、はぁ……」

ツイン団子は視線を下に向け、微妙な表情をする。

「じゃ、じゃあそろそろ行こっか～」

ツイン団子の様子をみた憂は少し焦った顔をして言った。

「お姉ちゃん、先に帰ってるね？」

「ほいほ～い」

ツイン団子は一礼して憂と一緒に部室を出て行った。

（入部の望みは薄いな……）

こう思った俺は明日の新観ライブにかけるしかないと感じた。

翌日、新観ライブ当日。

授業終了後すぐに部室へ行き、楽器や機材を講堂に運び終えた俺たちは
舞台袖で待機をしていた。

「うわ！人でいっぱい……」

当たり前の事を言う秋山。

「そりゃ、新入生歓迎会だからな」

「いつも通りやればいいだけ」

まぁ、秋山さえ大丈夫ならきっと心配無くいけるだろう。

「で、で、で、でも……」

「結局緊張するんだな……」

すると、秋山と違い緊張感ゼロの少女が何かを見つけた。

「りっちゃん！そこで百円拾った！」

「お前はもっと緊張しろ……」

「唯、緊張感を持て……」

本番前はこんなのだが、いざ本番になれば唯が本番に強いという事が分かる。

「え〜と…ふわふわ時間（タイム）、カレーのちライス、私の恋はホッチキス、ふでペンボールペン」

今回俺たちが演奏する曲目は

1：ふわふわ時間（タイム）

2：カレーのちライス

3：私の恋はホッチキス

4：ふでペンボールペン

この4曲だ。

「相変わらず澪のセンスは独特だよな〜」

「そう？」

「ねえねえ、ボーカル全部私でいいの？」

「そういや決めてなかったな…そうだな、澪も一曲ぐらいやった方がいいんじゃないか？」

「えっ！？」

「ほら！ハイタッチ！」

「ヤダ！絶対イヤ！」

「澪ちゃん…」

「でも、前のライブ評判よかったし！」

「ヤダ！」

「あんなアクシデントもう起こらないって」

「ヤダ！！」

「澪ちゃ「ヤダ！！」…」

そんな状態を目にした唯はニヤケ……

「ラーメンだけじゃ？」

「ヤダ！」

ここで琴吹も。

「餃子も付かなきゃ？」

「ヤダ！！」

「……すっごい拒否反応だな、おい」

「……ハァ」

俺は黙って見ていたのだが、ため息を放出。

「しょうがないわね～」

すると、舞台袖から山中が登場。

「全部唯ちゃんでいいんじゃない？」

まぁ、この状態で秋山にやれという方が無理だ。

『次は軽音楽部によるクラブ紹介の演奏です』

始まりのアナウンスが入る。

「あ、出番だ」

「頑張ってね？最後にみんなに一つだけ言っておく事があるわ……」

珍しく山中が俺たちに激励の言葉を……

「……制服も意外といい！！」

かける訳も無く、こんな時にそんな事を言う。

「早く舞台袖に下がってください……」

「山中は早くどっかに行け……」

とりあえず『ふわふわ時間（タイム）』と『カレーのちライス』を演奏し終えた。

出来は良いと言っていいだろう。そして、唯のＭＣに。

「どうも…軽音部です！えと、新入生のみなさん！ご入学おめでとうございます！」

唯のＭＣを袖をまくり、水を飲みながら見る。
特に問題はなさそうだ。

「私、最初軽音部って聞いて、軽～い音楽だと思ってたんですよ～」

観客席から笑いが起こる。

「それでカスタネットが出来ればな～…なんて軽い気持ちで入部しました」

（俺は強制的に入部させられたんだが……）

「なのでみなさんもそんな感じで、気軽に入部してください」

そこでＭＣが終了したかと思いストラトを構えるが……

「あ、でも～カスタネットは難しいってさわちゃん先生が言ってました～」

始まらない……

「では、次の曲」

まぁ、今度こそは始まるのでストラトを構える。

「あ、さわちゃんって言うのは音楽の先生のあだ名……」

ダダダンッ！！

田井中がここでドラムを叩く。

「コミックバンドか！！」

「ゴメンゴメン」

（何やってんだか……）

「じゃあ次の曲、私の恋はホッチキス！」

……演奏中……

出だしが肝心なこの曲。唯はしっかり弾けていた。

（この調子なら大丈夫だな……）

そう思っていた矢先、

「あっ、歌詞忘れたぁ～…」

小声でそう呟いた唯、仕方なく俺は秋山に

「（歌え！お前しか歌詞覚えてねぇ！）」

「（で、でも！）」

「（とにかく歌え、命令だ）」

「（う、うぅ…）」

『…んでなんだろう　気になる夜君への……』

（危ねぇ……）

秋山は若干照れながら歌いだす。

そこからは立て直した。

……演奏中……

（どうなる事かと思ったが……安心だ）

新観ライブが終了し、その後は新入部員がくるのを部室で待っていた。

「う～ん…誰も来ないなぁ…」

と、田井中。

「ライブうまくいったと思ったのに！」

と、唯。

「やっぱり軽音部って人気ないのかな…？」

と、秋山。

「あの～、みなさん…そんな目で見てたら、来るものも来ないんじゃ…」

と、琴吹。

「お前ら、少しは落ち着け」

と、俺。

「だって、折角ライブ盛り上がったのに……」

「一人も来ないなんて、ありえないっ！」

「あっ！でも、もしかして私が失敗したから！？」

「やっぱり、部員が少ないのがいけないのかなぁ……」

「「「ハァ……」」」

「お茶入りましたよ♪」

「だから落ち着け」

とりあえず全員椅子に座る。

「こうなったら、憂ちゃんを捕まえてくるしかないか」

「虫じゃないんだぞ」

「突っ込みに気力がないぞ、秋山」

「きょう君、新入部員はいるかなぁ？」

「知らん…来ると信じて待ってろ」

「……うん」

そんなマイナスな会話をしていたら……

ガチャ

「あの～…」

誰かが入ってきた。
しかもどこかで見たことのあるツインテール。

「はい？」

「入部希望……なんですけど…」

「「「「……」」」」

全員が黙った。
そこで唯が声を出した。

「へ？今なんと？」

「入部希望……」

その言葉を聞いた瞬間、全員が立ち上がった。

「待ってたら来たな……」

田井中はツインテールのところへ走って行き……

「確保ーっ！！！！！」

「キャアアァーッ！！！！！！」

思いっきり飛び掛った。

「唯、よかったな」

「うん！」

「澪ちゃん！やったわ！！」

「うん！やった！」

各自嬉しさを胸に感じていた。

（ふぅ……）

俺は嬉しさ半面安心感があった。
こうして軽音部に新入部員が入り、俺らの後輩が出来た。

第十七話　新観ライブ！そして新入部員！！（後書き）

え～、次回、本当に梓が登場！！やっと個人名がでてきます。
今後もよろしくお願いします！！

感想等ございましたらよろしくお願いします！！

ではまた次回お会いしましょう！

ラルクでした！！

第十八話　中野梓編～軽音部の危機～　（前編）（前書き）

どーも！お久しぶりです、ラルクです！！今回は

ここで長々とお話しするのはアレなので第十八話、中野梓編前編どうぞ！！

文章力がクソですが…

第十八話　中野梓編～軽音部の危機～（前編）

放課後、新観ライブが終わりのんびりとしていた所に新入部員登場。
その新入部員に飛び掛った田井中。

「……離れろ」

「歓迎したんだろ～…」

「……歓迎のしかたが激しすぎだ」

ツインテールにへばり付いていたデコを剥がす。

「悪いな……」

「い、いえ…」

立ち上がったツインテールを見て……

（チビだな、こいつ……）

と、思ってしまった。
まぁ、そんな事はどうでもいいが……

「じゃあ、改めて…ようこそ！軽音部へ！！」

さっきの行為を無かったかのように堂々と言う。

「ほら！こっちこっち！」

唯はツインテールの手をとり、席へと誘導。
俺は長椅子に座る。

「お名前は何ていうの？」

「あ…中野です」

と、琴吹が早速質問。この質問を先頭に唯、田井中という援軍が加勢する。

「パートは何やってんの？」

「あ…えっと～…」

「好きな食べ物は？」

「中学校どこだった？」

「あ…えっと、その…」

3人による攻撃をまともに受ける。

(つーか話聞いてやれよ……)

見兼ねた秋山も……

「落ち着けお前ら」

まぁ、当然の突っ込み。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

「えっと…1年2組の中野梓（なかのあずさ）と言います」

さっきできなかった自己紹介を改めて始める。
それに対し俺らも自己紹介。

「私は部長の田井中律！」

「私は秋山澪、よろしくな」

「琴吹紬です」

「平沢唯だよ！！」

「高嶺恭哉だ」

何故かやけにテンション高く自己紹介をする唯。

「あっ、副部長さんはきょう君だよ！」

そして俺の紹介まで。

「みなさん、よろしくお願いします」

中野は礼儀正しく俺たちに礼をした。
憂も礼儀正しいが、中野も礼儀正しい。
あいつだけだな、俺以外には礼儀正しかった……ツイン団子。
まぁ、この話は良いとして一つ疑問。

「で、お前はパートは何だ？」

軽音部に来たからには何かしら出来るのであろう。

それを知るために聞いてみる。

「あ、パートはギターを少し…」

（この軽音部にギターが3人も……）

「あっ！唯とキョウと一緒だな！」

「よろしくお願いします、唯先輩と「唯先輩…」…え？」

「唯先輩…先輩…先輩…」

どうやら唯は先輩と呼ばれた事に感動しているようだ。

「お～い、帰ってこ～い」

まぁ、感動というか……とりあえずどこかへ飛んでいった。
いわゆる、琴吹の妄想展開状態に近い状態になっていた。

「あ、あの…恭哉先輩…」

「…ほっとけば直る」

「……そうですか」

その後、遠くの方へ飛んで行っていた唯が帰ってきて、挨拶は一通り終了。
そこで唯がギターを持ってきて。

「とりあえず、なんか弾いて見せて～」

といって、自分のレスポールを渡す。

ギターを受け取った中野はストラップを肩にかける。

「まだ、初心者なので下手ですけど……」

「大丈夫！私が教えてあげるから！」

「お、早くも先輩風吹かせてるな！」

「お前は教えられる身だろうが……」

「…確かにそうかもな…」

「ん？あぁ、悪い…始めてくれ」

いつ始めていいのかとキョロキョロしていた中野に合図を出す。

「そ、それじゃあ…」

中野はレスポールを構え、軽くストロークする。
そして……

♪♪♪～～…

レスポールを弾く。

「う、うまい…」

「私より断然……」

（断然上手い…少なくとも唯よりは）

ジャラ〜ン…

そして弾き終える。

「あ、あれ？」

予想以上に上手かった中野の演奏に唖然としている４人を見て。
あ、ちなみに俺は長椅子から見ている。

「ゴメンなさい！やっぱり聞き苦しかったですよね…」

何を言い出すかと思えば…

「ああ、いや…そういうわけじゃ……」

「聞き苦しいとか言ってっけど…むしろ、スゲェ上手いじゃねぇか」

「で、でも…ライブの時の唯先輩や恭哉先輩に比べたら…」

「いや、すごく上手いぞ梓！」

「うん、梓ちゃん上手！」

「そ、そうですか？……ありがとうございます」

嬉しそうな顔をする中野。

「まぁ、そんだけギター弾けるなら文句の一欠けらもねぇ…」

「ありがとうございます、恭哉先輩！」

でも、一人見栄を張る奴が。

「ま、まだまだだねっ！！」

「「「えぇっ！！」」」

「ハァ……」

そう、先輩の意地をかけ見栄を張る唯。

「（ちょっ唯！おい！いつまで見栄張ってるんだよ！）」

「おい、中野を見ろ」

俺はこそこそと話している唯と田井中に指示。

「「えっ……あっ…」」

「わぁ～♪♪」

中野は眼を輝かせて唯を見る。

「私、もう一度唯先輩のギターが聞きたいです！！」

そしてまさかの……

「恭哉先輩のギターも聞きたいです！！」

とばっちりを受ける事に。

「……分かった、準備する間唯、お前が弾いとけ」

「えっ！私！？」

「お前以外に誰がいる……」

「あ～…え～と～…ラ、ライブでぎっくり腰になったから、また今度ね…」

「唯、それは苦しいぞ」

「だ、だからきょう君がやるよ～」

唯は俺の方を指差し言う。

まぁ、最初からやるつもりだったが。

「じゃあ、恭哉先輩！お願いできますか！？」

「……あぁ」

「ありがとうございます！！…わぁ～♪」

眼を輝かせて俺を見る。
まるでその輝きは某非現実的格闘漫画の天〇飯の使う太〇拳の様なモノだった。

（それじゃあ、俺たちの目が潰れてるだろ……）

「じゃあやるぞ……ふぅ～」

一呼吸をつき、

♪♪♪～……

とりあえず適当にギターを弾く。

「わぁ～♪上手いです！！すっごく上手いです！！」

「なんつーか…相変わらず上手いよな～…」

「そうだな」

「上手いわね～♪」

「さずがきょう君だね！！」

口々から聞こえてくるが、無視。
３０秒ぐらい弾き、終了させる。

ジャ～ン…♪

パチパチパチパチッ

余韻を残し、消えそうになったところに軽く弦に触れて音を消す。
それと同時に中野から拍手が送られる。

「やっぱり恭哉先輩はとても上手いです！！すごいです！」

「……そりゃどうも」

何故かテンションが斜め右上に急上昇している中野に
若干押されつつ礼を言う。

「唯～、お前が演奏しないから憧れの的が唯からキョウに変わったぞ～」

「そ、そんな！！」

「じゃあもっと練習して上手くなれ……」

「了解しました！きょう君殿！」

（意味分からん……）

「とにかく入部してくれるって事でいいんだよね？」

「はい！新観ライブのみなさんの演奏を聞いて感動しました！！」

（まぁ、唯が歌詞を忘れるというハプニングがあったが……）

「これからよろしくお願いします！！」

またまた礼儀正しく礼をする中野。

「あぅ～、眩し過ぎて直視できませんっ！」

訳分からない発言に田井中は、お前少し黙ってろ、という顔で唯を見る。
仕方なく俺が。

「唯は少し黙れ」

「はっ！きょう君がヒドイ子に！」

唯は『そんな～』と頭を抱えながら床にまた突っ伏した。
なんやねん……

「あ、そうだ…入部届けです」

「確かに受け取ったから、明日からよろしくね」

「はい、それじゃあ失礼します」

中野はペコっと頭を下げて部室を後にした。

「あ！私…どうしよう！」

中野がいなくなった途端慌てる唯。

「「「練習しとけ」」」

俺と田井中と秋山で冷たく言い放つ。

――

翌日の放課後。

俺はすでに定位置となった長椅子に座り、ギターの調整。
するとドアが開き中野が登場。

「こんにちわ～」

「おぉ、元気いっぱいだな！」

「はい！放課後が待ち遠しかったです！」

（練習はほとんどシネェケド……）

「それじゃあ、早速！！」

「練習ですか！？」

「お茶にするか……」

「えぇ！」

（これで練習するかなんて田井中が言ったら、むしろ奇跡に近いぞ……）

「梓ちゃんもどうぞ♪」

「あ、あの～…音楽室でこんな事して大丈夫なんですか？」

「大丈夫、大丈夫！！」

（あ～…紅茶…）

「あの～…恭哉先輩」

「ん？なんだ」

「本当に大丈夫なんですか？」

「気にするな……おい琴吹、紅茶」

「は～い♪」

「せ、先輩まで……」

ガチャッ

ドアが開き山中が入ってきた。
そのまま席に座る。

「あの…あの！これは……」

軽音部に来てまだ初日。中野はこんなティータイムをやっている事が先生に怒られると思ったのだろう、必死に弁解しようとしていた。
まぁ、怒られる訳がないのだが……

「私ミルクティーね」

「えぇっ…」

ほらな………

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

「顧問の山中さわ子です、よろしくね♪」

「よ、よろしくお願いします…」

軽い挨拶が終わる。

「お菓子もどうぞ～」

「今日もおいしそ～♪」

（あぁ～眠い……）

「あれ？きょう君食べないの？」

「あぁ…俺の分まで食っていいぞ」

「やった～♪ありがとう♪」

「あ～！唯いいなぁ～…」

「いいでしょ♪」

（……軽く寝るか…）

「どこ行くの？」

「……寝る」

「キョウ寝るのかよ！」

「……悪いか」

言葉を返しつつ長椅子に寝転がり、片腕を枕にして寝る。
そのまま意識は徐々にブラックアウトした。

……

……

……

…

「うるさぁーいっ！！！」

「……あ？人が寝てるのにうるせぇな…」

状況が分からんので声がした方へ向くと
ギターを持って今にも泣きそうになっている中野。
その中野向かって怒鳴り声を上げたであろう山中。

（……山中のやつ、折角来た新入部員を退部させる気か…）

「さわちゃんのアホーッ！！！」

「だって…静かにお茶したかったんだもん…」

「言い方ってもんがあるだろ」

すると、秋山が席を立ちしゃがみ込んですすり泣いている中野の元へ行き頭を撫でる。

「ごめんな、あの先生ちょっと変なの」

「おい」

「変なのは事実だろ…」

「恭哉君…ひどいわ…」

（……仕方ねぇだろ）

「あ、きょう君おはよー」

「……あぁ」

（なんか泣きそうになってやがる……）

「気にしないでね？」

「さぁ、ケーキ食べよう～」

「ティータイムがうちの売りだから」

「……売りにするな」

「うぅぅ…」

「あ？」

「……ぅぅ…」

体を震わせて今にも泣きそうなのか、それともキレそうなのか…
よく分からない声を出し始めた中野。

「あ、梓ちゃん？」

「泣くか…あるいはキレるぞ」

「え？」

中野の状態を見ながら言うと琴吹がこっちに向く。
それと同時に……

「こんなんじゃダメですーっ！！」

手を上下にバタバタと動かし中野がキレた。

「うわっ！キレた！」

「……キレたか」

（これで軽音部の裏がばれたな……）

さぁ、これから軽い『ミス中野のお説教タイム！！』が始まるよ♪

「みなさん！やる気が感じられないです！！」

「え…いや～…新観終わった後だったし…」

「そんなの関係ありません！！」

（……正論だな）

「音楽室を私物化するのもよくないと思います！！」

（……ここは準備室だぞ、でも正論だな）

「ティーセットは全部撤去すべきです！！」

（……これまた正論だな）

「それだけは勘弁してぇ～」

「何で先生が言うんですかっ！！」

（……これが一番の正論だ）

「それに！部長である律先輩がしっかりしなくちゃダメじゃないですか！！」

「いや、それはだな…」

（……もう全員タジタジだな）

「恭哉先輩はどう思いますか！！」

「……俺？」

「はい！」

「……まぁ、確かに中野の言う事は正論ではある」

「そうですよね！恭哉先輩もこう言ってるじゃないですか！！」

「いや～！恭哉君まで～…」

「しがみ付くな山中」

カサカサとゴキブリのように俺の元へ来た、ゴキ中を振り払う。

「ま、まぁ…とにかく落ち着いて…」

「これが落ち着いていられますか～っ！！」

（ん？あいつ何してんだ？）

中野の背後から忍者の如く気配を消して近づいていく唯。
そしてそのまま中野を…

ギュッ

優しく抱きしめた。

「いい子、いい子」

「そんな事で治まるはずが…」

「ふわぁ～♪」

「おさまったーっ！」

「……なんでやねん」

まるでエサ（ケーキ）を与えられた腹ペコの犬（唯）のような簡単な治まり方だった。
これにて『ミス中野のお説教タイム！！』が終了となった。

「ふわぁ～♪」

後ろには琴吹がどこかへと旅立っていた。

（……こいつもか）

「ムギまで！？」

「……訳分からん」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「取り乱してすいませんでした…」

深々と頭を下げ俺たちに謝る中野。

「ううん、全然気にしてないから」

「えっ…それはそれで…」

「まぁ、謝る事もねぇだろ……中野の言う事も正しい」

「そうだな、梓の言う事も一理あるよ」

（一理って…全体的だと思うが……）

「私たちももっとやる気出していかないと！」

「……俺はやってるんだが」

（……ちょくちょく寝てるけどな）

「分かりましたね！？」

秋山は唯、田井中、琴吹、山中に向かって叱咤する。
その叱る姿を見て眼を輝かせる中野。

「「「「はーい…」」」」

渋々返事をする4人。

「……あ」

（……忘れてた）

「……おい中野」

「はい」

「……これ」

俺は中に何も入っていないカバンから楽譜をだした。

「楽譜…ですか？」

「そうだ、俺たちの曲の楽譜だ…とりあえず覚えて貰わんと始まらない」

「……はいっ！」

「恭哉、作ったんだ」

「……あぁ、一応お前のパートもあるが…どういう曲なのかってのを知るのもいいし…
まぁそこの所はお前に任せるが……」

「分かりました、自分のやりやすい方でやります」

「……そうしてくれ」

俺の仮定だが…もし、ティータイム状態が続いていくとヘタしたら中野が退部する…
という可能性が無いとも限らない。
事実、俺たちの裏の活動を見て怒った。これがまだ決定的とまでは行かないが
今後もしかしたら…があるかもしれない。
とりあえず、そんな事態は避けたいがため……

（少なくとも俺だけでも練習をしないとな……）

数日後

現在部室で『俺は』練習中である。
今部室にいるのは唯と田井中と琴吹。

「こんにちは～…」

こんな状況に部室に来た中野。
呆れた様な眼でティータイムを楽しんでいる先輩たちを見ている。

「……ハァ」

「い、今から練習するところだったんだよ！本当だよ！」

唯はギターを持って弾くが全く力が入らない。

「やっぱりケーキを食べないと力がでないよ～…」

「はい、唯ちゃん」

「ん？あ～ん…おぉ！」

（……ケーキで復活するのかよ）

「あ、上手い！」

「梓ちゃんも食べてみなよ……美味しいよ？」

ケーキを何故か食べさせようとする唯。

「はい、あーん……ほれ…」

中野は唯に押され仕方なく食べる。

「あ、おいし…」

「ん？何だって？」

「お、惜しいって言ったんです！！」

（惜しいって何がだよ……）

なんとも苦しい誤魔化し方。

「ん～…気に入らなかったか…」

唯が呟くと中野はケーキを凝視。
それに気がついた唯は中野にケーキを差し出す。
中野の表情が一気に明るくなった。反対に唯がケーキを引っ込めると表情が一気に沈んだ。

その反応が実に面白かったんだろう、差し出しては引っ込め、差し出しては引っ込めを
ずっと繰り返し中野で遊んでいた。
最終的には中野の砦は陥落しティータイムへと誘われた。

（お前は……）

「みんな、練習頑張ってる～！？」

ドアが開いて現れたのは珍しく顧問らしい事を言っている山中。

「……無駄だ」

「って、食べてるじゃんっ！！」

その後は軽音部メンバー全員でティータイム。
途中、山中がおもむろに立ち上がりふと何を思ったか、私もうここで死んでもいい、と

訳分からん事を口走っていた。

「そういえば、結局なんでティーセット撤去しなかったの？」

「そ、それは……な、何でもかんでも否定するのはダメだと思って…」

「「「「へぇー…」」」」

「…それで納得するのかよ」

今思いついた素振りで言った事を何の疑いも無く納得する女子。

「梓ちゃんっていつ始めたのギター？」

「あ、えっと…小４くらいからです、親がジャズバンドをやってい

たのでその影響で」

「……初心者じゃねぇじゃん」

「恭哉先輩はギターを始めたきっかけは何ですか？」

「……暇つぶし」

「…ひ、暇つぶしですか？」

「…そうだ」

「暇つぶしでここまでギター上手くなったんですか…」

「…まぁ、今は暇つぶしじゃなく趣味の一環になってるが…」

「そうなんですか…なんか凄いですね…」

「…そうでもな「凄いだろ梓！さすが私が認めただけあるな！」…いつテメェに認められた」

勝手に田井中に認められる。

「違うよりっちゃん！！認めたのは私だよ！」

「…お前は余計な事を言うな」

「だってぇ～…」

（だってじゃねぇ……）

「…あの、唯先輩がギターを始めたきっかけって何ですか？」

「えっ！私！？」

明らかに誤魔化しているのが分かる唯の口笛。

「あ、あの…」

「いやー！とにかく新入部員が入ってよかった！」

誤魔化した、思いっきり……

そこでいきなり何かを思いついたのか山中が手をパンッと叩いた。

「そうそう、私梓ちゃんにプレゼント持ってきたんだった♪パンパカパ～ン♪」

そう言ってポケットから出したのは、猫耳。

「あの…これ、何ですか？」

「何って猫耳だけど？」

「いや、それは分かるんですけど…」

「…テメェは何でそんな物持ってるんだ」

「梓ちゃんのプレゼントだからよ♪」

「…もっとマシなのを選べなかったのか」

「だって～…梓ちゃん、猫耳が似合いそうだったから～」

（…ダメだこいつ）

「えっと……これをどうすれば…」

「…ふっふっふっふっふ」

山中は奇妙な声で中野の背後に付き、肩に手を乗せる。
正直変質者となんら変わりの無い山中。

「軽音部の儀式みたいな物だから」

「何の儀式ですかー！？」

（じゃあ、あの儀式衣装を着ればいいんじゃね？）

とか思ったが、もし言ったら本当にやり兼ねないので言うのをやめる。
そんな儀式が絶対に嫌なんだろう、肩に置かれていた山中の手を思い切り振りほどき距離をとる。

「もう、恥ずかしがり屋さんねぇ…」

「当たり前です!!先輩方だって恥ずかしいですよね!?」

と、聞くが残念ながら恥ずかしい訳も無く。

「どう？」

「似合う似合う～」

「さっすが、ムギだな～」

「あれ？私がおかしいの……？」

「…いや、あいつらがおかしいんだ」

一通り楽しんだ唯たちは中野に猫耳を託した。

「はい、次梓ちゃんの番」

（次…じゃねぇだろ）

猫耳を受け取った中野は猫耳に目をやり、前にいる唯たちを見て、後ろにいる山中を見て、
椅子に座って紅茶を平然と堪能している俺を見て、また猫耳に目を戻す。
そしてこの状況を打開できず仕方ないと思ったのか

「うぅ～…」

と、声を上げ…装着。

「「「「「おぉ～っ！！」」」」」

「すごく似合ってるよ！」

「私の目に狂いはなかったわ」

「「「「「軽音部へようこそ！」」」」」

「ここで！？」

「ん～、梓ちゃん可愛い～♪」

「ニャーって言ってみてニャーって！」

「ニ、ニャー…」

（…徐々に中野も汚染されてきたか）

「はっ！つい…」

「あだ名はあずにゃんで決定だね！！」

何とも言えないあだ名が付けられた中野。
その中野に諦めろという意味を込めて一つ大きく頷いておいた。

「じゃあ次はこの服よ、猫耳メイド！！」

「それは絶対嫌です！」

「似合うのに～」

「嫌です！！」

するといきなり秋山が何かを語りだした、と思ったら。

「梓、可愛いな…弄られる対象が私から梓に移ったのは助かったけど…でも、この寂しい気持ちは何」

（何してんだこいつ）

猫耳を付けた田井中が秋山の声真似をして思ってもみない事を言う。

「さっきから何言ってるのよ」

「…お前はアホか」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

今日の部活は中野を弄って遊ぶだけで終わった。
それだけで終わったという事は練習を一切していないという事になる。

「大丈夫？ 軽音部やっていけそう？」

「あ、えっと…こののんびりした空気がちょっとあれですけど、まぁ…」

中野の顔は無理矢理笑った感があり、その顔に何か引っかかったのか秋山は少し心配そうな顔をした。

（…このままだとマズイか）

「ねえあずにゃん、うちの近くに美味しいアイス屋さんがあるんだよ～」

「みんなで行きましょう♪」

「先輩が奢ってあげる！」

（…先輩風をそこで吹かすな）

「あ、はぁ…」

「違う違う、返事はニャーだよ」

「え…」

「はい、ニャー」

「ニ、ニャー」

（…何か対策を考えるか）

「…悪い、先に帰る」

「え、きょう君一緒に行かないの？」

「…あぁ」

「おいキョウ、折角梓も行くのに…」

「…用事がある、じゃあな…あ、中野、明日部室ちゃんと来いよ」

軽く意味ありげなことを言って唯たちと別れた。
用事、もちろん中野の事である。きっと秋山の事だろう多分俺の意図は掴んでいるだろう。
もし、このままの状態が続くようであれば本当に退部し兼ねない。

「……ハァ」

何かの対策など一つも浮かばず翌日。

「何？緊急会議って」

きっと中野のことだろう。

「新入部員が入ったのに、いつまでもマッタリダラダラしてたらマズイと思うんだよな」

「そ、そうなの？」

「このままじゃ梓、辞めてしまうかも知れないぞ！」

「あ、あずにゃんがいなくなるのはヤダよ！」

「仕方ない、何か梓の弱みでも」

ガンッ！

「…真面目に考えろ、辞めてもいいのか」

「…すいましぇん」

「ちゃんと活動計画を立てた方がいいんじゃないか？」

「活動計画？」

「確かにな～…じゃあまず、梓の歓迎会をするか！」

「いいねー」

「楽しそう♪」

「キョウは来れるのか？」

「…あぁ」

とりあえず了承しておいた、この雰囲気に慣れるということも大切な事の一つだ。
早く何かの策を見つけなければ……
だがそんな事は関係無く、中野の表情が曇っていく事はそう時間がかからなかった。

――――――――――――――――――――【遅かれ早かれその時間は来るかもしれない、改善が無ければ。だが…】

『分からなくなって…どうして軽音部に入ろうと思ったのか…』

――――――――――――――――――――【考える暇無く、その時間が来てしまった…】

――――――――――――――――――――【余り時間が残されていなかったようだ……】

第十八話　中野梓編～軽音部の危機～（前編）（後書き）

あずにゃんの話って難しい……
めちゃめちゃ更新が遅れた事、本当にすいませんでした！
何故かというとですね…高校から疲れて帰ってきて、気力が異常な程に
沸かなかったというのと、さっきの通り、話が難しいって事です。
…もっと頑張ります。

では、感想等ございましたらよろしくお願いします！！

また次回！できれば今月中、もしくは来月の頭ぐらいに予定してます。
今後もよろしくお願いします！

ラルクでした！

第十九話　中野梓編～軽音部の危機～　（後編）（前書き）

どうも！！本当にお久しぶりです！

今回の更新は試験勉強の間を見つけてちょこちょこ書いていました。

いやー…頑張った。

長い話はしないとして、大変長らくお待たせしました！

約一ヶ月間申し訳ありませんでした。

２５日からの試験に備えて勉強中ですが

頑張って書きました。

第十九話です！どうぞ！！

第十九話　中野梓編～軽音部の危機～　（後編）

田井中の提案により、中野の歓迎会をするべく
ボートやラッキーボートだのに乗れる、自然公園へ。
現在は芝生の上にレジャーシートを引き、憂と俺自身が作ってきた
弁当箱と
琴吹が持ってきたケーキを置き、やけに中野で楽しんでいる唯たち。
そんな中正座でシーンとしている秋山。
そんな奴らに囲まれて、朝飯を抜かされ腹ペコで飯を食っている俺。

（…なんで俺は朝飯を抜かされたんだ）

抜かされる理由が全く分からない疑問を持ちつつ飯を食う。ちなみに俺の弁当は一人分なので俺自身が食べている。

（…それでも、朝飯は抜かさなくてよかっただろ）

「ほら、あずにゃんも食べて、食べて～」

「ケーキもあるわよ」

と、中野に勧める唯と琴吹。

「梓には、これ！」

強引に田井中は買ってきたたい焼きを中野に食べさせる。
それをモグモグと食べ、中野の周りにキラキラとした星のようなものが
見える程まで、至福の笑みを浮かべた。

「たい焼き…好きなの？」

と、秋山の問いに小さく「うん…」と、頷いた。

（…ハァ～、飯美味かった…）

まぁ、そんな中俺は坦々と飯を平らげた。

「はい、きょう君にはこれ！」

いきなり呼ばれて振り返ると俺の口に何かが入ってきた。

「…ん？」

どうやらイチゴのショートケーキらしい。

「…美味い」

「じゃあきょう君…あーん」

「…食べさせろと？」

「うん」

「…はいよ」

ケーキを一口サイズにフォークで切り、唯の口に持っていく。

「あー…ん！美味しい～♪」

その後、全員で飯を食べて休憩の後…唯たちはフライングディスクで楽しんでいた。

（…中野の歓迎会じゃねぇのかよ）

とか思い、木陰に移動。木陰で雑誌を読んでいる秋山の反対側の木

陰で
睡眠の体勢に入る。

「…ふぁ～…眠い」

思い切り欠伸をして目を閉じる。
が、何かの視線を感じたので目を開ける。
すると、体育座りをした中野が俺たちをジーッと見ていた。

「…何か用か、中野」

「あっ…い、いえ…」

中野は一旦俺たちから視線を外すが、また視線を俺たちの方へ向ける。

「あの…澪先輩は、外でバンド組んだりしないんですか？」

「う〜ん、確かに外バンも面白そうだよね」

すると、俺側の木陰から『学祭澪　秘』と書いてある何かの封筒の様なものを持ち
秋山に忍び寄る。

「あー、そんな事言って、いいの…かな？」

と言って、封筒から半分も見えなかったが、赤い幕が見えたのできっとあの場面だろう。
それ以上は何とも言い辛いので言わないが…
当たり前だが、その写真の内容を見られたくはない秋山はそれを奪い取ろうとするが
器用にヒラリとかわす。まぁ、結果的に弱味を握られているために外バンは組めない
と言う事になる。

「あの、恭哉先輩はどうなんですか？」

「…俺は組みたいと思ったことがあるが、もう無理だな」

「え？もう無理って…その」

「今更外バンを組む意味も無ければ、俺はコイツらの音楽に慣れたから他は無理だ」

「そ、それでも外バンの人達とやってる内に慣れるじゃないですか」

「…確かにそうかも知れないが、こっちの方が何かシックリくんだよ」

「…そうなんですか」

「…それにな、多分コイツらと一緒にやってた方が…俺は楽しいと思うぞ」

「……」

そんな俺の言葉を聞いた中野は体育座りのまま、何かを考え始めた。
多分コイツの中で迷っているんだろう、軽音部の事を……

「…それともう一つ聞いていいですか？」

「…なんだ」

「えっと…聞き辛い事なんですが、恭哉先輩と唯先輩ってもしかして…その、付き合っていたり…？」

「…なんでそう思った」

「えっ！それは～その～…恭哉先輩は唯先輩の事を唯って下の名前で呼びますけど、律先輩や澪先輩たちの事は上の名前で呼んでるじ

ゃないですか」

「…結構鋭いな、お前」

「え…もしかして本当に…？」

「…あぁ、俺と唯は付き合ってるぞ」

「…えぇ～っ！！本当だったんですか！？」

「…うるせぇ、つーかお前が予想したんだろうが」

「…そうですけど、本当にそうだと聞いたらビックリしちゃって…」

「…あっそ、ビックリするのはいいんだが…後ろ」

「へ？」

「バニーもいいわね…」

中野の後ろにはいない方が安全であろう山中がいた。
いつどこから現れたのかは分からない。怖い教師だ。

いきなり後ろに現れた山中に驚いた中野は、
体育座りの体勢から瞬時に山中との距離をとった。
案の定、今回は頭に猫耳では無くウサ耳がついていた。

（…お前逃げ切れてねぇから）

「あっ、さわちゃん先生」

山中に気がついた唯と琴吹は遊ぶのをやめて、こっちへ来た。

「遅れてゴメンね、いろいろと仕込があってさ～」

といって、持っていたアタッシュケースを自分の前へ持ってきて…

「じゃ～ん♪」

と、開いた。

中に入っていたのは、ゴシック衣装やら巫女服やらチアガール衣装やら

他多数の衣装が入っていた。

中野はそんな衣装の群集を見て、自分も着せられると思ったのか

自分の体を抱きながら小刻みに震えていた、ウサ耳をつけながら。

（…いい加減外せよ）

「あずにゃん、嫌なら私たちが着るから」

「…そういう問題じゃねぇだろ」

「ほえ？」

「…いや、なんでもない」

突っ込みも唯には惜しくも通じず、そのまま体を木に預け一つため息を吐いて
その風景をボーっと眺めていた。
そんな感じで中野の歓迎会が終わり、帰り道。
すっかり空は青色から茜色に変わり、はしゃいでいた子供たちの姿も無くなる。

「あ～、楽しかったね～」

「今度はどこ行くかな～？」

「動物園とか」

「温泉もいいわね～」

「あっ！それいい！」

「凄く素敵です！」

「そう？じゃあ今度本当に行っちゃう？」

どうやら歓迎会の形すら無くなったらしい。
というか、次回の遊びを考えていて中野の事は知らん振り。
そんな悲しい先輩方の姿を見た中野は、呆れた顔でため息。

（…つーか温泉だったら俺行かねぇからな）

「みんな聞いて！」

突如大きな声を上げる秋山。その顔はめちゃめちゃ真面目な顔だった。

「うちは軽音部だから！明日からは絶対練習するからな！絶対の絶対の絶対！！」

秋山の気迫に押された唯たちはその場で何度も首を縦に振っていた。

「遊ぶのもいいが、練習もしなきゃいけない…分かったか？」

俺の言葉にも首を何度も縦に振る唯たち。

大して気迫など出していないんだが……

―――――――――

休みが明けて放課後の部室。中野はまだ部活には来ている。

「みんな！忘れてるかも知れないが、うちは軽音部だから！」

「いや…忘れてないから」

「…お前が言うな、アホ」

何ともアホらしい発言をする田井中。

「今日は練習するぞーっ！！」

「「「おぉーっ！！」」」

「「…お、おおー」」

「……」

「おー」と言いながら拳を高く突き上げる。

（…今日『は』なんだな…今後もやれよ）

「よし！梓も入ってギターが3人になったから、演奏の幅が広がるな」

「…それに中野は実力が相当ある」

「…い、いえそんな事は…」

「…で、誰がリードギターやる？」

まぁ、何とも珍しく部長らしい事を言う田井中。

「はいはい！私がやる！」

（…どっからその自信が出てくるのやら…）

「…演奏聴いてみて決めればいいんじゃねぇの？」

「そうだな、じゃあ一人ずつ演奏してみてくれ」

すると何故か唯が中野をジーっと睨みつける。

「…後輩に威嚇するんじゃない」

俺は唯の首根っこを掴み、中野から引き離す。
それでもジーっと見る唯。

「…そ、それじゃあ私から」

唯の視線から逃れるためか、中野は一番手に名乗り出た。
中野のギターは『ムスタング』別名『じゃじゃ馬』と呼ばれるギターだった。
ボディーの部分は赤、ピックガードの部分が白という色のギターだ。
ムスタングを構え、演奏を始める。

「凄い、梓ちゃん」

「やっぱり上手いな」

（…だからといって、軽音部をやめられたら元も子もない）

「…次は俺か」

中野の演奏が終わり、今度は俺の番。
実の所、リズムでもいいのだがやるだけやりたいので、ギターを構える。

「…そんじゃ、適当に弾くか」

軽くストロークをして弾き始める。
適当に弾いて、簡単に終わらせた。
何かとてつもない視線を感じるので、まさかと思い中野を見る。

「わぁ～♪」

めちゃめちゃ眼が輝いていた。

「次は唯の番…って、おい！」

「ギックリ腰が…」

俺や中野に敵わないとか思ったのか、分かり易い嘘をつく唯。

「…いい加減にしろ」

と、田井中の突っ込み。

「きょう君！ギターを教えて下さい！！」

もう誤魔化しきれないと気がついたのか、目尻に涙を溜めながら俺にすがり付いてきた。

「…中野に教えて貰え、頼んだぞ中野」

「えっ…私ですか！？」

「…頼んだぞ、中野」

「わ、分かりました」

という訳で、中野には唯の演奏を聞いてもらいながら気になる点を上げていった。

「あ、そこはミュートした方が…あと、さっきのフレーズでビブラートきかせた方がいいかも…」

正直、ギターを教えたりするのが苦手な俺にはとても楽になった。

「みゅーと？びぶらーと？何それ？」

だが…中野のアドバイスも空しく、首を傾げる唯。
そんな先輩を見た中野は、俺と秋山に困惑した視線を送ってきた。

「…こんなんでも一年間やってきたんだ」

「…ある意味の天才だ」

（…合宿の時に教えた筈だぞ）

「ミュートもビブラートも知らずにどうやって…」

と、中野が呆れているのか驚いているのか、という時に
唯がしっかりミュートをしてギターを弾いていた。

「あれ？ちゃんとミュートできてる…」

「あ、さっきのがミュートって言うんだぁ」

「…唯、それ忘れるなよ？」

「うん、大丈夫だよ！」

（…その自信がどっから出てるのかが知りてぇわ）

「唯はゲーム買っても説明書を読まないタイプなんだよ…」

「…あぁ、納得です」

（…納得されていいのか、唯）

すると、今までティータイムをせずに退屈そうにしていた山中が体をグイっと伸ばして…

「じゃあそろそろ、ロイヤルミルクティー淹れてくれる？」

と、琴吹に伝えるが…

「あの！今日は練習しますから！」

と、珍しく拒む。
それでも山中は諦めずに琴吹すがりつく。
それを見た田井中は仕方なく…

「…ちょっとだけ休憩するか」

案の定、普段の軽音部と変わらないティータイムが始まり唯、田井中、琴吹の３人は俺の定位置でダラけてしまった。

（…これだと、中野は辞めるか）

思いたくは無いのだが、誰よりも真面目に練習をする中野には
外面では笑っているが、内面では曇っているだろう。
つまり、辞める確立はほぼ…確実だと言ってもいいかもしれない。

（…チッ）

「おい！練習は！？」

「…ん～？あ～…明日から頑張ろう…」

秋山の言葉にも特に反応せず、結局明日へ。
きっとそのままた明日、次も明日と連鎖する。
後輩の気持ちを考えずに勝手に楽しんでいる奴らに
軽く苛立ちを感じた。

「明日って！今日練習するって決めただろ！」

「…秋山」

「恭哉も何か言って「…もうほっとけ」…え、でも」

「…いい、いくら言っても無駄だ…俺たちだけで練習するぞ」

「…うん」

多分俺の今の表情は相当の不機嫌顔だ。
中野の表情はやはり曇っていた。練習すると言って置きながら全くしない先輩たちを見ながら。

「…おい、なか「あずにゃ～ん、あ～ん♪はい、あ～ん♪」…」

唯はケーキが刺さったフォークを中野の口に近づける。
中野はちょっと拒みつつもそれを口に入れる。
とても幸せそうな顔に。

「はい、梓ちゃん専用のカップよ♪」

と、琴吹は表面に猫の模様がついたピンク色のカップを中野に渡す。
それを左手で受け取った中野は中に入っている飲み物を少しだけ飲んだ。

「……」

結局その後は練習をせず、真面目にやっていたのは最初のみだった。
終始真面目にやっていた俺と秋山の先輩組は無言だった。

翌日。
中野は部活に顔を出さなかった。

「…今日、あずにゃん来ないね」

「そうだな、どうしたんだろ」

「用事でもあったんじゃないかしら」

「「……」」

中野が来ない理由は俺と秋山は分かっている。
でも言葉には出さない。

結局練習はせずにティータイムで終了。
それでも一つ違うところは、いつものティータイムではなく
何か不安な空気が流れているティータイムだった。

（…これで気づけばいいんだが）

翌日も中野は部活に顔を出す事は無く、何かを察したのか
唯たちも練習するようになった。

（…薄々気づいてきたか？）

それでも俺にはイライラは少し残っている。
なぜ今更になって気づいて、慌てる様子で練習するのか。

「…なんでいきなり練習し始めたんだ？」

抑えるつもりはあったのだが、口に出てしまった。

「「「…え？」」」

秋山以外は疑問の声をあげた。
ちなみに秋山は何か言いたげな感じで俺を見ている。

「…昨日までは普通に茶を飲んでただろ、それが今日になっていきなり何で練習し始めたんだ？」

「…えっと、それは…」

「…あの、えっと」

「…えーと」

唯たちは俺から目線を外し、言葉を濁す。

「…言い辛いなら俺が言う、率直に言うと…中野が顔を出さなくなり、辞めるかもしれないと思い今頃焦って、真面目に練習し始めた…簡単に言うとこうだろ？違うか？」

「「「……」」」

核心を突かれたのか、全員が黙った。

「…一つ聞く、お前らは中野の表情が日に日に曇っていったのを知ってるか？」

「えっ…」

「あ、あずにゃんが？」

「で、でも…それで梓が辞めるって訳じゃ…」

「…確かにそうだ、でも可能性が無い訳じゃないだろ」

「……だ」

すると、顔を俯けていた唯が微かに聞こえる程度に言葉を発した。

「…何だ、唯」

「ヤダよきょう君…あずにゃんが辞めるなんてヤダぁ！」

と、唯は涙眼で俺の腕を掴み、子供のように泣き叫んでいた。

「…唯、別に辞めると決まった訳じゃない…ただ、お前らの努力しだいで変わるかもな」

といって、俺は唯の頭を撫でた。

「…とりあえず顔洗え」

「…うん」

唯はトコトコと部室にある水道へ行き顔を洗う。

「…なぁキョウ」

「…あ？」

「もしかして、キョウがずっと練習してたのって、その…」

「…普段からやってるだろ、特別やってたわけじゃない」

（…とか言いながら、少しは中野の事について考えつつ練習していたんだが……）

「でも、ゴメンな…」

「…私もゴメンなさい」

「…恭哉、ゴメン」

各自俺に謝るが、謝る相手は俺ではない。

「…謝る相手が違うだろ」

「でも、恭哉君にも悪いし…」

「…俺はどうでもいい、それよりもお前らはどうする」

「…そうだな」

（…あ）

「…楓が言ってたんだが、中野はライブの時に一番気に入って聴いてた曲があるらしい」

「気に入った曲？」

「…あぁ、確か…ホッチキスだったか？」

どうやらこの曲を中野はライブの時に聞き入ってたようで、それを

隣で楓と憂は見ていたらしい。

「ホッチキスか…よーし！梓のために、早速練習するか！」

「「「おーっ！！」」」

こうして練習を再開した。

「恭哉、ありがとな」

「…別に、ただ言いたい事を言っただけだ」

（…後は中野次第だな）

翌日。

「…あずにゃん、来ないね」

週末の今日、青色に染まっていた空も、すでに茜色に染まっていた。
そんな中、ここ3日間ずっと練習していた俺ら。
だが、中野は部室には一度も顔を見せていない。

「…もう、来ないかもな」

「え…」

「…待つしかねぇだろ」

「…うん」

どうしようか迷っている中野を部室に連れてくるなんて、前代未聞。
そんな事したら悪循環をフル回転させてしまう。
そんな中、日が経つにつれ、元気に練習していた唯たちの顔も曇ってきた。

ガチャ…

と、突然部室のドアがゆっくり開いた。

（…来たか）

入ってきたのは中野。手にはカバンのみ、背中にはあるはずのギターが無かった。
一瞬の不安が過ぎったが、目を軽く瞑り振り払う。

「あっ！梓！」

「うわぁ～ん、待ってたよ～」

と、唯が中野に抱きつくが、いつもの『やめてください』という声は聞こえず
そのまま無言で立っていた。
その様子を見た田井中は。

「…まさか、辞めるって言いに来たんじゃ…」

「それだけは勘弁して！」

すると、中野はすすり泣き始めこう言った。

「分からなくなって…」

「「「「え？」」」」

「…どうして軽音部に入ろうと思ったのか、
どうして新観ライブの演奏が…あんなに感動したのか、
しばらく一緒にいてみれば、分かると思ってやってきたけど…
けどやっぱり分からなくて……」

中野は溢れ出てくる涙を両手で隠すように拭いながら、震える声で話す。
そんな中野を前に唯たちはどう声をかけたらいいのか分からなかった。

「…何ボケーッと突っ立ってんだ」

「…きょう君？」

「…中野が来たらする事があったろ」

すると、田井中が全員に声をかけた。

「よし！梓のために演奏するぞ！その時の気持ちを、思い出せるようにさ！」

「「「うん！」」」

「…よし、準備しろ」

俺がそう言うと各自準備に取り掛かった。
そんな中俺は中野の下へ。

「…お前はいつまで泣いてんだよ」

「…恭哉先輩」

「…泣いてたら聞こえるもんも聞こえねぇだろ」

「…はい」

「…先輩たちが折角お前個人のために演奏すんだ、しっかり聞け」

「…はい」

「…よし、じゃあ顔あげとけ」

「…はい」

と、俺は中野の頭に手をポンッと置いて、準備に取り掛かった。
つーか全く俺らしくも無い台詞を吐いていた。

「…田井中」

「おう！1，2，3，4！」

田井中のカウントから曲が始まる。
曲名『わたしの恋はホッチキス』

…演奏中…

泣いていた中野は、顔を上げ目尻に涙がまだ残っている状態で俺たちの演奏を聞いていた。

…演奏終了…

目の前にいる中野は少し呆然としていた。

「…梓」

呆然としていた中野に秋山が話しかける。

「…この前、なんで私が外バン組まないか聞いたよね？」

「…あ、はい」

「やっぱり、私はこのメンバーとバンドするのが楽しいんだと思う」

「…え？」

「…きっと皆もそうで、だからいい演奏になるんだと思う」

この秋山の言葉を聞き、悩みが晴れたかのような顔になった。
だから聞いた…

「…で、どうする？」

答えを聞いた。

「…はい！私、やっぱり先輩方と演奏したいです！」

中野は目尻に溜まっていた涙を拭き、改めて軽音部の仲間になった。

「あ～っ！よかった～！」

唯は感極まったのか中野に抱きついていた。

「まぁ…これからもお茶飲んだり、ダラダラしたりする事もあると思うけど、それもやっぱり必要な時間なんだよ…うん」

（…それがねぇと、顧問がな…）

「…お前らは何してんだ」

「燃え尽きた…」

「向こう一週間演奏したくねぇ～…」

さっきまで中野に抱きついていた筈の唯、その隣に田井中が長椅子でだらけていた。
それを見た中野。

「…本当に？」

疑いの目。

「…多分」

（…これが本当に息抜だったらいいんだが）

「…まぁ、こんな奴らだが…退屈はしねぇと思うぞ？」

「え…」

「…さっきの演奏だって、俺らだから出来た曲…他の奴らがやったらまた違う曲になる
それに、ここまで後輩を大切にしてる部活なんて、ここぐらいしかねぇだろ」

「…クスッ、そうですね」

軽く笑う中野、その隣で腕を組みダラけてる唯と田井中を呆れた目で見る俺。
こんな会話をしているとも思っていない唯が振り返って…

「あずにゃ〜ん、猫耳付けてみて〜」

という。

「え！？い、いやです！」

「ねぇお願〜い、そしたら頑張れるからぁ〜」

「…え、じゃあ…」

「…お前はそれに乗るな」

「…あ、つい」

こうして中野の退部は無くなり、普通の日常が戻った。

第十九話　中野梓編～軽音部の危機～　（後編）　（後書き）

どうでしたでしょうか？
一ヶ月間書いてないと、構成がグダグダになりますね…
というわけであずにゃん編終了となります。
次からは合宿編です。

更新は来月の出来れば頭に予定しています。
なんせ２９日にテストが終わるもので…それまで書けなくて。
まぁ、次回をお楽しみに！

感想等お待ちしております！
感想来ると作者はｐｃ前でフィーバーしますのでお願いします。
それとユーザー登録もお待ちしてます！
バンバン登録しちゃってください！

それではこの辺で！ラルクでした！

第二十話　再び合宿！！　（前編）　（前書き）

どうもみなさん、お久しぶりです。ラルクです。

えー今回は梓も加わり軽音部二度目の合宿です。

合宿編は二つに分けようと思います。

では、前編をどうぞ！！

第二十話　再び合宿！！（前編）

ｓｉｄｅ　ｉｎ

ｓｉｄｅ　【高嶺恭哉】

８月初旬。

夏休みという長い休みの期間に入って約２週間ほど。
キンキンに冷えた自室でのんびりしていたいところだが、
部活という名の戦場に強制的に駆り出された俺は渋々学校へ行くはめに。

もう見慣れた部室への階段を上っていると階段の上から唯とデコが姿を現した。

「あ、きょう君やっほ～♪」

「……」

「お、やっと来たかキョウ」

「……」

「返事が返ってこないな…まぁ、丁度いいやついてきて」

「きょう君も一緒～♪」

「…どこに」

「お、しゃべった」

人が暑さでダラけているというのに暑さを感じさせず淡々と喋る田井中に、
俺の質問を簡単にスルーし、腕を引っ張りどこかへと連れ去ろうとしてる唯。

「…話聞いてるか？」

「ん？なぁに？」

やっぱり聞いていなかった。

「…だから、どこに行くか聞いてんだ」

「職員室だよ」

「…なにしに」

「…りっちゃん、何しに行くんだっけ？」

（…おい）

「さわちゃんに合宿行くかどうか聞きにいくんだよ」

「あー！そうそう」

手をポンと叩く唯。

（…それぐらい覚えとけよ…あ、職員室か、エアコンぐらいあるだろ…）

淡い期待をもって、何だかんだして職員室。

「失礼しま～す」

職員室に入ると…

（…アッツ）

期待とは裏腹に普通の暑い部屋だった。

「あ、いたいた」

お目当ての人物、山中に会えたようだ。
俺はずっと気落ちして俯いてるからどこに山中がいるのかが見えない。

「夏休みなのに大変ですねぇ～」

「研修とか色々あってねぇ～…それであなたたちも練習？」

「はい」

「…部室に行く途中…のはず」

「そう、で…何か用？」

「軽音部で合宿するんだけど」

「先生も来るかなぁ～と思って」

「合宿ねぇ～…」

眉を寄せて、実にめんどくさそうな顔をした。

「じゃあいいよ、私たちだけで行くから」

「声かけなかったら怒るのに、声かけたらこれだ…」

「泳いだり、バーベキューしたり出来るのにね～」

「えっ！？」

ただただ練習だけだと思ってたのかどうだか知らないが
その言葉を聞いた瞬間にめちゃめちゃ後悔＋驚いている顔をしていた。

「…どーせ合宿メンドクせぇんだろ？」

「そんな訳ないじゃない！」

「…は？」

―――――――――――――――

時は飛んで、空が青から茜色に変わったころ。
俺たちは練習を終え、帰宅準備をしていた。
するといきなり、我らの部長が椅子に立ち

「よーし、久しぶりにみんな揃った事だし、合宿の買い物に行くか」

という命令が下された。

「……」

まぁ、そんなのに微塵の興味も湧かない俺は一人ギターケースを背負い帰ろうとした。

「キョウ、どこ行くの？」

「…帰るに決まってんだろ」

「だーめ♪」

「…断る」

「あれ？恭哉先輩は行かないんですか？」

「…何で女の買い物に男の俺が付いてかなきゃ行けねぇんだ…」

「部長命令だから？」

「…訳分からん」

その後もめんどくさいので断っていたが田井中、唯のコンビのゴリ押しによって
渋々俺も付いていくことになってしまった。

ところ変わって商店街。

「ところで何を買いに行くんですか?新しい機材とか!?」

と、合宿初参加の中野は明るい表情をして秋山に聞く。

「え〜と…」

「水着だよ!」

答え辛そうにしていた秋山の代わりに
唯がショーウィンドウにあった水着を指して言う。

「遊ぶ気満々…まぁ、どうせこんな事だろうと思いました」

中野は肩をガックリして答える。

「別にずっと遊ぶわけじゃないよ？」

「信用できないです！」

「…お前は後輩にすら信用されてないのか」

「すらって何すらって！？」

（…そのままの意味だよ）

「…練習も絶対するが…ひたすら練習ってのも気が滅入る」

「そう、だから息抜きも必要だから、な？」

全く信じていない後輩に俺と秋山が説得をする。

「そっか…そうですよね！」

と、田井中の事はさっぱり信じない中野は俺と秋山の説得によって信じた。

「…この寂しさはなんだろう」

「…お前先輩としての威厳ゼロだな」

「あ、あのー」

「なんだ、梓」

「水着を買いに行くのは良いんですけど…恭哉先輩が…」

「…付いていく訳ねぇだろ」

「そうですか」

「…そこらへんの涼しい店にいる…終わったら誰か俺にメールしといてくれ」

といって、俺はこの場を去った。

side out

side in side【平沢唯】

「今年はどうしよっかな～？」

たくさんある水着の中から、似合いそうな水着を探す。

「唯～こんな水着どうだ～」

と、りっちゃんが水着を持って私のところに来た。

「どれ？」

「これこれ！」

と言って見せてきたのは大胆に胸元を露出している水着だった。

「だ、ダメだよ！そんなの恥ずかしいよ！」

「これでキョウを誘惑しちゃえよ」

と、ニヤニヤしながらりっちゃんは水着を勧めてくる。

「い、いいよ！」

「いいからいいから～」

「律、いい加減にしろ」

ゴンッ

「イタッ！」

見兼ねた澪ちゃんがりっちゃんの頭にゲンコツを落とす。

「ほら早めに決めろ、恭哉も待ってるんだぞ」

「わ、分かったよ～」

「澪ちゃんは決めたの？」

「ん？私はこれにするよ」

澪ちゃんが見せてきたのは藍色のビキニ。

「ムギちゃんは？」

「私はこれにしようかな♪」

ムギちゃんはクリーム色のビキニに花柄のパレオ。

（二人ともスタイルいいからなぁ～…）

「あずにゃんは？」

「私はこれなんですけど…子供っぽいでしょうか？」

あずにゃんはピンク色のワンピース。

「似合ってるよ？」

「ありがとうございます」

「りっちゃんは決めたの？」

「私はこれだな」

白を中心としたスポーティなビキニ。

「で、キョウに見せる水着は決まったのか？」

「うん、一応これかな？」

私は悩んだ末、ミニスカートの付いた水色のビキニ。

「へ～可愛いじゃん」

「エへへ～♪」

（きょう君に早く見せたいなぁ～）

ｓｕｄｅ　ｏｕｔ

side in
side 【高嶺恭哉】

数日経った某日。
合宿当日のこの日、誰も遅刻することなく予定通り合宿所に着いた。

「こりゃまた、一段とすげぇな～」

俺たちの目の前にはテラスの付いたそりゃあもうデカイ別荘が建っていた。
それに明らかに去年の別荘よりデカイ。

「これが去年言ってた借りれなかった別荘だね！？」

と、興奮気味に唯は琴吹に聞く。

「ごめんなさい、その別荘は今年もダメだったの…多少狭いと思うけど我慢してね？」

琴吹は申し訳なさそうに言った。

（…まだ上があんのかよ、つーかこいつは一体何者なんだ…）

下手すると俺が想像してたよりももっと凄い奴かもしれないと心から思った。
それから別荘の中に入り荷物を置いた。
素晴らしい事に俺は一人個室。
まぁ、女子の軍団に男子が一人介入するわけにはいかない。

「よーし！遊ぶぞー！」

「おー！」

「おぉーい！」

声が聞こえると思ったらすでに水着に着替えていた田井中と唯が玄関を大袈裟に飛び出していた。

「遊ぶのは練習してから！」

そして秋山に説教されていた。

「ちぇ～」

「遊びたい！」

声がする方へ行くと、口を尖らせ必死に遊びたいをせがんでいる田井中と唯がいた。

「それじゃあ多数決にしよう、私は練習が先！」

「「遊ぶーっ！」

「練習がいいです」

「遊びたいで～す♪」

ここでまさかの琴吹が遊ぶに一票。

「最後、恭哉はどっちだ！？」

どうやら『遊ぶ』か『練習』の運命の選択は俺の一票にかかっているようだ。
なので俺は…

「……寝るに一票」

どちらでもない『寝る』に一票を投じた。

「恭哉！！」

「…でも結局は3対2対1で遊ぶの勝ちじゃねぇか」

「うっ…」

「やっほー！唯遊ぶぞー！」

「おー！」

結果、遊ぶ事になった。
各自水着に着替えた俺らは浜辺にいた。

「……消えるんだ太陽」

「いきなり意味分かんない事を言うな」

トランクスタイプの水着にパーカーを羽織った俺は
パラソルのしたで太陽に消えてくれとぶっ倒れながら頼んでいた。

「恭哉先輩は泳がないんですか？」

「…泳がねぇ」

「…もしかして、泳げないんですか？」

「…調子に乗るな」

「はい、すいません…」

「去年はパラソルの下で寝てたんだぞ?恭哉は」

「凄いぐっすり寝てたの♪」

「…寝て何が悪い」

「へぇ〜そうなんですか」

と言った他愛も無い話をしていると…

「あずにゃ〜ん!」

と、唯がビーチボールを持ってこっちへ走ってきた。

「あずにゃんも一緒に遊ぼうよ！」

「結構です」

中野は田井中と唯から目をそらした。

「はは～ん…さてはスポーツとか苦手な人？」

と、田井中が不適な笑みを浮かべながら挑発する。

「そんな事ありません！！やってやるです！！」

まんまと挑発に乗ってしまった。
するとテクテクと唯がこっちに来た。

「ねぇねぇ、きょう君も遊ぼうよ」

「…暑いから断る」

俺は目を腕で覆いながら答える。

「え～…遊ぼうよ～」

「…はぁ、俺はねむ……ッ！！」

「どうしたの？……あっ！」

目を覆っていた腕をずらして目を開け横を向くと
それはもう隣でしゃがんでいた唯の…その…なぁ…
が、なかなか近距離にあった。

「…悪い」

「う、ううん！だ、大丈夫！」

「…キョウ、エロ」

「…うるせぇ、デコ」

俺をエロ呼ばわりするデコ。

「…唯、遊んで来い」

「でも、きょう君は？」

「…悪いが体が動かない」

「そうなんだ…」

俺は少しでも元気付けるため、唯の頭を撫でた。

「えへへ／／／」

「…行って来い」

「うん、ちょっと遊んでくるね！」

唯は田井中と中野と一緒に浜辺へ行った。

「相変わらずラブラブだな、恭哉と唯は」

「本当ね～♪」

「…うるせぇ」

その後、散々に遊んだ女子たちがパラソルへ戻ってきた。
ちなみに俺は爆睡していた。

「はぁ～…」

「遊んだ遊んだ～…もうご飯食べて寝ようよ…」

「練習はどうした？」

「やっぱり遊ばずに先に練習した方がよかったんじゃないですか？」

「……梓が一番遊んでたじゃん、真っ黒になって」

現れたのは真っ黒くなった中野。

「うっ…わ、私はちゃんと練習もするもん！」

「じゃあ一晩中？」

「うぅっ……するもん！！！」

無駄に挑発に引っかかった中野は
一晩中練習する…らしい。

「…滅びろ太陽」

そんな中俺は太陽に今度は滅びろと頼んでいた。

第二十話　再び合宿！！（前編）（後書き）

どうでしたでしょうか…？
久々であまりうまく書けてるとは思いませんが…

え～…これからも本作＋短編集をよろしくお願いします。

感想等随時受け付けてます。
気軽に感想をお願いします！

ラルクでした！！

第二十一話　再び合宿！！（後編）（前書き）

どうもラルクです。

今回は前回に引き続き後編です。

では、二十一話、どうぞ！！

第二十一話　再び合宿！！（後編）

海で遊び終わった俺ら。
俺と唯たちは一旦分かれシャワーを浴びに行き
部屋着に着替えて別荘内にあるスタジオへ向かう。
スタジオの前につくと秋山がスタジオの扉を開けて中へ入る。

「…大分広いな」

中を見渡すと、左側にはドラムセットに去年より格段にレベルが上がった
アンプが置いてあり、右側にはＬ字型のソファーとテーブルが置いてあった。

「すご～い♪」

「確かに凄いな…」

「あんなアンプ使った事ないです…！」

「…へぇ」

練習大好きの中野は眼が輝いていた。

「澪！早く練習しようぜ！スネアが新品だ！」

と、ここに来る時は疲れただの腹減っただの…愚痴を言っていた田井中は新品のドラムを見た瞬間、中野同様に眼を輝かせ普段練習しようなんて言わないくせに今日に限って早くなどと急かす田井中。
そんな珍しい行動をする田井中に俺は…

「…お前、本当に田井中か？」

「私が練習しようとしてるのがそんなにおかしいか！？」

「「「…あぁ（うん）（はい）」」」

俺と秋山と後輩の中野までもがおかしいと答える。

「…この寂しさはなんだろう」

「…前にも同じ件があったからな」

田井中のボケにツッコミをした後
各自楽器の準備、調整をしていた。

「きょう君、あずにゃん、それなぁに？」

「これですか？ただのチューナーですけど？」

（…俺はその『パラダイス』と書かれたTシャツの方がなんなのか聞きたい……）

「へぇ～…チューナーって言うんだ～」

「これでチューニングするんですけど…唯先輩チューナー知らないんですか？」

「うん、始めて見た」

「あの、恭哉先輩…唯先輩、チューナー知らないらしいんですけど…」

「…本当に知らねぇの？」

「うん」

（…今まで平然とギター弾いてたから普通にチューニングぐらいしてるかと…ん？
だとすると今まではどうやってチューニングしてたんだ…？）

「…唯、今までどうやってチューニングしてた？」

「え？適当に……」

唯は軽くレスポールのペグをいじる。

「ほら」

と言ってストロークすると
多分合っているだろう音色がレスポールからした。

「え！？もしかして…！」

「…絶対音感だな」

「…凄いのか凄くないのか分からない人ですね…」

「…それが唯だからな」

「…そうですね」

「ほぇ？」

張本人は頭にハテナを浮かべ首を傾げていた。

「ほら、準備したのか？」

「うん、いつでもいいよ～」

「大丈夫です」

「私もいいよ♪」

「おう！」

「…あぁ」

各自準備終了。

「じゃあ行くよ、ワン・ツー・スリー・フォー」

そして田井中のカウントで演奏を始める。

―――――――――――――――――――――――――

ジャラァァ～ン…

今日の練習はここで終了。
最後のは大分いい演奏だった。

「今のすごくいい感じでしたよね！」

「…珍しく田井中が走らずにキープできてたな」

「確かにな、律は特訓でもしたのか？」

と言って秋山は田井中の方を見る。

「…お腹が空いて力が出ない…」

「お腹空いてるから無駄な力が抜けたのね…」

ドラムに凭れ掛かっている田井中。
それを見て呆れ顔の秋山。

「もうご飯にしよ…飯食わせろ！！」

「私も…」

琴吹もそれに同意した。

「…材料あんのか？」

「…無いね」

「そんなぁ〜…」

「…買いに行くしかねぇな」

――――――――――――――――――――――――

全く動けない田井中と保護者として付いた秋山を残して
俺らは買い物に行った。
といっても、荷物持ちというのが一番だが…

……数十分後……

「戻ったよ～」

「おっかえり～♪」

「ただいま」

「りっちゃん、お肉だよ～お野菜だよ～」

「待ってましたーっ！」

さっきまで死にかけていた田井中は食材が来ると途端に息を吹き返した。

「はっ！丸ごとキャベツ…生でも食ってやるーっ！」

一玉のキャベツを手に取るとそれを天に掲げ騒ぎ始めた。

「ちょっとは我慢しろ」

秋山が止めに入るが…

「離せー、キャベツの…キャベツの神様がお怒りじゃーっ！」

と、空腹で頭がおかしくなったのか、意味分からない言葉を叫び始めた。

「じゃあ私コンロの火を見ます」

中野は自ら率先して仕事を始めた。

「ほら見ろ、後輩が率先して頑張ってるんだから」

「…田井中、こんなことわざがある…働かざる者食うべからず…」

その言葉を聞いて観念したのか…

「…分かったよ」

と、田井中は渋々認めた。

その後は各自作業に取り掛かっていた。

「目が痛い～」

「唯、大丈夫か…？」

田井中と唯はタマネギを切って号泣していた。

「…切る前に冷蔵庫で冷やすとか、水に浸けとくとかしろよ」

「…きょう君、グスッ…先に言って、グスッ…くだせぇ…」

（いや、それぐらい…ってこいつは料理しねぇのか…）

「りっちゃん」

「唯」

「死ぬときは一緒だよ」

「あぁ」

「…いいから野菜を切れ」

訳分かんない茶番劇を見せられた俺。

「恭哉、ちょっといいか？」

「…あ？」

いきなり秋山に呼ばれた俺は
おにぎりを握っている秋山と中野の下へ。

「…どうした」

「これ…」

秋山が指を指した方向をみると
大小差があるおにぎりが皿の上に置いてあった。

「…まぁ、自分の手を恨むんだな…」

「恭哉ーっ！」

「あらあら、澪ちゃんの手が大きいのかしら？」

そこに冷やかしに来る田井中。

「う、うるさい！」

そんな田井中と秋山の騒動が繰り広げられてる最中
暇な俺。
とりあえず目の前にあったおにぎりを握る。

「…こんなもんか」

握ったおにぎりを秋山のであろうおにぎりの隣に置く。
すると隣からこんな声が。

「…私のよりも大きい」

心なしかその声には元気が戻っていた。

「…唯」

「あ、きょう君！」

「…何か手伝うか？」

「う～ん…じゃあこれ切って？」

渡されたのはカボチャ。

（…唯にカボチャを切らせるのは危なっかしいな）

「…任せとけ」

俺は唯の隣に行き包丁を持ってカボチャを切る。
それなりに硬いので少々大変だ。

「やっぱりきょう君は料理出来て良いね」

「…まぁ、損はねぇな」

「私も料理作れるようになんなきゃな…」

「…そのうち出来る様になるだろ」

「…うん」

「…そう気落ちするな、別に料理だけが唯の全てじゃねぇだろ」

「きょう君…！」

「…抱きつくなよ」

「え～…」

「…いいから残ってる野菜も切るぞ、手伝ってやるから」

「うん！」

その後は切り終わった野菜と肉を串に刺してバーベキューをして、俺らは夕飯を堪能した。

夕飯が終わり辺りはすっかり暗くなっていた。

パチパチパチパチ……

今は琴吹たっての希望で花火をしている。
俺はテラスから見ているだけだが。

「あ…終わっちゃった」

「あはは、最後消える時ってもうちょっと頑張れ～頑張れ～ってなるよな～」

（…久々にロケット花火をブチかましてぇ）

とか、なんとなく思ってみる。

「よ～し、もう一本」

どうやら琴吹は二本目に突入。

「頑張れ、頑張れ」

といって線香花火を見守っているが、残念ながらその小さな花火は落ちてしまった。

「あ～！りっちゃん、消えちゃうよ～！」

「よしっ！そういう時は合体で大きくするんだ！」

「うん！」

唯は自分の花火を田井中のに近づけて行った。

「「合体！線香花火マン！！」」

「あ、ずるい」

琴吹はそんなショボイ線香花火マンを羨ましそうに見ていた。

「…アホ」

俺は呆れながら花火の風景を見ていた。

「今度は肝試しをやろう」

「おーっ！」

花火が終わると今度は肝試しをやると田井中が提案。

「次から次へと…」

「いいじゃん！やっぱり夏で合宿と言えば、肝試しだよね！」

「私はやらないぞ」

「そっか～、澪は怖いの苦手だもんね♪」

「ぜんっぜん余裕よ！やってやろうじゃないの！」

まんまと挑発に乗った秋山。

「それじゃ、くじ引いて～」

いつの間にやら用意されたくじ。
それを引こうとすると。

「あ、キョウと唯はもうペア決定だから」

「…は？」

「だって付き合ってるじゃん」

「…あっそ」

つーわけで、理不尽な決め方をされた俺と唯。
４人のくじ引きの結果はこうなった。

○田井中・琴吹

○中野・秋山

○俺・唯

最初に田井中・琴吹ペアが行く。
多分秋山を驚かせたいのかは知らないが待ち伏せする可能性がある。
次に中野・秋山ペア。
最後に俺らが行く。

「…薄気味ワリィな」

「そうだね」

「…はぁ、田井中もしょーもない事をかん「きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！」…は？」

「い、今の声澪ちゃんじゃない！？行ってみようよ！」

「…あぁ」

俺たちは悲鳴が聞こえた方へと急いだ。

「…ん？」

中野と一緒にいたのは秋山のはずだが
何故か山中と一緒にいた。

「…おい」

「あ、恭哉先輩」

「…何で山中がいるんだ？」

「恭哉君？」

「…やっぱり来たか」

「…当たり前じゃないの」

「…ぼっろぼろだな…つーか秋山はどうした」

「えっと、澪先輩ならあそこにいます」

指の指す方を見ると、真っ白くなっている秋山の姿が。

「…燃え尽きたか」

「あれ？さわちゃん先生？どうしたの？ていうか何でいるの？」

「後から合流してみんなを驚かせようと思ったんだけど…道に迷って…」

服も身体も泥だらけの山中は目尻に涙を溜めて言う。

「驚かせようっていう目標は達成できたみたいですけど…」

中野は振り返って白くなってへたり込んでいる秋山を見る。

「…とにかく山中と秋山を連れて戻るぞ、田井中たちには俺が伝えてくる」

「きょう君が行くなら私も…」

「…いや、中野一人はさすがにな…だから唯も付いていってやって

くれ」

「うーん…分かった、気をつけてね？」

「…あぁ」

俺は唯たちを見届けた後、道を先に進んだ。
やはり先のほうに木の枝に糸とこんにゃくをつけた田井中が木の陰に隠れていた。
その後ろには琴吹も。

「…おい」

「うわっ！び、びっくりした～…キョウか…」

「わぁ～♪恭哉君って驚かせるの得意なのね！！」

「…別に驚かせてねぇよ…つーか肝試し中止だ、別荘に帰るぞ」

「え？何でだよ」

「…来る途中に山中に会った、今唯たちが別荘に連れ帰ってる」

「…マジかよー…仕方ない、ムギ帰ろう」

「残念…」

というわけで俺らも別荘に帰った。
帰った後は風呂へ。
去年とは違って俺は一人大浴場を使い幸せだった。
その後は全員リビングで琴吹の淹れてくれた紅茶などを飲み
各自思い思いの時間を過ごしていた。

「…ちょっと夜風にあたってくるか」

俺はソファから立ち上がり外へ行こうと歩みだす。

「あれ？きょう君どこ行くの？」

「…外行ってくる」

「キョウ外行くの？じゃあアイス「…断る」ちぇ～」

「…唯も来るか？」

「うん！」

俺と唯はリビングを出て、さっき花火した場所へ向かった。
丁度座れる階段があったので座る。

「何で外に来たかったの？」

「…なんとなく夜風に当たりたかったんだ」

「ふ～ん」

「……」

「……」

そこから沈黙。

すると唯がスリスリと近づいてきて

俺の肩に頭を乗せた。

俺も受け入れる様に唯の肩を抱いた。

「…どうした」

「…なんとなくこうしたかっただけ」

「…そうか」

「ねぇねぇきょう君」

「…ん？」

「…本当に私でよかったの？」

「…いきなりなんだよ」

「…だって澪ちゃんとかムギちゃんの方が綺麗だし、あずにゃんの方が可愛いし

りっちゃんみたいに活発な訳でもないし…」

「…じゃあ何で俺と付き合ったんだ？他にも良い奴がいただろ」

「そ、それはきょう君、優しいし、カッコいいし、ギター上手いし…」

「…じゃあ俺もそうだ、唯だって唯なりに良いところがあるだろ」

「た、例えば？」

（…そうだな）

「…天然で、ちょっとドジで、食い意地はってるし、子供っぽくて単純だし…」

「…それ嫌な所ばっかりだと思うけど」

「…俺が好きなんだからいいだろ、それに充分可愛いし、
一生懸命ギター弾く姿とか俺は大好きだぞ？」

「本当に？」

「…あぁ、当たり前だ」

すると唯は思いっきり抱きしめてきた。
俺も強く抱きしめる。

「私、きょう君の事大好き…」

「…俺がこんなに人を好きになる事なんて有り得ないからな」

「エへへ／／／」

俺は一旦唯を離し、頭の後ろに手を置いてそのまま顔を引き寄せてキスをした。

「ん…きょう……く…ん…！」

「ゆい…すき……だ」

「わた…し、も……」

俺はソフトにやるつもりだったが…何故か激しくしてしまった。

「ん……はぁ、はぁ、びっくりしたぁ」

「…はぁ、悪い…そこまでやるつもりは無かった」

「い、いいよ…きょう君なら／／／」

「…そ、そうか」

その後は後ろから唯を抱きしめて
一緒に夜空を見ていた。

「お熱いねぇ～二人とも」

「…は？」

上を見上げるとそこには
ニヤニヤしている田井中に
顔を赤くしながらやめろと止めている秋山
眩しい笑顔を振りまいている琴吹
顔を赤くしながらチラチラとこっちを見る中野。

「…お前らいつからそこにいる」

「今来たばっかりだよ」

と、田井中が言うが周りの（特に秋山と中野）奴らは不自然に顔を赤らめている。

（…こいつら最初から居やがったな）

「…はぁ、俺は部屋に戻るぞ」

「え～きょう君もう行っちゃうの～？」

「…9時半だ、ちょっとやる事があるしな」

「そっか…」

「…お前らも早く部屋に戻れ」

俺はテラスにいる覗きたちを横目に
別荘内へと入っていった。

―――――――――――――――――――――

カリカリカリ……

時刻は十一時半。
廊下の照明は暗くなり、全員夢の中に
ダイブしているであろうこの時間。

カリカリカリ……

そんな中、今俺は何をやっているかと言うと…

「…ダリィ」

夏の課題を早めに済ませているのである。
口はダルイと言っているのだが、やらなければ
後がヤバイと思い、全ての課題をこの合宿に持ってきていたのだ。

「…ダメだ、一旦休憩」

俺はその場で倒れ、何気なく携帯を確認する。

「…メール来てるし」

俺はメールを開き見ると

宛先名：橘　雄介

件名：なし

本文：お前今どこにいんの？
　家行ってもいなかったんだけど…

　後さ、今度おま

パタン。

俺は携帯を閉じた。

「…はぁ」

俺は何か飲み物＋トイレのために部屋を出る。

「……」

トイレに向け歩みを進めているとある部屋の中から…

『キャ～ベツうめぇ～…』

と、不可解な声が聞こえてきた。

「……」

とりあえず俺はあえてシカトをした。
本能的に気にしてはいけないとでも思ったのだろうか…
とにかく俺はトイレ目指し歩みを進めた。

「……」

歩いて数分。
目的地に到着し用を済ませた俺は
自室に帰ろうとすると
煌煌と光っている部屋があった。
その場所とはスタジオ。

「……」

誰かいるのかと思い、ドアに付いている円形の小さな窓から
中を確認してみる。

「…あいつら」

中にいたのは床に楽譜を広げ、ギターを持って練習している
中野と唯の姿があった。

「……」

二人の練習を邪魔してはいけないと思い
ゆっくり退散しようとするとジャストで
中野と目線があってしまった。

「…あ」

『…あ』

目線があってしまったせいか、引くに引けなくなり
仕方なくスタジオ内に入る事に。

「どうも」

「…あぁ」

「あ！きょう君だ！」

俺はそのまま部屋の右側にあるソファに座った。

「…夜遅くまで練習か？」

「いえ、たまたま通ったら部屋の明かりがついてたので窓から覗いてみたら
唯先輩が一人で練習していまして…それで一緒に」

「…へぇ、唯が…」

「私だって練習はするよ！？」

「…分かってるよ」

「あ、そういえば恭哉先輩はこんな時間まで何を？」

「…夏の課題をちょっとな」

「…課題ですか」

「きょう君は頭いいんだよ！」

「…お前が自慢げに答えるな」

「エヘヘ／／／それほどでも～♪」

（…いや、別に褒めてねぇけど）

「…そうなんですか！？じゃあ…あの、分からないところを教えていただいてもよろしいですか？」

「…あぁ、別に構わねぇよ」

「ありがとうございます！！はぁ～…よかった…」

その後は唯と中野の練習風景を見て
先に寝ると言ってスタジオを出た。
自室に戻るとまたメールが来ていた。

宛先名：橘　雄介

件名：なし

本文：メール返信しろよ！
　　ずっと待っ

パタン

俺は携帯を閉じた。
そのまま俺は就寝した。

―――――――――――――――――――――

そして翌日。

「さぁ、帰るか！」

「さらばじゃ、べっそ君！」

「なんですかその名前？」

「え？べっそうのべっそを取ってべっそ君だよ？」

「…いえ、そういうわけではなくて…」

「唯、梓行くぞー」

「あ、はい分かりました澪先輩」

「ほらきょう君もいこ♪」

「…あぁ」

こうして俺らは短い合宿を終えた。

余談。
返信をしてこないと思って直接話した方が早いと思ったのか、
雄介がやたらと夏俺の家に来るようになった。
勿論…話どころか家に一歩も入れなかったが。

第二十一話　再び合宿！！（後編）（後書き）

２度目の合宿が終了。
もうここまで来ましたか…
次回は学園祭前のちょっとしたイザコザでしょうか。

では、感想等受け付けております。

それではまた次回！！
ラルクでした！！

第二十二話　ギターのメンテナンス、擦れ違うココロ　【第一部】（前書き）

どうもラルクです。

今回アニメ一期１１話の半分の内容です。

ちなみにこの話は2，3話で終了予定なので
この回を

『第一部』

と、させて頂きます。
タイトルは違いますが内容は続いていますので
じっくり読んでいただければ嬉しいです。

それでは第二十二話、どうぞ！

第二十二話　ギターのメンテナンス、擦れ違うココロ　【第一部】

まだ残暑が残る9月中旬。
世間では7月、8月よりはまだ快適に過ごせると言っているが
暑さに滅法弱い俺にとって世間の言葉は通じず、ただただ
ダラけているだけの日々が続く。
それにこんな暑い中9月には高校の伝統だかなんだか知らないが…
イベントがある。それは学園祭。
どこの部活も準備と言うものをやっているのだが、
我が部活、軽音部は…

「ムギちゃん、ケーキ頂戴♪」

「あ、ムギ！私もケーキをくれ」

「ムギちゃん、ミルクティーお願い」

と、全くいつもと変わらないティータイム。
そんな中この部の1，2を争う厳しさを持つ中野が

珍しく鼻歌を歌い、超ご機嫌。
なんとも珍しい光景だ。

「何かご機嫌だな、梓」

田井中が話しかけると鼻歌を止め、若干恥ずかしそうに笑う。

「もうすぐ学祭でライブが出来ると思うと嬉しくて」

「初々しいねぇ～」

「去年の軽音部のライブも見たかったです」

すると、ライブの被害者の秋山が紅茶を思い切り吹き出した。

（…去年なぁ、まさかの悲劇だな…あれは）

「あはは…澪は去年、大活躍だったもんな…」

「…あれは活躍と呼べねぇだろ」

「恭哉見たのか!?」

「…見たも何も目を塞がれてたんだ、見れるわけねぇだろ、第一見ねぇし」

「そうか、よかった…」

俺一人に見られてなくても、
会場にいた人全員に見られているから
どうあれ意味は無いと思う。

「えっと…去年何かあったんですか？」

「ステージで転んで「わぁぁぁーっ！」…」

田井中が暴露しようとするも、秋山がその口を塞いだ。

「去年の学園祭のライブならちゃんととってあるわよ」

と言って山中は『桜校祭　軽音部！』と書かれたＤＶＤを片手にニヤリと笑った。
結局田井中が言っても言わなくても変わらなくなった…
いや、むしろ映像が付いているこっちの方が嫌だろう。

「あ！見たいです見たいです！」

「ちょっ…」

これから悲しい事件が映像に映し出されるとは
全く思っていない中野は見る気が満々だが
当の被害者は…

「いや、梓…考え直さない？」

説得をしている。

「唯ちゃんりっちゃん！」

山中が指を鳴らすと唯と田井中は秋山の両腕を掴み
ずるずるとパソコンから遠ざけていった。

「は～な～せ～！」

残念ながら離さない。

「ていうか恭哉見るなーっ！！」

「…見ねぇよ」

「えい♪」

「…は？」

見ないと言ったはずなのに何故か
目を誰かに塞がれた。
多分声からして琴吹だろう。

「…いや、見ねぇから」

「ダーメ♪」

「…はぁ」

「それじゃあお勧めシーンから」

どうやら初っ端からあのシーンを流すらしい。
隣から微かに音声が聞こえてくる。

「やめろ梓、危険だぞ、呪われるぞ～」

隣からはドタンというこけた音。

「…どうやら遅かったみたいだな」

「…み、見ちゃいました」

「…遅かった」

悲惨な事件を見た後は
初めからしっかりライブ映像を見る。

「それにしてもライブの時だけは、みなさん凄い演奏してますよね」

「言うようになったな、このぉ！」

田井中は中野にスリーパーホールドをかける。

「ふふっ…」

静かに映像を見ていた唯はいきなり笑みをこぼした。

「…いきなりどうした」

「色々思い出しちゃってさ」

「…お前、声ガラガラだったもんな」

「あはは、そうそう」

と、懐かしいというかまぁ、去年の事を
久々に思い返してみた。

「梓にとっちゃ、軽音部として初ライブだな」

「…期待してるぞ新人」

「はい！私頑張ります！」

どうやら、やる気いっぱいらしい。

「盛り上がってるところ悪いんだけど…」

と言って、軽音部に訪問者が来た。

「…真鍋が来たってことは、また…か」

「そう、これを届けに」

真鍋は持っていた一枚の紙を田井中に渡す。

「講堂使用届…」

「…はぁ、またか」

とりあえず呆れる。
こいつを部長にして本当によかったんだろうか…

「あー…忘れてた」

何とも呑気な声でさらっと言う。

「そんな呑気でいいんですか！？」

「いや～…忙しくってねぇ…」

「去年にもこんな事あったな…」

どす黒いオーラを纏った秋山。
それを見た田井中は表情が固まった。

「…大人しく頭に受けろ」

俺の言葉の後、田井中の頭上に
硬く重い鉄拳が落とされた。

「じゃあ梓、書記な」

「え、私?.まぁ、いいですけど」

とりあえず全員椅子へ着席。

「えっと…使用者は軽音部……あの、名称って?.」

中野はボールペンを止め、紙に落としていた顔を上げた。

「バンド名でいいんじゃない」

「あ、はい」

中野はまた紙に目を戻すが
一つ間をおいた後また顔を上げた。

「そういえば、バンド名って何でしたっけ?」

「スイーツスマイル」

「恩名組」

「チョコレートメロディ」

ものの見事にバラバラだ。

「…丁度いい機会だ、今考るか」

「恭哉先輩、さり気無く無視しましたね…」

「…気にするな」

とりあえずさらっとアホらしい意見を無視し
他の意見を待つ。

「じゃあ、平沢唯とすっこけシスターズってどう?」

「私ら何もんだ!」

「…まず俺がいる時点でダメだろ」

「あ、そっか」

今更気づく唯。

「ピュアピュアとかどうかな？」

「もうネタはいいから真面目に考えようぜ」

「うっ…割と本気なのに…」

「本気だったんかい！」

「人のセンスは色々ですから」

「…いいから早く決めろ」

それぞれの意見はネタとしか考えられなくまともに決められない。

「よーし分かった！私が決める」

「「「「もう少しみんなで考えよう」」」」

何故かそこだけ団結力があった。

「…はぁ」

「じゃあ書類、後で生徒会室に持ってきてね」

と、誰かと思ったら真鍋。

「…お前、まだいたんだな」

「…いちゃ悪いかしら？」

「…いや」

若干言葉に覇気が混ざってた気がする。
今後何があっても真鍋を怒らすのはやめよう。

「あ、悪いな待たせちゃって」

「いいよ」

「和ちゃん、たまには帰りにお茶しようよ」

「分かった、後でメールする」

唯の返事を快く受け入れると軽く手を振って部室を出て行った。

「…で、バンド名は」

「まぁ、バンド名は各自一晩考えてくる事にして、練習するか」

まぁ、妥当な意見である。

「学園祭も近いんだから、気合いれないとな」

「はい！」

とりあえずバンド名決めは一旦保留にして
練習する事に。

「あ、そうだきょう君」

「…ん？」

ストラップを肩にかけて、シールドをアンプに
つないでいる最中に唯が何かに気がついたように
俺を呼び止めた。

「最近音の調子が悪くて」

と言って、レスポールを抱えてトコトコとこっちへ来る。

「…貸してみ」

「うん」

仕方なくまたストラトをギタースタンドに戻してレスポールを手に取る。

「……」

一目見て明かに原因発覚。

「…六弦まで死んでる」

「え？」

六弦まで見事に錆びていた。
じっくり見るために一旦長椅子に置く。

「…ネックが完璧に反ってるな」

「本当ですね…」

中野も見に来て一緒に見る。

「…こうもボロボロだと、買った時の面影が一つもねぇな」

「あの…弦っていつごろ交換したんですか？」

「え？弦って交換するものなの？」

今の言葉は聞かなかった事にしよう。

「…ちゃんとメンテしてんのか？」

「…だってやり方知らないもん」

「恭哉、教えてないの…？」

「…いや、教えたはず」

「…う～ん、忘れた！」

何胸張って言ってんだよ。

「…はぁ、楽器店持ってくか」

「え？きょう君出来ないの？」

「…出来なくはねぇけど、楽器店の人にやってもらうのが一番だろ」

「分かった」

という訳で、レスポールを元の素晴らしい新品に戻すべく楽器店へ部活を切り上げて行く事に。

―――――――――――――――――――――――――

「はいは～い、到着～」

楽器店もとい１０ＧＩＡに到着。

「じゃあ私ここで待ってるから」

店内へ入ろうとするといきなり
秋山が歩みを止める。

「え？何でですか？」

「私左利きだから、右利き用の楽器見ても悲しくなるだけだし…」

悲しいオーラを出しながら言う。

「あ、でもほら澪、なんかレフティフェアやってるよ？」

「へ！？」

秋山は顔をハッと上げてポスターに目をやると

そそくさと田井中とともに店内へ入っていった。

「…はぁ、俺らも行くか」

「そうですね…」

店内に入り一旦レフティのところへ行くと
目を輝かせながらレフティベースを眺めている
秋山がいた。

「こ、ここは天国ですか!?店員さん!ここにあるの全部ください!!」

「…落ち着けアホ」

(…よかったな雄介もとい天国少年、新たに天国少女が仲間になったぞ)

いつかにあった天国少年の話がここで蘇る。

「澪ちゃん楽しそう」

「左利き用は少ないですから」

「…お前らは早くメンテ行ってこい」

「そうですね、唯先輩行きましょう」

「うん」

（…俺はどうすっかな、あ～…あれ買っとくか…）

と、考えてると

「あれ?きょう君も一緒に行かないの?」

「…あぁ、ちょっと買うものがある」

「そうなんだ、残念…」

「…いいから行ってこい」

「うん、行ってくる」

とりあえず離れる事は絶対に無い秋山とその付き添いの田井中と琴吹それとメンテに行く唯と中野に一端の別れを告げある物を買いに行く。

「…弦はこれでいいとして」

とりあえず弦はエキストラライトゲージのセットを手に取る。
ちなみに俺が来たのは弦やシールド、チューナーなど
ギターに必要な物がある売り場。

「…後は」

その後はポリッシュ、専用のクロスやフィンガーイーズなどの弦メンテ製品。
電気系の不具合のためのスプレーなど、メンテナンスに必要不可欠の物を
取り揃えていく。

「…こんだけあればいいだろ」

それらのメンテ用品を持ってレジへ。

「いらっしゃいませ」

ピッ…ピッ…

店員が商品の精算を終え

「××××円になります」

学生にとって高額になるとは思ってはいたがさすがに言われるとシンドイ。

「……」

とりあえず財布を出し中身を確認。
中には一万円札が一枚に千円札が三枚
その他小銭がジャラジャラ。

「一万円お預かりします」

「…はぁ」

軽くため息を吐く。
だがメンテ用品を買わなければいちいちメンテナンスに来なく行かなければならず
それごとになかなか高いメンテナンス料を払わせるのは痛い。
それにアイツの財布の中にそんな金が入っているとは思えない。
後はメンテのやり方を教えなければならない。

「××××円のお返しになります」

俺の長方形の紙は丸い金属の塊の集団となって手元に帰ってきた。
とりあえず商品を受け取る。

「ありがとうございました～」

若干財布の中身が寂しくなったが仕方なく思い唯たちの元へ。

――――――――――――――――――――

「紬お嬢様、いらっしゃいませ！」

「あ、これは紬お嬢様！お久しぶりです！」

戻ってくると店員に囲まれペコペコ頭を下げられてる琴吹と

「ここムギん家の系列の楽器店なんだってよ」

「えっ！？」

「ビックリするんだよね～あの呼び方」

と、驚いている中野に解説している田井中と唯。

「…おい」

「あ、きょう君！」

「…メンテ終わったのか？」

「まだだよ」

「お待たせしました」

と、たった今ギターが帰ってきたようだ。

「お〜！綺麗になったなぁ〜」

「ギー太！」

「「え？」」

思わず唯から出た言葉に俺と中野は
同じ反応をしてしまった。

（…名前付けてたんだな）

「ありがとうございました！」

何故か目尻に軽く涙を溜めて

目をキラキラさせながら店員に礼を言う。

「い、いえ…あ、御代の方５０００円になります」

店員がそういうとさっきまでのキラキラが消え
何を言ってるのみたいな顔をしていた。

「え……お金とるの…？」

「…タダでやってくれたら誰だってメンテ用品買わねぇだろ」

「…どうしよう、お金無い」

「「え！」」

（…やりやがったコイツ）

「どうしたの？」

そんな困っている時にお嬢様登場。

「唯先輩、メンテナンスにお金かかるって知らなかったみたいで…」

「え？そうなの？どうしよう…手持ちあったかしら？」

といってカバンの中にある財布を取ろうとする。
すると後ろにいた店員の一人が慌てた様子でこっちに来る。

「おおおお嬢様！ここはサービスと言う事で！」

「そんな悪いわ…」

「とんでもない！日ごろお父様にお世話になっていますので！」

「え、でも…」

「いえ！ここはサービスさせてください！」

どうやらお金の事は問題ないらしい。
こんな事ならこのメンテ用品もサービスにして貰えばよかった…
無理か…

「…唯、これ」

「え？なぁにこれ？」

「…とりあえずメンテ用品一式買っておいた」

「きょう君が買ってくれたの…？」

「…あぁ」

「ありがとうきょう君！！」

袋を抱きかかえて喜ぶ。
まぁ喜んでくれたら何よりだ。

「キョウがわざわざ買ってきたんだぞ？これからはこまめにメンテしろよ？」

「うん！絶対する！」

「…その前にメンテのやり方な」

「あ…そうだった」

「…教えるから覚えろよ？」

「うん！」

と、買ったのはいいがやり方を知らないんじゃ全く意味が無い。
仕方ない、教えるか。

「恭哉先輩、いくらしたんですか？」

「…高額の長方形の紙が丸い金属の塊となって手元に帰ってきた」

「あ～…それはまた…」

今日は痛い出費だった。

――――――――――――――――――――

「それじゃあ、そろそろ帰りますか」

「「は～い」」

やるべきことは終わったので帰宅へと向かう。
が、ここで中野がある事に気づく。

「…て、あれ？澪先輩は…？」

「…どうせレフティのとこにいるだろ」

そう言ってレフティフェアのやっている店の一角を見ると予想通り今だ座ったまま体勢を変えていない秋山がいた。

「あ～…呼んでくるわ…」

田井中は渋々座り込んでいる秋山のとこへ。

「澪～ほら帰るぞ～」

「ヤダ」

「みんな待ってんだって」

「ヤダ」

（…子供かあいつは）

「ほら、澪ちゃ～ん」

「ちょっ律！」

田井中が一向に帰ろうとしない秋山の
襟首を無理矢理掴んで引っ張る。

「はいは～い、帰りまちょうね～」

「ヤダよ、もう！」

田井中は無理矢理こっちに来させようと引っ張るが
秋山はそれを拒みまたレフティフェアのところへ戻ろうとする。
いきなり引っ張られた秋山は抵抗できずに…

ドサッ

バランスを崩して尻餅をつく。

「な、何やってんだよ澪～」

「もう良いよっ！！！」

「え…？」

立ち上がると少々大きな声で言う。

「……」

パキ…

この時組み合わさっていた“ココロ”にひびが入る音がした。

―――――――――――――――――――――

若干空気が重くなったまま店を出た俺ら。
現在の時刻はすでに6時をになっていた。

「よかったぁ～ギー太キレイになって♪」

「名前付けてたんだな…それ…」

「…ギターに対する愛着のベクトルが違う表れだな」

「…確かにそうですね」

服着せたり、一緒に寝たり、まさか名前までつけるとは俺ですら思わなかった。

「この後どうする？」

「う～んそうだな～…よしっ！お茶でも飲んでくか！」

「またお茶ですか…」

田井中の提案にまたか…という顔でゲンナリする中野。

「…俺はパス」

「そういう事言わずに行くぞ」

「…断る」

「ノリ悪いぞキョウ」

「…悪くて結構」

何か普段と若干違うような気がする田井中。
特に秋山と接する時に。

「あっゴメン、私この後和ちゃんと約束あるんだ～」

「えっ！和も来るの！？私も行って良い！？」

この言葉を聞いた田井中は…

「…え…？澪…？」

小さく言葉を漏らした。

「あそっか、澪ちゃん、和ちゃんと同じクラスだもんね～いいよ♪」

「ホント！？」

凄くうれしそうな表情をする秋山。

「……」

それを見て複雑な表情をする田井中。

パキ…

また小さくひびが入る音がした。

「きょう君も来る？」

「…いや、お前らだけで楽しんで来い」

「そう？じゃあみんなは？」

「いえ、大丈夫です」

「澪ちゃんと唯ちゃんとで楽しんできて」

「…私もいい……」

ポッケに手を突っ込み視線を落として
小さく拒否する田井中。

「じゃあみんなバイバ～イ」

「また明日」

「お疲れ様でした、また明日です」

「また明日ね、澪ちゃん、唯ちゃん」

「…じゃあな」

「……」

両手を振って別れを告げる唯。

軽く手を上げて唯と一緒に歩いていく秋山。
ペコっと軽く頭を下げる中野。
笑顔で手を振る琴吹。
視線を落としたままふてくされたように言葉を返す田井中。
団扇で扇ぎながら田井中の態度に不安を覚える俺。

「……」

唯と秋山の二人は目的地へと向かって
田井中の態度には気がつかずに歩いていった。

「…また明日な」

俺ももう用はなくなったので俺も
帰宅路へと足を向ける。

ガシッ

が、誰かに肩を掴まれる。

「キョウちょっと待って」

「…なんだよ」

「ムギ、梓、あの二人を追うぞ」

「「…え？」」

真剣な顔でそんな事をいいやがる。

「…俺は帰るから」

「ダメだ」

「…なんで」

「いいから、よし！行くぞ！」

勝手に納得して勝手に歩いていく田井中。

「りっちゃん！」

「待ってくださいよ律先輩！」

スタスタ歩いていく田井中を追っていく琴吹と中野。

「…はぁ」

仕方なく俺も渋々後ろから付いていく事にした。

パキ…ピキピキ……

少しずつ少しずつひびが入りながら
時は進んでいく。

ピキ……パキ…

その組み合わさった“ココロ”が
いつ壊れてしまうのかは誰もまだ知らない…

第二十二話　ギターのメンテナンス、擦れ違うココロ　【第一部】（後書き）

前書きでもお話しましたが
次回の第二十三話と内容が繋がっているので
この回を第一部とします。

感想等お待ちしてます。

ラルクでした。

第二十三話　全てが崩れ去るココロ　【第二部】（前書き）

どうもラルクです。

今回は前回の続きです。
タイトルは違いますがこの回を

『第二部』

と、させて頂きます。

では、第二十三話どうぞー！！

第二十三話　全てが崩れ去るココロ　【第二部】

現在俺たちは秋山、唯、真鍋がいる席のちょっと離れた席を陣取り、その様子を眺めているところだ。

「…お前何してんの」

「隠れてんだよ、ほらキョウも隠れろって」

何故か店のメニューで目から下を隠している。
が、そんな事しても服装、髪型等で見られればバレるのでただただ無意味な事をしているだけ。

「…お前、若干楽しそうだな」

「うん！だって探偵さんみたいなんだもん♪」

俺の横にいる琴吹は何故かニコニコとしながら
このこそこそと見物する無駄な行動を楽しんでいる。

「…で、お前は呆れてると」

「…呆れてると言うか…何でコソコソとこんな事を…」

一方中野はこの行動の意味がさっぱり分からない様子。
事実俺も分からない。

「チッ…なんか良い雰囲気だな、あの二人」

二人とはきっと秋山と真鍋のことだろう。

「…楽しそうにして何が悪いんだか…はぁ」

と、小声で言い軽く呆れる。

「……」

何がしたいんだか分からない田井中は
真剣な眼差しかそれとも不安の眼差しか
双方どっちともとれる眼で楽しくお茶会を
している秋山と真鍋を見る。

「…一つ聞いていいか」

「なに」

なんとなく頼んでおいたアイスコーヒーを片手に
田井中に一つ質問をしてみる。

「…お前何しに来たんだよ」

「…何って？」

「…ここに来た目的、ただ見に来ただけじゃねぇだろ」

「それは…その…」

「…何か聞きてぇのか知らねぇけど、わざわざ回りくどい事する必要ねぇだろ」

と、言うが…

「……」

田井中はあいつらを見つめたまま黙っていた。

「…はぁ、まぁ俺は何か関係ある訳じゃねぇし…どうでもいい」

「…キョウがよくても私が関係ある」

さっぱり意味が分からない。
あいつらが仲良さげにしているのに対して
何故田井中が関係あるのかさっぱりだ。

「…何か、ムカムカするんだよ」

最後にその言葉を付け足した。
今の言葉で大体分かった。

（…こいつはあいつらに…はぁ）

「よし、突撃！」

「「？？」」

いきなり立ち上がったと思うとツカツカと
秋山と真鍋、あとケーキをムシャムシャ食ってる唯のいる
席へと突入する。
そんな突然の行動にただ頭にハテナを浮かべるしかない俺ら。

「お二人さ～ん、仲良いっすね～♪」

店内に思いっきり響く声で
秋山に隣に座る、というか本当に突撃する。

「…はぁ、とことんアホだなアイツは」

「皆さん驚いてますね」

「…そりゃそうだろ」

あっちの会話はさっぱりだが、行動は分かる。
見る限り何か微妙な空気が流れている。

「何を話してるんでしょうか」

「う～ん、聞こえない…」

耳に手を当て聞こうとするが
聞こえないらしく琴吹は悪戦苦闘していた。

「あ、恭哉先輩！気付かれちゃいましたよ！？」

「…だからどうって事はねぇだろ」

中野も探偵ごっこをやっていたのか知らないが
気が付かれた事に残念そうだった。

「それにしても律先輩、どうしたんですかね」

「恭哉君は何か知ってる？」

「…知ってるっつうか、まぁ大体の予想は付く」

「教えてくれませんか？」

「…そうだな、じゃあ例えばだ…俺と唯は付き合ってるな」

「はい」

「…仮に唯がいるのにも関わらず他の女、例えば中野でもいい」

「私…ですか」

「…あぁ、で、俺が中野と楽しそうにしているのを見てる唯はどんな気持ちになる」

「あぁ～そういうことね恭哉君♪」

琴吹は理解したのか、手をポンと叩き、うんうんと頷く。

「え？ムギ先輩分かったんですか？」

「うん♪」

「…で、どうだと思う」

「えと、好きな人が自分ではなく、他の人と楽しそうにしているんですよね」

「…そうだ」

「…なった事がないのでアレですけど、多分…嫌、だと思います」

「そうね、だから嫌な気持ちになるの」

「…つまり今の田井中はその状態だ」

「あぁ…なるほど、そういう事ですか」

簡単に言うと、田井中は秋山と真鍋が仲良く話したりするのが

嫌だ。妬むほどまでは行きはしないと思うが、多分嫉妬のようなものを
していうんだろう。

「…田井中にも意外な一面があるらしいな」

「そうですね」

「そうね～焼きもち妬きさんだなんて♪」

（…ただその嫉妬が限度を過ぎなきゃいいんだが）

「ねぇねぇ恭哉君」

「…あ？」

「恭哉君は唯ちゃんがもし他の男の人といたら焼きもち妬く？」

いきなり何を聞くんだこいつは。

「私も気になります…普段はクールというか冷静なのでそういう一面があるのかと…」

こいつも何を言うんだ。

「…そんなん聞いてどうする」

「あ、いえ…単なる興味本位と言いますか…」

「…まぁ、妬くというか複雑だとは思うが」

「でもちょっとは妬いてるのね♪」

「恭哉先輩でも焼きもちは妬くんですね…」

「…何かいけないか」

「いえ！そういう訳ではないです！はい！」

（…はぁ、何かどっと疲れたし、帰るか）

「…そんじゃ帰る」

「え？帰るんですか？」

「…帰るんです」

俺は立ち上がりながら返答する。

「残念ね…またね恭哉君」

「…あぁ」

俺は横に立てかけてあったギターケースを背負い
通学鞄を手に持ち帰宅しようとする。

「…あ、これコーヒー代」

俺は財布からこの前メンテ用品を買った際に俺の財布へと入り込んできた
金属の塊の集団からコーヒー代を出し、テーブル上へ置く。

「…またな」

「はい、お疲れ様でした」

「また明日ね、恭哉君♪」

軽く頭を下げる中野とニコニコと笑みを浮かべながら手を振る琴吹に軽く左手を上げて別れを告げる。

「ちょっと律…」

「何？なんか嫌なの？」

「そうじゃないけど…」

「けど…何？」

「…いや、和たちもいるんだし、ここお店だから静かにしないとダメだろ」

「…悪かったよ」

出口へ行く時、秋山と田井中のこんな会話が聞こえてきた。
その時の田井中の様子はやはりおかしかった。
真鍋の名前が出てきた時には特に。

「あ、お客様御代の方は…？」

「…連れの奴に金渡してあるんで」

「えっと、お連れの方は…」

「…あそこのテーブルのツインテールの女子です」

「はい、分かりました…ご来店ありがとうございました」

店を出ると昼間の暑さは若干和らいでおり
空は茜色の空から徐々に暗い色に移り変わる真っ最中だった。

（…明日も様子見るか）

ピキ…パキパキ…

ココロのひびは徐々に深くなっていく…

ピキパキ…ピキピキ…

そのココロが割れるまでの時間は……

ピキ…パキ…バキッ！

もうすぐそこまで来ていた……

―――――――――――――――――――――――――

翌日。
午前の授業が終わり昼休み。

「恭哉ー！パン食おうぜ～」

「…お前うるさい」

「つーか最近弁当どうした？」

「…作んのダルイ」

「ふーん…今度作ってもらおうと「…テメェは弁当箱でも食ってろ」なんですとぉ!?」

俺の席の前を陣取ってるこいつは
相変わらずうるさい。

「…いいから誰かの弁当箱でも食ってこいよ」

「そんな人間以外しか出来ない事を人間である俺に言う!?」

「…お前何言ってんの?お前人間じゃねぇじゃん」

「うわっひど!俺この人に人間として見られてなかったのかよ…」

「…他の奴に聞いてみろよ」

と、俺が言うと席から勢い良く飛び上がり近くにいた女子の軍団を見つけると…

「なぁなぁ！ちょっといいか！？」

「きゃっ…な、なに？橘君」

「俺ってさ、人間だよね？」

「「「……」」」

そこにいた女子の軍団は今の言葉を聞いた瞬間俺の口からは言い表せない顔になっていた。

「……」

その一部始終を焼きそばパンを頬張りながら見ていると
集団の一人がこっちを見て困惑の眼で見てくる。

「…はぁ」

仕方なく俺は席から立ち、アホの元へ行く。

「ねぇ！人間だよね？」

「…黙れ」

バコッ

「フボァッ！」

とりあえず言葉より先に行動という方が先に脳が俺に信号を送ったので、
聞いてる姿が気持ち悪いアホの脇腹を思い切り蹴った。

「…悪いな」

一言そう言って、床に転がっているアホの足を持ちズルズルと自分の席へと持って帰る。

「……」

連れて帰ってきたのは良いものの、全く復活しないのでとりあえずシカトして残りのパンを頬張る。

「……」

しばらくパンを食べ、事前に買ってきていたミルクティーを飲んでいると…

「はい！ランチタイム終了ー！」

と、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「…あいつ」

声のする方へ目線を向けると
妙に笑顔がぎこちない田井中がいた。

「…いや、私は今から…」

しかも秋山と真鍋のところにいる。

「これから学祭までは、昼休みも練習するから」

どうやら練習する事を伝えに来たらしい。
だが俺には何かが違う気がした。
多分、いや絶対…

（…また嫉妬か、意地でも真鍋から離したいのか…）

きっと練習と理由をつけて秋山と真鍋を離すつもり。
ただそんな気がしたというだけ、絶対そうという訳ではない。

「キョウ、お前も行くぞ」

「…は？」

「部室行って練習！ほら早く！」

俺は持っていたミルクティーと共に
強制的に部室へと連行された。

「はっ！あれ？恭哉いねぇし…恭哉ー！どこ行ったー！！」

アホがなにやら叫んでいたが俺はシカトした。

――――――――――――――――――――――――

ガチャ

部室に入るとすでに唯、中野、琴吹が揃っていた。

「あ、きょう君来たー！」

「あ、恭哉先輩どうも」

「恭哉君、紅茶いる？」

「…いや、練習すんだろ」

いきなり的外れな発言をされる。

「……」

俺はスタンドにかけてあったストラトを持ち
そのまま長椅子へ座る。
とりあえずアンプにつないでチューニングする。

「……」

唯たちも各自演奏するための準備をしている。

「いやー、今年の学園祭は澪、どんな風に盛り上げてくれんのかなぁ～」

そんな中、田井中だけはずっと秋山のそばで

「去年はパンチラだったし～…今年はへそ出しとかかなぁ～？」

「……」

田井中は秋山の制服を引っ張ったりしてちょっかいを出すが
秋山は無視してベースの準備をする。
大分不機嫌そうな顔をしている。

「……」

「でもキョウがいるから恥ずかしいか～」

「……」

多分俺だけだ。この雰囲気がおかしいと思っているのは。
喋り方といい表情といい、おかしい田井中に
背を向けて準備をしている唯、中野、琴吹の三人は
全く気付いていない。少なくとも中野、琴吹の二人は田井中の事は
知ってるはず。
でも特に気にかけてはいない。
だから次の秋山の言葉に……

「練習するんだろ！！」

ピキ…バキ…

「え…？」

「澪先輩…？」

「澪ちゃん…？」

驚いた。

「……」

俺は驚かずただただ平然と見る。
内心はイライラしながら。

「…するよ～」

変な笑みを作って言う。

「だったら…」

「たこ焼き～」

「はぁ？」

「へへへ…ポニテ～！」

「ちょっ…」

「三つ編み～♪」

「ちょっ…やめろって」

イラッ…

俺はイライラする。
正直こういうのは好きじゃない。

「もう！何なんだよ！」

秋山はしつこい田井中の手を振り払う。

「あ～そうそう、お勧めの凄い怖いホラー映画持ってきたんだけど…」

全然反省の色が見られない…

イラッ…

それを見てまた俺はイライラする。

「も、もう教室戻るぞ！！」

ピキ…バキバキ…

「ふーん、戻れば？」

「はぁ？」

ガラガラ…

ひびが入っても崩れる事無く保っていたココロは
徐々に欠片が崩れていく。

「悪かったよ、折角の和との楽しいランチタイムを邪魔してさ」

「…ッ…」

俺は黙っていた。
少し舌打ちして。

ピキ…パキ…バリン！！

ガラガラガラガラ……！！！

何とか保っていたココロは崩れていき…

…ガラ……

全てが崩れ去った…

「はぁ!?そんな事言ってないだろっ!!!」

「教室に戻るってのはそういうことじゃん!!」

秋山は相当の声量で怒鳴りつける。
それに対して田井中も同じように怒鳴りつける。

「え?な、なに?どうしたんだろう…?」

「え、えと…あの…」

「お、お茶にしよう?ね?お茶にしない…?」

唯はどうしたのかが分からず困惑の声を出し
中野はいきなりの事でオロオロしていて
琴吹は何とかこの状況を脱しようと提案するが…

「教室に戻るんだろ!?早く戻ればいいじゃん!!」

「あぁ戻るよ!!」

全員の言った言葉は二人の耳には届いておらず
ますますヒートアップしている。

「……」

そんな口喧嘩が俺の目の前で起こっている。
正直俺もイライラしている。
でも怒鳴る気は無い。
俺はうるさいのは嫌いだ。
しかもこんなガキの喧嘩みたいなのは…
だから誰かに止めてとかそんな事を言われなくても
俺の身体は勝手に動いた。

ジャラァァ〜ン!!!!

演奏をするために準備をし終えていたストラトを
アンプの音量を若干大きくして思い切り鳴らす。

「「……！？」」

「きょう…君？」

「恭哉先輩…？」

「恭哉君…？」

いきなりギターの音がして何かと思ったのか
喧嘩をしていた二人を含め、全員がこっちに注目する。

「……いい加減にしろ」

丁度全員黙っていたので俺は下を向きながら
聞こえるように全員に言う。

『……ッ！！』

顔を上げると俺の顔を見てか
全員体が硬直しているかのように
動きが止まっていた。
それは仕方ない。
自分でも分かるほどの不機嫌な顔で
ましてはこいつらにこんな顔を見せた事がないから
余計にビックリはする。

「……学祭近ぇから、昼休みに練習すんのはいいけどよ……なぁ、
田井中」

「…ッ！」

そう言って俺の前にいる田井中を睨む。

「……俺たちを呼び出しておいて秋山と口喧嘩か？
練習しに呼び出したんじゃねぇのか？」

「……」

「…俺たち集めて秋山との口喧嘩を見せ付けるんなら…
悪ィけどそんなん見る気ねぇ…勝手にどっかでやってろ」

「…そ、そんなつもりじゃ…」

「…そんなつもりじゃねぇならするな、今のお前らはただの迷惑だ」

「…っ…で、でも練習は…」

「…こんな状態じゃ練習できねぇだろ…後は放課後だ…」

俺はアンプの電源を切り、ストラトをスタンドに立てかけ扉へ向かう。

「…放課後までに頭冷やしとけ」

そう言って俺は

ガチャ

扉を開けて

「「あ…キョウ（恭哉）」」

バタン…

部室から出て行った。

第二十三話　全てが崩れ去るココロ　【第二部】（後書き）

え～第二部いかがでしたでしょうか？

今回は恭哉君の冷静な怒り、と言うものを
書かせていただきました。

次回でこの回が終了になると思います。
現在製作中なのでまた近日更新できるかと……

それでは感想等お待ちしてます。

ラルクでした！！

第二十四話　元通りになるココロ、バンド名決定。　【第三部】（前書き）

どうもラルクです。

今回【第三部】で、この回終了です。

では、第二十四話、どうぞー！！

第二十四話　元通りになるココロ、バンド名決定。【第三部】

翌日。

部室での騒動があってから一日がたったが
普段の陽気な空気が流れている部室は
今は重苦しい空気が流れていた。

「……」

やはりあんな事があったから練習なんかしない。
いや、出来ないが正しい。
なぜなら…

「律先輩…来ませんね…」

そう、田井中が来ていない。
しかも騒動があった昨日から…
多分顔を合わせづらいんだと思う。

「…はぁ」

「…あ、恭哉」

「…なんだ？」

「その…ゴメン」

俺のいる長椅子のところへ来て
頭を下げて秋山は謝ってきた。

「昨日は気持ちがちょっと落ち着かなくて…謝れなかったから…」

「…頭上げろ」

「…え？」

「…別に謝んなくていい、ただ今後は気をつけろ」

「で、でも…」

「…いいから」

「うん…」

凄く申し訳なさそうな顔をして
自分の椅子へ戻っていった。

「ところで恭哉君」

「…あ？」

（そういや山中、居たんだっけか…）

「部活、どうするの？」

「…どうするも何もできねぇだろ…ドラムがいねぇんだから」

「そうね～…じゃあ個々に練習するしかないわね～」

「…そうだな、じゃあ唯と中野は分からないところとか俺に聞きながら練習」

「うん…」

「はい…」

「秋山は…教えるのは無理だから、難しいとか思ってるところを重点的に練習」

「…そうだな」

「琴吹は…秋山と同じだ」

そう告げると各自準備に取り掛かろうとした…

「あの…もしこのまま律先輩が戻って来なかったら…ライブ、どうなるんでしょう…」

が、中野がいきなりこんな事を言う。

「…どうなるも何も、出来ないだろ…」

「そう…ですよね…」

「もしくは…」

山中が突然口を開いた。

「代わりを探すとかね」

「…へ？」

その提案に秋山は思わず声が漏れる。

「まぁ、万一の事を考えとくって事だけど…」

「……」

その提案も一理あるかと言われれば、微妙だ。
今更練習して俺たちの音楽に合わせるなんて出来ない。
いくら田井中よりうまいドラマーがいてもだ。

「りっちゃんの代わりはいませんっ！！」

琴吹もその提案に反対。
断固反対で声を出した。

「…田井中を思い切り怒った俺が言うのもなんだが…琴吹の言う事は正しい…
田井中の代わりなんて絶対にいねぇ…」

「恭哉君…」

「ムギちゃん…きょう君…」

「待ってよ…りっちゃんが来るの、待っていようよ…」

普段の琴吹とは違う弱弱しい声でそう訴える。

「りっちゃん、きっと来るから…お願い、恭哉君」

「ムギちゃん…」

「ムギ先輩…」

確かに今は練習なんてやっても身が入らないし
そっちの方が今は学園祭ライブなんかよりも重要だ。

「…分かった」

「…ありがとう！」

それから放課後。
辺りは茜色に変わり下校時間。

「……」

待ったが…田井中が部室に姿を現すことは無かった……

―――――――――――――――――――――

部活が終わり唯と帰ろうとした時、何故かチョイチョイと山中に手招きされた俺は、唯に待っててとの用件だけ伝え、現在職員室。

「…唯待たせてんだけど」

「まぁまぁ、ちょっと待ちなさいって」

「…じゃあ早くしろ、呼んだって事は何かあんだろ」

「ええ、単刀直入に言うわ」

この顧問にしては珍しく真面目な顔。
きっとそれなりの話が…

「…最近甘い物に手を出しちゃって、体重が…って、待ちなさい恭哉君」

それなりの話なんて無かった。

「…真面目な顔で何言うかと思えば…ふざけるなアホ」

「教師をアホ呼ばわりするのはどうかと思うわよ？」

「…実際そうだろうが、つーか用件はそんだけか？」

「今のは冗談よ、本題はね…」

今度もしっかりした真面目な顔になり、今度こそはしっかりした話をしてくれるだろう。

「軽音部の事、というかりっちゃんと澪ちゃんの事ね」

まぁ、しっかりした話だ。

「…あれは俺の問題じゃない、秋山たちの問題だろ…それに俺が入って解決したら意味ねぇだろ」

そう、俺が解決したんじゃ意味が無い。あいつらがしなければ。

「違う違う、別に解決して欲しい訳じゃなくて…うーん、何て言えばいいのかしらね…」

「……」

「…あ！手助けしてあげなさい」

（手助け…？）

「…助言でもしろと？」

「そうね、助け舟出して欲しいわね」

「…それで何で俺？」

「あなたは軽音部の副部長じゃない」

「…俺の意志じゃない」

「恭哉君以外出来ないから言ってるの、ほかのみんなが説得してるところを想像してみなさい」

（…唯は、まず無理だ…琴吹、あの迫力だと説得力に欠ける…中野、いざなるとオロオロするな）

「…確かに無理だ」

「でしょ？だから恭哉君にやってもらうのが一番なのよね…」

「…俺がやる理由にはならん、それにあいつらなりに答えを出すだろ」

俺はそう告げて職員室のドアに歩みを進める。

「じゃあ最後に一つだけ…」

「…なんだ」

「助け舟よろしく！！頑張りなさい副部長さん！！」

バンッ！

「イッテ…だから俺は…「さ、下校の時刻とっくに過ぎてるわよ～、ほら生徒は帰宅！」…おい」

強制的に背中を押され俺は職員室の外へと追い出された。

「…はぁ」

仕方なく俺は下駄箱で待っている唯のところへ行った。

「…待たせて悪い」

待たせていたからなのか、それとも違うのか…分からないが唯の横顔が何故か悲しい表情になっていた。

「あ、きょう君！」

でも俺が呼んで、振り向く頃には表情はいつもの唯と変わりなかった。

「ううん、大丈夫！それよりさわちゃん先生と何話てたの？」

「…いや、別に大した事じゃない…ただメンドイ事しなきゃいけねぇ事には変わりは無い」

「…？」

「…行くぞ」

「あ、待ってよきょう君～」

帰り道。
俺と唯、二人隣同士で歩く。

「……」

「……」

でも会話は無い。
さっきの元気はどうした…
そんな状態が別れ道まで続いた。

「…唯」

「…え？」

「…ここ」

「…あ、うん…じゃあね」

「…あぁ」

別れ道に来ると少しの言葉を交わして
唯と別れた。
その時の表情はまたとても暗かった。

「……」

俺は背を向けて歩く唯の背中を見ていた。
その背中は弱く、悲しみが溢れていた。

「…はぁ」

俺も背を向けて歩き出す。
一歩…二歩…三歩……ポスッ

「…？」

俺の背中に何かが当たった。

「……」

振り返るとそこには…

「…きょう…く…ん」

弱弱しい声を出して、今にも泣きそうな顔をしている唯がいた。

「…どうした」

「…あずにゃんが言ったみたいに本当に学園祭までに来なかったらどうしようって思ったら…不安になっちゃって…」

俺は唯を優しく抱きしめた。
唯は俺の服を掴みそう訴える。
不安だったから下駄箱でも表情が暗かったのか。

「…そうか」

「…うん」

「…大丈夫だ、何とかなる…なにせあのしぶとい部長だどうせすぐ復活するだろ」

「…うん」

「…ほら涙引っ込めろ、泣くな」

そういうと、眼を軽く手で拭いて…

「エヘヘ／／／」

いつものような子供のような無邪気な笑顔を見せる。

「…ほら、帰るぞ」

俺は唯を離そうとする
離す…離す…離れない…

「…おい、唯」

「…なぁに？」

「…帰るって言ってんだけど」

「うん」

「…いや、うんじゃねぇよ…離せって」

「やーだ♪」

「…はぁ」

俺はしばらくそのままにしていた。

「はぁ～…久しぶりにきょう君に抱きついたから何か嬉しくなっちゃった♪エヘヘ／／／」

「…あっそ、ほら早く帰れ…」

「うん！ゴメンね？いきなり…」

「…いや、別に」

「じゃあねきょう君！また明日！」

「…おう」

唯は笑顔で自宅へと走って帰っていった。

「…俺も帰るか」

そうして俺も帰路についた。

（…さて、明日にでも助け舟だすぐらいしておくか…）

――――――――――――――――――――――――

翌日の昼休み。

俺は秋山に用件を伝えようと教室内を見るが、
何故か居なくなっており、真鍋に聞いても知らないとのこと。

「…あいつどこ行ったんだよ」

と、廊下をウロチョロしてると階段を上がっていこうかいかないか、
一段上がっては一段降り、と無駄な運動を繰り返している秋山に遭遇。
まぁ、なるべく早く用件を伝えようと後ろから声をかける。

「…お前何してんの？」

「うわぁ！きょ、恭哉か…ビックリさせないでくれ…」

驚かれてしまった。
てかそっちが勝手に驚いたように思えてならない。

「…つーか教室あっち、上行っても意味ないだろ」

「い、いや…その…」

何かを隠している様子。
…もしかして

「…2組に行く気だったろ」

「へ！？」

図星だったのか変な声を上げる。

「…誰に会う気だったんだ？」

「い、いや別に私は律を見になんか…」

どうやら田井中に会いに行くつもりだったらしい。
でも、今日は…

「…田井中なら風邪で休みだってよ、ほら」

といって、俺は一時間目前に送られてきた唯からのメールを見せる。

「えと…本当だ、律…風邪で休みなんだ…」

「…そこでだ、丁度いいから話がある」

「え？」

「ここじゃあれだな、少し場所移動するか」

「え、あ、ちょっ！恭哉！」

てことで廊下から場所を移動し、部室前。

「どうしたの？恭哉からなんて珍しいな」

「…そうだな、こういう事が無ければ俺も別に何か二人で話す理由は無いな」

「こういう事？」

「…これから話す事だ…じゃあ本題だ」

「うん」

一旦一呼吸入れて山中に言われた通り助け舟を出す。

「…一度ちゃんと田井中と話して来い」

「…え？それってどういう…？」

「…仲直りしろっていうか、しっかり話せ、言いたい事を…怒ってたら伝わるもんも伝わらないだろ」

「でも…」

「…お前は田井中が嫌いか？」

「いや、それは絶対ない！」

「…それなら安心だな、田井中だってお前の事好きだろ…ずっと一緒に居た大切な奴だろ」

「…うん」

「…なら、尚更話したほうがいい…いいのか？このまま田井中と仲悪いままで」

「…嫌だ、律と仲悪いままなんて嫌だ…」

こいつだって仲直りする気持ちはある。
田井中はこいつの気の許せる一番の友達。

「…でも、全てが田井中のせいじゃない、お前にも悪い事はある…」

「…うん、恭哉が怒った時思った…律に向かって話してたけど、私にも同じ事言ってるように聞こえた…」

全部田井中のせいじゃない、秋山にも非がある。
だからこそお互いが話して、理解して、仲を戻す必要がある。

「…中野は不安がってたろ、田井中が戻ってくるか…」

「…うん」

「…琴吹だって、田井中が戻ってくるのを待ってる…」

「…うん…」

「…唯だって、ずっと不安だって言ってた、涙流して…」

「……うん…」

「…俺だって、部長居なけりゃ俺がどうにかしなきゃいけねぇんだ…戻ってきてもらわないと困る」

「……うん……」

全員心配だ。

だからこそ一日でも早く、部長に戻ってきてもらう。

「…それにお前だって楽しくバンドやりたいだろ、去年と違って中野が入って、また楽しくなったろ？」

「…グスッ…うん」

秋山の目からは徐々に涙が出てきた。

「…いつも通り楽しくティータイムしたいだろ」

「…グスッ…うん…」

「…学祭ライブ成功させたいだろ」

「グスッ…うん、うん…」

「…田井中の、走り気味だけどパワフルなドラムが聞きたいだろ」

「グスッ…ぅ…うん…聞きたい…」

そんなに軽音部の事想ってるなら…
そんなに田井中の事想ってるなら…
やり直せば良い。

「…だったら、田井中と話し合え」

「グスッ…うぅ……う…ん」

今まで積み上げてきた『ココロ』が崩れて無くなったなら
今からでもまた積み上げれば良い。
バラバラになった『ココロ』をまた集めてくっ付ければ良い。

「…今日でも明日でもいい、風邪の見舞いのついでにちゃんと話して来い」

そういうと、秋山は涙を拭いて、俺の目を見る。
その目は不安などを振り切った意志の強い目をしてた。

「私、今日話してみる…律とちゃんと」

「…あぁ」

「それで律が帰ってきたら練習しよう！学祭近いから目一杯練習しよう！」

「…そうだな」

「ありがとな、恭哉」

「…別に、副部長としての助言だ」

「素直じゃないな、恭哉は」

「…それが俺だ」

「ぷっ！あはは！！」

「…笑うとこかよ」

「い、いや…なんかおかしくなっちゃって…あはは！！」

「…はぁ、そんじゃあ先帰るぞ」

「あ、待ってよ！私も一緒に行くから」

とりあえず俺はスタスタ歩いていく。
が、その後ろを機嫌がよさそうに歩いてきた。

―――――――――――――――――――

放課後。

秋山はじゃあ行ってくると俺に告げて
足早に田井中家へ向かった5分後ぐらいに
俺のクラスへ唯、琴吹、中野の三人が顔を出した。

「なぁ、今日はどこ行く?ゲーセン?カラオケ?それとも俺ん家?」

「…さも俺がお前といつも一緒に遊んでいるという感じを醸し出さないでくれ」

「一緒に遊んでたろ！？中学の時！」

高校はどうしたと俺はあえて突っ込まなかった。

「…あれは遊びじゃなくて喧嘩だったろ」

「お前が遊びって言って喧嘩し始めたんだろ！！」

「…あの時の俺は俺じゃない、つーか黙れ」

「黙れとは何だ！大体お前が…「きょう君ー！！」…唯ちゃん！？話が途中で切れたよ！？」

「あ、ユウ君！やっほー♪」

「やっほぁぁっ！！！」

とりあえず思い切りスネを蹴る。

「……」

そのまま放置して教室を出る。

「あ、どうも」

「こんにちわ♪恭哉君♪」

軽くペコっと頭を下げる中野。
変わらずニコニコしながら挨拶する琴吹。

「…なんだ？秋山ならいねぇぞ」

「あれ？澪ちゃんいないの？」

「…あいつは田井中家へ行った」

「ほ、本当ですか！？だ、大丈夫でしょうか…」

「安心して梓ちゃん、恭哉君が何とかしてくれたわよ♪」

「……は？」

（…なんでこいつが知ってんだ…）

「お昼休みの時に部室に行こうとしてるの見たから、もしかしたらと思って」

「…あぁ、そ…」

どうやら見られてたらしい。

「きょ、きょ、きょ、恭哉先輩さすがです！！」

「…落ち着け」

「ではきょう君、本題へ移ろうではないか」

「……」

こいつらの話の展開が速すぎてイマイチついていけない。
でも、本題らしいからそこからはしっかり聞く。

「これからりっちゃんをお見舞いに行きます！！」

と、高らかに手を上げて言う。

「行きま～す♪」

それに次いで琴吹も手を上げる。

「い、行きま～す…」

「…別にやる必要ねぇからな」

流れ的にもそうなったのか知らないがわざわざ手を上げる中野に必要ないと告げて俺は疑問を問う。

「…行くったって、場所知ってんのか？」

「大丈夫！！地図持ってるから！！」

それから数十分後……

「…きょう君…ここどこ…？」

大丈夫じゃなかった。

「…地図貸せ」

「うぅ～…しゅいましぇん…」

迷う予想はあらかじめ考えていたので別にどうこう言わないが
こいつに任せてたらどこに行くか分からないので仕方なく俺が先導
することに。

「……」

多分そうであろう方向にスタスタ一人で歩いていく。

スタスタ……

その後ろを3人が追いかけてくる。

スタスタ…ピタッ……スタスタ…

歩いては一旦地図に目をやり、また歩く。

「…ここだな」

「え…？」

俺の前の家には『田井中』と書いてある表札が。

しばらく住宅街を歩いていたらあった。

というか、もと来た道を戻ってちょっと角を曲がったくらいで着いた。

無駄な行動をしていたらしい。

「それじゃあピンポン押しま～す！」

そうこう考えてる内に3人共次の行動に移していた。

ピンポ～ン♪

と、唯がインターホンを押す。
すると田井中家ドアが開き、中から…

ガチャ…

「はい？」

知らない男が出てきた。

「……」

背丈などから見て、中学生っぽい奴。

「えっと…」

「あ、私たちりっちゃんの友達です！」

「お見舞いに来ました～♪」

「…あぁ、ねぇちゃんの…どうぞ、あがってください」

（…ねぇちゃん？あぁ…田井中の弟か…つーか弟いたのか、あいつ）

とりあえず中に通されたので唯を先頭にスタスタと入っていく。

「……」

ジー…

中に入ろうとするとジーっと俺の顔を見てくる田井中弟。

「…なんだよ」

「え！？いえ、何でも！！」

「……」

何だコイツ、と思いつつ中へ入る。

「じゃあ律先輩の部屋に行きましょう」

「そうね」

「澪ちゃんもいるかな？」

「あ、澪さんなら部屋にいますよ」

「そうなんだ、ありがとう♪」

3人は靴を脱いで田井中の部屋へ向かおうとするのだが。

「…お前ら部屋がどこにあるか知らねぇだろ」

「「「…あ……」」」

「あの～…案内しますんで…」

「「すいません、お願いします…」」

「…はぁ」

若干苦笑いを浮かべる弟の後ろから俺らは着いていく。

トタトタトタ…

階段を上りすぐのところにある部屋の前で弟が止まる。

「ここです」

「ありがと〜」

「…お前ら行って来い、俺はここで待ってる」

「え？何でですか？」

「…病人相手に大勢で押しかけるのは良くねぇし、仮にもあいつは女だし」

「そうね…じゃあ、ちょっと待っててね？」

「ちょっと行ってきます、恭哉先輩」

気を利かせてか静かな声で言う。

「…おう」

バタンッ

俺と弟を残し部屋の中に入っていった。

「……」

「……」

いきなり二人きりになったからか沈黙。
まぁ、いきなりじゃなくとも沈黙だとは思うが。

「あの…」

すると、弟が口を開いた。

「冷たい飲み物でもお持ちしましょうか…？」

「…いや」

「…そうですか、じゃあそれで「…持ってこなくて良い、俺がそっちに行く」…え？」

「…ここで待ってるのもダルい」

「ぷっ…」

「…テメェなに笑ってんだよ」

「す、すいません！！」

（…はぁ）

「…おい、早く案内しろ」

「はい！分かりました！」

階段を下りて一階の奥の方にあるリビングへ。

「はい、どうぞ…」

「…サンキュ」

ソファーに座ってると弟が飲み物を渡しに来る。

「……」

チラ…

「……」

チラ…

「…今度はなんだ」

「い、いや！その！あの！えーと…」

「……」

「…高嶺…恭哉…さん？」

「…だったらなんだ」

「やっぱり!!一回会いたかったんだよね〜!!」

俺の事を確認した瞬間、めちゃめちゃテンションが上がる。

「…会いたかった?」

「うん!ねぇちゃんの合宿の時の写真見たとき、一人だけ男でしかもめっちゃカッコよかったからねぇちゃんに聞いたんだ!!そしたら内の部の副部長でイケメンギターだって言うから会いたくなっちゃって!!」

(…イケメンギターってなんだよ)

「ねぇねぇ!にぃちゃんは中学どこだった?」

「…おい、今なんつった」

「え？中学どこって…」

「…違う、その前」

「にぃちゃん」

当然の呼び方のように真顔で言ってくる。

「…それ辞めろ」

「え～いいじゃんか～」

「…俺はお前の兄貴じゃない」

「あ！兄貴っていいね！」

「…人の話聞けアホ」

「アホって言わないでよ、じゃあどっちがいいの？」

なぜその二つしか選択肢がないのかは知らない。

「…知るか、にぃちゃん以外で呼びたきゃ勝手に呼べ」

「じゃあにぃちゃんで！それで、中学どこ？」

（…以外つったろうが…はぁ）

俺はもう諦めでスルーした。

「…中一で桜四中、中一の途中から神楽坂」

「……」

中学校名を聞いた瞬間無言。

「…なに黙ってんだお前」

「…あ、えっと…神楽坂ってあの不良校の…？」

「…それ以外どこに神楽坂がある」

「えぇーっ！！！にぃちゃんって不良！？」

「…元だ」

「そうなんだ…でもあそこって一番ヤバイ中学じゃん、ボコボコにされなかった？」

「…されねぇよ、つーか俺の中学時代を掘り下げんな」

「えぇ～…でも、そういう話聞きたいし…」

「…人生聞かなくても良い話はいくらでもある…その内の一つが俺の過去だ」

「…なんかすごい重い話っぽいね…」

「…ぽいじゃなくてそうだ」

「…なんかゴメン」

「…別に」

そんな重苦しい会話をしていると
リビングに近づいてくる足音が聞こえた。

ガチャ…

「恭哉？いるか？」

「…あん？」

「あ、澪さん」

「聡、ここにいたのか」

「…聡？お前聡って言うのか」

「あれ？知らなかったの？」

「…当たり前だろ、今日テメェと会ったんだぞ」

「あ、そうだったね」

「…そんで、田井中とはどうなった」

「ちゃんと話してきたよ、律と」

「…で？」

「うん…ちゃんと仲直りできたよ、ありがとう恭哉」

「…そうか」

この瞬間、崩れ去った『ココロ』は

……キラキラ……

元通りのキレイな『ココロ』に戻った。

「そういや、聡と恭哉って今日会った割には仲良いな」

「うん！にぃちゃん凄いし、こんなカッコいい不良は男として憧れるよ！」

その言葉で秋山は固まった。
そう、唯以外には元不良だという事は明かしていない。
中学の事も昔の事も。

「ふ、不良？恭哉が？」

「中学の時はかぐんんっ！」

「…喋るな」

後ろから聡を取り押さえ口を塞ぐ。

「えと、不良って…？」

「…秋山俺は帰る、あいつらの事よろしく」

といって聡を連れてリビングを後にする。

ガチャ…

「…あ！恭哉！律が話しあるって…」

「…風邪治ったら話聞いてやると伝えろ」

バタン…

玄関前で聡に説教。
というかふざけるなと伝える。

「…テメェなぁ、あんまそういう事言うんじゃねぇよ」

「ひっ…ご、ごめんなさい…」

「…はぁ、そんじゃあな」

「え？本当に帰るの？」

「…あぁ、もうやる事ねぇからな」

俺の元々の目的は秋山と田井中の事。
それが分かったんならもうここにいる理由はない。

ガチャ…

「あ、じゃあにぃちゃん、またね！！」

「…ん」

姉と同じ笑顔。
さすが家族似てるな。

バタン…

俺は軽く手をあげ、田井中家を後にした。

―――――――――――――――――――――――――

それから数日後の放課後。

「全開ーっ！！！」

田井中は見事に復活した。

「学園祭に向けて頑張るぞーっ！！！」

「「「「おー！！」」」」

「……」

と、各自喜びに浸っている。

「あと、キョウ」

「…あ？」

「すいませんでした！！」

と、頭を下げる。
俺の前に来て。

「…そんな事してる暇があったら練習しろ」

「…え？」

恐る恐る下げていた頭を上げる。

ビシッ

「いたっ！」

田井中自慢のデコにデコピンした。

「…謝るなアホ、別に怒ってねぇ」

「でも…」

「…いいから、一々気にすんな…お前らしくねぇよ部長」

「……」

少し考えるような、そんな表情をして…

「おう！これからもよろしく！！副部長！！」

といって、手を出してくる。

「…了解」

俺も手を出して思い切り。

パンッ！

ハイタッチをした。

と、一見素晴らしい場面を送ってると

バタンッ！！

「ちょっと！！」

「……」

ものすごい勢いで入ってきた人物が。

「学祭の講堂使用届、出さなかったの！？」

真鍋だった。

「え…？」

「…は？」

「「「「「……」」」」」

全員の思考が一気に止まり
一瞬の静寂が起こる。

「あぁ！！」

田井中がやってしまったと言わんばかりに声を上げる。

「…どうにかならねぇのか」

「そう言われても…会長に言ってみないと…」

「…よし、お前ら生徒会室に殴りこむぞ」

「きょ、恭哉！そんな事…」

「…別に本当に殴る訳じゃねぇよ、ただ謝って使用届出せるように交渉するんだ」

「よし！そうと決まれば行くぞ！」

「「「「おぉー！」」」」

―――――――――――――――――――――

生徒会室。

「すいませんすいません…」

「締め切りは締め切りだから」

と、生徒会長。

「そこをなんとか！！」

頭を下げる部長。

「届けが遅れたのは部長が風邪で欠席してたからですし…お願いします」

隣にいた真鍋も頭を下げる。

「部長が休みだったのはしかたないけど…そこは副部長がなんとかしないといけないんじゃない？」

「…チッ」

痛いところを突かれた。

「…確かにそうだな、でも…軽音部自体の問題に頭がいっぱいで使用届まで回らなかったんだ」

「…その問題はそんなに重要な事？」

「…あぁ、だから頼む…次からは期限内に出すようにこいつには言っておく」

俺は田井中の頭を掴み同時に軽く頭を下げる。

「……部長さん」

「はいっ！！」

「いい副部長さんでよかったわね？」

「…へ？」

「…その副部長さんと真鍋さんに免じて、今日一杯待ちましょう」

これで何とかなったらしい。

「…あ、あんたたち…えぇ人や～！」

といって、俺と真鍋の手を掴んで拝むように言う。

「…はぁ、いいから早く書いて早く出すぞ」

「ほら律、行くぞ」

「「「失礼しました～」」」

俺たちは生徒会室を後にした。

「やっぱぴゅあぴゅあよくない？」

「却下」

「握り拳は？」

「演歌っぽい…」

「じゃあ…靴の裏のガム」

「今日…踏んだんだな…」

「え！？何で分かるの？」

「ムギ～…なんかいいのない？」

「う～ん…充電期間とかどう？」

「縁起わるっ…」

「じゃあポップコーンハネムーンとか」

「だーかーら、何でそんな甘々のばっかなんだよ」

「ロケット鉛筆ってよくない？」

「…ちょっとお前は黙れ」

「はぅ！！きょう君がひどいことを～…」

そんなめんどくさい会話をしてか
徐々に顔色が変わっていっている山中の姿が。

「……」

口元がピクピク動き始めて
仕舞いには…

「まどろっこしぃーっ！！！！」

「キャアッ！」

「うわぁ！」

「…ッ」

隣にいた俺の耳が飛ぶ…。

「…耳がおかしくなる」

「ゆっくりお茶も出来やしない！こんなの適当に決めればいいのよ！」

といってスラスラと書いて…

「よし！」

書き終わった。

「「「「「あぁ！！」」」」」

「勝手決められた…」

「…なんだよこのバンド名は」

「でもまぁ…いっか」

「そうだな」

「そうですね」

「これいいわね♪私たちっぽい♪」

「ホントだね～」

と、意見を一致させて笑い合ってるが…

（…これはないだろ）

と、思うがそれを言っても山中にじゃあ恭哉君はどんなのがいいの？と聞かれたら
一瞬にして俺が撃沈するので言わない。

「という訳で！！」

「「「「「何とか、バンド名決定！！」

今日、このときを持ってバンド名が

『放課後ティータイム』

に決まった。

「後は学祭ライブに向かって練習するだけですね」

「よーし！バンド名も決まった事だし、練習も頑張るぞー！」

「「「「「おぉー！！」」」」」

と、意気込み全開でライブに向かって練習するのはいいが…

「いぃーきしっ！！！」

この唯のくしゃみが後の事件の引き金になるとは知らずに…

「…はぁ、先が思いやられる…」

第二十四話　元通りになるココロ、バンド名決定。　【第三部】（後書き）

どうでしたでしょうか？

今まで書いてきて一番この回が頑張った気がします…

その御陰でこの小説最高文字数……今話約１０２００文字。

でした。

通りで時間がかかったわけだ…

あ、ちなみに律の弟、聡とは恭哉君となんとなく仲良くしたいな…

と思ったので今回こんな感じになりました（笑）

では次回は軽音部ライブ直前の話ですね。

それでは感想等お待ちしてます！

ラルクでした！！！

キャラ設定　【二年生】（前書き）

今回キャラ設定二年生編のような形で出したいと思います。
ここでは恭哉君と雄介君の過去と中学生の頃について
書きたいと思います。
どうやらあまり詳しく書いていなかった事を
今の今まで忘れてました…
マジですいません。

キャラの構成はしっかり固まっていますので
ここに書くことと本編を混ぜて、オリジナルを書いていきたいと
思います。

キャラ設定　【二年生】

高嶺恭哉

【過去】

小学校六年から父親の暴力を受けていた。（母親、妹も）
その一年後に両親が離婚。そのまま父親は行方不明に。
勝手に暴力を振って、勝手に離婚して、勝手に行方を暗ました父親を心からものすごく憎んでいる。

その時の衝動から在学していた学校【桜ヶ丘第四中学校】で、暴力行為。
生徒約十人を病院送りにし、校長室に呼ばれその場に居た教師、副校長、校長に
罵声を受け、殴る蹴るの暴行をして一年の一学期に退学。
一年の二学期から不良校と知られる【神楽坂中学校】に転校。
転校初日にクラスメイト全員に喧嘩を売られるが全員を殴り飛ばす。
その頃から徐々に神楽坂トップに上り詰めて行った。

二年生時にはすでに神楽坂トップ。
その時に雄介が桜四中から神楽坂へ転校。
それと同時に雄介は副トップに。

そのまま三年時にはトップ、副トップとして学校を締めていた。
恭哉がトップなのが気に入らなかったのかある男が
勝負を仕掛けてきていた。
そのある男は後々の物語に出てきたり……？

それから中三の最後の方で雄介に
これからは真面目に勉強してちゃんとした高校へ行こうといわれ
自分自身ももういい加減にしようと思って真面目に勉強。
その頃から神楽坂のトップを下りて普通に勉強し始めて
無事現在通っている高校【桜ヶ丘高等学校】に入学。

橘雄介

【過去】

恭哉の小さい頃からの幼なじみ。
恭哉の過去の事は全て知っている。
恭哉が心を許す、唯一の男友達。

中学一年の時に恭哉が暴力行為を起こし、神楽坂に転校してから一年後、二年の時に自分もわざと教師などを殴って自ら退学。
恭哉を追って神楽坂へ。
それからは恭哉と喧嘩に明け暮れる日々。

だが、中三に恭哉を説得して高校を目指し共に勉強。
無事に恭哉と一緒に桜ヶ丘に入学。

キャラ設定　【二年生】（後書き）

まぁ、大体こんな感じでしょうか？

これを元にしてのオリジナルを書きたいと思っています。
それでは閑話のようなものを挟んで次の第二十五話に
行きたいと思います。

現在製作中。待っててください。

第二十五話　学園祭まで残り四日の悲劇。（前書き）

どうもラルクです。

一旦キャラ設定挟んでの今回二十五話です。
アニメ見てる方ご存知のこの展開。
タイトル読んで分かりますという人もいるでしょう。

楽しんで読んでください！！

それでは第二十五話です。どうぞ！！

第二十五話　学園祭まで残り四日の悲劇。

学園祭まで残すところあと四日になった頃。
またまた事件が発生した。

「やいやい、恭哉よ」

「……」

「やいやい、恭哉よ」

「……」

「やいやい！！恭哉よ！！」

「…さっきからうるせぇんだよテメェは」

俺の事を呼んでいるのか、それともからかっているのか
それとも日本語の練習をしているのか、全く分からないが
とにかくパンを食ってる俺の隣でうるさいアホ。

「うるせぇって言われたってよ、反応しないお前が悪いんだろ?」

「…じゃあ呼び方変えろアホ」

「そっちだってアホって呼び方変えろよ……はぁ…じゃあ、やいやい、恭ちゃん」

ドスッ!

「ギャァーッ!!」

「…そっちの呼び方じゃねぇムシ」

いつもと同じアホもといムシとの無駄な体力を使う会話をしている俺。
我ながら昼休み疲れることをやっている訳で。

「ちょっと橘！毎回毎回床に倒れないでくれる！？」

たまたま通ろうとしたクラスの女子がさっきのボディブローでぶっ倒れている雄介を乗り越えながら言う。

「そんなこと言われても恭哉がね…」

「…俺は何もしてねぇよ、パン食ってるだけだ」

「さっき思い切りボディブロー決めたでしょ！？」

「…知るか」

「うわっ！この人数分前の出来事を消そうとしてるよ！！」

「橘うるさい」

ガンッ

「イッテェ！」

クラスの女子までもが雄介に暴力を振るう様になっている。

「…よくやった」

その女子にとりあえず頷く。

「それと高嶺、服装だらしないんだけど」

「…だからどうした」

「一応クラスメイトだから注意よ、先生からも目が付けられてるし」

「…あっそ」

『あ、いたいた…絵美里～！』

すると、ドアからだれかを呼ぶ声が聞こえた。

「あ、やっと来た」

こいつだったらしい。

「服装直しときなさいよ高嶺」

「……」

と、なぜか喋った記憶も無いやつに注意されそんな言葉を吐いて去っていく。

「…なんだあいつ」

『絵美里、よかったね♪高嶺君と喋れて』

『え!?ちちち違うよ!?そういう訳じゃなくて…!えっと…その

…』

『あはは♪よっ！さすが恋する乙女！』

『もうっ！』

そんな会話が繰り広げられていた事は知らない。

「…はぁ」

すると俺の席の周りに二人の男子が集まってきた。

「さすが高嶺」

「あの絵美里ちゃんとお話が出来るとは」

「…は？」

「俺たちが勝手につけてるクラス内女子ランキング二位の仙道絵美理だよ！！」

と半ば興奮気味に言って、一枚の紙を俺の目の前に出す。

「…近すぎ」

「あ、ワリィ…興奮しすぎた」

俺と紙の距離がほぼゼロ距離だったので何にも見えなかった。

「えと、これこれ」

俺の目の前から紙が退き、机の上にバンと置かれ、その紙のどこかに指を指した。

「…二年一組女子クラス内ランキングトップテン、二位…仙道絵美理」

そこに書かれていたのは四十人ほどいるこのクラスのトップテンらしい女子のランキングだった。

「…ん？」

二位という事は一位がいるという事でなんとなく気になり一位の欄を見る。

一位……秋山澪

俺は見なかった事にした。

「でも俺は悪いけどこのクラスじゃないんだよな」

「はぁ？初耳だぞそれ」

「俺は二組の田井中律がおすすめだ、あの男勝りな性格に時折見せる可愛い女の子らしさ」

「…それ完全に田井中じゃねぇし」

（…時折見せる……一度も見当たらねぇけどな）

「高嶺はいいよなぁ…田井中さんのみならず、ここの一位秋山さん、天然で可愛い平沢さん
いつも笑顔で可愛い琴吹さん、可愛い後輩の中野さん…羨ましすぎる」

「田井中さんって可愛いんだよなぁ…」

俺に羨ましがって語り掛ける男子。
田井中の事でトリップしている男子。

「…テメェも軽音部はいるか？」

「今更無理無理、高嶺いる時点で俺たちが入っても逆効果だっつーの」

「田井中さんと喋ってみたい…」

悲しそうな顔の前で手を罰にする男子。
ずっとトリップ中の男子。
すると後ろから

ガシ

頭をつかまれた。

「…あ？」

振り向くとそこには……

「さっきから呼んでるのに全く反応しないから部長直々に来たぞ」

田井中だった。

「あ、巧…田井中さん来たぞ」

「へ？たたたた田井中さんどこ！？え？マジでどこ！？イッテェ！スネ打ったイテェ！！」

めちゃめちゃ慌てる巧と呼ばれる男子。
つーか落ち着いて欲しい。

「…キョウ、どうしたんだこいつ」

「…お前の事が好きなんじゃねぇの」

「…嘘はいいから」

するとスネを打って悶えていた男子がいきなり立ち上がり田井中の前に来て頭を下げる。

「…こいつマジで大丈夫なの？」

「…知るか」

「田井中さん！！」

「うわぁ！いきなりなんだよ！？」

頭を下げていた男子がいきなりクラス中に響く声を出して

「僕はあなたの事が好きです！！付き合ってください！！」

まさかの告白。

「…え～と～…ゴメン」

「そうですよね～…高嶺、幸せを届けてくれてありがとう、裕也…行こう」

「お、おう」

男子撃沈。
可哀相な男子は巧と呼ばれる男子と共にどこかへ去っていった。
つーか幸せを届けた覚えが全く無い。

「…なんだったんだ」

「私に聞くなよ…って、そうだ！キョウ、憂ちゃんのクラスに行くぞ！」

「…なんで」

「唯のことを聞きにいくんだよ」

ここで冒頭に戻って一旦いままでの事は忘れよう。

そう、またまた事件が発生したのである。

「…そっか、そういやあいつ風邪だったな」

「そうそう、一応様子聞こうと思ってな」

「…そういうことか、んじゃ行くか」

とりあえず一応彼氏兼軽音部の仲間なので気にしない訳にはいかない。
席を立って田井中と共に教室を出ようとする。

「ちょっと待って律、恭哉！私も行く！」

後ろから呼び止められる声が聞こえ、振り返ると秋山。

「澪も一緒に行く？」

「うん、心配だしな…リードがいないんじゃ困る」

（…まさかあいつが風邪を引くとは、まぁ田井中が風邪引くぐらいだからな…ん？田井中？）

「…おい田井中」

「ん？なんだ？」

「…風邪、お前がうつしたんじゃねぇの」

「え？なんで？」

「あ～…そういえば律が寝た後、隣で一緒に唯も寝ちゃってたし、

それでうつったりしたかな？」

「え、マジ？」

「…テメェじゃねぇか」

「うっ…で、でもまだ分からない！それを聞くために憂ちゃんのとこに行くんだ！」

「…あっそ」

斯くして俺たちは憂がいるクラスへと歩みを進めた。

―――――――――――――――――――――――――

バタンッ！

「たーのもー！！」

と勢いよく扉を開ける。
案の定見える限りの生徒は軽くビックリしていた。

「下級生をびびらせるなっ！！」

ゴイン

「あぅっ！」

「…アホか」

スタスタ…

田井中が無駄な行動をしたせいで俺が一人で教室に入ると周りからの視線がビシビシとぶつかってくる。

「あれ？恭哉先輩？」

「恭哉さん？」

「兄さん？」

教室内を見渡すと、窓側の席に中野、憂、楓の姿を確認。俺はスタスタと周りの視線を気にせずにそっちへ歩く。

「…よう」

「どうしたんですか先輩？」

「いきなりゴメンな、憂ちゃんに唯の様子を聞きに来たんだ」

と、さっき倒れていたはずの田井中が隣に居た。

「…で、憂…唯の様子は」

「まだ熱下がらなくて…」

「そうか…」

「全く！こんな時に風邪ひくなんて…たるんでる証拠だ！」

「「だから、お前がうつしたんだろ」」

「え？わたし？」

「そうですよ、時期的に考えても」

「あ、でも多分…この間…」

「…なんか心辺りあるのか？」

「はい…」

遡ること数日前。
ある放課後の出来事。

「この中からステージ衣装選んで！」

と、山中の強制的な衣装選びが始まった。

「いつのまにこんな…」

「う～んそうね～…例えばこのウェイトレス！」

「ちょっと私着てみます～」

「ちょ…ムギ！？」

琴吹は衣装を持って物置へ。
そして数分後。

「いらっしゃいませ～」

「いいわねムギちゃん！これどう！？」

「絶対ヤダッ！」

「じゃあチャイナ服！」

「もっとヤダッ！」

「じゃあバニー服！」

「こ、これは…いい…かも…」

「「おい」」

「せ、先生…なんだか楽しくなってきました…！」

「でしょ？」

「澪～戻ってこ～い」

秋山の壁、陥落。

「ねぇ見てみて～」

「これどうですか？」

振り向く先には浴衣姿の中野と唯。

「これ可愛いよ～♪」

「本当ね、これならみんなで着れるんじゃないかしら？」

「澪はこれどう？」

「まぁ、これなら…」

「他のよりはまぁマシだよな」

と、俺以外の全員はどうやら浴衣で決定な様で。
じゃあこれにしましょう！と勝手に決定事項にした中野。

「さわちゃん先生、きょう君の浴衣ある？」

「ええ、もちろん！」

「…待て、なぜ俺が着ることになってんだ」

「何言ってるの恭哉君、みんなが着るんならあなたも着ないと」

「…断る、俺は制服でいい」

「きょう君の浴衣姿はカッコいいから大丈夫だよ！」

「…いや、カッコいいカッコ悪いはどうでもいいんだよ…」

「じゃあなに？」

「…着る理由が見当たらない」

「それはきょう君がこの放課後ティータイムの一員だから！！」

「……」

「…なんか唯にしてはまともな事いった気がするのはわたしだけか？」

「…奇遇だな、俺も思った」

「ひどいよきょう君、りっちゃん！！」

「恭哉先輩！唯先輩がこう言ってるんですから先輩も着ましょう！」

と、なぜか中野は俺に近づいてきながら半ば興奮気味に言ってくる。

「…んな事言われてもな」

「大丈夫よ梓ちゃん、恭哉君にはわたしがちゃんと着させるから！」

「さすが先生です！」

「…はぁ」

全員がどうやらぶっ壊れているようだ。

「それじゃあこれで決定だね！」

「…はぁ」

その後は着替えて帰宅した。

「…確かに浴衣着てたな」

「はい」

「でも、それとどんな関係があるんだ？」

「お姉ちゃん、制服で帰ってきてお風呂入った後、浴衣に着替えちゃって…
その浴衣すごく気に入ってて一日中浴衣で過ごしてたから、冷えちゃったのかも…」

「小学生か…」

「唯先輩らしいですね…」

「…あぁ、全くだ」

唯は小学生というか、幼稚園児というか…
なにか抜けてるようなそれともただ子供っぽいというか…

「つーかさぁ…あの時の衣装さ、いけてる様な気がしたけど…」

「冷静になって考えてたら…恥ずかしいですよね…」

「…今更何言ってんだよ」

「恭哉先輩は恥ずかしくないんですか…？」

「…恥ずかしいも何も、お前らが勝手に俺の拒否反応を打破して無理矢理着る事になったんだろうが」

「すいません…」

「澪も恥ずかしいよな？」

と、田井中が秋山に聞くが、秋山はなにか目を瞑って考えていた。

「澪？」

すると、秋山は目を開いて

「梓、今日からリードの練習もしておいてくれないか？」

と、いきなり真面目な話に。

「え…？」

「…唯が間に合わなかった時のためにか？」

「うん、万が一の事を考えて」

「でも…」

「…中野」

「はい…」

「…唯が間に合わない可能性も無くもねぇ、最悪の場合は唯抜きだ」

「そんな…！それは嫌です！」

「…最悪の場合だ、別に絶対って訳じゃねぇ…でも、その可能性があるって事を考えておけ」

「……」

すると授業が始まる合図の鐘の音が聞こえた。

「梓、恭哉が言う通り最悪の場合だから」

「分かりました…」

俯かせていた顔を上げ、何とか了解する。
でもその顔はどこか納得していないような顔だった。

「それじゃあまた放課後な」

「じゃあな」

「……」

俺らはクラスを後にした。

次の日。
学園祭まであと三日と迫った今日。
俺らはとにかく練習をしていた。

ジャ～ン……

「梓、いけそう？」

「はい、なんとか」

「じゃあもう一回最初からやってみようか」

「……」

と、練習に練習を重ねていると
不意にドアがガチャっと開いた。
山中にしては黙ってると思って振り返ると
そこには熱でダウンしていたはずの…

「やっほ〜」

唯がいた…？

（…ん？唯…じゃねぇし、何やってんだあいつ）

「あ、来た！」

「先輩！」

と、全員が駆け寄る。

「風邪大丈夫なの？」

「え？あ…風邪か…ゴホンッ！ゲホンッ！」

ものすごくわざとらしい咳をする。

「わざとらしい…」

「まぁ、それなら大丈夫って事か」

「ていうか、直ってたなら朝からちゃんと来いよ、みんな心配してたんだぞ？」

「え？あ～それは…授業が終わる頃に急によくなったの！」

「単なるサボりたかっただけだろ？」

「それより早く練習しましょう！ね！」

「そうだね…」

俺はその会話を立ってボーっと見ていた。
明らかに言葉の至る所がおかしい。

「恭哉君は気づいてるのね」

と、後ろから突然声がしたので振り返ってみるとそこには優雅にお茶を堪能している山中がいた。

「…そりゃあな」

「さすが唯ちゃんの彼氏だけあるわね」

「…声の高さとかちげぇし、それに上履きの色が赤だし」

「あら?そこに気が付いたの?」

「…じゃあアンタはどこに気がついたってんだよ」

「胸の大きさ」

「…アンタは生徒をどんな目で見てんだ」

（…ていうかこいつ）

「…いつからここにいた」

「ついさっき」

「……」

山中にはどうやら『神出鬼没』がデフォルトで備わってるらしい。

恐ろしいヤツだ。

「恭哉先輩！唯先輩が来たので早く練習しましょう！！」

「恭哉！早く早く！」

（…なにこいつらテンション上がってんだ）

仕方なくそのテンションに押されて練習する。

ジャ～ン…

曲が終わると妙なシックリ感が湧いた。

（…ん？こいつギター出来て…？）

いくら真似ているとはいえ、まさかギターが出来て、いや唯より普通に上手いことがあるとは思いもしなかった。

どうやらこのシックリ感に他の部員たちもなにか不可思議な感覚に襲われてるらしい。

「どう思う…？」

「分からないけど…」

「たまたまじゃないか…？」

「…気のせいか、よしもう一回やってみよう」

「そうね」

ジャ～ン…

『……』

やはりおかしいと思っているんだろう。
全員が無言になった。

「唯…」

「はい？」

「完璧に合い過ぎる！今までこんな感触無かったのに！！」

「唯のリズムキープが性格過ぎるんだ！何があった…！」

「な…なにも…」

すると琴吹は不意に窓辺へ行き…

「月が赤い…」

と、呟いた。

（…月が赤いって、不吉だなおい）

そんな中ひとりその変な感触を
堂々と受け止め、むしろ喜んでいるヤツがいた。

「いいじゃないですか！完璧に合ってるならそれで！ね！恭哉先輩！」

「…そーだな」

「わたしはすごく気持ちよかったです」

「そうそう、『梓ちゃん』の言う通りだよ」

ここまで俺と山中以外の全員を騙してきたが
ついにボロが出た。

「え…？」

それを聞いた中野は一人だけ困惑気味に声を上げる。
だが、その他のヤツらは全くもって気が付いていない。

（…ここで気が付かねぇとか、耳大丈夫かあいつら）

「そうよね…」

「なんか混乱しちゃってたよ」

「『律さん』も『紬さん』も、心配し過ぎだよ」

またまたボロが出た。

「律さん？」

「紬さん？」

「あっ！」

どうやら等々誤魔化しきれなくなってきた。
口に手を当て、やってしまったという顔をする。

「いい加減いいんじゃない？憂ちゃん」

と、今更こいつの出現方法など考えても
多分次元が違うと思いつつ、呆れた顔で山中の方へ振り返る。

「いたのかよっ！！！」

「…ついさっき、何らかの方法でこの部室に忍び込んできたらしい」

「忍者かよ！！ていうか……」

「「「「「憂ちゃん！？」」」」」

「え！？憂だったの！？」

「みんなの目は誤魔化せても…」

なぜかゆったりと椅子から立ち上がる。
それにはなにか意味があるのか。

「わたしと恭哉君の目は誤魔化せないわよ」

「ってキョウも気づいてたのかよ！！」

「…当たり前だろ」

「みんなよーく見て！」

といって、山中は憂を指差す。
全員の視線が憂の方へいったのを確認するとすごく真剣な顔で…

「唯ちゃんより胸が大きいわっ！！」

と、そんな自信満々の顔で公言されても困る。

「「「「「……」」」」」

そんなんで本当だと信じる理由にもならないので
俺が仕方なく完璧にこなしてきた憂の欠点をいう。

「…さっきの山中の発言は無しにしてもだ、お前ら足元見てみろ」

そう言われた全員は憂の足元を見る。

「…上履きの色が赤だろ」

「「「「「あ、本当だ！」」」」」

「ナ、ナンノコトヤラサッパリ…！」

上履きの色は現在、一年が赤、二年が青、三年が緑となっている。
つまり、二年である唯が赤い上履きを履いているのはおかしい。

「あ、じゃあわたしの渾名言ってみて！」

と、追い討ちをかけるように中野が
徹底的な一打を放つ。

「ああ、あずさ二号！！」

「「「「「あ、偽者だ…」」」」」

これが一番納得できることだったらしい。

「…はぁ」

とりあえず溜息を吐いた。

――――――――――――――――――――――――

「…ごめんなさい」

とりあえず椅子に座り話をする。

「それにしても似てたな…全く気づかなかった」

「キョウ、よく気づいたな」

「…上履きもそうだが、明らかに唯より声が高いだろ」

「そうね、憂ちゃんの方が胸が大きいからね」

なぜこの発言を二回したのかが意味不明。

「……ッ！？」

さっきは隠す事に必死になっていたのか恥ずかしがる素振りは見せなかった憂だが
今回に至っては腕で胸を覆い、顔を真っ赤にする。

「…お前デリカシーって言葉知ってるか？」

「知ってるわよ」

「さわちゃん…一応キョウもいるんだからそういう発言を控えるよ

うにしようよ…」

なぜこんなヤツが教師を出来たのだろうか。

「梓ちゃんもごめんね…」

「あ、うん」

「ベットで寝てるお姉ちゃん見たら、いてもたってもいれなくなっちゃって…」

「憂…」

ガチャ…

するとドアが開いた。

「やっほ〜」

唯がいた。

「うぉ！激しくデジャブ！！」

「先輩！！」

いち早く唯に駆け寄る中野。

「ごめんね〜心配かけて〜…」

「もう大丈夫なの？」

「うん！さっき起きたらね、なんか元気になっててね、少しは練習し……へっくじぃっ！！！」

「うわ～…きたね～…」

田井中の顔に唯の鼻水が飛び散る。

「だからもう大丈夫！」

「…どこがだ」

「あぁ～きょう君だぁ～」

と、こっちに歩いてくるが足取りがふらふら。

「きょう君だぁ～…エへへ～」

と、抱きついてくる。
ふいに唯の額に手を当ててみると

「…お前まだ熱があるじゃねぇか」

「え!?本当ですか先輩!」

「…あぁ」

「あ!ギー太!こんなところにいたのか～…よっこいしょ…」

俺から離れ、フラフラとレスポールが置いてある長椅子に行って抱きかかえると、

「って、おもっ！あぁぁ～…」

無残にもレスポールと共にぶっ倒れた。

「…唯っ」

「お姉ちゃん！！」

「先輩！」

俺はぶっ倒れてる唯を抱きかかえ、長椅子に横にさせる。

琴吹は額に濡れたタオルを置く。

「熱、全然下がってないじゃないか！」

秋山は唯の熱を測ると、少々怒り気味に言う。

「ごめんね…やっぱりダメだね…わたし抜きで本番の方がいいかも…」

「そんな…！」

「あずにゃん…きょう君…ギターは任せたよ…」

そんな弱音を吐く先輩に中野は声を出す。

「…です」

「え？」

「嫌です！」

「梓ちゃん…」

「ダメです！みんなで出れないなら辞退した方がマシですっ！」

『……』

全員が黙って、沈んだような表情をしている。

「…唯」

「……」

「…本番までに治して来い」

「え？」

「恭哉先輩？」

「…六人での初ライブましては中野の初ライブ…そこに一人欠けてやるのは…こいつが許さねぇ」

俺は中野の頭にポンと手を置く。

「…だから治して来い、全員待っててやるから…そしてこれから言う事は絶対だ」

『……？』

俺は少し間を空けてこう言った。

「…絶対に放課後ティータイム全員で本番を迎えるぞ、分かったな？副部長命令だ」

「恭哉…」

「キョウ…」

「恭哉君…」

「恭哉先輩…」

そして…

「きょう君…」

唯が。

「…唯、頑張れよ」

「うん！絶対に治してくるよ！」

上半身をゆっくり起こして両拳を強く握り、強い決意を述べる。

「頑張れ唯！」

「先輩！絶対に全員で最高のライブにしましょう！」

「頑張って唯ちゃん！」

「唯、信じてるぞ！」

と、メンバー一同から激励の言葉。
唯がどれだけ頑張って、残り三日間とされた少ない日にちの中で風邪を治してくるか。
そして、ちゃんとライブに間に合うように風邪はタイミングよく治るか。
すべては唯の努力と憂の看病にかかっている。

学園祭ライブまで残り三日。

唯が間に合えば問題は解決……だと、俺は思っていた…

まさか思わぬ問題がこの後発生するとは
俺も、他のメンバーも思ってはいなかった。

第二十五話　学園祭まで残り四日の悲劇。（後書き）

どうでしたか？
前半若干ギャグで後半若干シリアス？で書いてみました。

次回から本番。ライブの一歩手前までで、『前編』です。

次回の冒頭で恭哉君と雄介君の会話が出来たらいいな。
と、思います。

第二十六話　放課後ティータイム初ライブ！！（前編）　（前書き）

皆様どうも遅いですが明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

という訳で遅れた新年の挨拶はまぁいいとして。
お久しぶりです、ラルクです。

４ヶ月もの長い期間を置いての投稿です。
正直更新遅くてやだよ～って方いらっしゃると思いますが
すいません…言い訳しようもないです…面目ない。

まぁ、今回久々に更新できたので読んじゃってください。
久々すぎて４ヶ月ブランクで文才が終わってますが…（元々）

それでは、第二十六話です！どうぞ！

第二十六話　放課後ティータイム初ライブ！！（前編）

「これなーんだ？」

唐突に携帯を開き、俺の目の前に突き出してくる。

「…死ね」

「ひどぉっ！！俺の自慢の放置自転車を見せてやったっていうのに！！」

「…放置自転車を自慢する意味が分からん」

「あ…ちなみにこれ、学校の近くの道に放置してあったんだよね、しかも鍵付きで」

「…誰もそんなこと聞いてねぇ」

「まぁ聞けって、そんでカッコよかったから写メったわけさ」

「…だから誰も聞いてねぇ」

「今日の帰りにでも家に持ち帰るかな～♪」

「…勝手にしろ」

「でもさぁ、やっぱりこれカッコよくね？」

「…知るか」

「まぁ恭哉にはこのカッコよさはわからないよね」

「…はぁ」

正直こんなことを朝っぱらからやられるのは
なんともだる過ぎてやってられない。
相手にしなきゃ良かったと今更ながら思う。
しかも…

「あの…橘君?先生の話聞いてくれるかな?あと、今は携帯使わないでね?ホームルーム中だから」

「ごめんごめん先生」

「あと、高嶺君も静かにね?」

「…あぁ」

「じゃ、じゃあ話続けるね」

と、気弱な先生にまるで幼稚園児に注意するかのように叱られている雄介。
それに巻き込まれる俺。

「…はぁ」

そんな状況にため息が出た。

――――――――――――――――――――

ワイワイ…ガヤガヤ…

「いらっしゃいませ～」

「アイスコーヒーがお二つですね」

廊下や外などが人で埋め尽くされている今日。
それを意味するのは学園祭。
９月下旬、とうとう学園祭当日になった。
さっきの気弱な先生も今日は学園祭です、と一言言っていた。
ちなみに俺はというと。

「高嶺君、アイスコーヒー二つお願い」

「…あぁ」

俺はクラスの喫茶店を手伝っている。
というか、ただ飲み物類が置いてあるテーブルの横で壁に寄り掛かっているだけだが。
隣にはダルそうに椅子に座って頬杖ついている雄介。

「あぁ～…やる事ねぇ～…」

「…テメェは役にたたねぇから仕方ねぇだろ」

「そういう恭哉だって何にもやってないじゃん」

「…たった今アイスコーヒーをカップに淹れ渡すという作業を行なったが」

「さっきからそんなようなのばっかじゃん」

「…何もしないで座ってるテメェよりゃマシだ」

正直のところ客足もまぁまぁ、忙しさまぁまぁな我がクラスに俺らがいなくても対した支障をきたすことは無いと思う。
そう考えた俺は壁から背を離して、そそくさとドアに向かって歩こうとした。

「あれ？どこ行くの？」

「…部室」

「早くね？」

「…別にいいだろ」

現時刻、十一時半。
楽器等を講堂に運ぶなどの作業はあるだろうから
とりあえず部室へ向かうことを考えた。
教室には秋山の姿がないということはすでに行ったのか
または午後からなのか…まぁ、どうせ部室にいるだろうから心配はしない。

「分かったぞ恭哉…！」

「…んだよ」

「クラスの連中にライブの準備とか言ってサボる気だな？」

「……」

「やっぱりな、図星か恭哉！！」

「…ちげぇよ」

「嘘はいかんよ、嘘は」

「…はぁ」

「はっはっは！俺は天才だな！」

とか調子に乗ってる隣のアホを呆れたの目で見ながらため息を吐きドアに向かって歩みを進める。

「はっはっは…ってあれ？おいおい待てよ恭哉～！サボるなら俺も一緒に…」

すると雄介の肩を責任感強そうな女子が掴んでいた。
確か前に話しかけてきた……仙道絵美里。

「ちょっと待ちなさい橘」

「へ？なに？」

「どこ行こうとしてるの？」

「どこって言われても…なぁ恭哉？」

「…俺はライブの準備しに部室」

「そう、それ、俺もライブの準備に…」

「高嶺はいいとして…あんたは軽音部じゃないでしょ！！いいから働きなさい！！」

「ちょっ！！恭哉…た、助けてっ！」

「…仙道、そいつの事頼んだ」

「ほら、こっち来なさい…！」

助けを求める雄介に合掌をして教室を後にする。

「親友を見捨てるのか恭哉ぁ～！！」

と、廊下で聞こえたが別に助ける理由もないのでスルーして足早に部室へ向かうことにした。

――――――――――――――――――――――――

ガチャ…

「あ、恭哉先輩」

「…唯は…まだ来てねぇか」

現時刻、十一時五十分。
部室を見渡す限りでは、唯以外全員来ているようだ。

「…とりあえず講堂に楽器持ってくぞ」

「そうね…」

「よーしみんな！楽器運ぶぞ！」

「はい…」

「うん…」

どうやら全員唯が来ていないことで意気消沈。
田井中も元気に声を出しているが、無理している気がした。
秋山も琴吹も中野も心ここにあらず、という感じで返事をしていた。

「…はぁ、お前ら唯が間に合わねぇとか思ってんのか？」

「そ、そんなことありません！！唯先輩は必ず来ます！」

「絶対間に合わせるってメールは来てたから…」

「…そうか」

「唯なら大丈夫…信じて待とう」

「…今俺たちに出来るのは待つことしかできねぇんだ…」

「はい…信じて待ちましょう」

「…とりあえず講堂に運ぶのが先」

とりあえず沈んだ空気の中、講堂に楽器を運ぶ。
その最中もどこか上の空なメンバー一同。
まぁ、それも仕方ないと思いつつ淡々と運ぶ。

「…田井中、心配なのは分かるが…ちゃんと前見て歩けよ」

「…へ？うわぁ！ご、ごめんなさい！」

廊下で人とぶつかりそうになる田井中。
やはりこいつも不安の色を隠せないようだ。

……

……

…

「…ふぅ～」

一通り講堂に運び終えた頃には既に時計の針は
十二時半迎えていた。
あとは対してやることも無く、本番まで部室にて待機。

「おさらいしておくか？唯抜きの演奏も」

すると地べたに座って自分のカバンをスティックで
リズム良く叩いている我が部長がそう切り出す。

「仕方ないな…」

「嫌です…！」

が、中野は唯抜きの演奏は絶対に認めないらしく
断固拒否の状態。

「やっぱり嫌です！このまま唯先輩抜きで演奏しても意味ないです！」

「……」

この空気はなんとやら…
どうも居心地の良くない空気になっている。
こんな感じはあっただろうか……いや、一回はあったか。

ガチャ…

「「「っ！？」」」

「……」

部室の扉が不意に開き、まさかと思った俺たちは扉に目をやる。
そこにいたのは…

「どうしたの？」

「…お前か」

期待していた人物ではなく、真鍋だった。
秋山たちも唯かと思っていたせいか…

「「「「…はぁ」」」」

と、ため息をついていた。

「え…何か来ちゃダメだったかしら？」

「…いや、別に…てか何しに来た」

「最終確認よ」

「…あそ」

手に持っていた書類にペンを走らせる。

「あ、ステージは十分押しだけど、予定通り十三時には行動に入って」

「分かった……」

秋山は短く返事をした。

「出演者は…」

真鍋はそう言って一人ずつ目を順々に巡らせていく。

「軽音部、出演者全員準備完了…と」

「和……」

「『全員』ね…」

「キョウ？」

『全員』

それが意味するのは現在ここにいるメンバーじゃなく…

「…唯を含め…っていう意味の全員だろ」

「うん」

「…て言う事は、真鍋は唯が間に合うって知ってるわけだ」

「え？そうなの和！？」

「知ってるっていうか…唯は夢中なことがあるとそれしか見えないの」

「……」

夢中なことがある……

唯にとってこの軽音部…放課後ティータイムは夢中になれること。

「きっと風邪の事なんか忘れちゃうわ」

（…猪突猛進ってか）

「だから……」

ガチャ

ジャストタイミングで部室の扉が開いた。

「うぃ～す」

「…なぜお前なんだ」

今の流れ的に唯というのが普通なはずなのだが…

「さわちゃん、空気読めーっ！」

「えぇ！？」

入ってきたのは今までの雰囲気が台無しになる
軽いノリの山中だった。

「ていうか、今まで何やってたんだよ…みんな大変だったのに！」

「あら、勿論ボーッと過ごしてたわけじゃないのよ」

「…じゃあ何やってたんだよ」

「それはね～…浴衣をバージョンアップしていたのです！！」

「バージョンアップ…ですか？」

浴衣…
そういや、あれはライブ衣装だった。
正直忘れてた。

「…で、その浴衣をどうしたって？」

「寒さのことを考えて、防寒バージョンに改良していたのです！！」

「…んなことすんだったら制服でやった方が手間省けたじゃねぇか」

「でも恭哉君、浴衣でやった方が面白いじゃない」

「…なんであんたの価値観で決められなきゃいけねぇんだよ」

「まぁいいじゃない、あ…ちなみにこれがその防寒バージョン衣装よ！！」

俺の反感を軽く一掃したあと
誰かがそこにいるかのように扉の方へ手を向ける。

「…ん？」

よ～く見てみるとピンク色の浴衣に身を包んだ…

「失礼しま～す…」

唯がいた。

（…偽物じゃねぇよな）

またもや偽物オチな可能性も無くもないので
若干確認したい気もするが…

「唯っ！！」

「唯ちゃん！！」

「来てたんなら真っ先にここに来いっ！！」

「……唯…先輩……」

と、田井中と琴吹が歓喜な声で名を呼び、秋山は嬉しそうに…少し怒りが混ざったような声を飛ばし
中野はというと…今にも泣きそうなのを我慢し小さな声で唯の名を呼ぶ。
それらを見た俺は…

「…はぁ」

ため息をひとつ吐いて、さすがに憂もこんな時に唯に成り済ますような事はしないだろうと思った。

「きょう君…」

腕を組んで歓喜の風景を見ていた俺のところに唯が恐る恐る近づいてくる。

「心配した…よね？」

「…そりゃな」

「エへへ／／／ごめんね」

「…とりあえずアッチの後輩をどうにかしろ」

「え？」

俺が指差す方向には…

「…心配して……ぅ…」

と、涙を堪えつつ唯に対して怒ってるような姿の中野。

「ちゃんと埋め合わせしろよ？」

「梓が一番心配してたんだぞ？」

「…唯先輩が来ないなら辞退する、なんて言ってたくらいだしな」

「え!?そうなのっ!?」

「…埋め合わせしてこい」

「うん…」

唯はゆっくりと中野に近づいていく。

「ぎゅ…」

唯に背を向けて今だ怒っているかのように言葉を発する中野の後ろから唯は優しく抱きしめた。

「あずにゃん…」

「…最低です…」

「ごめんね、あずにゃん…心配かけて…」

「…みなさん心配してたんですから」

「私、精一杯演奏するよ…みんなと一緒に」

「当たり前です…心配かけた分、しっかり演奏してください…」

と、なぜかいい雰囲気になっている唯と中野。

「キョウ…」

「…んだよ」

「後輩の女子に彼女取られたな！！」

「…殺す」

「キャーッ！！澪！助けてくれー！」

「自業自得だ」

「ムギーッ！助けてー！」

「ポー…」

「あれ！？ムギ？あぁ、梓と唯見て旅立ってる…！！」

「……」

「うっ…わ、悪かったって～…ほんの冗談だよ！な？」

「…知るか」

ゴンッ！

「痛い…私の頭が…」

「…はぁ」

ライブ直前だというのに全くの緊張感が無い俺ら。

どうやら緊張の『き』の字すら出てこないらしい。

「盛り上がってるとこ悪いんだけど…時間だから移動して」

「よーし、ライブ頑張るぞー！！」

「「「おー！！」」」

頭の衝撃から起き上がった田井中を先頭に
手を高らかにあげ講堂へ向かおうと意気込むが…

「あれ！？」

唯が何かに気が付く。

「ギー太は！？ここに置いてったよね！？」

「…は？」

「あっ！！あれ、憂ちゃんが持って帰ったぞ！！」

「……」

唯は何かを考えて…

「あぁぁっ！！！そうだったーっ！！」

「…気が付けよ」

「ど、どうしよう…！！えと…！！」

「…とりあえず落ち着け」

「仕方ないわね…これ、使いなさい」

山中が持っていたのはエレキギター。

「…まさかとは思うが…」

「ギー太以外使えないなんて事は…」

「……使えましぇん」

「「「「…だよな」」」」

（…さて、どうするか…）

「どうしよう……時間ないのに…」

「もう一時よ!?もう時間もないのに…!」

唯は少し考えて……

「私、ギー太を取りに行ってくる!!」

時間が無いというのに無謀なことを口走っている。

「じゃあ行ってきますっ!!」

「…唯っ」

「唯先輩！？」

「ちょっと！唯！？」

引き止めるのも虚しく…

タッタッタ……

部室を飛び出していった。

「とにかくみんな移動しなさい！」

「で、でも…唯ちゃんは…」

「…どう考えても間に合う訳がない」

「恭哉…」

「恭哉くん…」

「…とりあえず行くぞ、講堂に」

「で、でも…恭哉先輩…！」

「…ここまで来て、ライブをやらないわけにはいかないだろ…」

「…唯先輩抜きのライブは…」

「…わかってる」

中野が六人でライブをしたいことはわかってる。
それはここにいる全員が知ってる。

（…考えろ、なにか一曲でも早く間に合う方法があるはずだ）

思考をフル回転させながら
俺を先頭に足早に講堂に向かう。
すると、俺の脳内にこんな会話が思い浮かんだ。

《これなーんだ？》

《…死ね》

《ひどぉっ！！俺の自慢の放置自転車を見せてやったっていうのに！！》

《…放置自転車を自慢する意味が分からん》

《あ…ちなみにこれ、学校の近くの道に放置してあったんだよ、しかも鍵付きで》

《…誰もそんなこと聞いてねぇ》

《まぁ聞けって、そんでカッコ良かったから写メったわけさ》

《…だから誰も聞いてねぇ》

朝のホームルームでのこの会話。

（…あいつも意外なところで役に立つ）

「…これに賭けるか」

「え？どうしたんですか？」

「何か案を浮かんだのかキョウ！？」

「…今回演奏する曲は四曲だよな」

「新歓ライブの時の四曲だけど…」

「…中野、一つ聞く」

「は、はい…」

「…三曲目か四曲目なら間に合う可能性がある、それでもいいか」

「は、はい！六人でライブが出来るならそれで！」

「…よし」

講堂に向かっている最中にある人物に電話をかける。

……

……

…

『どしたの恭哉？』

「…今どこにいる」

『へ？今講堂にいるけど…もしかして俺に…』

「…黙れ、今から説明することをよく聞け」

『最後まで話聞いてくれてもいいじゃんか…』

「…今はお前の話を聞いてる時間なんてねぇんだよ」

『今のみならずいつもじゃ……まぁ、なんでも話してみなさい』

「…今から唯を迎えに行ってくれ、学校の近くの放置チャリ乗って」

『はぁ？今からってもうライブ始まるじゃねぇか！』

「…あいつ家にギター忘れやがったから取りに帰ってる最中だ」

『マジですか…よし！任せとけ！！今から唯ちゃんのとこに行ってくる！』

「…とりあえず唯を家に送って、そのまま講堂まで帰ってこい…全力でだ」

『お任せあれリーダーさん！！』

「…もうリーダーじゃねぇよ」

ピッ…

「あの…誰と話してたんですか？」

「…たまには使えるアホ」

「…え？」

（…これで大丈夫なはず）

あとは唯が三曲目あるいは四曲目までに間に合うかどうか。
唯が戻ってくるのを演奏しつつ待つのみとなった。

「…さて気合い入れて行くか」

「はい！」

「頑張ろう！」

「そうね♪」

「唯の為にも頑張るぞ～！」

「「「おぉー！」」」

拳を高らかにあげ、俺らは講堂に入っていった。

第二十六話　放課後ティータイム初ライブ！！（前編）（後書き）

後書きを今まで何書いてたかすらもう覚えてないや…

とりあえず次回予告。
次回は後編です。当たり前ですが。
どうやら次回でけいおん！第一期の本編が終了…。
早いですね。

さぁて、適度に頑張っていきますか……！

それではまた次回お会いしましょう！ラルクでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1491q/

けいおん！~もう一人のギタリスト~

2012年1月5日01時52分発行